aws

ユーザーガイド

Amazon DataZone

Amazon DataZone: ユーザーガイド

Table of Contents

Amazon DataZone とは

Amazon DataZone は、、オンプレミス、およびサードパーティーのソースに保存されたデータのカタログ化、検出 AWS、共有、管理を迅速かつ簡単に行うことができるデータ管理サービスです。Amazon DataZone を使用すると、組織のデータアセットを監督する管理者は、きめ細かなコントロールを使用してデータへのアクセスを管理および統制できます。これらのコントロールは、適切なレベルの権限とコンテキストによるアクセスの確保に役立ちます。Amazon DataZone を使用すると、エンジニア、データサイエンティスト、製品マネージャー、アナリスト、ビジネスユーザーは、組織全体で簡単にデータを共有したりデータにアクセスしたりできるため、検出、使用、共同作業を行ってデータを活用したインサイトを引き出すことができます。

Amazon DataZone は、Amazon Redshift、Amazon Athena、Amazon QuickSight、 AWS Glue、AWS Lake Formation、オンプレミスソース、サードパーティーソースなどのデータ管理サービスを統合することで、エンドユーザーに直接データを配信し、アーキテクチャを簡素化するのに役立ちます。

トピック

Amazon DataZone でできること

Amazon DataZone では、次のことを実行できます。

- 組織の境界を越えてデータアクセスを統制する。Amazon DataZone を使用すると、個人の認証情報に頼ることなく、組織のセキュリティ規制に従って、適切なユーザーが適切な目的で適切なデータにアクセスできるようにすることができます。また、データアセットの使用状況について透明性を確保し、統制されたワークフローを使用してデータサブスクリプションを承認することもできます。使用状況監査機能を通じて、プロジェクト間でデータアセットを監視することもできます。
- 共有データとツールを使用してデータワーカーをつなぎ、ビジネスインサイトを促進する。Amazon DataZone を使用すると、チーム間のシームレスなコラボレーション、およびデータと分析ツールへのセルフサービスアクセスの提供により、ビジネスチームの効率を高めることができます。ビジネス用語を使用して、、オンプレミス、またはサードパーティープロバイダーに保存されているカタログ化されたデータを検索 AWS、共有、アクセスできます。また、Amazon DataZone のビジネス用語集を使用すると、使用するデータの詳細がわかります。

- 機械学習を使用してデータ検出とカタログ化を自動化する。Amazon DataZone を使用すると、ビジネスデータカタログへのデータ属性の手動入力にかかる時間を短縮できます。データカタログ内のデータが充実すると、検索エクスペリエンスも向上します。

Amazon DataZone が他の AWS サービスをサポートおよび統合する方法

Amazon DataZone は、他の AWS サービスとの 3 種類の統合をサポートしています。

- プロデューサーデータソース - Glue Data Catalog および Amazon Redshift テーブルとビューに保存されているデータから Amazon DataZone カタログにデータアセットを発行できます。 AWS Amazon Simple Storage Service (S3) から Amazon DataZone カタログにオブジェクトを手動で公開することもできます。
- コンシューマーツール - Amazon Athena または Amazon Redshift クエリエディタを使用してデータアセットにアクセスし、分析することができます。
- アクセスコントロールとフルフィルメント - Amazon DataZone は、Lake Formation マネージド AWS Glue テーブルと Amazon Redshift テーブルおよびビューへのアクセス AWS 許可の付与をサポートしています。他のすべてのデータアセットの場合、Amazon DataZone は、アクションに関連する標準イベント (サブスクリプションリクエストに対する承認など) を Amazon EventBridge に公開します。これらの標準イベントを使用して、カスタム統合のために他の AWS サービスやサードパーティーのソリューションと統合できます。

どうすれば Amazon DataZone にアクセスできますか?

次のいずれかの方法で Amazon DataZone にアクセスできます。

- Amazon SageMaker マネジメントコンソールまたは Amazon DataZone コンソール

  Amazon SageMaker マネジメントコンソールまたは Amazon DataZone マネジメントコンソールを使用して、Amazon DataZone ドメイン、ブループリント、およびユーザーにアクセスしたり設定したりできます。詳細については、https://console.aws.amazon.com/datazone を参照してください。このコンソールは、Amazon DataZone データポータルの作成にも使用されます。
- Amazon DataZone データポータル

  Amazon DataZone データポータルはブラウザベースのウェブアプリケーションであり、さまざまなユーザーがセルフサービス方式でデータのカタログ化、検出、ガバナンス、共有、分析を行うこ

とができます。データポータルは、IAM Identity Center (AWS SSO の後継) または IAM 認証情報を使用して、ID AWS プロバイダーからの認証情報で認証できます。データポータル URL を入手するには、https://console.aws.amazon.com/datazone で Amazon DataZone コンソールにアクセスします。

- Amazon DataZone HTTPS API

  Amazon DataZone HTTPS API を使用してプログラムで Amazon DataZone にアクセスすると、HTTPS リクエストをサービスに直接発行できます。詳細については、「Amazon DataZone API Reference」を参照してください。

Amazon SageMaker と、Amazon SageMaker および Amazon DataZone を使用するタイミング

Amazon DataZone 上に構築された Amazon SageMaker カタログを使用すると、ユーザーはデータアセットを一元管理できます。データアセットのカタログ化、データの検索と検出、組み込みの生成 AI 機能を使用したメタデータの作成が可能です。あるいは、Amazon Q Developer に自然言語で質問してデータを検索することもできます。ユーザーは、Amazon SageMaker Unified Studio で一元的にきめ細かなアクセスコントロールを備えた単一のアクセス許可モデルを使用して、アクセスポリシーを一貫して定義、適用できます。ビジネス用語集を作成し、メタデータを拡張して、きめ細かなアクセスコントロールで大規模なチームと共有できるデータ製品を構築できます。データ品質スコアを表示し、データアセットのデータリネージュを検出することもできます。

Amazon SageMaker Unified Studio から Amazon SageMaker カタログにアクセスできます。Unified Studio は、 AWS データ、分析、人工知能 (AI)、機械学習 (ML) サービスを組み合わせた Amazon SageMaker 内の開発エクスペリエンスです。単一のインターフェースからワークフローを構築、デプロイ、実行、モニタリングできます。これにより、チーム間のコラボレーションが促進され、アジャイル開発が容易になります。

Amazon DataZone の用語と概念

Amazon DataZone は、 、オンプレミス、およびサードパーティーソースに保存されたデータのカタログ化、検出、共有 AWS、管理を迅速かつ簡単に行うことができるデータ管理サービスです。Amazon DataZone を使用すると、組織のデータアセットを監視する管理者やデータスチュワードは、きめ細かなコントロールを使用してデータへのアクセスを管理および制御できます。これらのコントロールは、適切なレベルの権限とコンテキストによるアクセスを保証するように設計されています。Amazon DataZone を使用すると、エンジニア、データサイエンティスト、プロダクトマネージャー、アナリスト、ビジネスユーザーが組織全体のデータにアクセスしやすくなり、データを活用したインサイトの発見、使用、共同作業での導出ができます。

Amazon DataZone の使用を開始する際は、その主要な概念、用語、コンポーネントを理解しておくことが重要です。

トピック

Amazon DataZone のコンポーネント

Amazon DataZone には、次の 4 つの主要なコンポーネントが含まれています。

- ビジネスデータカタログ - このコンポーネントを使用すると、ビジネスコンテキストを使用して組織全体のデータをカタログ化できるため、組織内のすべてのユーザーがデータをすばやく見つけて理解できます。
- ワークフローの公開とサブスクライブ - これらの自動ワークフローを使用して、プロデューサーとコンシューマー間のデータをセルフサービスで保護し、組織内のすべてのユーザーが適切な目的に適したデータにアクセスできるようにすることができます。
- プロジェクトと環境

- Amazon DataZone プロジェクトでは、人、アセット (データ) 、ツールをビジネスユースケースベースでグループ化し、 AWS 分析へのアクセスを簡素化します。プロジェクトは、プロジェクトメンバーがコラボレーション、データ交換、アセット共有ができる領域を提供します。デフォルトでは、プロジェクトは、プロジェクトに明示的に追加されたユーザーのみが、そのプロジェクト内のデータと分析ツールにアクセスできるように設定されています。プロジェクトは、データコンシューマーがアクセスするためのプロジェクトポリシーに従って、生成されたアセットの所有権を管理します。
- Amazon DataZone プロジェクト内では、環境は、特定の一連の IAM プリンシパル (寄稿者アクセス許可を持つユーザーなど) が操作できる 0 個以上の設定済みリソース (Amazon S3 バケット、 AWS Glue データベース、Amazon Athena ワークグループなど) のコレクションです。

- データポータル (AWS マネジメントコンソール外) - これはブラウザベースのウェブアプリケーションであり、さまざまなユーザーがセルフサービス方式でデータのカタログ化、検出、管理、共有、分析を行うことができます。データポータルは、 AWS IAM アイデンティティセンターを通じて ID プロバイダーからの IAM 認証情報または既存の認証情報を使用してユーザーを認証します。

Amazon DataZone ドメインとは

Amazon DataZone ドメインを使用して、アセット、ユーザー、それらのプロジェクトを整理できます。追加の AWS アカウントを Amazon DataZone ドメインに関連付けることで、データソースをまとめることができます。その後、これらのデータソースから、メタデータの完全性と品質を向上させるメタデータフォームと用語集を使用して、アセットをドメインのカタログに公開できます。これらのアセットを検索して参照し、ドメインで公開されているデータを確認することもできます。さらに、プロジェクトに参加して他のユーザーとコラボレーションしたり、アセットをサブスクライブしたり、プロジェクト環境を使用して Amazon Athena や Amazon Redshift などの分析ツールにアクセスしたりできます。Amazon DataZone ドメインを使用すると、エンタープライズ用に単一の Amazon DataZone ドメインを作成する場合でも、異なるビジネスユニット用に複数の Amazon DataZone ドメインを作成する場合でも、組織構造のデータと分析のニーズを柔軟に反映できます。

Amazon DataZone プロジェクトと環境とは

Amazon DataZone を使用すると、チームや分析ユーザーは、チーム、ツール、データのユースケースベースのグループを作成して、プロジェクトでコラボレーションできます。

- Amazon DataZone でプロジェクトを使用すると、ユーザーのグループは、Amazon DataZone カタログ内のデータの公開、検出、サブスクライブ、使用など、さまざまなビジネスユースケースでコラボレーションできます。プロジェクトメンバーは、Amazon DataZone カタログのアセットを

消費し、1 つ以上の分析ワークフローを使用して新しいアセットを生成します。プロジェクトは、データポータル内で次のアクティビティをサポートします。

- プロジェクト所有者は、所有者、コントロビューター、コンシューマー、スチュワード、およびビューワーのアクセス許可を持つメンバーを追加できます
- プロジェクトメンバーは、SSO ユーザー、SSO グループ、IAM ユーザーです
- プロジェクトメンバーは、データカタログ内のアセットへのサブスクリプションをリクエストできます

  サブスクリプションの承認がプロジェクトに提供されます

	プロジェクトの作成/削除	プロジェクトプロファイルの作成/削除	環境プロファイルの作成/削除	環境の作成/削除	プロジェクトへのメンバーの追加/削除	検索と検出	メタデータフォーム/用語集の作成/削除	データソース作成の実行とデータの取り込み	データの公開	サブスクリプションのリクエスト	サブスクリプションリクエストの承認/拒否	Amaz Athen とAmaz Redsl からのサブスクライブされたデータの読み取り	アセットフィルターを作成する
所有者	ドメイン単位メンバ	ドメイン単位メンバ	ドメイン単位メンバ	ドメイン単位メンバ	はい	はい	はい	はい	はい	はい	はい	はい	はい

	プロジェクトの作成/削除	プロジェクトプロファイルの作成/削除	環境プロファイルの作成/削除	環境の作成/削除	プロジェクトへのメンバーの追加/削除	検索と検出	メタデータフォーム/用語集の作成/削除	データソース作成の実行とデータの取り込み	データの公開	サブスクリプションのリクエスト	サブスクリプションリクエストの承認/拒否	AmazAthenとAmazRedslからのサブスクライブされたデータの読み取り	アセットフィルターを作成する
	ーによって管理される	ーによって管理される	ーによって管理される	ーによって管理される									

	プロジェクトの作成/削除	プロジェクトプロファイルの作成/削除	環境プロファイルの作成/削除	環境の作成/削除	プロジェクトへのメンバーの追加/削除	検索と検出	メタデータフォーム/用語集の作成/削除	データソース作成の実行とデータの取り込み	データの公開	サブスクリプションのリクエスト	サブスクリプションリクエストの承認/拒否	AmazAthenとAmazRedslからのサブスクライブされたデータの読み取り	アセットフィルターを作成する
コントロビューター	ドメイン単位メンバー	ドメイン単位メンバー	ドメイン単位メンバー	ドメイン単位メンバー	いいえ	はい	はい	はい	はい	はい	はい	はい	はい

	プロジェクトの作成/削除	プロジェクトプロファイルの作成/削除	環境プロファイルの作成/削除	環境の作成/削除	プロジェクトへのメンバーの追加/削除	検索と検出	メタデータフォーム/用語集の作成/削除	データソース作成の実行とデータの取り込み	データの公開	サブスクリプションのリクエスト	サブスクリプションリクエストの承認/拒否	AmazAthenとAmazRedshからのサブスクライブされたデータの読み取り	アセットフィルターを作成する
	によって管理される	によって管理される	によって管理される	によって管理される									

	プロジェクトの作成/削除	プロジェクトプロファイルの作成/削除	環境プロファイルの作成/削除	環境の作成/削除	プロジェクトへのメンバーの追加/削除	検索と検出	メタデータフォーム/用語集の作成/削除	データソース作成の実行とデータの取り込み	データの公開	サブスクリプションのリクエスト	サブスクリプションリクエストの承認/拒否	AmazAthenとAmazRedshからのサブスクライブされたデータの読み取り	アセットフィルターを作成する
コンシューマー	ドメイン単位メンバー	ドメイン単位メンバー	ドメイン単位メンバー	ドメイン単位メンバー	いいえ	あり	なし	なし	なし	あり	なし	あり	なし

	プロジェクトの作成/削除	プロジェクトプロファイルの作成/削除	環境プロファイルの作成/削除	環境の作成/削除	プロジェクトへのメンバーの追加/削除	検索と検出	メタデータフォーム/用語集の作成/削除	データソース作成の実行とデータの取り込み	データの公開	サブスクリプションのリクエスト	サブスクリプションリクエストの承認/拒否	Amaz Athen とAmaz Redsl からのサブスクライブされたデータの読み取り	アセットフィルターを作成する
	によって管理される	によって管理される	によって管理される	によって管理される									

	プロジェクトの作成/削除	プロジェクトプロファイルの作成/削除	環境プロファイルの作成/削除	環境の作成/削除	プロジェクトへのメンバーの追加/削除	検索と検出	メタデータフォーム/用語集の作成/削除	データソース作成の実行とデータの取り込み	データの公開	サブスクリプションのリクエスト	サブスクリプションリクエストの承認/拒否	AmazAthenとAmazRedshからのサブスクライブされたデータの読み取り	アセットフィルターを作成する
ビューワー	ドメイン単位メンバー	ドメイン単位メンバー	ドメイン単位メンバー	ドメイン単位メンバー	いいえ	あり	なし	なし	なし	なし	なし	あり	なし

	プロジェクトの作成/削除	プロジェクトプロファイルの作成/削除	環境プロファイルの作成/削除	環境の作成/削除	プロジェクトへのメンバーの追加/削除	検索と検出	メタデータフォーム/用語集の作成/削除	データソース作成の実行とデータの取り込み	データの公開	サブスクリプションのリクエスト	サブスクリプションリクエストの承認/拒否	AmazAthenとAmazRedshからのサブスクライブされたデータの読み取り	アセットフィルターを作成する
	によって管理される	によって管理される	によって管理される	によって管理される									

	プロジェクトの作成/削除	プロジェクトプロファイルの作成/削除	環境プロファイルの作成/削除	環境の作成/削除	プロジェクトへのメンバーの追加/削除	検索と検出	メタデータフォーム/用語集の作成/削除	データソース作成の実行とデータの取り込み	データの公開	サブスクリプションのリクエスト	サブスクリプションリクエストの承認/拒否	AmazAthenとAmazRedshからのサブスクライブされたデータの読み取り	アセットフィルターを作成する
スチュワード	ドメイン単位メンバー	ドメイン単位メンバー	ドメイン単位メンバー	ドメイン単位メンバー	いいえ	はい	はい	はい	あり	なし	はい	あり	なし

	プロジェクトの作成/削除	プロジェクトプロファイルの作成/削除	環境プロファイルの作成/削除	環境の作成/削除	プロジェクトへのメンバーの追加/削除	検索と検出	メタデータフォーム/用語集の作成/削除	データソース作成の実行とデータの取り込み	データの公開	サブスクリプションのリクエスト	サブスクリプションリクエストの承認/拒否	Amaz Athen とAmaz Redsl からのサブスクライブされたデータの読み取り	アセットフィルターを作成する
	によって管理される	によって管理される	によって管理される	によって管理される									

- Amazon DataZone プロジェクトでは、環境は、0 個以上の設定済みリソース (Amazon S3、 AWS Glue データベース、Amazon Athena ワークグループなど) のコレクションであり、それらのリ

ソースを操作できる特定の IAM プリンシパルのセットが含まれます。環境は、環境を作成するための再利用可能なテンプレートを提供する事前設定されたリソースとブループリントのセットである環境プロファイルを使用して作成されます。環境プロファイルは、環境がデプロイされる AWS アカウント やリージョンなどの設定を定義します。

Amazon DataZone のブループリントとは

環境が作成されるブループリントは、環境が属するプロジェクトのどの AWS ツールやサービス (AWS Glue Amazon Redshift など) メンバーが Amazon DataZone カタログのアセットを操作するときに使用できるかを定義します。

Amazon DataZone の現在のリリースでは、以下のデフォルトのブループリントがサポートされています。

ブループリント名	説明	作成されるリソース
データレイクのブループリント	Amazon DataZone プロジェクトメンバーは、環境内でデータレイクプロデューサーおよびコンシューマーのサービスを起動できます。 コンシューマーとして、Amazon DataZone プロジェクトメンバーは Amazon Athena およびその他の Lake Formation がサポートするクエリエンジンで Lake Formation が管理するアセットの「読み取り専用」コピーに直接アクセスできます。 プロデューサー として、Amazon DataZone プロジェクトメンバーは Amazon Athena を使用して新しい LakeFormation マネージド	Amazon Athena を使用して Lake Formation テーブルを作成およびクエリする機能をユーザーに提供します。Amazon Athena ワークグループ、「読み取り専用」の Lake Formation アクセス許可を持つ AWS Glue データベース、「読み取り専用」の IAM アクセス許可、および「作成」と「付与」の Lake Formation アクセス許可を持つ project. AWS Glue database によって管理される Amazon S3 へのアクセス、「読み取り」と「書き込み」の IAM アクセス許可、タグ付けを伴う AWS Glue ETL (抽出、変換、ロード) 。

ブループリント名	説明	作成されるリソース
	テーブルを作成し、Amazon DataZone カタログに公開できます。	
データウェアハウスのブループリント	コンシューマーとしてこのブループリントを使用すると、Amazon DataZone プロジェクトメンバーは固有の Amazon Redshift クラスターに接続してリモートデータストアをクエリし、新しいデータセットを作成および保存できます。 プロデューサーとしてこのブループリントを使用すると、Amazon DataZone プロジェクトメンバーは固有の Amazon Redshift クラスターに接続してリモートデータストアをクエリし、新しいデータセットを作成し、Amazon DataZone カタログに公開できます。	Amazon Redshift クエリエディタへのアクセス、Amazon DataZone カタログからのサブスクライブされたデータソースへの「読み取り」アクセス、設定された Amazon Redshift クラスターにローカルアセットを作成する機能。Amazon Redshift クエリエディタへのアクセス、Amazon DataZone カタログからのサブスクライブされたデータソースへの「読み取り」アクセス、設定された Amazon Redshift クラスターからアセットを作成して公開する機能。

ブループリント名	説明	作成されるリソース
Amazon Sagemaker ブループリント	このブループリントは、データプロデューサーおよびコンシューマーが Amazon SageMaker にシームレスに切り替えて、データおよび ML アセットへのアクセスガバナンスを適用しながら、機械学習 (ML) プロジェクトでコラボレーションするのに役立ちます。Amazon DataZone と Amazon SageMaker の新しい組み込み統合により、データコンシューマーおよびプロデューサーはインフラストラクチャのセットアップ全体の ML ガバナンスを合理化し、ビジネスイニシアチブでコラボレーションして、データと ML アセットを簡単に管理できます。	Amazon DataZone でデータおよび ML アセットを検索、サブスクライブ、公開できる Amazon SageMaker ドメインを作成できます。また、設定に従って AWS Glue データベースとレイクフォーメーションをサブスクライブして公開することもできます。

Amazon DataZone インベントリと公開ワークフローとは

プロジェクトインベントリアセットの作成

Amazon DataZone を使用してデータをカタログ化するには、まず Amazon DataZone のプロジェクトのインベントリとしてデータ (アセット) を取り込む必要があります。プロジェクトのインベントリを作成すると、そのプロジェクトのメンバーのみがアセットを検出できます。プロジェクトインベントリアセットは、明示的に公開されていない限り、すべてのドメインユーザーが検索/参照で利用できるわけではありません。Amazon DataZone の現在のリリースでは、次の方法でプロジェクトインベントリにアセットを追加できます。

- データポータルまたは Amazon DataZone API を使用して、データソースを作成および実行します。Amazon DataZone の現在のリリースでは、 Glue と Amazon Redshift AWS のデータソースを

作成して実行できます。 AWS Glue または Amazon Redshift データソースを作成して実行することで、選択したプロジェクトインベントリにアセットを作成し、その技術メタデータをソースデータベーステーブルまたはデータウェアハウスからインベントリとして Amazon DataZone にインポートします。

- APIs を使用して、使用可能なシステムアセットタイプ (AWS Glue、Amazon Redshift、Amazon S3 オブジェクト) またはカスタムアセットタイプからアセットを作成できます。
  - Amazon DataZone API を使用して、プロジェクトインベントリにカスタムアセットタイプを作成します。カスタムアセットタイプには、ML モデル、ダッシュボード、オンプレミステーブルなどが含まれます。
  - Amazon DataZone API を使用して、これらのカスタムアセットタイプからアセットを作成します。
- Amazon DataZone データポータルを使用して S3 オブジェクトのアセットを手動で作成します。

プロジェクトインベントリアセットのキュレート - プロジェクトインベントリの作成後、データ所有者は、ビジネス名 (アセットとスキーマ)、説明 (アセットとスキーマ)、Read me、用語集の用語 (アセットとスキーマ)、メタデータフォームを追加または更新することで、必要なビジネスメタデータを使用してインベントリアセットをキュレートできます。これは、データポータルまたは Amazon DataZone API を使用して行うことができます。アセットを編集するたびに、新しいインベントリバージョンが作成されます。

Amazon DataZone カタログへのプロジェクトインベントリアセットの公開

Amazon DataZone を使用してデータをカタログ化する次のステップは、プロジェクトのインベントリアセットをドメインユーザーが検出できるようにすることです。これを行うには、インベントリアセットを Amazon DataZone カタログに公開します。カタログに公開できるのはインベントリアセットの最新バージョンのみであり、検出カタログでは最新の公開バージョンのみがアクティブになります。インベントリアセットを Amazon DataZone カタログに公開された後に更新する場合は、最新バージョンが検出カタログに含まれるように、インベントリアセットを明示的に再公開する必要があります。Amazon DataZone の現在のリリースでは、次の方法でプロジェクトインベントリアセットを Amazon DataZone カタログに公開できます。

- データポータルまたは Amazon DataZone API を使用して、プロジェクトインベントリアセットを Amazon DataZone カタログに手動で公開します。
- データソースの作成または編集の一環として、オプションの [AWS Glue アセットをカタログに公開] 設定、または、[Amazon Redshift アセットをカタログ公開] 設定を有効にして、スケジュールされた、または自動化されたデータソースの実行中に使用します。この設定を有効にすると、デー

タソースの実行によってプロジェクトのインベントリにアセットが追加され、インベントリアセットが Amazon DataZone カタログに公開されます。直接公開すると、アセットにビジネスメタデータがない可能性があり、すべてのドメインユーザーが直接検出できるようになります。この設定は、データポータルまたは Amazon DataZone API を使用して、データソースに使用できます。

Amazon DataZone サブスクリプションおよびフルフィルメントワークフローとは

アセットが Amazon DataZone カタログに公開されると、ドメインユーザーはこれらのアセットを検出し、これらのアセットへのアクセスをリクエストして取得し、引き続き Amazon DataZone を使用してこれらのアセットを管理、共有、分析できます。

ユーザーは、プロジェクトの代わりにそのアセットをサブスクライブすることで、アセットへのアクセスをリクエストします。サブスクリプションリクエストが作成されると、アセットの所有者は通知を受け取り、サブスクリプションリクエストを確認して、承認するか拒否するかを決定できます。サブスクリプションリクエストがデータ所有者によって承認された場合、サブスクライブしているプロジェクトにはそのアセットへのアクセス権が付与されます。

サブスクリプションリクエストが承認されると、Amazon DataZone はサブスクリプションフルフィルメントワークフローを開始し、 AWS Lake Formation または Amazon Redshift で必要な許可を作成して、プロジェクト内のすべての該当する環境にアセットを自動的に追加します。これにより、サブスクライブしているプロジェクトメンバーは、環境内のクエリツール (Amazon Athena または Amazon Redshift クエリエディタ) のいずれかを使用してアセットをクエリできます。

Amazon DataZone は、マネージドアセット (Glue テーブルと Amazon Redshift テーブルとビューを含む) AWS に対してのみ、この自動フルフィルメントロジックをトリガーできます。他のすべてのアセットタイプ (アンマネージドアセット) では、Amazon DataZone は自動的にフルフィルメントをトリガーすることはできません。代わりに、イベントペイロードに必要なすべての詳細を含むイベントを Amazon Eventbridge に公開し、Amazon DataZone の外部で必要なグラントを作成できるようにします。Amazon DataZone には、サブスクリプションが Amazon DataZone の外部で満たされるとそのステータスを更新できる `updateSubscriptionStatus` API も用意されており、Amazon DataZone はプロジェクトメンバーにアセットの消費を開始できることを通知できます。

Amazon DataZone のユーザーペルソナ

主な Amazon DataZone ユーザーペルソナは次のとおりです。

- Amazon DataZone を組織の分析プラットフォームとして設定するドメイン管理者。

  Amazon DataZone のコンテキストでは、ドメイン管理者は Amazon DataZone を AWS アカウントにインストールし、Amazon DataZone ドメインを作成し、Amazon DataZone ドメインとの AWS アカウントの関連付けと ID プロバイダーの関連付けを設定します。ドメイン管理者は、AWS Organization や AWS Service Catalog などの他のサービスコンソールを使用して Amazon DataZone を設定します。

- Amazon DataZone (アセットパブリッシャーとサブスクライバー) の主要なユーザーであるデータユーザーは、分析タスクと機械学習タスクを行います。

  データユーザーには、データアセットを生成および消費するデータ分析ワーカー、データサイエンティスト、システムユーザーが含まれます。Amazon DataZone のコンテキストでは、データユーザーはプロジェクトと環境を作成および参加し、事前設定された分析ツールや機械学習ツールを使用してデータアセットをサブスクライブおよび消費し、出力データアセットを Amazon DataZone ドメインカタログに公開して他のユーザーと共有します。

- カスタムインフラストラクチャテンプレートを構築し、Amazon DataZone を内部カタログまたは本番システムと統合するシステムデベロッパー。

  Amazon DataZone のコンテキストでは、システムデベロッパーは、環境ブループリント (インフラストラクチャテンプレート) または環境プロバイダーとしての Infrastructure-As-Code CI/CD パイプライン、環境間でデータアセットを昇格させるデータパイプライン、内部カタログと統合するためのカタログ同期およびサブスクリプショングラントフルフィルメントアダプター、または必要に応じて Amazon DataZone API と内部ユーザーインターフェイスまたは本番システム間の統合を構築します。

- 組織のセキュリティ、プライバシー、その他のコンプライアンスポリシーの定義とリスクを認め、これらの定義に従って組織内で Amazon DataZone が使用されていることを確認するデータガバナンス責任者。

Amazon DataZone の用語

ドメイン

Amazon DataZone ドメインは、アセット、ユーザー、およびプロジェクトを関連付けて整理するエンティティです。Amazon DataZone ドメインを使用すると、エンタープライズ用に単一の Amazon DataZone ドメインを作成する場合でも、異なるビジネスユニットやチーム用に複数の Amazon DataZone ドメインを作成する場合でも、組織構造のデータと分析ニーズを柔軟に反映できます。

ドメインユニット

ドメインユニットを使用すると、アセットやその他のドメインエンティティを特定のビジネスユニットやチームに下で簡単に整理できます。組織のビジネスユニット内およびビジネスユニット間で安全で効率的なデータ共有を設定するには、Amazon DataZone 内にドメインユニットを作成し、各ビジネスユニット内の選択したユーザーがログインしてアセットをカタログに共有できるようにします。ドメインユニットを使用して、 AWS アカウント所有者などのリソース所有者がリソースに Amazon DataZone 認可アクセス許可を設定することもできます。ドメインユニットは、アカウント所有者から委任された権限をドメインユニットの所有者に提供します。また、アカウント所有者の代わりに、(ブループリント設定を使用して作成される) 環境プロファイルに許可権限を設定できます。詳細については、「Amazon DataZone のドメインユニットと認可ポリシー」を参照してください。

認可ポリシー

Amazon DataZone 認可ポリシーは、プロジェクト、ブループリント、環境、用語集、メタデータフォームなどのエンティティに適用される Amazon DataZone 内の一連のコントロールです。これらのポリシーで、Amazon DataZone ポータルでこれらのエンティティを作成し、そのライフサイクルを管理できるユーザーを定義します。

Amazon DataZone ドメインユニット内で、次の認可ポリシーをユーザーとグループに割り当てると、ユーザーに特定のアクセス許可を付与できます。

- ドメインユニット作成ポリシー
- プロジェクト作成ポリシー
- プロジェクトメンバーシップポリシー
- ドメインユニット所有権引き受けポリシー
- プロジェクト所有権引き受けポリシー

詳細については、「Amazon DataZone ドメインユニット内のユーザーとグループに認可ポリシーを割り当てる」を参照してください。

Amazon DataZone ドメインユニット内で次の認可ポリシーをプロジェクトに割り当てると、特定のアクセス許可を付与できます。

- 用語集作成ポリシー
- メタデータフォーム作成ポリシー
- カスタムアセットタイプ作成ポリシー

詳細については、「Amazon DataZone ドメインユニット内のプロジェクトに認可ポリシーを割り当てる」を参照してください。

特定のブループリント設定内で、プロジェクトとドメインユニットの所有者に次の認可ポリシーを割り当てることができます。

- このブループリントを使用して環境プロファイルを作成する - このポリシーは Amazon DataZone プロジェクトに割り当てることができ、このブループリントを使用して環境プロファイルを作成することをプロジェクトに許可します。
- このブループリントを使用して環境プロファイルを作成するアクセス許可を付与する - このポリシーはドメインユニットの所有者に割り当てることができ、このブループリントを使用して環境プロファイルを作成するアクセス許可をプロジェクトに付与することを所有者に許可します。

詳細については、「Amazon DataZone ブループリント設定内で認可ポリシーを割り当てる」を参照してください。

アカウントの関連付け

AWS アカウントを Amazon DataZone ドメインに関連付けると、これらの AWS アカウントのデータを Amazon DataZone カタログに公開し、Amazon DataZone プロジェクトを作成して、複数の AWS アカウントでデータを操作できます。アカウントの関連付けリクエストは、Amazon DataZone ドメインを所有する AWS アカウントでのみ開始できます。アカウントの関連付けリクエストは、招待された AWS アカウントの管理ユーザーのみが受け入れることができます。AWS アカウントが Amazon DataZone ドメインに関連付けられていると、このアカウントの AWS Glue カタログや Amazon Redshift などのデータソースをこのドメインに登録できます。関連付けると、 AWS アカウントは Amazon DataZone プロジェクトと環境を作成することもできます。

は、1 つ以上の Amazon DataZone ドメインに関連付ける AWS アカウント ことができます。

データソース

Amazon DataZone では、データソースを使用して、アセット (データ) の技術メタデータを、ソースデータベースまたはデータウェアハウスから Amazon DataZone にインポートできます。Amazon DataZone の現在のリリースでは、 Glue と Amazon Redshift AWS のデータソースを作成して実行できます。データソースを作成することで、Amazon DataZone とソース (AWS Glue Data Catalog または Amazon Redshift ウェアハウス) 間の接続を確立します。これにより、テーブル名、列名、データ型などの技術的なメタデータを読み取ることができます。データソースを作成することで、Amazon DataZone で新しいアセットを作成または既存のアセットを更新

する最初のデータソース実行も開始します。データソースの作成中や、データソースが正常に作成された後に、データソースの実行のスケジュールを指定するオプションもあります。

データソースの実行

Amazon DataZone では、データソースの実行は、プロジェクトインベントリにアセットを作成するために、また、オプションでプロジェクトインベントリアセットを Amazon DataZone カタログに公開するために、Amazon DataZone が実行するタスクです。データソースの実行は、自動化 (データソースが最初に作成されたときに開始) することも、スケジュールしたり、手動にすることもできます。データ選択基準を使用すると、既存のデータセットと今後のデータセットをファインチューニングして、プロジェクトインベントリまたは Amazon DataZone カタログに取り込むことができ、それらのインベントリまたはカタログアセットへのメタデータの更新頻度も調整できます。

サブスクリプションターゲット

Amazon DataZone でサブスクリプションターゲットを使用すると、プロジェクトでサブスクライブしているデータにアクセスできます。サブスクリプションターゲットは、Amazon DataZone がソースデータとの接続を確立し、Amazon DataZone プロジェクトのメンバーが既にサブスクライブしているデータのクエリを開始できるように必要な許可を作成するために使用できる、場所 (データベースやスキーマなど) および必要なアクセス許可 (IAM ロールなど) を指定します。

サブスクリプションリクエスト

Amazon DataZone では、サブスクリプションリクエストは、特定のアセットへのアクセスを許可するために Amazon DataZone プロジェクトが従う必要があるプロセスです。サブスクリプションリクエストは、承認、拒否、取り消し、または付与できます。

アセット

Amazon DataZone では、アセットは、単一の物理データオブジェクト (テーブル、ダッシュボード、ファイルなど) または仮想データオブジェクト (ビューなど) を表示するエンティティです。

アセットタイプ

アセットタイプで、アセットを Amazon DataZone カタログで表す方法を定義します。アセットタイプで、特定のタイプのアセットのスキーマを定義します。アセットを作成すると、アセットタイプ (デフォルトでは最新バージョン) で定義されたスキーマに対して検証されます。アセットが更新されると、Amazon DataZone は新しいアセットバージョンを作成し、Amazon DataZone ユーザーがすべてのアセットバージョンで操作できるようにします。

ビジネス用語集

Amazon DataZone では、ビジネス用語集は、アセットに関連付けられる可能性のあるビジネス用語のコレクションです。ビジネス用語集は、さまざまなデータ分析タスクを通じて組織全体で同じ用語と定義が使用されるようにするのに役立ちます。

ビジネス用語集の用語をアセットと列に追加して、検索中にそれらの属性の ID を分類したり強化したりできます。用語集は、アセットに関連付けられているメタデータ形式のフィールドの値タイプとして選択できます。アセットのメタデータフォームフィールドの値として特定の用語を選択すると、ユーザーはビジネス用語集の用語を検索し、関連付けられているアセットを見つけることができます。

メタデータフォームタイプ

メタデータフォームタイプは、アセットがインベントリとして作成されたとき、または Amazon DataZone ドメインで公開されたときに収集して保存されるメタデータを定義するテンプレートです。メタデータフォームタイプは、データアセットに関連付けることができます。メタデータフォームタイプは、ドメイン管理者がコンプライアンス情報、規制情報、分類など、そのドメインに必要なメタデータフォームを定義するのに役立ちます。これにより、ドメイン管理者はアセットの追加のメタデータをカスタマイズできます。Amazon DataZone には、asset-common-details-form-type、column-business-metadata-form-type、glue-table-form-type, glue-view-form-type、redshift-table-form-type、redshift-view-form-type、s3-object-collection-form-type、subscription-terms-form-type、suggestion-form-type などのシステムメタデータフォームタイプがあります。

メタデータフォーム

Amazon DataZone では、メタデータフォームで、アセットがインベントリとして作成されたとき、または Amazon DataZone ドメインに公開されたときに収集して保存されるメタデータを定義します。メタデータフォーム定義は、ドメイン管理者がカタログドメインに作成します。メタデータフォーム定義は 1 つ以上のフィールド定義で構成され、ブール値、日付、10 進数、整数、文字列、ビジネス用語集のフィールド値データ型をサポートしています。

ドメイン管理者は、メタデータフォームをドメインに追加して、ドメイン内のアセットにメタデータフォームを適用します。次に、アセットパブリッシャーは、メタデータフォームの任意フィールドと必須フィールドの値を提供します。

プロジェクト

Amazon DataZone では、プロジェクトを利用して、ユーザーグループはさまざまなビジネスユースケースでコラボレーションできます。これには、プロジェクトインベントリにアセット

を作成してすべてのプロジェクトメンバーがアセットを検出できるようにし、その後、Amazon DataZone カタログでのアセットの公開、検出、サブスクライブ、消費を行うことなどがあります。プロジェクトメンバーは、Amazon DataZone カタログのアセットを消費し、1 つ以上の分析ワークフローを使用して新しいアセットを生成します。プロジェクトメンバーは、所有者、コントロビューター、コンシューマー、スチュワード、ビューワーです。

	プロジェクトの作成/削除	プロジェクトプロファイルの作成/削除	環境プロファイルの作成/削除	環境の作成/削除	プロジェクトへのメンバーの追加/削除	検索と検出	メタデータフォーム/用語集の作成/削除	データソース作成の実行とデータの取り込み	データの公開	サブスクリプションのリクエスト	サブスクリプションリクエストの承認/拒否	Amazon Athena と Amazon Redshift からのサブスクライブされたデータの読み取り
所有者	ドメイン単位メンバーによって管理される	ドメイン単位メンバーによって管理される	ドメイン単位メンバーによって管理される	ドメイン単位メンバーによって管理される	はい	はい	はい	はい	はい	はい	はい	はい
コントロ	ドメイン単位	ドメイン単位	ドメイン単位	ドメイン単位	いいえ	はい	はい	はい	はい	はい	はい	はい

	プロジェクトの作成/削除	プロジェクトプロファイルの作成/削除	環境プロファイルの作成/削除	環境の作成/削除	プロジェクトへのメンバーの追加/削除	検索と検出	メタデータフォーム/用語集の作成/削除	データソース作成の実行とデータの取り込み	データの公開	サブスクリプションのリクエスト	サブスクリプションリクエストの承認/拒否	Amazon Athena と Amazon Redshift からのサブスクライブされたデータの読み取り
ビューター	メンバーによって管理される	メンバーによって管理される	メンバーによって管理される	メンバーによって管理される								
コンシューマー	ドメイン単位メンバーによって管理される	ドメイン単位メンバーによって管理される	ドメイン単位メンバーによって管理される	ドメイン単位メンバーによって管理される	いいえ	あり	なし	なし	なし	あり	なし	はい

	プロジェクトの作成/削除	プロジェクトプロファイルの作成/削除	環境プロファイルの作成/削除	環境の作成/削除	プロジェクトへのメンバーの追加/削除	検索と検出	メタデータフォーム/用語集の作成/削除	データソース作成の実行とデータの取り込み	データの公開	サブスクリプションのリクエスト	サブスクリプションリクエストの承認/拒否	Amazon AthenaとAmazon Redshiftからのサブスクライブされたデータの読み取り
ビューワー	ドメイン単位メンバーによって管理される	ドメイン単位メンバーによって管理される	ドメイン単位メンバーによって管理される	ドメイン単位メンバーによって管理される	いいえ	あり	なし	なし	なし	なし	なし	はい

	プロジェクトの作成/削除	プロジェクトプロファイルの作成/削除	環境プロファイルの作成/削除	環境の作成/削除	プロジェクトへのメンバーの追加/削除	検索と検出	メタデータフォーム/用語集の作成/削除	データソース作成の実行とデータの取り込み	データの公開	サブスクリプションのリクエスト	サブスクリプションリクエストの承認/拒否	Amazon Athena と Amazon Redshift からのサブスクライブされたデータの読み取り
スチュワード	ドメイン単位メンバーによって管理される	ドメイン単位メンバーによって管理される	ドメイン単位メンバーによって管理される	ドメイン単位メンバーによって管理される	いいえ	はい	はい	はい	あり	なし	はい	はい

プロジェクト所有者は、所有者またはコントロビューターとして他のユーザーを追加または削除でき、プロジェクトを変更または削除できます。コントロビューターに対するその他の制限は、ポリシーで定義できます。プロジェクトを作成したユーザーが、そのプロジェクトの最初の所有者になります。

環境

環境は、設定されたリソース (Amazon S3 バケット、 AWS Glue データベース、Amazon Athena ワークグループなど) のコレクションであり、それらのリソースで操作できる特定の IAM プリン

シパル (コントロビューターアクセス許可が割り当てられている) のセットがあります。各環境には、サブスクリプションとフルフィルメントを介してリソースにアクセスし、データへのアクセスを取得する権限があるユーザープリンシパルが含まれる場合もあります。環境は、実用的なリンクを AWS サービス、外部 IDE、コンソールに保存するように設計されています。プロジェクトのメンバーは、環境内で設定されているディープリンクを使用して、Amazon Athena コンソールなどのサービスにアクセスできます。プロジェクトの SSO ユーザーと IAM ユーザーについては、特定の環境を使用したり特定の環境にアクセスしたりできるよう、さらに範囲を絞り込むことができます。

環境プロファイル

Amazon DataZone の環境プロファイルとは、環境の作成に使用できるテンプレートです。環境プロファイルは、ブループリントを使用して作成されます。

環境プロファイルを使用すると、ドメイン管理者は事前に設定されたパラメータでブループリントをラップでき、データワーカーは既存の環境プロファイルを選択し、新しい環境の名前を指定することで、新しい環境を必要なだけすばやく作成できます。これにより、データワーカーは、ドメイン管理者が適用したデータガバナンスポリシーを確実に満たすと同時に、プロジェクトと環境を効率的に管理できます。

ブループリント

環境が作成されるブループリントは、環境が属するプロジェクトのどの AWS ツールやサービス (AWS Glue Amazon Redshift など) メンバーが Amazon DataZone カタログのアセットを操作するときに使用できるかを定義します。

Amazon DataZone の現在のリリースでは、以下のデフォルトのブループリントがサポートされています。

- データレイクのブループリント
- データウェアハウスのブループリント
- Amazon Sagemaker ブループリント

ユーザープロファイル

ユーザープロファイルは Amazon DataZone ユーザーを表します。Amazon DataZone は、さまざまな目的で Amazon DataZone マネジメントコンソールとデータポータルを操作するための IAM ロールと SSO ID の両方をサポートしています。ドメイン管理者は、IAM ロールを使用して、新しい Amazon DataZone ドメインの作成、メタデータフォームタイプの設定、ポリシーの実装など、Amazon DataZone マネジメントコンソールで初期管理ドメイン関連の作業を実行します。データワーカーは、アイデンティティセンター経由で SSO コーポレートアイデンティティを使

用して Amazon DataZone Data Portal にログインし、メンバーシップがあるプロジェクトにアクセスします。

グループプロファイル

グループプロファイルは、Amazon DataZone ユーザーのグループを表します。グループは手動で作成することも、エンタープライズ顧客の Active Directory グループにマッピングすることもできます。Amazon DataZone では、グループは 2 つの目的を果たします。まず、グループは、組織図のユーザーのチームにマッピングできるため、新しい従業員がチームに参加したり、チームから退出したりするときに、Amazon DataZone プロジェクト所有者の管理作業を減らすことができます。次に、会社の管理者は、Active Directory グループを使用してユーザーステータスを管理および更新するため、Amazon DataZone ドメイン管理者はこれらのグループメンバーシップを使用して Amazon DataZone ドメインポリシーを実装できます。

ドメイン管理者

Amazon DataZone では、Amazon DataZone ドメインを作成する IAM プリンシパルが、そのドメインのデフォルトのドメイン管理者です。Amazon DataZone のドメイン管理者は、ドメインの作成、他のドメイン管理者の割り当て、データソースとサブスクリプションターゲットの追加、プロジェクトと環境の作成、プロジェクト所有者の割り当てなど、ドメインの主要な機能を実行します。

パブリッシャー

Amazon DataZone では、パブリッシャーは Amazon DataZone カタログにアセットを公開し、公開するアセットのメタデータを編集できます。この権限が付与された場合、パブリッシャーは、Amazon DataZone カタログに公開したアセットへのサブスクリプションリクエストを承認または拒否できます。

サブスクライバー

Amazon DataZone では、サブスクライバーは Amazon DataZone カタログ内のアセットを検索、アクセス、消費する Amazon DataZone プロジェクトです。

AWS アカウント 所有者

Amazon DataZone では、 AWS アカウント 所有者 AWS アカウント は にロール、ポリシー、アクセス許可を作成し、これら AWS アカウント を Amazon DataZone ドメインに関連付けることができます。

Amazon DataZone の新機能

このセクションでは、Amazon DataZone の新機能と改良点についてリリース日別に説明します。

トピック

2024

Amazon DataZone がサブスクリプションリクエストに対するメタデータ適用ルールを開始

2024/11/20 リリース

Amazon DataZone におけるサブスクリプションリクエストの新しいメタデータ適用ルールは、ドメインユニットの所有者がデータコンシューマーの明確なメタデータ要件を確立し、アクセスリクエストを合理化し、データガバナンスを向上させることにより、データガバナンスを強化します。この機能により、組織は組織のメタデータ標準に準拠し、カスタムワークフローを実装して、一貫性のある管理されたデータアクセスエクスペリエンスを提供できます。詳細については、「サブスクリプションリクエストのメタデータ適用ルール」を参照してください。

Amazon DataZone カスタム AWS サービスブループリントにより、Amazon DataZone プロジェクトの新しいセットアップエクスペリエンスで Amazon SageMaker を有効にするようになりました。 DataZone

2024/11/15 リリース

Amazon DataZone カスタム AWS サービスプリントを使用すると、既存の Amazon SageMaker ドメインを Amazon DataZone に移行できます。管理者はこの機能を使用して、Amazon SageMaker ドメインから既存の承認済みユーザー、セキュリティ設定、ポリシーをインポートして Amazon DataZone プロジェクトをセットアップできるようになりました。詳細については、「SageMaker アセットのセットアップ (管理者ガイド)」を参照してください。

Amazon DataZone がカスタム AWS サービスブループリントの AWS CloudFormation サポートを開始

2024/9/12 リリース

Amazon DataZone は、カスタム AWS サービスブループリントの AWS CloudFormation サポートを追加しました。この新機能により、 AWS CloudFormation を使用して Amazon DataZone での環境作成を自動化できます。カスタムブループリントを使用すると、管理者は既存の IAM ロールを使用して Amazon DataZone を既存のデータパイプラインにシームレスに統合し、データアセットを Amazon DataZone カタログに公開できるようになりました。これにより、これらのアセットの共有を容易に管理し、インフラストラクチャ全体のガバナンスを強化できます。詳細については、「Amazon DataZone resource type reference」を参照してください。

Amazon DataZone でドメインユニットと認可ポリシーを開始

2024/8/12 リリース

Amazon DataZone では、ユーザーがビジネスニーズに応じてビジネスユニット/チームレベルの組織を作成し、ポリシーを管理できるようにする、ドメインユニットと認可ポリシーと呼ばれる一連の新しいデータガバナンス機能が導入されています。ドメインユニットの追加により、ユーザーはビジネスユニットやチームに関連付けられたデータアセットとプロジェクトを整理、作成、検索、検出できます。認可ポリシーを使用すると、これらのドメインユニットのユーザーは、Amazon DataZone 内で作成するプロジェクト、用語集、使用するコンピューティングリソースのアクセスポリシーを設定できます。詳細については、「Amazon DataZone のドメインユニットと認可ポリシー」を参照してください。

Amazon DataZone でデータ製品を開始

2024/8/5 リリース

Amazon DataZone はデータ製品を導入し、データアセットを、特定のビジネスユースケースに合わせて明確に定義された自己完結型パッケージにグループ化します。例えば、マーケティング分析データ製品は、マーケティングキャンペーンデータ、パイプラインデータ、顧客データなど、さまざまなデータアセットをバンドルできます。データ製品を使用すると、検出プロセスとサブスクリプションプロセスを簡素化し、ビジネス目標に合わせて調整して、個々のアセットの処理における冗長性を軽減できます。詳細については、「Amazon DataZone データ製品」を参照してください。

Amazon DataZone できめ細かなアクセスコントロール機能を提供開始

2024/7/2 リリース

Amazon DataZone ではきめ細かなアクセスコントロールを導入し、Amazon DataZone のビジネスデータカタログ内のデータアセットをデータレイクとデータウェアハウス全体できめ細かく制御できるようになりました。新機能により、データ所有者は、データアセット全体へのアクセス権を付与する代わりに、行および列レベルでデータの特定のレコードへのアクセスを制限できるようになりました。例えば、個人を特定できる情報 (PII) などの機密情報を含む列がデータに含まれている場合、必要な列のみにアクセスを制限することができます。これにより、機密情報を保護しながら、機密性の低いデータへのアクセスも許可できます。同様に、行レベルでアクセスを制御できるため、ユーザーは自分のロールまたはタスクに関連するレコードのみを表示できます。詳細については、Amazon DataZone でのデータへのきめ細かなアクセスコントロールを参照してください。

Amazon DataZone でデータリネージュ機能を提供開始

2024/6/27 リリース

Amazon DataZone ではプレビューでデータリネージュを起動して、OpenLineage 対応システムまたは API を通じてリネージュイベントを視覚化し、ソースから消費までのデータ移動を追跡できるようにユーザーを支援しています。Amazon DataZone の OpenLineage 互換 APIs を使用すると、ドメイン管理者とデータプロデューサーは、Amazon S3、Glue、その他の サービスでの変換など、Amazon DataZone で利用できる以上の系統イベントをキャプチャして保存できます。 AWS さらに、Amazon DataZone バージョンは各イベントとリネージュを合わせるため、ユーザーは任意の時点でリネージュを視覚化したり、アセットまたはジョブの履歴全体の変換を比較したりできます。この履歴のリネージュにより、データがどのように進化してきたかについて理解を深めることができます。これはデータアセットの整合性のトラブルシューティング、監査、検証に不可欠です。詳細については、Amazon DataZone のデータリネージュのサポートを参照してください。

Amazon DataZone がカスタム AWS サービスブループリントを起動

2024/6/17 リリース

カスタム AWS サービスブループリントでは、IAM ロール、データレイク、データメッシュ、Amazon S3 バケット、Amazon Redshift クラスターなどの既存の AWS リソースがある場合、独自のカスタム IAM ロールを使用してこれらの既存のリソースへのアクセス許可を指定できるようになりました。これにより、Amazon DataZone ユーザーはパブリケーションとサブスクリプションを活用してこれらのリソースを共有および管理できます。カスタム AWS サービスブループリ

ントを使用すると、Amazon DataZone 管理者は独自のカスタムロールを使用して AWS サービス環境を設定できます。これらの AWS サービス環境のアクションリンクを設定し、既存の AWS リソースへのフェデレーションアクセスを提供できます。また、これらのカスタム AWS サービス環境でサブスクリプションターゲットとデータソースを設定することもできます。管理者は、独自の Amazon DataZone ドメインアカウント、またはデータの公開、サブスクライブ、検出、管理を行う関連アカウントで AWS サービス環境を設定できます。詳細については、「Amazon DataZone カスタム AWS サービスの設計図」を参照してください。

データソース作成フローの機能強化

2024/6/10 リリース

Amazon DataZone では、データソース作成フローに拡張機能を追加し、データプロデューサーのアクセス管理を簡素化しました。これらの更新により、データプロデューサーが AWS Glue および Amazon Redshift アセットを発行するためのデータソースを作成すると、Amazon DataZone はプロジェクトメンバーに読み取り専用アクセス許可を付与します。 AWS Glue データソースを作成すると、Amazon DataZone はデータソースの作成に使用される環境の IAM ロールに「読み取り専用」アクセス許可を自動的に付与し、関連付けられた AWS Glue データベース内のすべてのテーブルへのアクセスを許可します。同様に、Amazon Redshift データソースの場合、Amazon DataZone はデータソースで使用される Amazon Redshift スキーマ内のすべてのテーブルへの「読み取り専用」アクセス許可を付与します。詳細については、「の Amazon DataZone データソースを作成して実行する AWS Glue Data Catalog」および「Amazon Redshift の Amazon DataZone データソースを作成して実行する」を参照してください。

Amazon DataZone で Amazon SageMaker との統合を開始

2024/5/6 リリース

Amazon DataZone では Amazon SageMaker との統合を開始し、データプロデューサーおよびコンシューマーが Amazon SageMaker にシームレスに切り替えて、データおよび機械学習 (ML) アセットへのアクセスガバナンスを適用しながら、機械学習プロジェクトでコラボレーションできるように支援しています。Amazon DataZone と Amazon SageMaker の新しい組み込み統合により、データコンシューマーおよびプロデューサーはインフラストラクチャのセットアップ全体の ML ガバナンスを合理化し、ビジネスイニシアチブでコラボレーションして、データと ML アセットを簡単に管理できます。詳細については、「Amazon DataZone の組み込みブループリント」および「Amazon DataZone の関連付けられているアカウント」を参照してください。

Amazon DataZone が AWS Lake Formation ハイブリッドアクセスモードとの統合を開始

2024/4/3 リリース

Amazon DataZone は Lake Formation AWS ハイブリッドアクセスモードとの統合を導入しました。この統合により、最初に AWS Lake Formation AWS に登録することなく、Amazon DataZone を介して Glue テーブルを簡単に公開および共有できます。開始するには、管理者は Amazon DataZone コンソールの `DefaultDataLake` ブループリントでデータロケーション登録設定を有効にします。次に、データコンシューマーが IAM アクセス許可を通じて管理される AWS Glue テーブルにサブスクライブすると、Amazon DataZone はまずこのテーブルの Amazon S3 ロケーションをハイブリッドモードで登録し、 AWS Lake Formation を通じてテーブルに対するアクセス許可を管理することでデータコンシューマーへのアクセスを許可します。これにより、テーブルに対する IAM アクセス許可は、既存のワークフローを中断することなく、新しく付与された AWS Lake Formation アクセス許可で引き続き存在します。詳細については、「Amazon DataZone と AWS Lake Formation ハイブリッドモードの統合」を参照してください。

Amazon DataZone が Glue Data Quality AWS との統合を開始

2024/4/3 リリース

Amazon DataZone は AWS Glue Data Quality との統合を開始し、サードパーティーのデータ品質ソリューションのデータ品質メトリクスを統合する APIs を提供します。新しい統合により、Glue Data Quality AWS スコアを Amazon DataZone ビジネスデータカタログに自動発行できます。Amazon DataZone API を使用して、サードパーティーのソースから品質メトリクスを取り込むことができます。公開されると、データコンシューマーはデータアセットを簡単に検索でき、きめ細かな品質メトリクスを表示し、失敗したチェックとルールを特定できるため、ビジネス上の意思決定が向上します。詳細については、「Amazon DataZone のデータ品質」を参照してください。

Amazon DataZone の説明に関する AI の推奨事項の一般提供リリース

2024/3/27 リリース

Amazon DataZone は、ビジネスデータカタログを強化することで、データ検出、データ理解、データ使用量を改善するための新しい生成 AI ベースの機能の一般提供リリースを発表しました。データプロデューサーはワンクリックで、包括的なビジネスデータの説明とコンテキストを生成し、影響力のある列を強調表示し、分析ユースケースに関する推奨事項を含めることができます。この機能の開始により、データプロデューサーがアセットの説明をプログラムで生成するために使用できる API

のサポートが追加されました。詳細については、「Amazon DataZone での機械学習と生成 AI の使用」を参照してください。

Amazon DataZone で Amazon Redshift 統合の機能強化を提供開始

2024/3/21 リリース

Amazon DataZone では、Amazon Redshift 統合にいくつかの機能強化を導入し、Amazon Redshift テーブルおよびビューの公開とサブスクライブのプロセスを簡素化しました。これらの更新により、データプロデューサーとコンシューマーの両方のエクスペリエンスが効率化され、Amazon DataZone 管理者が提供する事前設定された認証情報と接続パラメータを使用してデータウェアハウス環境をすばやく作成できます。さらに、これらの機能強化により、管理者は AWS アカウントと Amazon Redshift クラスター内のリソースを使用できるユーザーと目的をより細かく制御できます。

- ブループリント設定: `DefaultDataWarehouseBlueprint` ブループリントを有効にすると、有効化されたブループリントに管理プロジェクトを割り当てることで、アカウント内のどのプロジェクトが `DefaultDataWarehouseBlueprint` ブループリントを使用して環境プロファイルを作成できるかを制御できます。クラスター、データベース、シー AWS クレットなどのパラメータを指定`DefaultDataWarehouseBlueprint`することで、 上にパラメータセットを作成することもできます。Amazon DataZone コンソール内から AWS シークレットを作成することもできます。
- 環境プロファイル: 環境プロファイルを作成するときに、独自の Amazon Redshift パラメータを指定するか、ブループリント設定のパラメータセットの 1 つを使用するかを選択できます。ブループリント設定で作成されたパラメータセットを使用する場合、 AWS シークレットには`AmazonDataZoneDomain`タグのみが必要です (`AmazonDataZoneProject`タグは、環境プロファイルで独自のパラメータセットを指定する場合にのみ必要です) 。環境プロファイルでは、許可されたプロジェクトのリストを指定できます。この環境プロファイルを使用してデータウェアハウス環境を作成できるのは、許可されたプロジェクトのみです。また、許可されたプロジェクトが公開できるデータを指定することもできます。現在、以下のオプションから 1 つを選択できます。1) 任意のスキーマから公開する、2) デフォルト環境のスキーマから公開する、3) 公開を許可しない。
- 環境: データプロデューサーまたはコンシューマーは、 AWS シークレット、クラスター、ワークグループ、データベースなどの独自の Amazon Redshift パラメータを指定しなくても、環境を作成するための環境プロファイルを選択できるようになりました。これらのパラメータは、環境プロファイルから環境に移植されます。環境の作成に加えて、Amazon DataZone では環境のデフォルトスキーマが作成されるようになりました。プロジェクトのメンバーは、このスキーマへの読み取りアクセスと書き込みアクセスを持ち、環境作成の一環で作成されたデフォルトのデータソースを実行すると、このスキーマで作成されたテーブルをカタログに簡単に公開できます。また、環

境を作成するために使用される Amazon Redshift パラメータを使用すれば、(データソース作成時にデータプロデューサーが独自のパラメータを提供しなくても) 新しいデータソースを作成できます。

AWS Amazon DataZone の Cloud Formation サポート

2024/1/18 リリース

Amazon DataZone のユーザーは、 AWS CloudFormation を活用して、Amazon DataZone リソースのスイートを効果的にモデル化および管理できるようになりました。このアプローチにより、リソースの一貫したプロビジョニングが容易になると同時に、コードプラクティスとしてのインフラストラクチャを介したライフサイクル管理も可能になります。カスタムテンプレートを使用すると、必要なリソースとその相互依存関係を正確に定義できます。詳細については、「Amazon DataZone resource type reference」を参照してください。

Amazon DataZone プロジェクトのメンバーとして IAM プリンシパルを直接追加する

2024/1/5 リリース

IAM プリンシパルがまだ Amazon DataZone にログインしていない場合でも (以前の要件)、IAM プリンシパルをプロジェクトメンバーとして追加できるようになりました。ドメイン管理者または IT 管理者がドメインのドメイン実行ロールに `iam:GetUser` と `iam:GetRole` を追加した後、プロジェクト所有者は、IAM ロールまたは IAM ユーザーの Amazon Resouce Name (ARN) を指定するだけで、メンバーとして IAM プリンシパルを追加できます。IAM プリンシパルは Amazon DataZone へのアクセスに必要な IAM アクセス許可も必要で、これらは IAM コンソールで設定できます。詳細については、「プロジェクトにチームメンバーを追加する」を参照してください。

データポータルからのカスタムアセットタイプのサポート

2024/1/5 リリース

カスタムアセットのサポートにより、Amazon DataZone はデータポータルを介してダッシュボード、クエリ、モデルなどの非構造化データ用にアセットをカタログ化できるため、これまで利用できた API サポートと共に、カスタムアセットをデータポータルに直接追加しやすくなります。Amazon DataZone でカスタムアセットを作成、更新、公開する機能を使用すると、あらゆる種類のアセットを共有、検索、サブスクライブし、それらのアセットのガバナンスを提供するビジネスワークフロー

を構築できます。詳細については、「Amazon DataZone でカスタムアセットタイプを作成する」を参照してください。

2023

ドメインの削除

2023/12/27 リリース

これは、より簡単にドメインを削除できる機能です。これで、ドメインが空でない場合 (つまり、プロジェクト、環境、アセット、データソースなどが含まれている場合) でも、ドメインの削除を続行できるようになりました。詳細については、「Amazon DataZone ドメインを削除する」を参照してください。

ハイブリッドモード

2023/12/22 リリース

Amazon DataZone で AWS Lake Formation ハイブリッドモードのサポートが追加されました。このサポートにより、ハイブリッドモードで Lake Formation に登録された AWS S3 ロケーションで AWS Glue テーブルを Amazon DataZone に発行する場合、Amazon DataZone はこのテーブルをマネージドアセットとして扱い、このテーブルへのサブスクリプション許可を管理できます。この機能リリース以前では、Amazon DataZone はこのテーブルをアンマネージドアセットとして扱います。つまり、Amazon DataZone はこのテーブルにサブスクリプションを付与できません。詳細については、「Amazon DataZone に Lake Formation アクセス許可を設定する」を参照してください。

HIPAA 適格性

2023/12/14 リリース

Amazon DataZone は現在、U.S. Health Insurance Portability and Accountability Act of 1996 (1996 年の米国における医療保険の相互運用性と説明責任に関する法令、HIPAA) に準拠しています。HIPAA 準拠 AWS のサービスのリストを表示するには、https://aws.amazon.com/compliance/hipaa-eligible-services-reference/ を参照してください。

Amazon DataZone の説明に関する AI の推奨事項 (プレビュー)

2023/11/28 リリース

AWS は、Amazon DataZone の新しい生成 AI ベースの機能のプレビューを発表し、ビジネスデータカタログを強化することでデータ検出、データ理解、データ使用量を改善します。データプロデューサーはワンクリックで、包括的なビジネスデータの説明とコンテキストを生成し、影響力のある列を強調表示し、分析ユースケースに関する推奨事項を含めることができます。Amazon DataZone の説明に関する AI の推奨事項により、データコンシューマーは分析に必要なデータテーブルと列を特定できるため、データ検出可能性が向上し、データプロデューサーとのやりとりが減少します。プレビューは、米国東部 (バージニア北部) 、米国西部 (オレゴン) の各 AWS リージョンでプロビジョニングされた Amazon DataZone ドメインで利用できます。詳細については、「Amazon DataZone での機械学習と生成 AI の使用」を参照してください。

DefaultDataLake ブループリントの機能強化

2023/11/20 リリース

Amazon DataZone は、DefaultDataLake ブループリントに拡張機能を追加しました。これにより、AWS アカウントからどのデータを公開できるかをより細かく制御できます。この機能のリリースで導入された主な変更点が 2 つあります。

- コンソールで DefaultDataLake ブループリントを有効にすると、有効化されたブループリントに管理プロジェクトを割り当てることで、アカウントの DefaultDataLake ブループリントを使用して環境プロファイルを作成できるプロジェクトを制御できます。
- 2 番目の変更は ポータルに関することです。DefaultDataLake ブループリントを使用して環境プロファイルを作成する場合、環境プロファイルを使用して環境を作成する権限のある許可されたプロジェクトを選択することもできます。デフォルトでは、すべてのプロジェクトでデータレイク環境プロファイルを使用できますが、環境プロファイルを特定のプロジェクトに制限したり、プロファイルで作成された環境を使用して公開できるデータを制御したりすることもできます。

詳細については、「環境ファイルを作成する」を参照してください。

Amazon DataZone がサポートされているリージョン

Amazon DataZone の現在のリリースでは、以下の AWS リージョンがサポートされています。

- 米国東部(オハイオ)
- 米国東部 (バージニア北部)
- 米国西部 (オレゴン)
- アジアパシフィック (ムンバイ)
- アジアパシフィック (ソウル)
- アジアパシフィック (シンガポール)
- アジアパシフィック (シドニー)
- アジアパシフィック (東京)
- カナダ (中部)
- 欧州 (フランクフルト)
- 欧州 (アイルランド)
- 欧州 (ロンドン)
- 欧州 (パリ)
- 欧州 (ストックホルム)
- 南米 (サンパウロ)

Amazon DataZone の設定

Amazon DataZone を設定するには、 AWS アカウントを持ち、Amazon DataZone に必要な IAM ポリシーとアクセス許可を設定する必要があります。

Amazon DataZone アクセス許可を設定したら、「Getting Started」セクションのステップを完了することをお勧めします。このステップでは、Amazon DataZone ドメインの作成、データポータル URL の取得、データプロデューサーとデータコンシューマー向けの基本的な Amazon DataZone ワークフローについて説明しています。

トピック

- AWS アカウントにサインアップする
- Amazon DataZone マネジメントコンソールを使用するために必要な IAM アクセス許可を設定する
- Amazon DataZone データポータルの使用に必要な IAM アクセス許可を設定する
- Amazon DataZone AWS 用の IAM Identity Center のセットアップ

AWS アカウントにサインアップする

AWS アカウントがない場合は、次の手順を実行してアカウントを作成します。

AWS 組織がある場合は、 アカウントを作成します。

1. AWS マネジメントコンソールにサインインし、https://console.aws.amazon.com/organizations/ で Organizations コンソールを開きます。
2. ナビゲーションペインで、[AWS アカウント] を選択します。
3. AWS アカウントの追加 を選択します。
4. AWS アカウントを作成し、リクエストされた詳細を入力します。 AWS アカウントの作成 を選択します。

AWS アカウントにサインアップするには

1. https://portal.aws.amazon.com/billing/signup を開きます。
2. オンラインの手順に従います。

   サインアップ手順の一環として、通話呼び出しを受け取り、電話キーパッドで検証コードを入力するように求められます。

AWS アカウントにサインアップすると、AWS アカウントのルートユーザーが作成されます。ルートユーザーは、アカウント内のすべての AWS サービスとリソースにアクセスできます。セキュリティのベストプラクティスとして、管理ユーザーに管理アクセスを割り当て、ルートユーザーアクセスが必要なタスクを実行する場合にのみ、ルートユーザーを使用してください。

Amazon DataZone マネジメントコンソールを使用するために必要な IAM アクセス許可を設定する

Amazon DataZone ドメイン、ブループリント、およびユーザーへのアクセスと設定を行ったり、Amazon DataZone データポータルを作成したりするには、Amazon DataZone マネジメントコンソールを使用する必要があります。

Amazon DataZone マネジメントコンソールを使用するユーザー、グループ、またはロールに必要なアクセス許可やオプションのアクセス許可を設定するには、以下の手順を実行する必要があります。

マネジメントコンソールを使用するために IAM アクセス許可を設定する手順

- Amazon DataZone コンソールへのアクセスに必要なポリシーとオプションのポリシーをユーザー、グループ、またはロールにアタッチする
- Amazon DataZone サービスコンソールの簡素化されたロール作成を有効にする IAM アクセス許可のカスタムポリシーを作成する
- Amazon DataZone ドメインに関連付けられているアカウントを管理するアクセス許可のカスタムポリシーを作成する
- (オプション) Amazon DataZone ドメインへの SSO ユーザーおよび SSO グループアクセスを追加および削除する AWS Identity Center アクセス許可のカスタムポリシーを作成する
- (オプション) IAM プリンシパルをキーユーザーとして追加し、 AWS Key Management Service (KMS) のカスタマーマネージドキーを使用して Amazon DataZone ドメインを作成します。

Amazon DataZone コンソールへのアクセスに必要なポリシーとオプションのポリシーをユーザー、グループ、またはロールにアタッチする

ユーザー、グループ、またはロールに必要なポリシーとオプションのカスタムポリシーをアタッチするには、以下の手順を実行します。詳細については、「AWS Amazon DataZone の マネージドポリシー」を参照してください。

1. AWS マネジメントコンソールにサインインし、https://console.aws.amazon.com/iam/ で IAM コンソールを開きます。
2. ナビゲーションペインで、ポリシー を選択してください。
3. 以下のポリシーを選択してユーザー、グループ、またはロールにアタッチします。

   - ポリシーのリストで、[AmazonDataZoneFullAccess] の横にあるチェックボックスを選択します。[Filter (フィルター)] メニューと検索ボックスを使用して、ポリシーのリストをフィルタリングできます。詳細については、「AWS 管理ポリシー: AmazonDataZoneFullAccess」を参照してください。
   - (オプション) Amazon DataZone サービスコンソールの簡素化されたロール作成を有効にする IAM アクセス許可のカスタムポリシーを作成します。
   - (オプション) Amazon DataZone ドメインへの SSO ユーザーおよび SSO グループアクセスを追加および削除する AWS Identity Center アクセス許可のカスタムポリシーを作成します。
4. [アクション] を選択し、[アタッチ] を選択します。
5. ポリシーをアタッチするユーザー、グループ、またはロールを選択します。[Filter] メニューと検索ボックスを使用して、プリンシパルエンティティのリストをフィルタリングできます。ユーザー、グループ、またはロールを選択したら、[ポリシーをアタッチ] を選択します。

Amazon DataZone サービスコンソールの簡素化されたロール作成を有効にする IAM アクセス許可のカスタムポリシーを作成する

カスタムインラインポリシーを作成して、Amazon DataZone がユーザーの代わりに AWS マネジメントコンソールで必要なロールを作成できるように必要なアクセス許可を付与するには、以下の手順を実行します。

> **Note**
>
> サービスロールの作成を許可するアクセス許可の設定に関するベストプラクティスについては、https://docs.aws.amazon.com/IAM/latest/UserGuide/id_roles_create_for-service.html を参照してください。

1. AWS マネジメントコンソールにサインインし、https://console.aws.amazon.com/iam/ で IAM コンソールを開きます。

2. ナビゲーションペインで、[Users] (ユーザー) または [User groups] (ユーザーグループ) を選択します。
3. 一覧から、ポリシーを埋め込むユーザーまたはグループの名前を選択します。
4. [Permissions (アクセス許可)] タブを選択して、必要であれば [Permissions policies (アクセス許可ポリシー)] セクションを展開します。
5. [アクセス許可を追加] および [インラインポリシーを作成] リンクを選択します。
6. [ポリシーを作成] 画面の [ポリシーエディタ] セクションで [JSON] を選択します。

   次の JSON ステートメントを使用してポリシードキュメントを作成し、[次へ] を選択します。

   JSON

```
{
    "Version":"2012-10-17",
    "Statement": [
        {
            "Effect": "Allow",
            "Action": [
                "iam:CreatePolicy",
                "iam:CreateRole"
            ],
            "Resource": [
                "arn:aws:iam::*:policy/service-role/AmazonDataZone*",
                "arn:aws:iam::*:role/service-role/AmazonDataZone*"
            ]
        },
        {
            "Effect": "Allow",
            "Action": "iam:AttachRolePolicy",
            "Resource": "arn:aws:iam::*:role/service-role/AmazonDataZone*",
            "Condition": {
                "ArnLike": {
                    "iam:PolicyARN": [
                        "arn:aws:iam::aws:policy/AmazonDataZone*",
                        "arn:aws:iam::*:policy/service-role/AmazonDataZone*"
                    ]
                }
            }
        }
```

```
    ]
}
```

7. [ポリシーを確認] 画面で、ポリシーの名前を入力します。ポリシーが完成したら、[Create policy (ポリシーの作成)] を選択します。画面上部の赤いボックスにエラーが表示されていないことを確認します。報告されたエラーがあれば、修正します。

Amazon DataZone ドメインに関連付けられているアカウントを管理するアクセス許可のカスタムポリシーを作成する

カスタムインラインポリシーを作成して、関連付けられた AWS アカウントにドメインのリソース共有を一覧表示、承認、拒否するために必要なアクセス許可を付与し、関連付けられたアカウントの環境ブループリントを有効、設定、無効にするには、次の手順を実行します。ブループリント設定中に使用可能なオプションの Amazon DataZone サービスコンソールの簡素化されたロール作成を有効にするには、Amazon DataZone サービスコンソールの簡素化されたロール作成を有効にする IAM アクセス許可のカスタムポリシーを作成することも必要です。

> **Note**
>
> サービスロールの作成を許可するアクセス許可の設定に関するベストプラクティスについては、https://docs.aws.amazon.com/IAM/latest/UserGuide/id_roles_create_for-service.html を参照してください。

1. AWS マネジメントコンソールにサインインし、https://console.aws.amazon.com/iam/ で IAM コンソールを開きます。
2. ナビゲーションペインで、[Users] (ユーザー) または [User groups] (ユーザーグループ) を選択します。
3. 一覧から、ポリシーを埋め込むユーザーまたはグループの名前を選択します。
4. [Permissions (アクセス許可)] タブを選択して、必要であれば [Permissions policies (アクセス許可ポリシー)] セクションを展開します。
5. [アクセス許可を追加] および [インラインポリシーを作成] リンクを選択します。
6. [ポリシーを作成] 画面の [ポリシーエディタ] セクションで [JSON] を選択します。次の JSON ステートメントを使用してポリシードキュメントを作成し、[次へ] を選択します。

JSON

```
{
    "Version":"2012-10-17",
    "Statement": [
        {
            "Effect": "Allow",
            "Action": [
                "datazone:ListEnvironmentBlueprintConfigurations",
                "datazone:PutEnvironmentBlueprintConfiguration",
                "datazone:GetDomain",
                "datazone:ListDomains",
                "datazone:GetEnvironmentBlueprintConfiguration",
                "datazone:ListEnvironmentBlueprints",
                "datazone:GetEnvironmentBlueprint",
                "datazone:ListAccountEnvironments",
                "datazone:DeleteEnvironmentBlueprintConfiguration"
            ],
            "Resource": "*"
        },
        {
            "Effect": "Allow",
            "Action": "iam:PassRole",
            "Resource": [
                "arn:aws:iam::*:role/AmazonDataZone",
                "arn:aws:iam::*:role/service-role/AmazonDataZone*"
            ],
            "Condition": {
                "StringEquals": {
                    "iam:passedToService": "datazone.amazonaws.com"
                }
            }
        },
        {
            "Effect": "Allow",
            "Action": "iam:AttachRolePolicy",
            "Resource": "arn:aws:iam::*:role/service-role/AmazonDataZone*",
            "Condition": {
                "ArnLike": {
                    "iam:PolicyARN": [
                        "arn:aws:iam::aws:policy/AmazonDataZone*",
```

```
                    "arn:aws:iam::*:policy/service-role/AmazonDataZone*"
                ]
            }
        }
    },
    {
        "Effect": "Allow",
        "Action": "iam:ListRoles",
        "Resource": "*"
    },
    {
        "Effect": "Allow",
        "Action": [
            "iam:CreatePolicy",
            "iam:CreateRole"
        ],
        "Resource": [
            "arn:aws:iam::*:policy/service-role/AmazonDataZone*",
            "arn:aws:iam::*:role/service-role/AmazonDataZone*"
        ]
    },
    {
        "Effect": "Allow",
        "Action": [
            "ram:AcceptResourceShareInvitation",
            "ram:RejectResourceShareInvitation",
            "ram:GetResourceShareInvitations"
        ],
        "Resource": "*"
    },
    {
        "Effect": "Allow",
        "Action": [
            "s3:ListAllMyBuckets",
            "s3:ListBucket",
            "s3:GetBucketLocation"
        ],
        "Resource": "*"
    },
    {
        "Effect": "Allow",
        "Action": "s3:CreateBucket",
        "Resource": "arn:aws:s3:::amazon-datazone*"
    }
```

```
    ]
}
```

7. [ポリシーを確認] 画面で、ポリシーの名前を入力します。ポリシーが完成したら、[Create policy (ポリシーの作成)] を選択します。画面上部の赤いボックスにエラーが表示されていないことを確認します。報告されたエラーがあれば、修正します。

(オプション) Amazon DataZone ドメインへの SSO ユーザーおよび SSO グループアクセスを追加および削除する AWS Identity Center アクセス許可のカスタムポリシーを作成する

カスタムインラインポリシーを作成して、Amazon DataZone ドメインへの SSO ユーザーと SSO グループのアクセスを追加および削除するために必要なアクセス許可を付与するには、以下の手順を実行します。

1. AWS マネジメントコンソールにサインインし、https://console.aws.amazon.com/iam/ で IAM コンソールを開きます。
2. ナビゲーションペインで、[Users] (ユーザー) または [User groups] (ユーザーグループ) を選択します。
3. 一覧から、ポリシーを埋め込むユーザーまたはグループの名前を選択します。
4. [Permissions (アクセス許可)] タブを選択して、必要であれば [Permissions policies (アクセス許可ポリシー)] セクションを展開します。
5. [アクセス許可を追加] および [インラインポリシーを作成] を選択します。
6. [ポリシーを作成] 画面の [ポリシーエディタ] セクションで [JSON] を選択します。

   次の JSON ステートメントを使用してポリシードキュメントを作成し、[次へ] を選択します。

   JSON

```
{
  "Version":"2012-10-17",
  "Statement": [
    {
      "Effect": "Allow",
      "Action": [
```

```
        "sso:GetManagedApplicationInstance",
        "sso:ListProfiles",
        "sso:AssociateProfile",
        "sso:DisassociateProfile",
        "sso:GetProfile"
      ],
      "Resource": "*"
    }
  ]
}
```

7. [ポリシーを確認] 画面で、ポリシーの名前を入力します。ポリシーが完成したら、[Create policy (ポリシーの作成)] を選択します。画面上部の赤いボックスにエラーが表示されていないことを確認します。報告されたエラーがあれば、修正します。

(オプション) IAM プリンシパルをキーユーザーとして追加し、 AWS Key Management Service (KMS) のカスタマーマネージドキーを使用して Amazon DataZone ドメインを作成します。

Key AWS Management Service (KMS) からカスタマーマネージドキー (CMK) を使用して Amazon DataZone ドメインをオプションで作成する前に、次の手順を実行して IAM プリンシパルを KMS キーのユーザーにします。

1. AWS マネジメントコンソールにサインインし、https://console.aws.amazon.com/kms/ で KMS コンソールを開きます。
2. ユーザーが作成および管理するアカウント内のキーを表示するには、ナビゲーションペインで [Customer managed keys] (カスタマーマネージドキー) を選択します。
3. KMS キーのリストで、確認する KMS キーのエイリアスまたはキー ID を選択します。
4. キーユーザーを追加または削除し、外部 AWS アカウントに KMS キーの使用を許可または禁止するには、ページのキーユーザーセクションのコントロールを使用します。キーユーザーは、データキーの暗号化、復号、再暗号化、生成などの暗号化オペレーションで KMS キーを使用できます。

Amazon DataZone データポータルの使用に必要な IAM アクセス許可を設定する

Amazon DataZone データポータル (AWS マネジメントコンソール外) はブラウザベースのウェブアプリケーションで、ユーザーはセルフサービス方式でデータのカタログ化、検出、管理、共有、分析を行うことができます。データポータルは、IAM アイデンティティセンターを通じて ID プロバイダーからの IAM 認証情報または既存の認証情報を使用してユーザー AWS を認証します。

ユーザー、グループ、またはロールが Amazon DataZone データポータルまたはカタログを使用するのに必要なアクセス許可を設定するには、以下の手順を実行する必要があります。

データポータルを使用するための IAM アクセス許可を設定する手順

- Amazon DataZone データポータルへのアクセスに必要なポリシーをユーザー、グループ、またはロールにアタッチする
- Amazon DataZone カタログアクセスに必要なポリシーをユーザー、グループ、またはロールにアタッチする
- ドメインが AWS Key Management Service (KMS) のカスタマーマネージドキーで暗号化されている場合、Amazon DataZone データポータルまたはカタログアクセスのユーザー、グループ、またはロールにオプションのポリシーをアタッチする

Amazon DataZone データポータルへのアクセスに必要なポリシーをユーザー、グループ、またはロールにアタッチする

Amazon DataZone データポータルにアクセスするには、 AWS 認証情報またはシングルサインオン (SSO) 認証情報を使用します。以下のセクションの手順に従って、 AWS 認証情報を使用してデータポータルにアクセスするために必要なアクセス許可を設定します。SSO による Amazon DataZone の使用の詳細については、「Amazon DataZone AWS 用の IAM Identity Center のセットアップ」を参照してください。

> **Note**
>
> ドメインのデータポータルにアクセスできるのは、ドメインの AWS アカウントの IAM プリンシパルのみです。他の AWS アカウントの IAM プリンシパルは、ドメインのデータポータルにアクセスできません。

ユーザー、グループ、またはロールに必要なポリシーをアタッチするには、以下の手順を実行します。詳細については、「AWS Amazon DataZone の マネージドポリシー」を参照してください。

1. AWS マネジメントコンソールにサインインし、https://console.aws.amazon.com/iam/ で IAM コンソールを開きます。
2. ナビゲーションペインで、[ユーザー]、[ユーザーグループ]、または [ロール] を選択します。
3. リストから、ポリシーを埋め込むユーザー、グループ、またはロールの名前を選択します。
4. [Permissions (アクセス許可)] タブを選択して、必要であれば [Permissions policies (アクセス許可ポリシー)] セクションを展開します。
5. [アクセス許可を追加] および [インラインポリシーを作成] リンクを選択します。
6. [ポリシーを作成] 画面の [ポリシーエディタ] セクションで [JSON] を選択します。次の JSON ステートメントを使用してポリシードキュメントを作成し、[次へ] を選択します。

   JSON

```
{
    "Version":"2012-10-17",
    "Statement": [
        {
            "Effect": "Allow",
            "Action": [
                "datazone:GetIamPortalLoginUrl"
            ],
            "Resource": [
                "*"
            ]
        }
    ]
}
```

7. [ポリシーを確認] 画面で、ポリシーの名前を入力します。ポリシーが完成したら、[Create policy (ポリシーの作成)] を選択します。画面上部の赤いボックスにエラーが表示されていないことを確認します。報告されたエラーがあれば、修正します。

Amazon DataZone カタログアクセスに必要なポリシーをユーザー、グループ、またはロールにアタッチする

> **Note**
>
> ドメインの AWS アカウントの IAM プリンシパルのみがドメインのカタログにアクセスできます。他の AWS アカウントの IAM プリンシパルは、ドメインのカタログにアクセスできません。

次の手順で、API と SDK を使用して Amazon DataZone ドメインのカタログへのアクセスを IAM ID に付与します。これらの IAM ID で Amazon DataZone データポータルにもアクセスできるようにする場合は、Amazon DataZone データポータルへのアクセスに必要なポリシーをユーザー、グループ、またはロールにアタッチするために、上記の手順にも従います。詳細については、「AWS Amazon DataZone の マネージドポリシー」を参照してください。

1. AWS マネジメントコンソールにサインインし、https://console.aws.amazon.com/iam/ で IAM コンソールを開きます。
2. ナビゲーションペインで、ポリシー を選択してください。
3. ポリシーのリストで、AmazonDataZoneFullUserAccess ポリシーの横にあるラジオボタンを選択します。[Filter (フィルター)] メニューと検索ボックスを使用して、ポリシーのリストをフィルタリングできます。詳細については、AWS マネージドポリシー: AmazonDataZoneFullUserAccessを参照してください。
4. [アクション] を選択し、[アタッチ] を選択します。
5. 各プリンシパルの横にあるチェックボックスを選択して、ポリシーをアタッチするユーザー、グループ、またはロールを選択します。[Filter] メニューと検索ボックスを使用して、プリンシパルエンティティのリストをフィルタリングできます。ユーザー、グループ、またはロールを選択したら、[ポリシーをアタッチ] を選択します。

ドメインが AWS Key Management Service (KMS) のカスタマーマネージドキーで暗号化されている場合、Amazon DataZone データポータルまたはカタログアクセスのユーザー、グループ、またはロールにオプションのポリシーをアタッチする

独自のデータ暗号化用 KMS キーを使用して Amazon DataZone ドメインを作成する場合、以下のアクセス許可を持つインラインポリシーを作成して IAM プリンシパルにアタッチし、Amazon DataZone データポータルやカタログにアクセスできるようにする必要もあります。

1. AWS マネジメントコンソールにサインインし、https://console.aws.amazon.com/iam/ で IAM コンソールを開きます。
2. ナビゲーションペインで、[ユーザー]、[ユーザーグループ]、または [ロール] を選択します。
3. リストから、ポリシーを埋め込むユーザー、グループ、またはロールの名前を選択します。
4. [Permissions (アクセス許可)] タブを選択して、必要であれば [Permissions policies (アクセス許可ポリシー)] セクションを展開します。
5. [アクセス許可を追加] および [インラインポリシーを作成] リンクを選択します。
6. [ポリシーを作成] 画面の [ポリシーエディタ] セクションで [JSON] を選択します。次の JSON ステートメントを使用してポリシードキュメントを作成し、[次へ] を選択します。

   JSON

```
{
    "Version":"2012-10-17",
    "Statement": [
        {
            "Sid": "Statement1",
            "Effect": "Allow",
            "Action": [
                "kms:Decrypt",
                "kms:DescribeKey",
                "kms:GenerateDataKey"
            ],
            "Resource": [
                "arn:aws:kms:us-
east-1:111122223333:key/1234abcd-12ab-34cd-56ef-1234567890ab"
            ]
        }
```

```
    ]
}
```

7. [ポリシーを確認] 画面で、ポリシーの名前を入力します。ポリシーが完成したら、[Create policy (ポリシーの作成)] を選択します。画面上部の赤いボックスにエラーが表示されていないことを確認します。報告されたエラーがあれば、修正します。

Amazon DataZone AWS 用の IAM Identity Center のセットアップ

> **Note**
>
> AWS Identity Center は、Amazon DataZone ドメインと同じ AWS リージョンで有効にする必要があります。現在、 AWS アイデンティティセンターは 1 つの AWS リージョンでのみ有効にできます。

Amazon DataZone データポータルにアクセスするには、シングルサインオン (SSO) 認証情報または AWS 認証情報を使用します。このセクションの手順に従って、Amazon DataZone 用の AWS IAM アイデンティティセンターを設定します。 AWS 認証情報を使用した Amazon DataZone の使用の詳細については、「Amazon DataZone マネジメントコンソールを使用するために必要な IAM アクセス許可を設定する」を参照してください。

Amazon DataZone ドメインを作成するリージョンと同じ AWS リージョンで AWS IAM アイデンティティセンター (AWS シングルサインオンの後継) が既に有効になっており、設定されている場合は、このセクションの手順をスキップできます。

IAM アイデンティティセンター (シングルサインオンの後継) AWS を有効にするには、 AWS 次の手順を実行します。

1. AWS IAM Identity Center を有効にするには、 AWS Organizations AWS 管理アカウントの認証情報を使用して マネジメントコンソールにサインインする必要があります。 AWS Organizations メンバーアカウントの認証情報を使用してサインインした場合は、IAM アイデンティティセンターを有効にできません。詳細については、「 Organizations ユーザーガイド」の AWS 「組織の作成と管理」を参照してください。
2. AWS IAM アイデンティティセンター (AWS シングルサインオンの後継) コンソールを開き、上部のナビゲーションバーのリージョンセレクターを使用して、Amazon DataZone ドメインを作成する AWS リージョンを選択します。
3. [有効化] を選択します。

4. ID ソースを選択します。

   デフォルトでは、迅速かつ簡単なユーザー管理のために IAM アイデンティティセンターストアを取得します。代わりに外部 ID プロバイダーに接続することもできますが、この手順では、デフォルトの IAM アイデンティティセンターストアを使用します。

   詳細については、ID ソースの選択に関する説明を参照してください。
5. IAM アイデンティティセンターのナビゲーションペインで、[グループ] を選択し、[グループを作成] を選択します。グループ名を入力し、[作成] を選択します。
6. IAM アイデンティティセンターのナビゲーションペインで、[ユーザー] を選択します。
7. [ユーザーの追加] 画面で、必要な情報を入力し、[パスワード設定手順の案内メールをユーザーに送信] を選択します。次の設定手順に関するメールがユーザーに送られます。
8. [次へ: グループ] を選択し、目的のグループを選択して、[ユーザーを追加] を選択します。SSO の使用を案内する招待メールがユーザーに送られます。ユーザーは、このメールで [招待を受け入れる] を選択し、パスワードを設定する必要があります。

Amazon DataZone ドメインを作成したら、Amazon DataZone の AWS Identity Center を有効にし、SSO ユーザーと SSO グループへのアクセスを提供できます。詳細については、「Amazon DataZone の IAM アイデンティティセンターを有効にする」を参照してください。

Amazon DataZone の開始方法

このセクションの情報は、Amazon DataZone の使用を開始する上で役立ちます。Amazon DataZone を初めて利用する場合は、Amazon DataZone の用語と概念で説明されている概念と用語について理解することから始めてください。

これらのクイックスタートワークフローのいずれかでステップを開始する前に、このガイドの「セットアップ」セクションで説明されている手順を完了する必要があります。新しい AWS アカウントを使用している場合は、Amazon DataZone マネジメントコンソールを使用するために必要なアクセス許可を設定する必要があります。既存の Glue Data Catalog オブジェクトがある AWS アカウントを使用している場合は、Amazon DataZone AWS への Lake Formation アクセス許可も設定する必要があります。 DataZone

この「使用開始」セクションでは、次の Amazon DataZone クイックスタートワークフローについて説明します。

トピック

- Glue データを使用した Amazon DataZone AWS クイックスタート
- Amazon Redshift データを使用した Amazon DataZone クイックスタート
- サンプルスクリプトを使用する Amazon DataZone クイックスタート

Glue データを使用した Amazon DataZone AWS クイックスタート

サンプル AWS Glue データを使用して Amazon DataZone で完全なデータプロデューサーとデータコンシューマーワークフローを実行するには、次のクイックスタートステップを実行します。

クイックスタートステップ

- ステップ 1 - Amazon DataZone ドメインとデータポータルを作成する
- ステップ 2 - 公開プロジェクトを作成する
- ステップ 3 - 環境を作成する
- ステップ 4 - 公開するデータを生成する
- ステップ 5 - Glue AWS からメタデータを収集する
- ステップ 6 - データアセットをキュレートして公開する
- ステップ 7 - データ分析用のプロジェクトを作成する
- ステップ 8 - データ分析用の環境を作成する

- ステップ 9 - データカタログを検索してデータをサブスクライブする
- ステップ 10: サブスクリプション リクエストの承認
- ステップ 11 - Amazon Athena でクエリを構築してデータを分析する

ステップ 1 - Amazon DataZone ドメインとデータポータルを作成する

このセクションでは、このワークフローの Amazon DataZone ドメインとデータポータルを作成する手順について説明します。

Amazon DataZone ドメインを作成するには、次の手順を実行します。Amazon DataZone ドメインの削除については、「Amazon DataZone の用語と概念」を参照してください。

1. https://console.aws.amazon.com/datazone の Amazon DataZone コンソールに移動し、サインインしてから、[ドメインを作成] を選択します。

   > **Note**
   >
   > このワークフローに既存の Amazon DataZone ドメインを使用する場合は、[ドメインを表示] を選択して使用するドメインを選択し、「ステップ 2 - 公開プロジェクトを作成する」に進みます。

2. [ドメインを作成] ページで、次のフィールドの値を指定します。

   - 名前 - ドメインの名前を指定します。このワークフローでは、このドメイン Marketing を呼び出すことができます。
   - 説明 - オプションでドメインの説明を指定します。
   - データ暗号化 - データは、デフォルトで が AWS 所有および管理するキーで暗号化されます。このユースケースでは、デフォルトのデータ暗号化設定のままにすることができます。

     カスタマーマネージドキーの詳細については、「Amazon DataZone での保管中のデータ暗号化」を参照してください。データ暗号化にユーザー独自の KMS キーを使用する場合は、デフォルトの AmazonDataZoneDomainExecutionRole に次のステートメントを含める必要があります。

     JSON

     ```
     {
         "Version":"2012-10-17",
     ```

```
    "Statement": [
        {
            "Sid": "Statement1",
            "Effect": "Allow",
            "Action": [
                "kms:Decrypt",
                "kms:DescribeKey",
                "kms:GenerateDataKey"
            ],
            "Resource": [
                "arn:aws:kms:us-
east-1:111122223333:key/1234abcd-12ab-34cd-56ef-1234567890ab"
            ]
        }
    ]
}
```

- サービスアクセス - デフォルトで選択されている [デフォルトのロールを使用] オプションを変更しないままにします。

> **Note**
>
> このワークフローに既存の Amazon DataZone ドメインを使用している場合は、[既存のサービスロールを使用] オプションを選択して、ドロップダウンメニューから既存のロールを選択できます。

- [Quick Setup] で、[データ消費と公開のためにこのアカウントを設定] を選択します。このオプションでは、データレイクとデータウェアハウスの組み込み Amazon DataZone ブループリントを有効にし、このアカウントに必要なアクセス許可、リソース、デフォルト プロジェクト、デフォルト データレイク、データウェアハウス環境プロファイルを設定します。Amazon DataZone ブループリントの詳細については、「Amazon DataZone の用語と概念」を参照してください。
- [アクセス許可の詳細] の残りのフィールドは変更しないでください。

> **Note**
>
> 既存の Amazon DataZone ドメインがある場合は、[既存のサービスロールを使用] オプションを選択し、[Glue 管理アクセスロール]、[Redshift 管理アクセスロール]、[プ

ロビジョニングロール] のドロップダウンメニューから既存のロール を選択できます。

- [タグ] のフィールドは変更しないでください。
- [ドメインを作成] をクリックします。

3. ドメインが正常に作成されたら、このドメインを選択し、ドメインの概要ページに表示されるこのドメインの [データポータル URL] をメモします。この URL を使用して Amazon DataZone データポータルにアクセスし、このワークフローの残りのステップを完了できます。データポータルを開く を選択して、データポータルに移動することもできます。

> **Note**
>
> Amazon DataZone の現在のリリースでは、ドメインが作成されると、データポータル用に生成された URL は変更できません。

ドメインの作成には数分かかることがあります。ドメインのステータスが [使用可能] になるまで待ってから、次のステップに進みます。

ステップ 2 - 公開プロジェクトを作成する

このセクションでは、このワークフローの公開プロジェクトを作成するために必要な手順について説明します。

1. 上記のステップ 1 を完了してドメインを作成すると、[Amazon DataZone へようこそ!] ウィンドウが表示されます。このウィンドウで [プロジェクトを作成] を選択します。
2. 例えば、このワークフローでプロジェクト名を指定する場合、SalesDataPublishingProject という名前を付け、残りのフィールドを変更せずに [作成] を選択します。

ステップ 3 - 環境を作成する

このセクションでは、このワークフローの環境を作成するために必要な手順について説明します。

1. 上記のステップ 2 を完了してプロジェクトを作成すると、[プロジェクトを使用する準備ができました!] ウィンドウが表示されます。このウィンドウで [環境を作成] を選択します。
2. [環境を作成] ページで、以下を指定して [環境を作成] を選択します。

3. 以下の値を指定します。

   - 名前 - 環境の名前を指定します。このチュートリアルでは、`Default data lake environment` と呼びます。
   - 説明 - 環境の説明を入力します。
   - 環境プロファイル - DataLakeProfile 環境プロファイルを選択します。これにより、このワークフローで Amazon DataZone を使用して、Amazon S3、 AWS Glue Catalog、Amazon Athena 内のデータを操作できます。
   - このチュートリアルでは、残りのフィールドは変更しないでください。

4. [環境を作成] を選択します。

ステップ 4 - 公開するデータを生成する

このセクションでは、このワークフローで公開するデータを生成するために必要な手順について説明します。

1. 上記のステップ 3 を完了したら、`SalesDataPublishingProject` プロジェクトの右側のパネルの [分析ツール]で Amazon Athena を選択します。これにより、認証にプロジェクトの認証情報を使用して Athena クエリエディタが開きます。公開環境が [Amazon DataZone 環境] ドロップダウンで選択され、`<environment_name>%_pub_db` データベースがクエリエディタで選択されていることを確認します。
2. このチュートリアルでは、Create Table as Select (CTAS) クエリスクリプトを使用して、Amazon DataZone に公開する新しいテーブルを作成します。クエリエディタでこの CTAS スクリプトを実行し、公開して検索とサブスクリプションで使用できる `mkt_sls_table` テーブルを作成します。

```
CREATE TABLE mkt_sls_table AS
SELECT 146776932 AS ord_num, 23 AS sales_qty_sld, 23.4 AS wholesale_cost, 45.0 as
 lst_pr, 43.0 as sell_pr, 2.0 as disnt, 12 as ship_mode,13 as warehouse_id, 23 as
 item_id, 34 as ctlg_page, 232 as ship_cust_id, 4556 as bill_cust_id
UNION ALL SELECT 46776931, 24, 24.4, 46, 44, 1, 14, 15, 24, 35, 222, 4551
UNION ALL SELECT 46777394, 42, 43.4, 60, 50, 10, 30, 20, 27, 43, 241, 4565
UNION ALL SELECT 46777831, 33, 40.4, 51, 46, 15, 16, 26, 33, 40, 234, 4563
UNION ALL SELECT 46779160, 29, 26.4, 50, 61, 8, 31, 15, 36, 40, 242, 4562
UNION ALL SELECT 46778595, 43, 28.4, 49, 47, 7, 28, 22, 27, 43, 224, 4555
UNION ALL SELECT 46779482, 34, 33.4, 64, 44, 10, 17, 27, 43, 52, 222, 4556
UNION ALL SELECT 46779650, 39, 37.4, 51, 62, 13, 31, 25, 31, 52, 224, 4551
```

```
UNION ALL SELECT 46780524, 33, 40.4, 60, 53, 18, 32, 31, 31, 39, 232, 4563
UNION ALL SELECT 46780634, 39, 35.4, 46, 44, 16, 33, 19, 31, 52, 242, 4557
UNION ALL SELECT 46781887, 24, 30.4, 54, 62, 13, 18, 29, 24, 52, 223, 4561
```

mkt_sls_table テーブルが左側の [テーブルとビュー] セクションに正常に作成されていることを確認します。これで、Amazon DataZone カタログに公開できるデータアセットができます。

ステップ 5 - Glue AWS からメタデータを収集する

このセクションでは、このワークフローのために AWS Glue からメタデータを収集するステップについて説明します。

1. 上記のステップ 4 を完了したら、Amazon DataZone データポータルで SalesDataPublishingProject プロジェクトを選択し、[データ] タブを選択し、左側のパネルで [データソース] を選択します。
2. 環境作成プロセスの一部として作成されたソースを選択します。
3. [アクション] ドロップダウンメニューの横にある [実行] を選択し、更新ボタンを選択します。データソースの実行が完了すると、アセットが Amazon DataZone インベントリに追加されます。

ステップ 6 - データアセットをキュレートして公開する

このセクションでは、このワークフローでデータアセットをキュレートして公開する手順について説明します。

1. 上記のステップ 5 を完了したら、Amazon DataZone データポータルで、前のステップで作成した SalesDataPublishingProject プロジェクトを選択して [データ] タブを選択し、左側のパネルで [インベントリデータ] を選択して mkt_sls_table テーブルを見つけます。
2. mkt_sls_table アセットの詳細ページを開くと、自動的に生成されたビジネス名が表示されます。自動生成されたメタデータのアイコンを選択すると、アセットと列の自動生成された名前が表示されます。各名前を個別に承認または拒否するか、[すべて承認] を選択して生成された名前を適用できます。必要に応じて、使用可能なメタデータフォームをアセットに追加し、用語集の用語を選択してデータを分類することもできます。
3. [アセットを公開] を選択して mkt_sls_table アセットを公開します。

ステップ 7 - データ分析用のプロジェクトを作成する

このセクションでは、データ分析用のプロジェクトを作成する手順について説明します。これは、このワークフローのデータコンシューマーステップの始まりです。

1. 上記のステップ 6 を完了したら、Amazon DataZone データポータルで、[プロジェクト] ドロップダウンメニューから [プロジェクトを作成] を選択します。
2. [プロジェクトを作成] ページで、プロジェクト名を指定します。例えば、このワークフローでは、MarketingDataAnalysisProject という名前を付け、残りのフィールドは変更せずに [作成] を選択します。

ステップ 8 - データ分析用の環境を作成する

このセクションでは、データ分析用の環境を作成する手順について説明します。

1. 上記のステップ 7 を完了したら、Amazon DataZone データポータルで `MarketingDataAnalysisProject` プロジェクトを選択し、[環境] タブを選択して [環境を作成] を選択します。
2. [環境を作成] ページで、以下を指定して [環境を作成] を選択します。

   - 名前 - 環境の名前を指定します。このチュートリアルでは、`Default data lake environment` と呼びます。
   - 説明 - 環境の説明を入力します。
   - 環境プロファイル - 組み込みの DataLakeProfile 環境プロファイルを選択します。
   - このチュートリアルでは、残りのフィールドは変更しないでください。

ステップ 9 - データカタログを検索してデータをサブスクライブする

このセクションでは、データカタログを検索してデータをサブスクライブする手順について説明します。

1. 上記のステップ 8 を完了したら、Amazon DataZone データポータルで Amazon DataZone アイコンを選択し、Amazon DataZone の [検索] フィールドで、データポータルの [検索] バーでキーワード (「カタログ」や「販売」など) を使用してデータアセットを検索します。

   必要に応じて、フィルターまたはソートを適用し、「製品販売データ」アセットを見つけたら、それを選択してアセットの詳細ページを開くことができます。

2. 「カタログ販売データ」アセットの詳細ページで、[サブスクライブ] を選択します。
3. [サブスクライブ] ダイアログで、ドロップダウンから MarketingDataAnalysisProject コンシューマープロジェクトを選択し、サブスクリプションリクエストの理由を指定して [サブスクライブ] を選択します。

ステップ 10: サブスクリプション リクエストの承認

このセクションでは、サブスクリプションリクエストを承認する手順について説明します。

1. 上記のステップ 9 を完了したら、Amazon DataZone データポータルで、アセットを公開した SalesDataPublishingProject プロジェクトを選択します。
2. [データ] タブを選択し、[公開されたデータ]、[受信リクエスト] の順に選択します。
3. これで、承認が必要な新しいリクエストの行が表示されます。[リクエストを表示] を選択します。承認の理由を入力し、[承認] を選択します。

ステップ 11 - Amazon Athena でクエリを構築してデータを分析する

Amazon DataZone カタログにアセットを正常に公開してサブスクライブしているので、アセットを分析できます。

1. Amazon DataZone データポータルで、MarketingDataAnalysisProject コンシューマープロジェクトを選択し、右側のパネルの [分析ツール] で Amazon Athena との [クエリデータ] リンクを選択します。これにより、認証にプロジェクトの認証情報を使用して Amazon Athena クエリエディタが開きます。クエリエディタの [Amazon DataZone 環境] ドロップダウンから MarketingDataAnalysisProject コンシューマー環境を選択し、データベースドロップダウンからプロジェクトの `<environment_name>%sub_db` を選択します。
2. サブスクライブしているテーブルでクエリを実行できるようになります。[テーブルとビュー] からテーブルを選択して [プレビュー] を選択すると、エディタ画面に SELECT ステートメントを表示できます。クエリを実行して、結果を確認します。

Amazon Redshift データを使用した Amazon DataZone クイックスタート

次のクイックスタートのステップを完了することで、Amazon DataZone で Amazon Redshift データのサンプルを使用して、データプロデューサーとデータコンシューマーの完全なワークフローを実行します。

クイックスタートステップ

- ステップ 1 - Amazon DataZone ドメインとデータポータルを作成する
- ステップ 2 - 公開プロジェクトを作成する
- ステップ 3 - 環境を作成する
- ステップ 4 - 公開するデータを生成する
- ステップ 5 - Amazon Redshift からメタデータを収集する
- ステップ 6 - データアセットをキュレートして公開する
- ステップ 7 - データ分析用のプロジェクトを作成する
- ステップ 8 - データ分析用の環境を作成する
- ステップ 9 - データカタログを検索してデータをサブスクライブする
- ステップ 10: サブスクリプション リクエストの承認
- ステップ 11 - Amazon Redshift でクエリを構築してデータを分析する

ステップ 1 - Amazon DataZone ドメインとデータポータルを作成する

Amazon DataZone ドメインを作成するには、次の手順を実行します。Amazon DataZone ドメインの削除については、「Amazon DataZone の用語と概念」を参照してください。

1. https://console.aws.amazon.com/datazone の Amazon DataZone コンソールに移動し、サインインしてから、[ドメインを作成] を選択します。

   > **Note**
   >
   > このワークフローに既存の Amazon DataZone ドメインを使用する場合は、[ドメインを表示] を選択して使用するドメインを選択し、「ステップ 2 - 公開プロジェクトを作成する」に進みます。

2. [ドメインを作成] ページで、次のフィールドの値を指定します。

- 名前 - ドメインの名前を指定します。このワークフローでは、このドメイン `Marketing` を呼び出すことができます。
- 説明 - オプションでドメインの説明を指定します。
- データ暗号化 - データは、デフォルトで が AWS 所有および管理するキーで暗号化されます。このチュートリアルでは、デフォルトのデータ暗号化設定のままにすることができます。

  カスタマーマネージドキーの詳細については、「Amazon DataZone での保管中のデータ暗号化」を参照してください。データ暗号化にユーザー独自の KMS キーを使用する場合は、デフォルトの AmazonDataZoneDomainExecutionRole に次のステートメントを含める必要があります。

  JSON

```
{
    "Version":"2012-10-17",
    "Statement": [
        {
            "Sid": "Statement1",
            "Effect": "Allow",
            "Action": [
                "kms:Decrypt",
                "kms:DescribeKey",
                "kms:GenerateDataKey"
            ],
            "Resource": [
                "arn:aws:kms:us-
east-1:111122223333:key/1234abcd-12ab-34cd-56ef-1234567890ab"
            ]
        }
    ]
}
```

- サービスアクセス - [カスタムサービスロールを使用] オプションを選択し、ドロップダウンメニューから AmazonDataZoneDomainExecutionRole を選択します。
- [Quick Setup] で、[データ消費と公開のためにこのアカウントを設定] を選択します。このオプションでは、データレイクとデータウェアハウスの組み込み Amazon DataZone ブループリントを有効にし、このワークフローの残りのステップを完了するために必要なアクセス許可とリソースを設定します。Amazon DataZone ブループリントの詳細については、「Amazon DataZone の用語と概念」を参照してください。

- [アクセス許可の詳細] と [タグ] の残りのフィールドは変更せずに、[ドメインを作成] を選択します。

3. ドメインが正常に作成されたら、このドメインを選択し、ドメインの概要ページに表示されるこのドメインの [データポータル URL] をメモします。この URL を使用して Amazon DataZone データポータルにアクセスし、このワークフローの残りのステップを完了できます。

> **Note**
>
> Amazon DataZone の現在のリリースでは、ドメインが作成されると、データポータル用に生成された URL は変更できません。

ドメインの作成には数分かかることがあります。ドメインのステータスが [使用可能] になるまで待ってから、次のステップに進みます。

ステップ 2 - 公開プロジェクトを作成する

次のセクションでは、このワークフローで公開プロジェクトを作成する手順について説明します。

1. ステップ 1 を完了したら、データポータル URL を使用して Amazon DataZone データポータルに移動し、シングルサインオン (SSO) または IAM AWS 認証情報を使用してログインします。
2. [プロジェクトを作成] を選択し、プロジェクト名を指定します。例えば、このワークフローでは、SalesDataPublishingProject という名前を付けてから、残りのフィールドを変更せずに、[作成] を選択します。

ステップ 3 - 環境を作成する

次のセクションでは、このワークフローで環境を作成する手順について説明します。

1. ステップ 2 を完了したら、前のステップで作成した `SalesDataPublishingProject` プロジェクトを Amazon DataZone データポータルで選択し、[環境] タブ、[環境を作成] の順に選択します。
2. [環境を作成] ページで、以下を指定して [環境を作成] を選択します。

   - 名前 - 環境の名前を指定します。このチュートリアルでは、`Default data warehouse environment` と呼びます。

- 説明 - 環境の説明を入力します。
- 環境プロファイル - DataWarehouseProfile 環境プロファイルを選択します。
- Amazon Redshift クラスターの名前、データベース名、およびデータが保存されている Amazon Redshift クラスターのシークレット ARN を入力します。

> **Note**
>
> AWS Secrets Manager のシークレットに次のタグ (キー/値) が含まれていることを確認します。
>
> - Amazon Redshift クラスターの場合 - datazone.rs.cluster: <cluster_name:database name>
>
> Amazon Redshift Serverless ワークグループの場合 - datazone.rs.workgroup: <workgroup_name:database_name>
> - AmazonDataZoneProject: <projectID>
> - AmazonDataZoneDomain: <domainID>
>
> 詳細については、「 AWS Secrets Manager でのデータベース認証情報の保存」を参照してください。
> AWS Secrets Manager で指定するデータベースユーザーには、スーパーユーザーアクセス許可が必要です。

ステップ 4 - 公開するデータを生成する

次のセクションでは、このワークフローで公開するデータを生成する手順について説明します。

1. Amazon DataZone データポータルでステップ 3 を完了したら、`SalesDataPublishingProject`プロジェクトを選択し、右側のパネルの [分析ツール] で Amazon Redshift を選択します。これにより、認証にプロジェクトの認証情報を使用して Amazon Redshift クエリエディタが開きます。
2. このチュートリアルでは、Create Table as Select (CTAS) クエリスクリプトを使用して、Amazon DataZone に公開する新しいテーブルを作成します。クエリエディタでこの CTAS スクリプトを実行し、公開して検索とサブスクリプションで使用できる `mkt_sls_table` テーブルを作成します。

```
CREATE TABLE mkt_sls_table AS
```

```
SELECT 146776932 AS ord_num, 23 AS sales_qty_sld, 23.4 AS wholesale_cost, 45.0 as
 lst_pr, 43.0 as sell_pr, 2.0 as disnt, 12 as ship_mode,13 as warehouse_id, 23 as
 item_id, 34 as ctlg_page, 232 as ship_cust_id, 4556 as bill_cust_id
UNION ALL SELECT 46776931, 24, 24.4, 46, 44, 1, 14, 15, 24, 35, 222, 4551
UNION ALL SELECT 46777394, 42, 43.4, 60, 50, 10, 30, 20, 27, 43, 241, 4565
UNION ALL SELECT 46777831, 33, 40.4, 51, 46, 15, 16, 26, 33, 40, 234, 4563
UNION ALL SELECT 46779160, 29, 26.4, 50, 61, 8, 31, 15, 36, 40, 242, 4562
UNION ALL SELECT 46778595, 43, 28.4, 49, 47, 7, 28, 22, 27, 43, 224, 4555
UNION ALL SELECT 46779482, 34, 33.4, 64, 44, 10, 17, 27, 43, 52, 222, 4556
UNION ALL SELECT 46779650, 39, 37.4, 51, 62, 13, 31, 25, 31, 52, 224, 4551
UNION ALL SELECT 46780524, 33, 40.4, 60, 53, 18, 32, 31, 31, 39, 232, 4563
UNION ALL SELECT 46780634, 39, 35.4, 46, 44, 16, 33, 19, 31, 52, 242, 4557
UNION ALL SELECT 46781887, 24, 30.4, 54, 62, 13, 18, 29, 24, 52, 223, 4561
```

mkt_sls_table テーブルが正常に作成されていることを確認します。これで、Amazon DataZone カタログに公開できるデータアセットができます。

ステップ 5 - Amazon Redshift からメタデータを収集する

次のセクションでは、Amazon Redshift からメタデータを収集する手順について説明します。

1. ステップ 4 を完了したら、Amazon DataZone データポータルで SalesDataPublishingProject プロジェクトを選択し、[データ] タブ、[データソース] の順に選択します。
2. 環境作成プロセスの一部として作成されたソースを選択します。
3. [アクション] ドロップダウンメニューの横にある [実行] を選択し、更新ボタンを選択します。データソースの実行が完了すると、アセットが Amazon DataZone インベントリに追加されます。

ステップ 6 - データアセットをキュレートして公開する

次のセクションでは、このワークフローでデータアセットをキュレートして公開する手順について説明します。

1. ステップ 5 を完了したら、Amazon DataZone データポータルで SalesDataPublishingProject プロジェクトを選択し、[データ] タブ、[インベントリデータ] の順に選択し、mkt_sls_table テーブルを見つけます。

2. mkt_sls_table アセットの詳細ページを開くと、自動的に生成されたビジネス名が表示されます。自動生成されたメタデータのアイコンを選択すると、アセットと列の自動生成された名前が表示されます。各名前を個別に承認または拒否するか、[すべて承認] を選択して生成された名前を適用できます。必要に応じて、使用可能なメタデータフォームをアセットに追加し、用語集の用語を選択してデータを分類することもできます。
3. [公開] を選択して mkt_sls_table アセットを公開します。

ステップ 7 - データ分析用のプロジェクトを作成する

次のセクションでは、このワークフローでデータ分析用のプロジェクトを作成する手順について説明します。

1. ステップ 6 を完了したら、Amazon DataZone データポータルで [プロジェクトを作成] を選択します。
2. [プロジェクトを作成] ページで、プロジェクト名を指定します。例えば、このワークフローでは、MarketingDataAnalysisProject という名前を付け、残りのフィールドは変更せずに [作成] を選択します。

ステップ 8 - データ分析用の環境を作成する

次のセクションでは、このワークフローでデータ分析用の環境を作成する手順について説明します。

1. ステップ 7 を完了したら、前のステップで作成した MarketingDataAnalysisProject プロジェクトを Amazon DataZone データポータルで選択し、[環境] タブ、[環境を追加] の順に選択します。
2. [環境を作成] ページで、以下を指定して [環境を作成] を選択します。
   - 名前 - 環境の名前を指定します。このチュートリアルでは、Default data warehouse environment と呼びます。
   - 説明 - 環境の説明を入力します。
   - 環境プロファイル - DataWarehouseProfile 環境プロファイルを選択します。
   - Amazon Redshift クラスターの名前、データベース名、およびデータが保存されている Amazon Redshift クラスターのシークレット ARN を入力します。

> **Note**
>
> AWS Secrets Manager のシークレットに次のタグ (キー/値) が含まれていることを確認します。
>
> - Amazon Redshift クラスターの場合 - datazone.rs.cluster: <cluster_name:database name>
>
>   Amazon Redshift Serverless ワークグループの場合 - datazone.rs.workgroup: <workgroup_name:database_name>
> - AmazonDataZoneProject: <projectID>
> - AmazonDataZoneDomain: <domainID>
>
> 詳細については、「 AWS Secrets Manager でのデータベース認証情報の保存」を参照してください。
> AWS Secrets Manager で指定するデータベースユーザーには、スーパーユーザーアクセス許可が必要です。

- このチュートリアルでは、残りのフィールドは変更しないでください。

ステップ 9 - データカタログを検索してデータをサブスクライブする

次のセクションでは、データカタログを検索してデータをサブスクライブする手順について説明します。

1. ステップ 8 を完了したら、Amazon DataZone データポータルの [検索] バーでキーワード (「カタログ」や「売上」など) を使用してデータアセットを検索します。

   必要に応じて、フィルターまたはソートを適用し、「製品販売データ」アセットを見つけたら、それを選択してアセットの詳細ページを開くことができます。
2. 「製品販売データ」アセットの詳細ページで、[サブスクライブ] を選択します。
3. ダイアログでドロップダウンからコンシューマープロジェクトを選択し、アクセスリクエストに理由を入力し、[サブスクライブ] を選択します。

ステップ 10: サブスクリプション リクエストの承認

次のセクションでは、このワークフローでサブスクリプションリクエストを承認する手順について説明します。

1. ステップ 9 を完了したら、アセットを公開した SalesDataPublishingProject プロジェクトを Amazon DataZone データポータルで選択します。
2. [データ] タブを選択し、[公開されたデータ]、[受信リクエスト] の順に選択します。
3. ビューリクエストリンクを選択し、[承認] を選択します。

ステップ 11 - Amazon Redshift でクエリを構築してデータを分析する

Amazon DataZone カタログにアセットを正常に公開してサブスクライブしているので、アセットを分析できます。

1. Amazon DataZone データポータルの右側のパネルで、Amazon Redshift リンクをクリックします。これにより、認証にプロジェクトの認証情報を使用して Amazon Redshift クエリエディタが開きます。
2. これで、サブスクライブしているテーブルでクエリ (SELECT ステートメント) を実行できます。テーブルをクリック (縦三点リーダーオプション) してプレビューを選択すると、エディタ画面に SELECT ステートメントを表示できます。クエリを実行して、結果を確認します。

サンプルスクリプトを使用する Amazon DataZone クイックスタート

Amazon DataZone には、管理ポータルまたは Amazon DataZone データポータルを介して、または Amazon DataZone HTTPS API を使用してプログラムでアクセスできます。これにより、HTTPS リクエストを サービスに直接発行できます。このセクションでは、以下の一般的なタスクを完了するために使用できる Amazon DataZone API を呼び出すサンプルスクリプトについて説明します。

サンプルスクリプト

- Amazon DataZone ドメインとデータポータルを作成する
- パブリッシュプロジェクトを作成する
- 環境ファイルを作成する
- 環境を作成する
- Glue AWS からメタデータを収集する
- データアセットをキュレートして公開する
- データカタログを検索してデータをサブスクライブする
- データカタログ内のアセットを検索する

- その他の便利なサンプルスクリプト

Amazon DataZone ドメインとデータポータルを作成する

次のサンプルスクリプトを使用して Amazon DataZone ドメインを作成できます。Amazon DataZone ドメインの削除については、「Amazon DataZone の用語と概念」を参照してください。

```
import sys
import boto3

// Initialize datazone client
region = 'us-east-1'
dzclient = boto3.client(service_name='datazone', region_name='us-east-1')

// Create DataZone domain
def create_domain(name):
    return dzclient.create_domain(
        name = name,
        description = "this is a description",
        domainExecutionRole = "arn:aws:iam::<account>:role/
AmazonDataZoneDomainExecutionRole",
    )
```

パブリッシュプロジェクトを作成する

次のサンプルスクリプトを使用して、Amazon DataZone で公開プロジェクトを作成できます。

```
// Create Project
def create_project(domainId):
    return dzclient.create_project(
        domainIdentifier = domainId,
        name = "sample-project"
    )
```

環境ファイルを作成する

次のサンプルスクリプトを使用して、Amazon DataZone で環境プロファイルを作成できます。

このサンプルペイロードは、CreateEnvironmentProfile API を呼び出すときに使用されます。

```
Sample Payload
{
    "Content":{
        "project_name": "Admin_project",
        "domain_name": "Drug-Research-and-Development",
        "blueprint_account_region": [
            {
                "blueprint_name": "DefaultDataLake",
                "account_id": ["066535990535",
                "413878397724",
                "676266385322",
                "747721550195",
                "755347404384"
                ],
                "region": ["us-west-2", "us-east-1"]
            },
            {
                "blueprint_name": "DefaultDataWarehouse",
                "account_id": ["066535990535",
                "413878397724",
                "676266385322",
                "747721550195",
                "755347404384"
                ],
                "region":["us-west-2", "us-east-1"]
            }
        ]
    }
}
```

このサンプルスクリプトは CreateEnvironmentProfile API を呼び出します。

```
def create_environment_profile(domain_id, project_id, env_blueprints)
        try:
            response = dz.list_environment_blueprints(
                domainIdentifier=domain_id,
                managed=True
            )
```

```
            env_blueprints = response.get("items")
            env_blueprints_map = {}
            for i in env_blueprints:
                env_blueprints_map[i["name"]] = i['id']

            print("Environment Blueprint map", env_blueprints_map)
            for i in blueprint_account_region:
                print(i)
                for j in i["account_id"]:
                    for k in i["region"]:
                        print("The env blueprint name is", i['blueprint_name'])
                        dz.create_environment_profile(
                            description='This is a test environment profile created via
 lambda function',
                            domainIdentifier=domain_id,
                            awsAccountId=j,
                            awsAccountRegion=k,

 environmentBlueprintIdentifier=env_blueprints_map.get(i["blueprint_name"]),
                            name=i["blueprint_name"] + j + k + "_profile",
                            projectIdentifier=project_id
                        )
        except Exception as e:
            print("Failed to created Environment Profile")
            raise e
```

これは、CreateEnvironmentProfile API が呼び出された後のサンプル出力ペイロードです。

```
{
    "Content":{
        "project_name": "Admin_project",
        "domain_name": "Drug-Research-and-Development",
        "blueprint_account_region": [
            {
                "blueprint_name": "DefaultDataWarehouse",
                "account_id": ["111111111111"],
                "region":["us-west-2"],
                "user_parameters":[
                    {
                        "name": "dataAccessSecretsArn",
                        "value": ""
```

```
                    }
                ]
            }
        ]
    }
}
```

環境を作成する

次のサンプルスクリプトを使用して、Amazon DataZone で環境を作成できます。

```
def create_environment(domain_id, project_id,blueprint_account_region ):
         try:
            #refer to get_domain_id and get_project_id for fetching ids using names.
            sts_client = boto3.client("sts")
            # Get the current account ID
            account_id = sts_client.get_caller_identity()["Account"]
            print("Fetching environment profile ids")
            env_profile_map = get_env_profile_map(domain_id, project_id)

            for i in blueprint_account_region:
                for j in i["account_id"]:
                    for k in i["region"]:
                        print(" env blueprint name", i['blueprint_name'])
                        profile_name = i["blueprint_name"] + j + k + "_profile"
                        env_name = i["blueprint_name"] + j + k + "_env"
                        description = f'This is environment is created for
 {profile_name}, Account {account_id} and region {i["region"]}'
                        try:
                            dz.create_environment(
                                description=description,
                                domainIdentifier=domain_id,

 environmentProfileIdentifier=env_profile_map.get(profile_name),
                                name=env_name,
                                projectIdentifier=project_id
                            )
                            print(f"Environment created - {env_name}")
                        except:
                            dz.create_environment(
                                description=description,
```

```
                                domainIdentifier=domain_id,

 environmentProfileIdentifier=env_profile_map.get(profile_name),
                                name=env_name,
                                projectIdentifier=project_id,
                                userParameters= i["user_parameters"]
                            )
                            print(f"Environment created - {env_name}")
        except Exception as e:
            print("Failed to created Environment")
            raise e
```

Glue AWS からメタデータを収集する

このサンプルスクリプトを使用して、 Glue AWS からメタデータを収集できます。このスクリプトは標準スケジュールで実行されます。サンプルスクリプトからパラメータを取得し、グローバルにすることができます。標準の関数を使用してプロジェクト、環境、ドメイン ID を取得します。 AWS Glue データソースは、スクリプトの cron セクションで更新できる標準時刻に作成および実行されます。

```
def crcreate_data_source(domain_id, project_id,data_source_name)
        print("Creating Data Source")
        data_source_creation = dz.create_data_source(
            # Define data source : Customize the data source to which you'd like to
 connect
            # define the name of the Data source to create, example: name
 ='TestGlueDataSource'
            name=data_source_name,
            # give a description for the datasource (optional), example:
 description='This is a dorra test for creation on DZ datasources'
            description=data_source_description,
            # insert the domain identifier corresponding to the domain to which the
 datasource will belong, example: domainIdentifier= 'dzd_6f3gst5jjmrrmv'
            domainIdentifier=domain_id,
            # give environment identifier , example: environmentIdentifier=
 '3weyt6hhn8qcvb'
            environmentIdentifier=environment_id,
            # give corresponding project identifier, example: projectIdentifier=
 '6tl4csoyrg16ef',
            projectIdentifier=project_id,
```

```
            enableSetting="ENABLED",
            # publishOnImport used to select whether assets are added to the inventory
and/or discovery catalog .
            # publishOnImport = True : Assets will be added to project's inventory as
well as published to the discovery catalog
            # publishOnImport = False : Assets will only be added to project's
inventory.
            # You can later curate the metadata of the assets and choose subscription
terms to publish them from the inventory to the discovery catalog.
            publishOnImport=False,
            # Automated business name generation : Use AI to automatically generate
metadata for assets as they are published or updated by this data source run.
            # Automatically generated metadata can be be approved, rejected, or edited
by data publishers.
            # Automatically generated metadata is badged with a small icon next to the
corresponding metadata field.
            recommendation={"enableBusinessNameGeneration": True},
            type="GLUE",
            configuration={
                "glueRunConfiguration": {
                    "dataAccessRole": "arn:aws:iam::"
                    + account_id
                    + ":role/service-role/AmazonDataZoneGlueAccess-"
                    + current_region
                    + "-"
                    + domain_id
                    + "",
                    "relationalFilterConfigurations": [
                        {
                            #
                            "databaseName": glue_database_name,
                            "filterExpressions": [
                                {"expression": "*", "type": "INCLUDE"},
                            ],
                            #    "schemaName": "TestSchemaName",
                        },
                    ],
                },
            },
            # Add metadata forms to the data source (OPTIONAL).
            # Metadata forms will be automatically applied to any assets that are
created by the data source.
            # assetFormsInput=[
            #     {
```

```
            #         "content": "string",
            #         "formName": "string",
            #         "typeIdentifier": "string",
            #         "typeRevision": "string",
            #     },
            # ],
            schedule={
                "schedule": "cron(5 20 * * ? *)",
                "timezone": "UTC",
            },
        )
        # This is a suggested syntax to return values
        #        return_values["data_source_creation"] = data_source_creation["items"]
        print("Data Source Created")


//This is the sample response payload after the CreateDataSource API is invoked:

{
    "Content":{
        "project_name": "Admin",
        "domain_name": "Drug-Research-and-Development",
        "env_name": "GlueEnvironment",
        "glue_database_name": "test",
        "data_source_name" : "test",
        "data_source_description" : "This is a test data source"
    }
}
```

データアセットをキュレートして公開する

次のサンプルスクリプトを使用して、Amazon DataZone のデータアセットをキュレートして公開できます。

次のスクリプトを使用して、カスタムフォームタイプを作成できます。

```
def create_form_type(domainId, projectId):
    return dzclient.create_form_type(
        domainIdentifier = domainId,
        name = "customForm",
        model = {
```

```
            "smithy": "structure customForm { simple: String }"
        },
        owningProjectIdentifier = projectId,
        status = "ENABLED"
    )
```

次のサンプルスクリプトを使用して、カスタムアセットタイプを作成できます。

```
def create_custom_asset_type(domainId, projectId):
    return dzclient.create_asset_type(
        domainIdentifier = domainId,
        name = "userCustomAssetType",
        formsInput = {
            "Model": {
                "typeIdentifier": "customForm",
                "typeRevision": "1",
                "required": False
            }
        },
        owningProjectIdentifier = projectId,
    )
```

次のサンプルスクリプトを使用して、カスタムアセットを作成できます。

```
def create_custom_asset(domainId, projectId):
    return dzclient.create_asset(
        domainIdentifier = domainId,
        name = 'custom asset',
        description = "custom asset",
        owningProjectIdentifier = projectId,
        typeIdentifier = "userCustomAssetType",
        formsInput = [
            {
                "formName": "UserCustomForm",
                "typeIdentifier": "customForm",
                "content": "{\"simple\":\"sample-catalogId\"}"
            }
        ]
    )
```

次のサンプルスクリプトを使用して、用語集を作成できます。

```
def create_glossary(domainId, projectId):
    return dzclient.create_glossary(
        domainIdentifier = domainId,
        name = "test7",
        description = "this is a test glossary",
        owningProjectIdentifier = projectId
    )
```

次のサンプルスクリプトを使用して、用語集の用語を作成できます。

```
def create_glossary_term(domainId, glossaryId):
    return dzclient.create_glossary_term(
        domainIdentifier = domainId,
        name = "soccer",
        shortDescription = "this is a test glossary",
        glossaryIdentifier = glossaryId,
    )
```

次のサンプルスクリプトを使用して、システム定義のアセットタイプを使用するアセットを作成できます。

```
def create_asset(domainId, projectId):
    return dzclient.create_asset(
        domainIdentifier = domainId,
        name = 'sample asset name',
        description = "this is a glue table asset",
        owningProjectIdentifier = projectId,
        typeIdentifier = "amazon.datazone.GlueTableAssetType",
        formsInput = [
            {
                "formName": "GlueTableForm",
                "content": "{\"catalogId\":\"sample-catalogId\",\"columns\":
[{\"columnDescription\":\"sample-columnDescription\",\"columnName\":\"sample-
```

```
columnName\",\"dataType\":\"sample-dataType\",\"lakeFormationTags\":{\"sample-
key1\":\"sample-value1\",\"sample-key2\":\"sample-value2\"}}],\"compressionType\":
\"sample-compressionType\",\"lakeFormationDetails\":{\"lakeFormationManagedTable
\":false,\"lakeFormationTags\":{\"sample-key1\":\"sample-value1\",\"sample-key2\":
\"sample-value2\"}},\"primaryKeys\":[\"sample-Key1\",\"sample-Key2\"],\"region\":
\"us-east-1\",\"sortKeys\":[\"sample-sortKey1\"],\"sourceClassification\":\"sample-
sourceClassification\",\"sourceLocation\":\"sample-sourceLocation\",\"tableArn\":
\"sample-tableArn\",\"tableDescription\":\"sample-tableDescription\",\"tableName\":
\"sample-tableName\"}"
            }
        ]
    )
```

次のサンプルスクリプトを使用してアセットリビジョンを作成し、用語集の用語をアタッチできます。

```
def create_asset_revision(domainId, assetId):
    return dzclient.create_asset_revision(
        domainIdentifier = domainId,
        identifier = assetId,
        name = 'glue table asset 7',
        description = "glue table asset description update",
        formsInput = [
            {
                "formName": "GlueTableForm",
                "content": "{\"catalogId\":\"sample-catalogId\",\"columns\":
[{\"columnDescription\":\"sample-columnDescription\",\"columnName\":\"sample-
columnName\",\"dataType\":\"sample-dataType\",\"lakeFormationTags\":{\"sample-
key1\":\"sample-value1\",\"sample-key2\":\"sample-value2\"}}],\"compressionType\":
\"sample-compressionType\",\"lakeFormationDetails\":{\"lakeFormationManagedTable
\":false,\"lakeFormationTags\":{\"sample-key1\":\"sample-value1\",\"sample-key2\":
\"sample-value2\"}},\"primaryKeys\":[\"sample-Key1\",\"sample-Key2\"],\"region\":
\"us-east-1\",\"sortKeys\":[\"sample-sortKey1\"],\"sourceClassification\":\"sample-
sourceClassification\",\"sourceLocation\":\"sample-sourceLocation\",\"tableArn\":
\"sample-tableArn\",\"tableDescription\":\"sample-tableDescription\",\"tableName\":
\"sample-tableName\"}"
            }
        ],
        glossaryTerms = ["<glossaryTermId:>"]
    )
```

次のサンプルスクリプトを使用してアセットを発行できます。

```
def publish_asset(domainId, assetId):
    return dzclient.create_listing_change_set(
        domainIdentifier = domainId,
        entityIdentifier = assetId,
        entityType = "ASSET",
        action = "PUBLISH",
    )
```

データカタログを検索してデータをサブスクライブする

次のサンプルスクリプトを使用してデータカタログを検索し、データをサブスクライブできます。

```
def search_asset(domainId, projectId, text):
    return dzclient.search(
        domainIdentifier = domainId,
        owningProjectIdentifier = projectId,
        searchScope = "ASSET",
        searchText = text,
    )
```

次のサンプルスクリプトを使用して、アセットのリスト ID を取得できます。

```
def search_listings(domainId, assetName, assetId):
    listings = dzclient.search_listings(
        domainIdentifier=domainId,
        searchText=assetName,
        additionalAttributes=["FORMS"]
    )

    assetListing = None
    for listing in listings['items']:
        if listing['assetListing']['entityId'] == assetId:
            assetListing = listing

    return listing['assetListing']['listingId']
```

次のサンプルスクリプトを使用して、リスティング ID を使用するサブスクリプションリクエストを作成できます。

```
create_subscription_response = def create_subscription_request(domainId, projectId,
 listingId):
    return dzclient.create_subscription_request(
        subscribedPrincipals=[{
            "project": {
                "identifier": projectId
            }
        }],
        subscribedListings=[{
            "identifier": listingId
        }],
        requestReason="Give request reason here."
    )
```

上記の create_subscription_response を使用して subscription_request_id を取得し、次のサンプルスクリプトを使用してサブスクリプションを承諾/承認します。

```
subscription_request_id = create_subscription_response["id"]

def accept_subscription_request(domainId, subscriptionRequestId):
    return dzclient.accept_subscription_request(
        domainIdentifier=domainId,
        identifier=subscriptionRequestId
    )
```

データカタログ内のアセットを検索する

以下のサンプルスクリプトを使用し、フリーテキスト検索を使用して、Amazon DataZone カタログで公開されたデータアセット (リスト項目) を検索できます。

- 次の例では、ドメインでフリーテキストキーワード検索を実行し、指定したキーワード「credit」に一致するすべてのリスト項目を返します。

```
aws datazone search-listings \
  --domain-identifier dzd_c1s7uxe71prrtz \
  --search-text "credit"
```

- 複数のキーワードを組み合わせて、検索範囲をさらに絞り込むこともできます。例えば、メキシコでの販売に関連するデータを持つすべての公開データアセット (リスト項目) を検索する場合は、「メキシコ」と「販売」という 2 つのキーワードを使用してクエリを作成できます。

```
          aws datazone search-listings \
  --domain-identifier dzd_c1s7uxe71prrtz \
  --search-text "mexico sales"
```

フィルターを使用してリスト項目を検索することもできます。SearchListings API の `filters` パラメータを使用すると、ドメインからフィルタリングされた結果を取得できます。API は複数のデフォルトフィルターをサポートしており、2 つ以上のフィルターを組み合わせて AND/OR 演算を実行することもできます。フィルター句には、属性と値の 2 つのパラメータがあります。サポートされているデフォルトのフィルター属性は、`typeName`、`owningProjectId`、`glossaryTerms` です。

- 次の例では、リスト項目 が Redshift テーブルのタイプである、指定したドメインのすべてのリスト項目を、`assetType` フィルターを使用して検索します。

```
          aws datazone search-listings \
--domain-identifier dzd_c1s7uxe71prrtz \
--filters '{"or":[{"filter":
{"attribute":"typeName","value":"RedshiftTableAssetType"}} ]}'
```

- AND/OR 演算子を使用して、複数のフィルターを組み合わせることもできます。次の例では、`typeName` および `project`フィルターを組み合わせます。

```
          aws datazone search-listings \
--domain-identifier dzd_c1s7uxe71prrtz \
--filters '{"or":[{"filter":
{"attribute":"typeName","value":"RedshiftTableAssetType"}},  {"filter":
{"attribute":"owningProjectId","value":"cwrrjch7f5kppj"}} ]}'
```

- 次の例に示すように、フリーテキスト検索とフィルターを組み合わせて正確な結果を検索し、リスト項目の作成時刻/最終更新時刻でさらにソートすることもできます。

```
            aws datazone search-listings \
--domain-identifier dzd_c1s7uxe71prrtz \
--search-text "finance sales" \
--filters '{"or":[{"filter":{"attribute":"typeName","value":"GlueTableViewType"}} ]}'
 \
--sort '{"attribute": "UPDATED_AT", "order":"ASCENDING"}'
```

その他の便利なサンプルスクリプト

次のサンプルスクリプトを使用して、Amazon DataZone でデータを操作するさまざまなタスクを完了できます。

次のサンプルスクリプトを使用して、既存の Amazon DataZone ドメインを一覧表示使用します。

```
def list_domains():
    datazone = boto3.client('datazone')
    response = datazone.list_domains(status='AVAILABLE')
    [print("%12s | %16s | %12s | %52s" % (item['id'], item['name'],
 item['managedAccountId'], item['portalUrl'])) for item in response['items']]
    return
```

次のサンプルスクリプトを使用して、既存の Amazon DataZone プロジェクトを一覧表示します。

```
def list_projects(domain_id):
    datazone = boto3.client('datazone')
    response = datazone.list_projects(domainIdentifier=domain_id)
    [print("%12s | %16s " % (item['id'], item['name'])) for item in response['items']]
    return
```

次のサンプルスクリプトを使用して、既存の Amazon DataZone メタデータフォームを一覧表示します。

```
def list_metadata_forms(domain_id):
    datazone = boto3.client('datazone')
    response = datazone.search_types(domainIdentifier=domain_id,
        managed=False,
        searchScope='FORM_TYPE')
    [print("%16s | %16s | %3s | %8s" % (item['formTypeItem']['name'],
 item['formTypeItem']['owningProjectId'],item['formTypeItem']['revision'],
 item['formTypeItem']['status'])) for item in response['items']]
    return
```

Amazon DataZone のドメインおよびユーザーアクセス

このセクションでは、Amazon DataZone でドメインおよびユーザーアクセスを作成して管理する方法について説明します。

Amazon DataZone ドメインは、アセット、ユーザー、およびプロジェクトを関連付けて整理するエンティティです。Amazon DataZone ドメインを使用すると、エンタープライズ用に単一の Amazon DataZone ドメインを作成する場合でも、異なるビジネスユニットやチーム用に複数の Amazon DataZone ドメインを作成する場合でも、組織構造のデータと分析ニーズを柔軟に反映できます。

このセクションでは、Amazon DataZone コンソールおよび Amazon DataZone ポータルへのユーザーアクセスの管理についても説明します。

詳細については、「Amazon DataZone の用語と概念」を参照してください。

トピック

Amazon DataZone ドメインを作成する

> **Note**
>
> AWS アイデンティティセンターで Amazon DataZone を使用して SSO ユーザーとグループへのアクセスを提供する場合、現在、Amazon DataZone ドメインは AWS アイデンティティセンターインスタンスと同じ AWS リージョンに存在する必要があります。

Amazon DataZone においてドメインとは、アセット、ユーザー、およびプロジェクトを関連付けて整理するエンティティです。詳細については、「Amazon DataZone の用語と概念」を参照してください。

Amazon DataZone ドメインを作成するには、管理者権限を持つアカウントで IAM ロールを引き受ける必要があります。Amazon DataZone マネジメントコンソールを使用するために必要な IAM アクセス許可を設定すると、ドメインの作成に最小限必要な権限を取得できます。

Amazon DataZone では、デフォルト設定のドメインユーザーに代わってアクションを実行するのに追加の IAM ロールが必要です。追加の IAM ロールは事前に作成することも、Amazon DataZone で作成することもできます。ドメイン作成プロセス中に Amazon DataZone で追加の IAM ロールを作成する場合は、ドメイン作成時にロール作成権限を持つ IAM ロールを引き受ける必要があります。「Amazon DataZone サービスコンソールの簡素化されたロール作成を有効にする IAM アクセス許可のカスタムポリシーを作成する」を参照してください。ドメイン作成の選択内容に応じて、Amazon DataZone は最大 4 つの IAM ロール (AmazonDataZoneDomainExecutionRole、AmazonDataZoneGlueManageAccessRole、AmazonDataZoneR を新規作成します。

Amazon DataZone ドメインを作成するには、次の手順を実行します。

1. https://console.aws.amazon.com/datazone の Amazon DataZone コンソールに移動し、上部のナビゲーションバーのリージョンセレクターを使用して適切な AWS リージョンを選択します。
2. [ドメインを作成] を選択し、次のフィールドに値を指定します。

   - [名前] - ドメインにわかりやすい名前を指定します。ドメインが作成されると、この名前は変更できません。
   - [説明] - (オプション) ドメインの説明を指定します。
   - [データ暗号化] - Amazon DataZone ドメイン、メタデータ、およびレポートデータは、 AWS Key Management Service (KMS) で Amazon DataZone に固有のキーを使用して暗号化します。このフィールドを使用して、 AWS 所有キーを使用するか、別の KMS AWS キーを選択するかを指定します。

     カスタマーマネージドキーの詳細については、「Amazon DataZone での保管中のデータ暗号化」を参照してください。データ暗号化にユーザー独自の KMS キーを使用する場合は、デフォルトの AmazonDataZoneDomainExecutionRole に次のステートメントを含める必要があります。

JSON

```
{
    "Version":"2012-10-17",
    "Statement": [
        {
            "Sid": "Statement1",
            "Effect": "Allow",
            "Action": [
                "kms:Decrypt",
                "kms:DescribeKey",
                "kms:GenerateDataKey"
            ],
            "Resource": [
                "arn:aws:kms:us-
east-1:111122223333:key/1234abcd-12ab-34cd-56ef-1234567890ab"
            ]
        }
    ]
}
```

- [サービスアクセス] - Amazon DataZone で新しい DomainExecutionRole を作成して使用するか、既存の IAM ロールを選択するかを選択します。
- [Quick Setup] - (オプション) このボックスにチェックを入れると、データの消費と公開のためのアカウントが Amazon DataZone でセットアップされ、迅速に開始できます。Amazon DataZone は、Glue および Amazon Redshift AWS リソースへのアクセスをプロビジョニング、取り込み、管理するための 3 つの IAM ロールを作成し、新しい Amazon S3 バケットを作成し、管理 Amazon DataZone プロジェクトを作成し、データレイクとデータウェアハウスのデフォルトブループリントの環境プロファイルを作成します。
- タグ - (オプション) ドメインの AWS タグ (キーと値のペア) を指定します。
- ドメインが正常に作成されるとブラウザが更新され、新しい Amazon DataZone ドメインの詳細ページが表示されます。

Amazon DataZone ドメインを編集する

Amazon DataZone においてドメインとは、アセット、ユーザー、およびプロジェクトを関連付けて整理するエンティティです。詳細については、「Amazon DataZone の用語と概念」を参照してください。

Amazon DataZone ドメインの作成後も、ドメインを編集すれば、説明の変更、IAM アイデンティティセンターの有効化、およびタグキーとその値の追加、編集、または削除を行えます。Amazon DataZone ドメインを編集するには、管理者権限を持つアカウントで IAM ロールを引き受ける必要があります。Amazon DataZone マネジメントコンソールを使用するために必要な IAM アクセス許可を設定すると、ドメインの作成に最小限必要な権限を取得できます。

ドメインを編集するには、次のステップを実行します。

1. AWS マネジメントコンソールにサインインし、https://console.aws.amazon.com/datazone で Amazon DataZone コンソールを開きます。
2. [ドメインを表示] を選択し、リストからドメイン名を選択します。名前はハイパーリンクになっています。
3. ドメインの詳細ページで、[編集] を選択します。
4.
   - [説明] を編集します。
   - [IAM アイデンティティセンターの設定] を設定します。この設定の詳細については、「Amazon DataZone AWS 用の IAM Identity Center のセットアップ」を参照してください。
   - [タグ] のキーとその値を追加、編集、または削除します。
5. 編集が完了したら、[ドメインを更新] を選択します。

Amazon DataZone ドメインを削除する

Amazon DataZone においてドメインとは、アセット、ユーザー、およびプロジェクトを関連付けて整理するエンティティです。詳細については、「Amazon DataZone の用語と概念」を参照してください。

ドメインを削除する操作は変更できません。削除すると、データソース、プロジェクト、環境、アセット、用語集、メタデータフォームなど、すべての Amazon DataZone エンティティが完全に削除され、取り消しはできません。削除しても、IAM ロール、S3 バケット、 AWS Glue データベース、LakeFormation または Redshift を介したサブスクリプション許可など、Amazon DataZone が作成に役立った可能性のある Amazon DataZone 以外の DataZone AWS リソースは削除されません。これらのリソースが不要になった場合は、それぞれの AWS サービスでリソースを削除します。

ユーザーが悪意を持ってドメインを削除しないようにするため、ドメインの削除には Amazon DataZone の IAM 管理者権限が必要です。この権限は IAM で設定できます。ユーザーが誤ってドメインを削除しないようにするため、ドメインの削除には確認ワード (Amazon DataZone コンソール内) が必要です。

ドメインを削除するには、次のステップを実行します。

1. AWS マネジメントコンソールにサインインし、https://console.aws.amazon.com/datazone で Amazon DataZone コンソールを開きます。
2. [ドメインを表示] を選択し、リストからドメイン名を選択します。名前はハイパーリンクになっています。
3. [削除] を選択し、情報が記載された警告を確認します。
4. 要求されたテキストを入力して、警告を理解したことを確認します。[削除] を選択します。

> **Important**
>
> ドメインの削除は取り消しができない操作で、ユーザーも AWSも元に戻せません。

> **Note**
>
> ユーザーまたはドメインユーザーがプロジェクトに環境を作成すると、Amazon DataZone はドメインまたは関連するアカウントに AWS リソースを作成し、ユーザーおよびドメインユーザーに機能を提供します。以下は、Amazon DataZone がドメイン内のプロジェクト用に作成できる AWS リソースのリストと、デフォルト名です。ドメインを削除しても、アカウント AWS 内のこれらの AWS リソースは削除されません。
>
> - IAM ロール: datazone_usr_<environmentId>。
> - Glue データベース: (1) <environmentName>_pub_db-*、(2) <environmentName>_sub_db-*。この名前の既存のデータベースが既に存在する場合、Amazon DataZone はその環境 ID を追加します。
> - Athena ワークグループ: <environmentName>-*。この名前の既存のワークグループが既に存在する場合、Amazon DataZone はその環境 ID を追加します。
> - CloudWatch ロググループ: datazone_<environmentId>

Amazon DataZone の IAM アイデンティティセンターを有効にする

> **Note**
>
> この手順を完了するには、Amazon DataZone AWS ドメインと同じ AWS リージョンで IAM Identity Center が有効になっている必要があります。

AWS IAM アイデンティティセンターを使用して、SSO ユーザーと SSO グループに Amazon DataZone データポータルへのアクセスを付与できます。Amazon DataZone AWS 用の IAM Identity Center のセットアップを完了すると、SSO ユーザーと SSO グループが Amazon DataZone ドメインのデータポータルにアクセスできるようになります。

AWS IAM アイデンティティセンターを Amazon DataZone ドメインで使用できるようにするには、管理アクセス許可を持つアカウントで IAM ロールを引き受ける必要があります。 Amazon DataZone マネジメントコンソールを使用するために必要な IAM アクセス許可を設定するおよび Amazon DataZone サービスコンソールの簡素化されたロール作成を有効にする IAM アクセス許可のカスタムポリシーを作成するは、IAM アイデンティティセンターを Amazon DataZone で使用できるようにするために必要な最小限のアクセス許可を取得する必要があります。

Amazon DataZone の AWS IAM アイデンティティセンターを有効にするには、次の手順を実行します。

1. AWS マネジメントコンソールにサインインし、https://console.aws.amazon.com/datazone で DataZone コンソールを開きます。
2. [ドメインを表示] を選択し、リストからドメイン名を選択します。名前はハイパーリンクになっています。
3. ドメインの詳細ページで、[編集] を選択します。
   - [IAM アイデンティティセンターでユーザーを有効にする] のチェックボックスをオンにします。
   - IAM アイデンティティセンターの組織インスタンスに接続するか、IAM アイデンティティセンターのアカウントインスタンスに接続するかを選択します。
   - 2 つのユーザー割り当てモードから選択します。選択内容でドメインが更新されたら、変更はできません。
     - [暗黙的なユーザーの割り当て] を選択すると、IAM アイデンティティセンターのディレクトリに追加されたユーザーは Amazon DataZone ドメインにアクセスできます。

- [明示的なユーザーの割り当て] を選択した場合は、IAM アイデンティティセンターのディレクトリから特定のユーザーまたはグループを追加し、Amazon DataZone ドメインへのアクセスを付与します。これらのユーザーとグループは、後で Amazon DataZone コンソールで追加および削除します。

4. 選択内容でよければ、[ドメインを更新] を選択します。

Amazon DataZone の IAM アイデンティティセンターを無効にする

Amazon DataZone AWS ドメインの IAM Identity Center を無効にすると、すべての SSO ユーザーのアクセスが削除されます。

> **Note**
>
> IAM アイデンティティセンターを無効にしても、SSO ユーザーの請求は停止されません。SSO ユーザーの請求を停止するには、ドメインで対象ユーザーを非アクティブ化する必要があります。請求は、ユーザーが非アクティブ化された月の末日まで継続されます。ユーザーを非アクティブ化するには、「Amazon DataZone コンソールでユーザーを管理する」を参照してください。

AWS IAM アイデンティティセンターを使用して、SSO ユーザーと SSO グループに Amazon DataZone データポータルへのアクセスを付与できます。Amazon DataZone の AWS IAM Identity Center を有効にしている場合は、後ですべてのユーザーのアクセスを無効にすることができます。

Amazon DataZone ドメインで使用する AWS IAM アイデンティティセンターを無効にするには、管理アクセス許可を持つアカウントの IAM ロールを引き受ける必要があります。 Amazon DataZone マネジメントコンソールを使用するために必要な IAM アクセス許可を設定するおよび Amazon DataZone サービスコンソールの簡素化されたロール作成を有効にする IAM アクセス許可のカスタムポリシーを作成するは、IAM アイデンティティセンターを Amazon DataZone で使用するのを無効にするために必要な最小限のアクセス許可を取得する必要があります。

Amazon DataZone の AWS IAM アイデンティティセンターを無効にするには、次の手順を実行します。

1. AWS マネジメントコンソールにサインインし、https://console.aws.amazon.com/datazone で DataZone コンソールを開きます。

2. [ドメインを表示] を選択し、リストからドメイン名を選択します。名前はハイパーリンクになっています。
3. ドメインの Amazon リソースネーム (ARN) をコピーします。ARN は、arn:aws:datazone:<regionName>:<accountId>:domain/<domainName> で始まります。
4. https://console.aws.amazon.com/singlesignon/ で IAM アイデンティティセンターのコンソールを開きます。
5. [Applications] (アプリケーション) を選択します。
6. IAM Identity Center AWS を無効にするドメインを選択します。これにより、すべての SSO ユーザーのドメインのデータポータルへのアクセスが削除されます。[フィルター] メニューと検索ボックスを使用して、アプリケーションのリストをフィルタリングします。
7. [アクション] メニューから [無効にする] を選択します。
8. SSO ユーザーは Amazon DataZone ドメインにアクセスできなくなります。
9. Amazon DataZone ドメインの AWS IAM アイデンティティセンターを再度有効にするには、IAM AWS アイデンティティセンターを再度有効にするドメインを選択し、アクションメニューから有効化を選択します。

Amazon DataZone コンソールでユーザーを管理する

ユーザーは、 AWS 認証情報またはシングルサインオン (SSO) 認証情報のどちらかを使用して Amazon DataZone データポータルにアクセスできます。Amazon DataZone ドメインの Amazon DataZone コンソールでユーザーを管理するには、Amazon DataZone マネジメントコンソールのアクセス許可を持つアカウントの IAM ロールを引き受ける必要があります。Amazon DataZone マネジメントコンソールを使用するために必要な IAM アクセス許可を設定する して、Amazon DataZone コンソールでユーザーを管理するために最小限必要な権限を取得します。

トピック

- IAM ロールとユーザーを管理する
- SSO ユーザーを管理する
- SSO グループを管理する

IAM ロールとユーザーを管理する

IAM ロールとユーザーは AWS Identity and Access Management (IAM) を使用して作成され、ポリシーを介してアタッチされたアクセス許可を通じて Amazon DataZone ドメインにアクセスできま

す。詳細については、「Amazon DataZone データポータルの使用に必要な IAM アクセス許可を設定する」を参照してください。Amazon DataZone の現在のリリースでは、Amazon DataZone ドメイン所有者アカウントの管理者は、自身のアカウントのユーザーまたは関連付けられているアカウントのユーザーに IAM ユーザープロファイルを作成できます。Amazon DataZone ドメイン所有者アカウントの管理者は、既存のユーザーのステータスを [割り当て済み] または [割り当て解除済み] (Amazon DataZone の使用に関して割り当て済みか未割り当てか) に設定したり、既存のユーザーをアクティブ化または非アクティブ化にしたりすることもできます。

1. AWS マネジメントコンソールにサインインし、https://console.aws.amazon.com/datazone で DataZone コンソールを開きます。
2. [ドメインを表示] を選択し、リストからドメイン名を選択します。名前はハイパーリンクになっています。
3. ドメインの詳細ページで、[ユーザー管理] を選択します。
4. Amazon DataZone ドメイン所有者アカウントまたは関連付けられているアカウントにユーザー IAM ユーザーを追加するには、[追加] を選択して [IAM ユーザーを追加] を選択します。
5. [ユーザーを追加] ページで、[現在のアカウント] または [関連付けられているアカウント] を選択し、[ユーザーまたはロールを検索して追加] フィールドを使用して追加するユーザーを検索し、[ユーザーを追加] を選択します。
6. 既存の IAM ユーザーのステータスを表示するには、[ユーザー管理] ページのユーザータイプのドロップダウンメニューで [IAM ユーザー] を選択します。

   - [名前] 列には IAM ユーザーまたはロールの ARN が表示されてます。
   - [ステータス] 列には、ドメインの IAM ユーザーまたはロールの現在のステータスが表示されます。
     - [割り当て済み] とは、Amazon DataZone を使用する権限が IAM ユーザーに割り当てられていることを意味します。
     - [割り当て解除済み] とは、Amazon DataZone を使用する権限が IAM ユーザーから割り当て解除されたことを意味します。
     - アクティブ化とは、IAM ユーザーまたはロールが API を呼び出したか、(コマンドラインインターフェイス経由) でコマンドを発行したか、またはドメインの Amazon DataZone ポータルにアクセスしたことを意味します。
     - 非アクティブ化とは、IAM ユーザーまたはロールが Amazon DataZone データポータルを使用できなくなったことを意味します。プログラムによるアクセスを制限するには、「Amazon DataZone へのアクセスの制限」を参照してください。

7. 現在アクティブ化されている IAM ユーザーまたはロールを非アクティブ化するには、ユーザーの横にあるチェックボックスをオンにし、[アクション] メニューから [非アクティブ化] を選択します。これにより、ユーザーは Amazon DataZone データポータルを使用できなくなります。プログラムによるアクセスを制限するには、「Amazon DataZone へのアクセスの制限」を参照してください。
8. 現在非アクティブ化されている IAM ユーザーまたはロールをアクティブ化するには、ユーザーの横にあるチェックボックスをオンにし、[アクション] メニューから [アクティブ化] を選択します。IAM ユーザーまたはロールに `datazone:GetUserPortalLoginUrl` アクセス許可がある場合、ユーザーは Amazon DataZone データポータルにアクセスできます。

SSO ユーザーを管理する

SSO ユーザーの作成または同期は、ID プロバイダーによって行われます。詳細については、Amazon DataZone AWS 用の IAM Identity Center のセットアップ「」およびAmazon DataZone の IAM アイデンティティセンターを有効にする「」を参照して、Amazon DataZone の AWS IAM アイデンティティセンターを有効にして設定します。ドメインに割り当てられている SSO ユーザーのリストを表示したり、SSO ユーザーを追加したり、SSO ユーザーを削除したりできます。

1. AWS マネジメントコンソールにサインインし、https://console.aws.amazon.com/datazone で DataZone コンソールを開きます。
2. [ドメインを表示] を選択し、リストからドメイン名を選択します。名前はハイパーリンクになっています。
3. ドメインの詳細ページで、下にスクロールして [ユーザー管理] を選択します。
4. ユーザータイプで、[SSO ユーザー] を選択すると、データポータルに対して以前に認証した SSO ユーザーの現在のリストが表示されます。暗黙的なユーザー割り当てを使用する場合、データポータルに対して以前に認証されていない SSO ユーザーは表示されません。

    - [名前] 列には、SSO ユーザーの名前が表示されます。
    - [ステータス] 列には、ドメインの SSO ユーザーの現在のステータスが表示されます。
        - [割り当て済み] とは、SSO ユーザーにドメインが明示的に割り当てられていることを意味します。結果として、ユーザーは Amazon DataZone にアクセスできます。このステータスは、ドメインの ID プロバイダーモードが明示的な割り当てに設定されている場合にのみ使用されます。
        - [アクティブ化] とは、SSO ユーザーにドメインの Amazon DataZone ポータルへのアクセス許可があることを意味します。アクティブ化は自動的に行われます。

- [非アクティブ化] とは、SSO ユーザーによるドメインへのアクセスがブロックされていることを意味します。
- [削除済み] とは、SSO ユーザーにドメインがあらかじめ割り当てられていたものの、ユーザーがアクセスする前に削除されたことを意味します。

5. [追加] と [ユーザーを追加] を順に選択して、SSO ユーザーを追加します。このオプションは、ドメインが [暗黙的なユーザーの割り当て] に設定されている場合は使用できません。つまり、アイデンティティプール内のすべてのユーザーは Amazon DataZone ドメインにアクセスできます。

   - [ユーザーを追加] ページで、追加するユーザーのエイリアスを検索します。一致する可能性のあるリストが検索ボックスの下に表示されます。
   - 追加するユーザーを選択します。そのユーザーのエイリアスが、検索ボックスの下にチップとして表示されます。
   - 追加するユーザーのリストに問題がなければ、[ユーザーを追加] を選択します。
   - ユーザーに Amazon DataZone ドメインが割り当てられ、ステータスは [割り当て済み] になります。
   - ユーザーがドメインのデータポータルに初めてアクセスすると、ステータスは自動的に [アクティブ化] に変わります。
6. ユーザーを選択し、[アクション] メニューから [割り当て解除] を選択して[割り当て済み] の SSO ユーザーを削除します。結果として、ユーザーは Amazon DataZone ドメインにアクセスできなくなります。ユーザーのステータスには [未割り当て] と表示されます。このオプションは、ドメインが [暗黙的なユーザーの割り当て] に設定されている場合は使用できません。
7. ユーザーを選択し、[アクション] メニューから [非アクティブ化] を選択して、[アクティブ化] の SSO ユーザーを非アクティブ化します。結果として、ユーザーは Amazon DataZone データポータルにアクセスできなくなり、ブロックされます。ユーザーのステータスには [非アクティブ] と表示されます。
8. ユーザーを選択し、[アクション] メニューから [アクティブ化] を選択して、[非アクティブ化] の SSO ユーザーをアクティブ化します。結果として、ユーザーは Amazon DataZone データポータルへのアクセスを回復します。ユーザーのステータスには [アクティブ化] と表示されます。

SSO グループを管理する

SSO グループは、IAM アイデンティティセンターの ID AWS プロバイダーで作成または同期されます。詳細については、Amazon DataZone AWS 用の IAM Identity Center のセットアップ「」およびAmazon DataZone の IAM アイデンティティセンターを有効にする「」を参照して、Amazon

DataZone の AWS IAM アイデンティティセンターを有効にして設定します。ドメインに割り当てられている SSO グループのリストを表示したり、SSO グループを追加したり、SSO グループを削除したりできます。

1. AWS マネジメントコンソールにサインインし、https://console.aws.amazon.com/datazone で DataZone コンソールを開きます。
2. [ドメインを表示] を選択し、リストからドメイン名を選択します。名前はハイパーリンクになっています。
3. ドメインの詳細ページで、下にスクロールして [ユーザー管理] を選択します。
4. ユーザータイプでは、[SSO グループ] を選択して、SSO グループの現在のリストを表示します。

   - [名前] 列には、SSO グループの名前が表示されます。
   - [ステータス] 列には、ドメインの SSO グループの現在のステータスが表示されます。
     - [割り当て済み] とは、SSO グループにドメインが明示的に割り当てられていることを意味します。結果として、グループ内のすべてのユーザーはドメインのデータポータルにアクセスできます (ユーザーが非アクティブ化されている場合は除く)。
     - [未割り当て] とは、SSO グループがドメインから削除されていることを意味します。グループのユーザーは、このグループのメンバーシップを使用してドメインのデータポータルにアクセスすることはできません。
5. [追加] と [グループを追加] を順に選択して、SSO グループを追加します。このオプションは、ドメインが [暗黙的なユーザーの割り当て] に設定されている場合は使用できません。つまり、アイデンティティプール内のすべてのユーザーは、グループメンバーシップに関係なく、Amazon DataZone ドメインにアクセスできます。

   - [グループを追加] ページで、追加するグループのエイリアスを検索します。一致する可能性のあるリストが検索ボックスの下に表示されます。
   - 追加するグループを選択します。そのユーザーのエイリアスが、検索ボックスの下にチップとして表示されます。
   - 追加するグループのリストに問題がなければ、[グループの追加] を選択します。
   - グループに Amazon DataZone ドメインが割り当てられ、ステータスは [割り当て済み] になります。
   - グループのメンバーがドメインのデータポータルにアクセスすると、ステータスは自動的に [アクティブ化] に変わります。

6. グループを選択し、[アクション] メニューから [割り当て解除] を選択して、[割り当てられた SSO グループ] を削除します。結果として、グループは Amazon DataZone ドメインにアクセスできなくなります。グループのステータスには [未割り当て] と表示されます。このグループのメンバーシップを使用して Amazon DataZone にアクセスしていたユーザーは、アクセスできなくなります。このオプションは、ドメインが [暗黙的なユーザーの割り当て] に設定されている場合は使用できません。

Amazon DataZone データポータルでユーザーアクセス許可を管理する

Amazon DataZone マネジメントポータルを使用して、IAM ユーザーとロール、SSO ユーザーとグループ、および SAML ユーザーの認証を設定できます。Amazon DataZone は、Amazon DataZone を使用する各ユーザーにユーザープロファイルを割り当てます。

プロジェクトを使用したり、エンティティを作成したりするためのユーザープロファイルのアクセス許可は、ドメインユニットとポリシー許可を使用して管理されます。特定のプロジェクト内では、プロジェクトメンバーシップの指定 (所有者、寄稿者、ビュー) によってアクションの承認が決まります。

Amazon DataZone へのアクセスの制限

Amazon DataZone へのプログラムによるアクセスの制限 - IAM ユーザーまたはロールの場合、プログラムによる API コールを行うと、IAM ポリシーを介してアクセスを制限できます。ロールに対して既に発行された短期認証情報を取り消す場合は、ロールまたはサービスコントロールポリシーで IAM セッションの取り消しメカニズムを使用できます。

Amazon DataZone データポータルへのログインアクセスの制限 - Amazon DataZone データポータルへのログインアクセスを制限するために、IAM ユーザーまたはロールに対して、IAM ポリシーは `datazone:GetUserPortalLoginUrl` アクションへのアクセスを制限できます。SSO ユーザーおよびグループの場合、Amazon DataZone ユーザープロファイルのステータスを[非アクティブ化] に設定して、Amazon DataZone データポータルへのアクセスを制限します。ドメインが暗黙的な割り当てで設定されていて、ユーザーが以前に Amazon DataZone を使用したことがない場合は、ID プロバイダーからユーザーを削除する必要があります。

Amazon DataZone ドメインを Amazon SageMaker 統合ドメインにアップグレードする

ドメインをアップグレードする前の考慮事項

Amazon DataZone ドメインを Amazon SageMaker 統合ドメインにアップグレードする前に、以下の重要な考慮事項を確認して、アップグレードプロセスがスムーズに実行されるようにしてください。

- アップグレードプロセスは、 AWS マネジメントコンソールを介してのみ使用できます。現在、ドメインのアップグレードには API サポートは提供されていません。Amazon DataZone ドメインのドメイン詳細ページからアップグレードプロセスを初期化できます。
- アップグレードプロセスでは、次のロールを設定する必要があります (既存のロールを選択するか、Amazon SageMaker Unified Studio でユーザーに代わってロールを作成できます)。
  - ドメイン実行ロール - Amazon DataZone ドメインの場合、Amazon DataZone がドメイン内のデータをカタログ化、検出、管理、共有、分析するために必要な AmazonDataZoneDomainExecutionRole を使用しています。Amazon SageMaker 統合ドメインでは、既存のロールを使用するか新しい AmazonSageMakerDomainExecution ロールを作成する必要があります。
  - ドメインサービスロール - Amazon DataZone にはドメインサービスロールは必要ありません。Amazon SageMaker 統合ドメインでは、既存のロールを使用するか新しい AmazonSageMakerDomainService ロールを作成する必要があります。これは、Amazon SageMaker Unified Studio によって実行されるドメインレベルのアクションのサービスロールです。
- ルートドメインの所有権に関する考慮事項:
  - IAM ユーザーまたは SSO ユーザー/グループは、アップグレードプロセス中にオプションでルートドメイン所有者として割り当てることができます。
  - ルートドメインユニットに所有者として割り当てられた IAM ロールのみがある場合は、IAM ユーザーまたは SSO ユーザー/グループを所有者として追加することをお勧めします。詳細については、「Amazon DataZone 管理者ガイド」の「ユーザー管理」を参照してください。
  - 重要: IAM ロールは Amazon SageMaker Unified Studio にログインできません。
- 関連付けられたアカウントと AWS Resource Access Manager (AWS RAM) の変更:
  - 関連付けられたアカウントは、RAM AWS からのリソース共有を使用して、ルートドメインアカウントからの API アクションを許可します。

  - アップグレードプロセスは、Amazon DataZone によって作成および管理される AWS RAM 共有の基盤となる管理アクセス許可を変更します。影響を受けるマネージドアクセス許可は `AWSRAMPermissionsAmazonDatazoneDomainExtendedServiceAccess` と `AWSRAMPermissionsAmazonDatazoneDomainExtendedServiceWithPortalAccess` です。
- Amazon Q サブスクリプションの変更 - アップグレードされたドメインでは、Amazon Q サブスクリプションがデフォルトで無料利用枠に設定されます。ドメイン管理者は、ドメインのアップグレードが完了した後にこれを変更できます。
- アップグレード後、ドメインの `domainVersion` 属性は `V1` から `V2` に変わります。

Amazon DataZone ドメインを Amazon SageMaker 統合ドメインにアップグレードする

次の手順を実行して、Amazon DataZone ドメインを Amazon SageMaker 統合ドメインにアップグレードできます。

1. https://console.aws.amazon.com/datazone で Amazon DataZone コンソールに移動し、上部のナビゲーションバーのリージョンセレクターを使用して適切な AWS リージョンを選択します。
2. アップグレードする Amazon DataZone ドメインを選択し、詳細ページに移動します。
3. ドメインの詳細ページで、[ドメインを Amazon SageMaker Unified Studio にアップグレード] 通知にある [始めましょう] ボタンを選択します。
4. [ドメインを Amazon SageMaker Unified Studio にアップグレード] ページで、[開始] を選択します。
5. 次に、アップグレードする Amazon DataZone ドメインに IAM ユーザー、SSO ユーザー/グループのタイプの所有者がない場合、ドメインの実行ロールとドメインのサービスロール、およびルートドメインユニットの所有者を指定します。[ドメインのアップグレード] を選択します。

Amazon DataZone ドメインを Amazon SageMaker 統合ドメインにアップグレードすることに関するよくある質問

- アップグレード後にドメインに引き継がれるプロパティと設定はどれですか?

  Amazon DataZone ドメインで設定されたすべてのプロパティは、アップグレードされた Amazon SageMaker 統合ドメインに引き継がれます。これには、データ暗号化プロパティ、認証アプリケーションのプロパティなどが含まれます。

- ユーザーに対してシングルサインオン (SSO) アクセスを再度設定する必要がありますか?

  いいえ。ドメインに関連付けられた IAM Identity Center SSO アプリケーションは、アップグレードされた Amazon SageMaker 統合ドメインに引き継がれます。さらに、ドメインに割り当てられた IAM ユーザーまたはロールは、アップグレードされた Amazon SageMaker 統合ドメインで使用できます。

- アップグレード後も Amazon DataZone ポータルを使用できますか?

  はい。アップグレード後、エンドユーザーは Amazon DataZone ポータルと Amazon SageMaker Unified Studio の両方を操作できるようになります。ドメイン管理者が Amazon SageMaker マネジメントコンソールから Amazon DataZone ポータルを非アクティブ化するまで、両方のポータルは開いたままになります。

- Amazon SageMaker Unified Studio の Amazon DataZone ポータルで作成されたプロジェクトやその他のエンティティは表示されますか?

  はい。Amazon DataZone ポータルを介して作成されたほとんどのエンティティ (プロジェクト、メタデータフォーム、用語集、ドメインユニット) は、Amazon SageMaker Unified Studio に表示されます。プロジェクトは、アセット、アセットのサブスクリプション、メンバーなどに関連するすべてのアセット、メタデータフォーム、用語集を引き継ぎます。これらのプロジェクトでは、 AWS Athena または Amazon Redshift クエリエディタからデータをクエリする必要があります。メタデータフォームと用語集は Amazon SageMaker Unified Studio に表示され、Amazon SageMaker から編集し、Amazon SageMaker を通じて作成されたプロジェクトのアセットに割り当てることができます。Amazon DataZone の環境と環境プロファイルは Amazon SageMaker Unified Studio に表示されません。これらのエンティティは Amazon SageMaker プロジェクトプロファイルに置き換えられています。Amazon SageMaker Unified Studio で作成されたプロジェクトは、Amazon DataZone ポータルからは表示されません。

- Amazon SageMaker 統合ドメインへのアップグレード後、ドメイン識別子とプロジェクト識別子はどうなりますか?

  ドメインやプロジェクトを含め、すべてのエンティティ識別子はアップグレード後も変わりません。

- my AWS CloudFormation (CFN) スタックは、新しくアップグレードされた Amazon SageMaker 統合ドメインでも引き続き機能しますか?

  Amazon SageMaker Unified Studio は、Amazon DataZone と同じ API を使用します。ただし、CFN テンプレート内のロジックにはいくつかの変更が必要です。例えば、Amazon DataZone

のドメインは、domainVersion (値 V1 | V2) という名前の属性によって Amazon SageMaker 統合ドメインと区別されます。

- アップグレードがロールバックされるとどうなりますか?
  - アップグレードをロールバックすると、ドメインバージョンが V2 から V1 に変更されます。Amazon SageMaker Unified Studio にアクセスできなくなります。ドメインのコンソールビューは Amazon DataZone ビューに戻ります。ロールバック前に作成されたリソースは、Amazon SageMaker Unified Studio から作成されたプロジェクトに関連付けられていない限り保持されます。ロールバックは、Amazon SageMaker Unified Studio 内から作成されたプロジェクトが存在しない場合にのみ許可されます。
  - AWS Q サブスクリプションなどの設定は、ロールバック後も保持されます。
  - Amazon SageMaker を使用するように VPC を作成した場合、ロールバック後も保持されます。SageMaker サービスによって作成された VPC には、Name = SageMakerUnifiedStudioVPC というタグが付けられます。
  - RAM リソース共有のマネージドアクセス許可はロールバックされません。マネージドアクセス許可は、Amazon DataZone と Amazon SageMaker Unified Studio の両方のスーパーセットです。
  - ロールバックされたドメインは、Amazon SageMaker 統合ドメインに再度アップグレードできます。

Amazon DataZone のドメインユニットと認可ポリシー

ドメインユニットを使用すると、特定のビジネスユニットとチームが管理するアセットやその他のドメインエンティティを簡単に整理できます。組織のビジネスユニット内およびビジネスユニット間で安全で効率的なデータ共有を設定するには、Amazon DataZone 内にドメインユニットを作成し、各ビジネスユニット内の厳選されたユーザーがログインしてアセットをカタログに共有できるようにします。ユーザーは企業内のどこからでも、それらのビジネスユニットが管理するアセットを簡単に検索し、そのアセットへのアクセスをリクエストできます。

ドメインユニットを使用して、 AWS アカウント所有者などのリソース所有者がリソースに Amazon DataZone 認可アクセス許可を設定することもできます。ドメインユニットは、アカウント所有者から委任された権限をドメインユニットの所有者に提供します。また、アカウント所有者の代わりに、(ブループリント設定を使用して作成される) 環境プロファイルに許可権限を設定できます。これにより、所属するビジネスユニットに応じて、誰がどの環境プロファイルを作成して使用できるかを制限できます。Amazon DataZone 許可権限は、メタデータ標準を適用し、選択したプロジェクトのみがメタデータフォームと用語集を作成できるようにする場合にも使用できます。これは、一貫した高品質のメタデータを維持するのに役立ちます。詳細については、「Amazon DataZone の用語と概念」を参照してください。

Amazon DataZone ドメインユニット内で、次の認可ポリシーをユーザーとグループに割り当てると、ユーザーに特定のアクセス許可を付与できます。

- ドメインユニット作成ポリシー
- プロジェクト作成ポリシー
- プロジェクトメンバーシップポリシー
- ドメインユニット所有権引き受けポリシー
- プロジェクト所有権引き受けポリシー

詳細については、「Amazon DataZone ドメインユニット内のユーザーとグループに認可ポリシーを割り当てる」を参照してください。

Amazon DataZone ドメインユニット内で次の認可ポリシーをプロジェクトに割り当てると、特定のアクセス許可を付与できます。

- 用語集作成ポリシー
- メタデータフォーム作成ポリシー

- カスタムアセットタイプ作成ポリシー

詳細については、「Amazon DataZone ドメインユニット内のプロジェクトに認可ポリシーを割り当てる」を参照してください。

Amazon DataZone で許可メカニズムを使用するもう 1 つの方法は、Amazon DataZone ブループリント設定内のプロジェクトとドメインユニットの所有者に認可ポリシーを適用することです。

Amazon DataZone ブループリント設定は、ユーザーワークフローの公開とサブスクライブに使用されるリソースを作成および設定するために必要な情報をカプセル化するエンティティです。この情報には、 AWS アカウント番号とリージョン、 CloudFormation テンプレート、VPCs やサブネットなどのアカウントレベルのパラメータが含まれ、データベース接続情報と認証情報を含めることもできます。コストを制御してセキュリティを向上させるには、これらのブループリントを使用して環境を作成できるユーザーを制御する機能がデータプラットフォームユーザーには必要です。

特定のブループリント設定内で、プロジェクトとドメインユニットの所有者に次の認可ポリシーを割り当てることができます。

- このブループリントを使用して環境プロファイルを作成する - このポリシーは Amazon DataZone プロジェクトに割り当てることができ、このブループリントを使用して環境プロファイルを作成することをプロジェクトに許可します。
- このブループリントを使用して環境プロファイルを作成するアクセス許可を付与する - このポリシーはドメインユニットの所有者に割り当てることができ、このブループリントを使用して環境プロファイルを作成するアクセス許可をプロジェクトに付与することを所有者に許可します。

詳細については、「Amazon DataZone ブループリント設定内で認可ポリシーを割り当てる」を参照してください。

トピック

- Amazon DataZone でドメインユニットを作成する
- Amazon DataZone でドメインユニットを編集する
- Amazon DataZone でドメインユニットを削除する
- Amazon DataZone でドメインユニットの所有者を管理する
- Amazon DataZone ドメインユニット内のユーザーとグループに認可ポリシーを割り当てる
- Amazon DataZone ドメインユニット内のプロジェクトに認可ポリシーを割り当てる
- Amazon DataZone ブループリント設定内で認可ポリシーを割り当てる

Amazon DataZone でドメインユニットを作成する

Amazon DataZone ドメインユニットを使用すると、特定のビジネスユニットとチームが管理するアセットやその他のドメインエンティティを整理できます。詳細については、「Amazon DataZone の用語と概念」を参照してください。

ドメインユニットを作成するには

1. データポータル URL を使用して Amazon DataZone データポータルに移動し、SSO または AWS 認証情報を使用してログインします。Amazon DataZone 管理者の場合は、Amazon DataZone ドメインが作成された AWS アカウントの https://console.aws.amazon.com/datazone にある Amazon DataZone コンソールにアクセスして、データポータル URL を取得できます。
2. [ドメインを表示] を選択し、ドメインユニットを作成するドメインを選択します。
3. ドメインの詳細ページで、[ドメインユニット] タブに移動します。
4. [ドメイン名を作成] を選択します。
5. 以下を指定してから、[ドメインユニットを作成] を選択します。
   - [ドメインユニットの詳細] で、[名前] にドメインユニット名を指定します。
   - [ドメインユニットの詳細] で、[説明] にドメインユニットの説明を指定します。
   - [ドメインユニットの親] - 新しいドメインユニットを追加する親ドメインユニットを選択します。
   - [ドメインユニットの所有者] - このドメインユニットを編集できるドメインユニットの所有者を指定します。

Amazon DataZone でドメインユニットを編集する

Amazon DataZone ドメインユニットを使用すると、特定のビジネスユニットとチームが管理するアセットやその他のドメインエンティティを整理できます。詳細については、「Amazon DataZone の用語と概念」を参照してください。

ドメインユニットを編集するには

1. データポータル URL を使用して Amazon DataZone データポータルに移動し、SSO または AWS 認証情報を使用してログインします。Amazon DataZone 管理者の場合は、Amazon DataZone ドメインが作成された AWS アカウントの https://console.aws.amazon.com/datazone にある Amazon DataZone コンソールにアクセスして、データポータル URL を取得できます。

2. [ドメインを表示] を選択し、ドメインユニットを編集するドメインを選択します。
3. ドメインの詳細ページで、[ドメインユニット] タブに移動し、編集するドメインユニットを選択します。
4. [アクション] を展開し、[ドメインユニットを編集] を選択します。
5. ドメインユニット名と説明を変更し、[変更を保存] を選択します。

Amazon DataZone でドメインユニットを削除する

Amazon DataZone ドメインユニットを使用すると、特定のビジネスユニットとチームが管理するアセットやその他のドメインエンティティを整理できます。詳細については、「Amazon DataZone の用語と概念」を参照してください。

ドメインユニットを編集するには

1. データポータル URL を使用して Amazon DataZone データポータルに移動し、SSO または AWS 認証情報を使用してログインします。Amazon DataZone 管理者の場合は、Amazon DataZone ドメインが作成された AWS アカウントの https://console.aws.amazon.com/datazone にある Amazon DataZone コンソールにアクセスして、データポータル URL を取得できます。
2. [ドメインを表示] を選択し、ドメインユニットを削除するドメインを選択します。
3. ドメインの詳細ページで、[ドメインユニット] タブに移動し、削除するドメインユニットを選択します。
4. アクションを展開し、[ドメインユニットを削除] を選択します。
5. [ドメインユニットを削除] ポップアップウィンドウで、[ドメインユニットを削除] を選択して削除を確定します。

Amazon DataZone でドメインユニットの所有者を管理する

Amazon DataZone ドメインユニットを使用すると、特定のビジネスユニットとチームが管理するアセットやその他のドメインエンティティを整理できます。詳細については、「Amazon DataZone の用語と概念」を参照してください。

Amazon DataZone マネジメントコンソールを使用して最上位のドメインユニットに所有者を追加するには、以下のステップを実行します。

1. https://console.aws.amazon.com/datazone で Amazon DataZone コンソールに移動し、アカウントの認証情報を使用してサインインします。

2. [ドメインを表示] を選択し、ドメインユニットの所有者を追加する Amazon DataZone ドメインを選択します。
3. ドメインの詳細ページで、[ドメインルートの所有者] テーブルに移動します。
4. [追加] を選択し、ドメインユニットの所有者にするユーザーを指定します。[ルートドメインの所有者を追加] を選択します。

Amazon DataZone データポータルを介してドメインユニットの所有者を追加するには、以下の手順を実行します。

1. データポータル URL を使用して Amazon DataZone データポータルに移動し、SSO または AWS 認証情報を使用してログインします。Amazon DataZone 管理者の場合は、Amazon DataZone ドメインが作成された AWS アカウントの https://console.aws.amazon.com/datazone にある Amazon DataZone コンソールにアクセスして、データポータル URL を取得できます。
2. [ドメインを表示] を選択し、ドメインユニットの所有者を追加するドメインとドメインユニットを選択します。
3. ドメインユニットの詳細ページで、[所有者] タブを選択し、[所有者を追加] を選択します。
4. [ドメインユニットの所有者を追加] ポップアップウィンドウで、ドメインユニットの所有者にするユーザーを指定し、[所有者を追加] を選択します。

Amazon DataZone ドメインユニット内のユーザーとグループに認可ポリシーを割り当てる

Amazon DataZone ドメインユニットを使用すると、特定のビジネスユニットとチームが管理するアセットやその他のドメインエンティティを整理できます。詳細については、「Amazon DataZone の用語と概念」を参照してください。

Amazon DataZone ドメインユニットでは、ユーザーとグループに次の認可ポリシーを割り当てて、このドメインユニット内のさまざまな許可権限を付与できます。

- ドメインユニット作成ポリシー
- プロジェクト作成ポリシー
- プロジェクトメンバーシップポリシー
- ドメインユニット所有権引き受けポリシー
- プロジェクト所有権引き受けポリシー

ドメインユニット内のユーザーとグループに認可ポリシーを割り当てるには、以下の手順を実行します。

1. Amazon DataZone データポータル URL に移動し、シングルサインオン (SSO) または AWS 認証情報を使用してサインインします。Amazon DataZone 管理者の場合は、https://console.aws.amazon.com/datazone で Amazon DataZone コンソールに移動し、ドメインが作成された AWS アカウント でサインインすると、[データポータルを開く] を選択できます。
2. [ドメインを表示] を選択し、認可ポリシーを割り当てるドメインとドメインユニットを選択します。
3. ドメインユニットの詳細ページで、ユーザー/グループに割り当てる認可ポリシーを選択し、[ユーザーを追加] を選択します。
4. [ユーザーを追加] ポップアップウィンドウで、次のいずれかを実行します。
   - [選択したユーザーとグループ] を選択し、選択した認可ポリシーを割り当てるユーザーとグループを指定して [ユーザーを追加] を選択します。
   - [すべてのユーザー] を選択し、[ユーザーを追加] を選択します。
   - [すべてのグループ] を選択し、[ユーザーを追加] を選択します。
5. 選択したユーザーに選択した認可ポリシーのカスケード権限を有効または無効にすることもできます。これを行うには、カスケード権限を有効にするユーザーを選択し、[アクション] を展開してから [カスケード権限を true に設定] を選択します。選択したユーザーには、このドメインユニットの管理下にあるすべての子ドメインユニットでこのポリシーによって付与されたアクセス許可が設定されます。または、カスケード権限を無効にするユーザーを選択し、[アクション] を展開して [カスケード権限を false に設定] を選択します。

Amazon DataZone のドメインユニットの階層におけるプロジェクトメンバーシップポリシー

プロジェクトメンバーシップポリシーは、ドメインユニット内のプロジェクトにメンバーとして追加できる個人またはグループを定義します。このトピックでは、個別のドメインユニットおよび階層構造におけるドメインユニットに関するポリシーの影響のシナリオについて説明します。

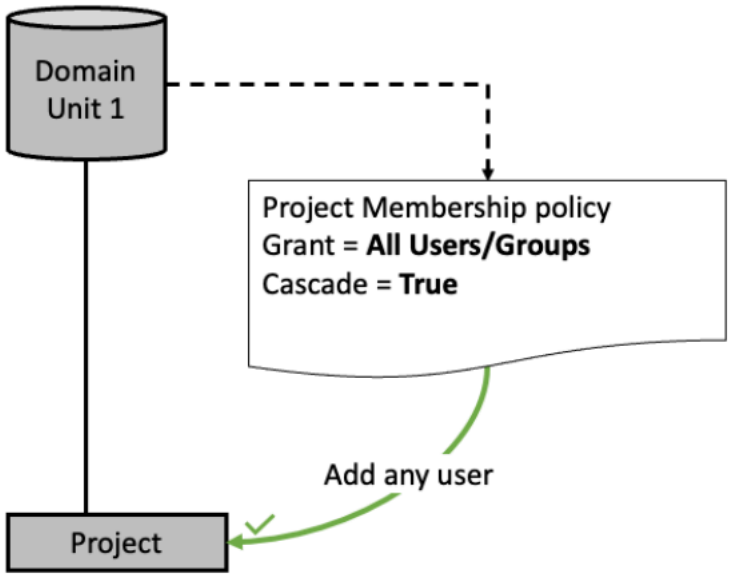
このトピックで使用されるいくつかの概念に注意してください。

- メンバーシッププール - プロジェクトメンバーシップポリシーを通じてアクセスが付与されたプリンシパル (ユーザーまたはグループ) は、プロジェクトメンバーシッププールの一部とみなされます。例えば、ドメインユニット DU1 のポリシーがユーザー U1 と U2、およびシングルサイン

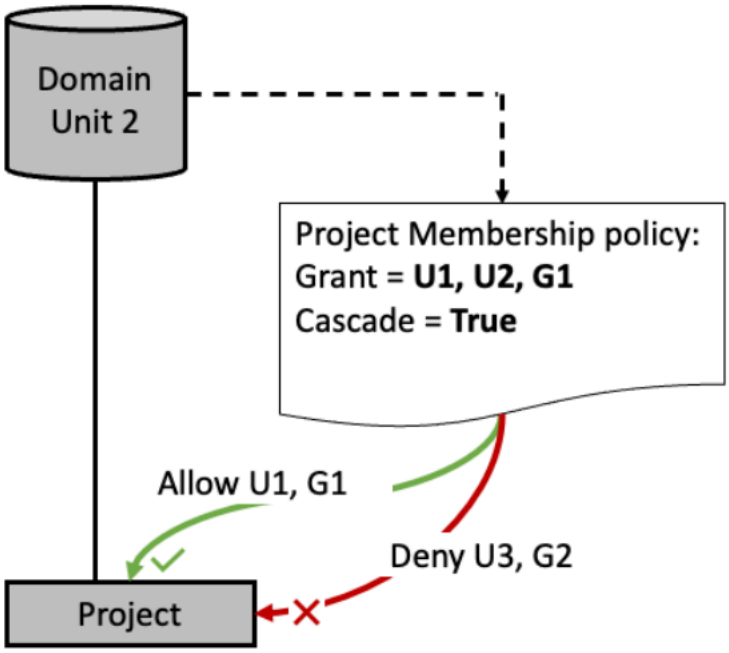
オン (SSO) グループ G1 に付与されている場合、DU1 のプロジェクトメンバーシッププールは {U1、U2、G1} で構成されます。

- カスケード - ドメインユニット階層を介して接続されたすべての子ドメインユニットに付与を継承する機能。
- 付与 - ユーザーまたはグループがアクションを実行するためのアクセス許可。

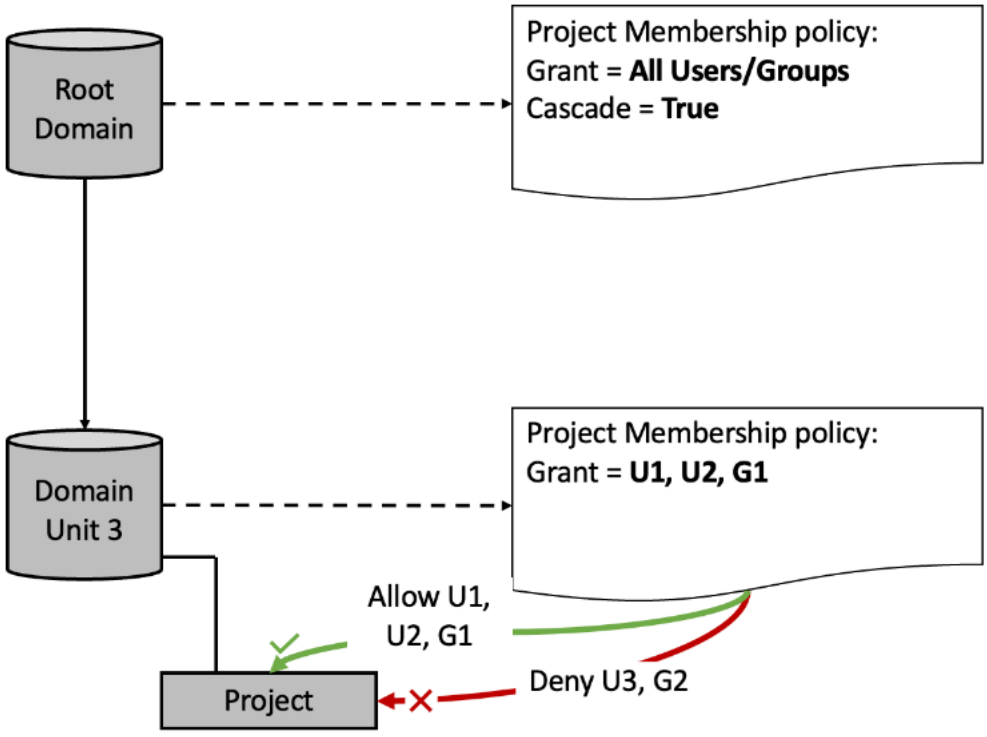
シナリオ 1 - メンバーシッププールは {すべてのユーザー/グループ} で構成されているため、ドメインユニット 1 のプロジェクトには任意のユーザーまたはグループを追加できます。



シナリオ 2 - ユーザー {U1、G1} はドメインユニット 2 のメンバーシッププールの一部であるため、ドメインユニット 2 のプロジェクトに追加できます。ユーザー {U3、G2} はメンバーシッププールに含まれていないため、プロジェクトに追加できません。

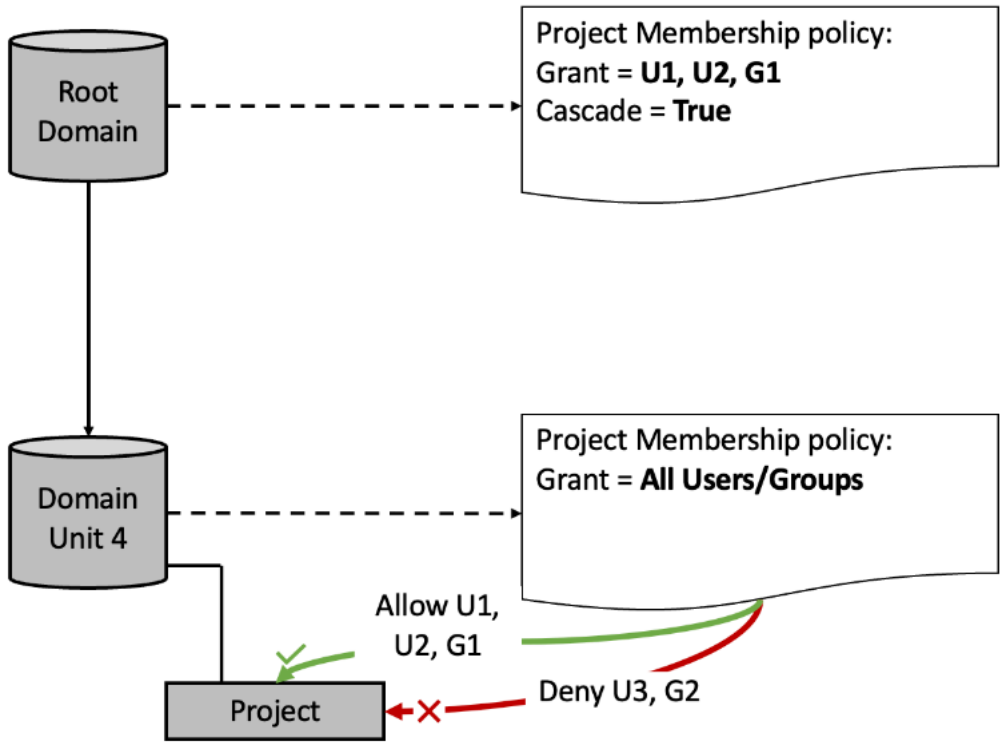


シナリオ 3 - メンバーシッププールの交差: 異なるドメインユニット階層レベルにメンバーシッププールがある場合、すべてのメンバーシッププールに含まれるユーザーとグループのみをプロジェクトに追加できます。



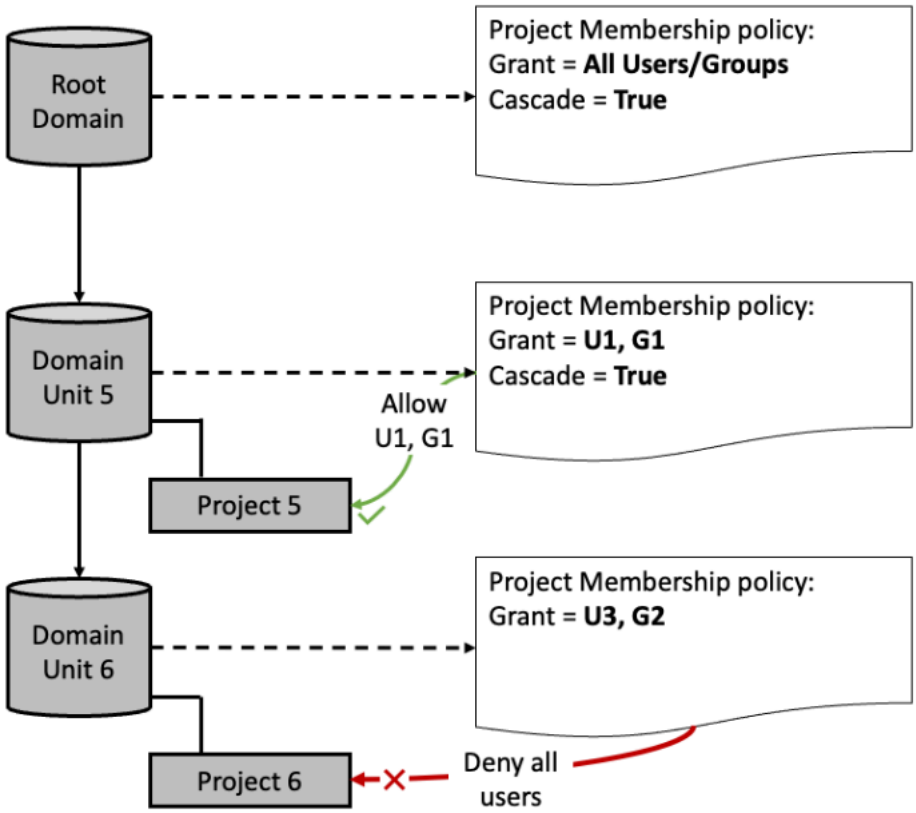
- 両方のメンバーシッププールにまたがるユーザーの交差は {U1、U2、G1} です。
- ユーザー {U1、U2、G1} は、ドメインユニット 3 のプロジェクトに追加できます。
- ユーザー {U3、G2} は、[すべてのユーザー] と [すべてのグループ] がルートドメインユニットレベルのメンバーシッププールに含まれる場合でも、ドメインユニット 3 のプロジェクトには追加できません。

シナリオ 4 - メンバーシッププールの交差: 異なるドメインユニット階層レベルにメンバーシッププールがある場合、すべてのメンバーシッププールに含まれるユーザーとグループのみをプロジェクトに追加できます。

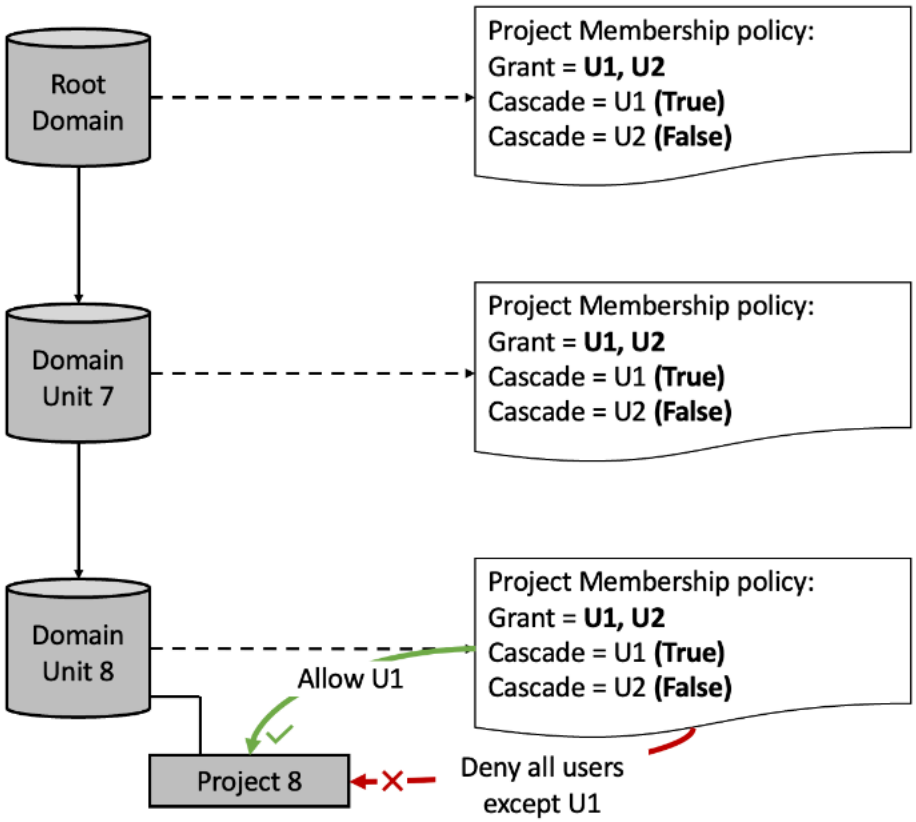


- 両方のメンバーシッププールにまたがるユーザーの交差は {U1、U2、G1} です。
- ドメインユニット 4 のメンバーシッププールは {すべてのユーザー / グループ} ですが、メンバーシッププールはルートドメイン {U1、U2、G1} のメンバーシッププールを超えて拡張することはできません。
- ユーザー {U3、G2} は、[すべてのユーザー] と [すべてのグループ] がドメインユニット 4 のメンバーシッププールに含まれる場合でも、ドメインユニット 4 のプロジェクトには追加できません。

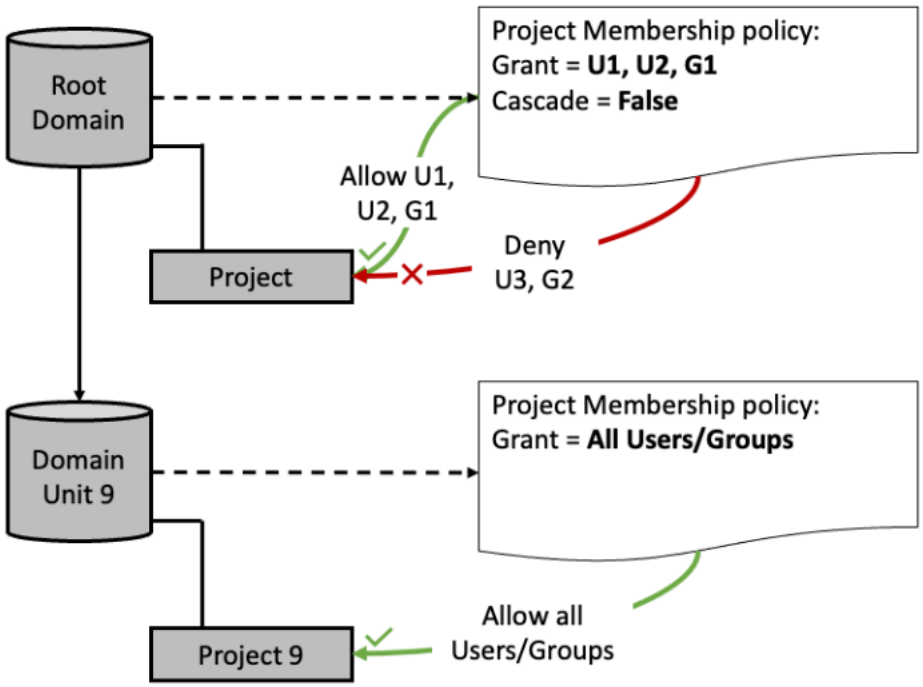
シナリオ 5 - ユーザー {U1、G1} は、ルートドメインとドメインユニット 5 の間のメンバーシッププールの交差部分に含まれるためプロジェクト 5 に追加できます。3 つのメンバーシッププールの交差が空であるため、プロジェクト 6 にユーザー/グループを追加することはできません。



シナリオ 6 - 3 つのメンバーシッププールすべてにまたがって交差しているため、ユーザー {U1} のみをプロジェクト 8 に追加できることを意味します。ドメインユニット 8 の交差しているプールは {U1}、{U1}、{U1、U2} で、この 3 つの間で共通しているのは {U1} のみです。



シナリオ 7 - ユーザー {U1、U2、G1} は、ルートドメインのメンバーシッププールの一部としてルートドメインのプロジェクトに追加できます。メンバーシッププールが {すべてのユーザー/グループ} で構成されているため、ドメインユニット 9 のプロジェクトには、任意のユーザーも任意のグループも追加できます。これは、その上のルートドメインにおいてカスケードが false に設定されているためです。



Amazon DataZone ドメインユニット内のプロジェクトに認可ポリシーを割り当てる

Amazon DataZone ドメインユニットを使用すると、特定のビジネスユニットとチームが管理するアセットやその他のドメインエンティティを整理できます。詳細については、「Amazon DataZone の用語と概念」を参照してください。

Amazon DataZone ドメインユニットでは、プロジェクトに次の認可ポリシーを割り当て、このドメインユニット内のさまざまな許可権限をこれらのエンティティに付与できます。

- 用語集作成ポリシー
- メタデータフォーム作成ポリシー
- カスタムアセットタイプ作成ポリシー

ドメインユニット内のプロジェクトに認可ポリシーを割り当てるには、以下の手順を実行します。

1. Amazon DataZone データポータル URL に移動し、シングルサインオン (SSO) または AWS 認証情報を使用してサインインします。Amazon DataZone 管理者の場合は、https://console.aws.amazon.com/datazone で Amazon DataZone コンソールに移動し、ドメインが作成された AWS アカウント でサインインすると、[データポータルを開く] を選択できます。

2. [ドメインを管理] を選択し、認可ポリシーを割り当てるドメインとドメインユニットを選択します。
3. ドメインユニットの詳細ページで、割り当てる認可ポリシーを選択し、[設定] を選択します。

Amazon DataZone ブループリント設定内で認可ポリシーを割り当てる

Amazon DataZone で許可メカニズムを使用するもう 1 つの方法は、Amazon DataZone ブループリント設定内のプロジェクトとドメインユニットの所有者に認可ポリシーを適用することです。

Amazon DataZone ブループリント設定は、ユーザーワークフローの公開とサブスクライブに使用されるリソースを作成および設定するために必要な情報をカプセル化するエンティティです。この情報には、 AWS アカウント番号とリージョン、CFN テンプレート、VPCs やサブネットなどのアカウントレベルのパラメータが含まれ、データベース接続情報と認証情報を含めることもできます。コストを制御してセキュリティを向上させるには、これらのブループリントを使用して環境を作成できるユーザーを制御する機能がデータプラットフォームユーザーには必要です。

特定のブループリント設定内で、プロジェクトとドメインユニットの所有者に次の認可ポリシーを割り当てることができます。

- このブループリントを使用して環境プロファイルを作成する - このポリシーは Amazon DataZone プロジェクトに割り当てることができ、このブループリントを使用して環境プロファイルを作成することをプロジェクトに許可します。
- このブループリントを使用して環境プロファイルを作成するアクセス許可を付与する - このポリシーはドメインユニットの所有者に割り当てることができ、このブループリントを使用して環境プロファイルを作成するアクセス許可をプロジェクトに付与することを所有者に許可します。

Amazon DataZone データポータルを介してブループリント設定から、[このブループリントを使用して環境プロファイルを作成する] 認可ポリシーをプロジェクトに割り当てる

1. Amazon DataZone データポータル URL に移動し、シングルサインオン (SSO) または AWS 認証情報を使用してサインインします。Amazon DataZone 管理者の場合は、https://console.aws.amazon.com/datazone で Amazon DataZone コンソールに移動し、ドメインが作成された AWS アカウント でサインインすると、[データポータルを開く] を選択できます。
2. データポータルで、使用する有効なブループリントがあるドメインを選択し、[ブループリント設定] タブに移動します。

3. [ブループリント設定] タブで、使用する有効なブループリントを選択し、このブループリントの詳細ページで [許可ポリシー] タブに移動してから、[このブループリントを使用して環境プロファイルを作成する] 認可ポリシーを選択します。
4. [このブループリントを使用して環境プロファイルを作成する] 認可ポリシーの詳細ページで、[アクション] を展開し、[プロジェクトを追加] を選択します。
5. [プロジェクトを追加] ポップアップウィンドウでは、次のいずれかを実行できます。

   - [ドメインユニット内のすべてのプロジェクト] オプションを選択し、このブループリントを使用して環境プロファイルを作成することを許可するプロジェクトを含んだドメインユニットを検索して指定し、[プロジェクトを追加] を選択します。
   - [ドメインユニットで選択したプロジェクト] オプションを選択し、このポリシーを割り当てるプロジェクトを含んだドメインユニットを検索して指定します。さらに、このポリシーを割り当てるプロジェクト検索して選択し、[プロジェクトを追加] を選択します。

Amazon DataZone マネジメントコンソールを介してブループリント設定から、[このブループリントを使用して環境プロファイルを作成するアクセス許可を付与する] 認可ポリシーをドメインユニットの所有者に割り当てる

1. https://console.aws.amazon.com/datazone で Amazon DataZone コンソールに移動し、アカウントの認証情報を使用してサインインします。
2. Amazon DataZone コンソールで、使用する有効なブループリントがあるドメインを選択し、[ブループリント] タブに移動します。
3. [ブループリント] タブで、使用する有効なブループリントを選択し、ブループリントの詳細ページで、[委任された権限] タブに移動します。
4. [委任された権限] タブで、[このブループリントを使用して環境プロファイルを作成するアクセス許可を付与する] ポリシーを割り当てる所有者のドメインユニットを検索して選択し、[委任された権限の追加] を選択します。

Amazon DataZone の組み込みブループリント

環境の作成に使用するブループリントには、環境が属しているプロジェクトのメンバーが Amazon DataZone カタログのアセットの使用時に使用できるツールとサービスが定義されます。Amazon DataZone の現在のリリースでは、以下の組み込みブループリントが用意されています。

- データレイクのブループリント
- データウェアハウスのブループリント
- Amazon SageMaker ブループリント

Amazon DataZone でデフォルトのブループリントを有効にするには、以下の手順を実行します。

- Amazon DataZone ドメインを所有する AWS アカウントで組み込みブループリントを有効にする
- Amazon DataZone ドメインを所有する AWS アカウントの信頼されたサービスとして Amazon SageMaker を追加する

Amazon DataZone ドメインを所有する AWS アカウントで組み込みブループリントを有効にする

環境の作成に使用するブループリントには、環境が属しているプロジェクトのメンバーが Amazon DataZone カタログのアセットの使用時に使用できるツールとサービスが定義されます。

Amazon DataZone の現在のリリースでは、データレイクのブループリント、データウェアハウスのブループリント、Amazon SageMaker ブループリントという組み込みブループリントが用意されています。

- データレイクの設計図には、Amazon DataZone カタログでデータレイクアセットを公開および使用するための一連のサービス (AWS Glue、 AWS Lake Formation、Amazon Athena) を起動および設定するための定義が含まれています。
- データウェアハウスのブループリントには、Amazon DataZone カタログで Amazon Redshift アセットを公開および使用する一連のサービス (Amazon Redshift) を起動および設定するための定義が含まれています。
- Amazon SageMaker ブループリントには、Amazon DataZone カタログで Amazon SageMaker アセットを公開および使用する一連のサービス (Amazon SageMaker Studio) を起動および設定するための定義が含まれています。

詳細については、「Amazon DataZone の用語と概念」を参照してください。

Amazon DataZone ドメインの作成中に、ドメイン作成プロセスの一環として、デフォルトのデータレイクとデフォルトのデータウェアハウスの組み込みブループリントを自動的に有効にする [Quick Setup] を選択できます。[Quick Setup] では、これらの組み込みブループリントを使用して、デフォルトの環境プロファイルとデフォルトの環境も作成されます。

Amazon DataZone ドメインの作成の一環としてクイックセットアップを選択しない場合は、次の手順を使用して、この Amazon DataZone ドメインを格納する AWS アカウントで使用可能な組み込みブループリントを有効にできます。これらの組み込みブループリントを使用してこのドメインに環境プロファイルと環境を作成するには、事前に該当するブループリントを有効にしておく必要があります。

Amazon DataZone マネジメントコンソールを介して Amazon DataZone ドメインの組み込みブループリントを有効にするには、管理者権限を持つアカウントで IAM ロールを引き受ける必要があります。Amazon DataZone マネジメントコンソールを使用するために必要な IAM アクセス許可を設定することで、最小限の権限を取得します。

Amazon DataZone ドメインで組み込みブループリントを有効にする

1. https://console.aws.amazon.com/datazone で Amazon DataZone コンソールに移動し、アカウントの認証情報を使用してサインインします。
2. [ドメインを表示] を選択し、1 つ以上の組み込みブループリントを有効にするドメインを選択します。
3. ドメインの詳細ページで、[ブループリント] タブに移動します。
4. [ブループリント] リストから、DefaultDataLake または DefaultDataWarehouse、あるいは Amazon SageMaker ブループリントのいずれかを選択します。
5. 選択したブループリントの詳細ページで、[このアカウントで有効にする] を選択します。
6. [許可とリソース] ページで、以下を指定します。

   - DefaultDataLake ブループリントを有効にする場合は、 Glue 管理アクセスロールで、Amazon DataZone に Glue と AWS Lake Formation AWS のテーブルへのアクセスを取り込んで管理する権限を付与する新規または既存のサービスロールを指定します。
   - DefaultDataWarehouse ブループリントを有効にする場合は、Redshift 管理アクセスロールに、Amazon Redshift のデータ共有、テーブル、ビューへのアクセスを取り込んで管理するための許可を Amazon DataZone に付与する新規または既存のサービスロールを指定します。

- Amazon SageMaker ブループリントを有効にする場合は、SageMaker 管理アクセスロールに、Amazon SageMaker データをカタログに公開するためのアクセス許可を Amazon DataZone に付与する新規または既存のサービスロールを指定します。また、カタログ内で Amazon SageMaker によって公開されたアセットへのアクセスの付与やアクセスの取り消しを行うためのアクセス許可も Amazon DataZone に付与します。

  > **Important**
  >
  > Amazon SageMaker ブループリントを有効にすると、Amazon DataZone では、Amazon DataZone の次の IAM ロールが現在のアカウントとリージョンに存在するかどうかの確認が行われます。これらのロールが存在しない場合、Amazon DataZone で自動的に作成されます。
  >
  > - AmazonDataZoneGlueAccess-<region>-<domainId>
  > - AmazonDataZoneRedshiftAccess-<region>-<domainId>

- プロビジョニングロールには、環境アカウントとリージョンで AWS CloudFormation を使用して環境リソースを作成および設定する権限を Amazon DataZone に付与する新規または既存のサービスロールを指定します。
- Amazon SageMaker ブループリントを有効にする場合は、SageMaker-Glue データソースの Amazon S3 バケットに、 AWS アカウント内のすべての SageMaker 環境で使用される Amazon S3 バケットを指定します。指定するバケットプレフィックスは、次のいずれかである必要があります。
  - amazon-datazone*
  - datazone-sagemaker*
  - sagemaker-datazone*
  - DataZone-Sagemaker*
  - Sagemaker-DataZone*
  - DataZone-SageMaker*
  - SageMaker-DataZone*

7. [ブループリントを有効にする] を選択します。

選択したブループリントを有効にすると、アカウント内のブループリントを使用して環境プロファイルを作成できるプロジェクトを制御できます。これを行うには、プロジェクトの管理をブループリントの設定に割り当てます。

> **Important**
>
> デフォルトでは、環境ブループリントに指定されている管理プロジェクトはありません。つまり、Amazon DataZone ユーザーは環境ブループリント用にプロファイルを作成できます。そのため、環境ブループリントの管理プロジェクトを必ず指定してガバナンスを強化することを強くお勧めします。

有効なブループリントで管理プロジェクトを指定する

1. https://console.aws.amazon.com/datazone で Amazon DataZone コンソールに移動し、アカウントの認証情報を使用してサインインします。
2. [ドメインを表示] を選択し、選択したブループリントの管理プロジェクトを追加するドメインを選択します。
3. [ブループリント] タブを選択し、使用するブループリントを選択します。
4. デフォルトでは、ドメイン内のすべてのプロジェクトで、アカウントの DefaultDataLake、DefaultDataWareshouse、または Amazon SageMaker のブループリントを使用して環境プロファイルを作成できます。ただし、管理プロジェクトをブループリントに割り当てると、これを制限できます。管理プロジェクトを追加するには、[管理プロジェクトを選択] を選択し、ドロップダウンメニューから管理プロジェクトとして追加するプロジェクトを選択して、[管理プロジェクトを選択] を選択します。

AWS アカウントで DefaultDataWarehouse ブループリントを有効にすると、パラメータセットをブループリント設定に追加できます。パラメータセットは、Amazon DataZone が Amazon Redshift クラスターへの接続を確立するために必要なキーと値のグループであり、データウェアハウス環境を作成するために使用されます。これらのパラメータには、Amazon Redshift クラスターの名前、データベース、クラスターへの認証情報を保持する AWS シークレットが含まれます。

DefaultDataWarehouse ブループリントへのパラメータセットの追加する

1. https://console.aws.amazon.com/datazone で Amazon DataZone コンソールに移動し、アカウントの認証情報を使用してサインインします。
2. [ドメインを表示] を選択し、パラメータセットを追加するドメインを選択します。
3. [ブループリント] タブを選択し、DefaultDataWareshouse ブループリントを選択してブループリントの詳細ページを開きます。

4. ブループリントの詳細ページの[パラメータセット] タブで、[パラメータセットを作成] を選択します。

   - パラメータセットの [名前] を指定します。
   - 必要に応じて、パラメータセットの説明を入力します。
   - リージョンの選択
   - Amazon Redshift クラスターまたは Amazon Redshift Serverless のどちらかを選択します。
   - 選択した Amazon Redshift クラスターまたは Amazon Redshift Serverless ワークグループの認証情報を保持する AWS シークレット ARN を選択します。パラメータセット内で使用するためには、 AWS シークレットに `AmazonDataZoneDomain : [Domain_ID]` タグを付ける必要があります。
     - 既存の AWS シークレットがない場合は、Create New AWS Secret を選択して新しいシークレットを作成することもできます。その場合はダイアログボックスが開き、そこでシークレットの名前、ユーザー名、パスワードを指定できます。新しい AWS シークレットの作成を選択すると、Amazon DataZone は AWS Secrets Manager サービスに新しいシークレットを作成し、パラメータセットを作成しようとしているドメインにシークレットがタグ付けされていることを確認します。
   - 上記のステップで Amazon Redshift クラスターを選択した場合は、ドロップダウンからクラスターを選択します。上記のステップで Amazon Redshift ワークグループを選択した場合は、ドロップダウンからワークグループを選択します。
   - 選択した Amazon Redshift クラスターまたは Amazon Redshift Serverless ワークグループ内のデータベースの名前を入力します。
   - [パラメータセットを作成] を選択します。

> **Note**
>
> DefaultDataWarehouse ブループリントには最大 10 個のパラメータセットしか追加できません。

AWS アカウントで Amazon SageMaker ブループリントを有効にすると、パラメータセットをブループリント設定に追加できます。パラメータセットは、Amazon DataZone が Amazon SageMaker への接続を確立するために必要なキーと値のグループであり、sagemaker 環境を作成するために使用されます。

Amazon SageMaker ブループリントへのパラメータセットの追加

1. https://console.aws.amazon.com/datazone で Amazon DataZone コンソールに移動し、アカウントの認証情報を使用してサインインします。
2. [ドメインを表示] を選択し、パラメータセットを追加する有効なブループリントを含むドメインを選択します。
3. [ブループリント] タブを選択し、Amazon SageMaker ブループリントを選択してブループリントの詳細ページを開きます。
4. ブループリントの詳細ページの [パラメータセット] タブで、[パラメータセットを作成] を選択し、以下を指定します。
   - パラメータセットの [名前] を指定します。
   - 必要に応じて、パラメータセットの [説明] を入力します。
   - Amazon SageMaker ドメインの許可タイプを指定します。IAM または IAM アイデンティティセンター (SSO) のどちらかを選択できます。
   - AWS リージョンを指定します。
   - データ暗号化用の AWS KMS キーを指定します。既存のキーを選択することも、新しいキーを作成することもできます。
   - [環境パラメータ] で以下を指定します。
     - [VPC ID] - Amazon SageMaker 環境の VPC に使用している ID。既存の VPC を使用することも、新しい VPC を作成することもできます。
     - [サブネット] - VPC 内の特定のリソースに対する IP アドレスの範囲を示す 1 つ以上の ID。
     - [ネットワークアクセス] - [VPC のみ] か [パブリックインターネットのみ] のどちらかを選択します。
     - [セキュリティグループ] - VPC とサブネットを設定するときに使用するセキュリティグループ。
   - [データソースパラメータ] で次のどちらかを選択します。
     - AWS Glue のみ
     - AWS Glue + Amazon Redshift Serverless。このオプションを選択する場合は、以下を指定する必要があります。
       - 選択した Amazon Redshift クラスターの認証情報を保持する AWS シークレット ARN を指定します。パラメータセット内で使用するためには、 AWS シークレットに `AmazonDataZoneDomain : [Domain_ID]` タグを付ける必要があります。

既存の AWS シークレットがない場合は、Create New Secret を選択して新しい AWS シークレットを作成することもできます。その場合はダイアログボックスが開き、そこでシークレットの名前、ユーザー名、パスワードを指定できます。新しい AWS シークレットの作成を選択すると、Amazon DataZone は AWS Secrets Manager サービスに新しいシークレットを作成し、パラメータセットを作成しようとしているドメインにシークレットがタグ付けされていることを確認します。

- 環境の作成時に使用する Amazon Redshift ワークグループを指定します。
- 環境の作成時に使用する (選択したワークグループ内にある) データベースの名前を指定します。

- AWS Glue のみ + Amazon Redshift クラスター
  - 選択した Amazon Redshift クラスターの認証情報を保持する AWS シークレット ARN を指定します。パラメータセット内で使用するためには、 AWS シークレットに `AmazonDataZoneDomain : [Domain_ID]` タグを付ける必要があります。

    既存の AWS シークレットがない場合は、Create New Secret を選択して新しい AWS シークレットを作成することもできます。その場合はダイアログボックスが開き、そこでシークレットの名前、ユーザー名、パスワードを指定できます。新しい AWS シークレットの作成を選択すると、Amazon DataZone は AWS Secrets Manager サービスに新しいシークレットを作成し、パラメータセットを作成しようとしているドメインにシークレットがタグ付けされていることを確認します。
  - 環境の作成時に使用する Amazon Redshift クラスターを指定します。
  - 環境の作成時に使用する (選択したクラスター内にある) データベースの名前を指定します。

5. [パラメータセットを作成] を選択します。

Amazon DataZone ドメインを所有する AWS アカウントの信頼されたサービスとして Amazon SageMaker を追加する

Amazon SageMaker ブループリントを有効にしている場合は、Amazon DataZone 内の信頼されたサービスの 1 つとして SageMaker も追加する必要があります。これを行うには、以下の手順を完了します。

1. https://console.aws.amazon.com/datazone で Amazon DataZone コンソールに移動し、アカウントの認証情報を使用してサインインします。

2. [ドメインを表示] を選択し、有効な SageMaker ブループリントを含むドメインを選択します。
3. [信頼されたサービス]、Amazon SageMaker、[有効化] の順に選択します。

Amazon DataZone カスタム AWS サービスの設計図

Amazon DataZone では、カスタム AWS サービスブループリントを使用して、組織で既にセットアップされている独自の既存の AWS Identity and Access Management (IAM) ロールと AWS サービスを使用するように Amazon DataZone を設定することで、リソースの使用状況とコストを最適化できます。

Amazon DataZone 環境の作成に使用するブループリントには、環境が属しているプロジェクトのメンバーが Amazon DataZone カタログのアセットの使用時に使用できるツールとサービスが定義されます。Amazon DataZone の現在のリリースでは、以下の組み込みブループリントが用意されています。

- データレイクのブループリント
- データウェアハウスのブループリント
- Amazon SageMaker ブループリント

Amazon DataZone カスタム AWS サービスブループリントを使用すると、組織で現在使用している AWS サービスに合わせてカスタマイズされた環境とプロジェクトを作成できます。カスタムブループリントの場合、既存の IAM ロールを使用してインフラストラクチャのセットアップ全体のガバナンスを強化し、ビジネスイニシアチブでコラボレーションするように設定することで、既存のデータパイプラインに Amazon DataZone を含めることができます。

> **Important**
>
> Amazon DataZone カスタム AWS サービスプリントを使用すると、既存の Amazon SageMaker ドメインを Amazon DataZone に移行できます。管理者はこの機能を使用して、Amazon SageMaker ドメインから既存の承認済みユーザー、セキュリティ設定、ポリシーをインポートして Amazon DataZone プロジェクトをセットアップできるようになりました。詳細については、「SageMaker アセットのセットアップ (管理者ガイド)」を参照してください。

トピック

- カスタム AWS サービスのブループリントを有効にする
- カスタム AWS サービスブループリントを使用して環境を作成する

- カスタム AWS サービス環境でアクションを作成する
- カスタム AWS サービス環境にプロジェクトメンバーを追加する
- AWS サービス環境でデータソースを設定する
- AWS サービス環境でサブスクリプションターゲットを設定する

カスタム AWS サービスのブループリントを有効にする

ドメインでカスタム AWS サービスブループリントを有効にするには、次の手順を実行します。

1. AWS マネジメントコンソールにサインインし、https://console.aws.amazon.com/datazone で Amazon DataZone マネジメントコンソールを開きます。
2. ドメインを表示を選択し、カスタム AWS サービスブループリントを有効にするドメインを選択します。
3. [ブループリント] タブを選択し、使用可能なブループリントのリストから AWS サービスブループリントを選択し、[有効化]を選択します。

カスタム AWS サービスブループリントを使用して環境を作成する

カスタム AWS サービスブループリントを使用して環境を作成するには、次の手順を実行します。

1. AWS マネジメントコンソールにサインインし、https://console.aws.amazon.com/datazone で Amazon DataZone マネジメントコンソールを開きます。
2. ドメインを表示を選択し、カスタム AWS サービスブループリントが有効になっているドメインを選択します。
3. [ブループリント] タブを選択し、有効な AWS サービスブループリントを選択して、[環境を作成] を選択します。
4. [環境を作成] ページで、以下を指定し、[環境を作成] を選択します。

    - [名前] - 環境の名前を指定します。
    - [説明] - 環境の説明を指定します。
    - [プロジェクト] - 環境に新規または既存の所有プロジェクトを指定します。プロジェクトを使用すると、ユーザーのグループは Amazon DataZone のアセットを検出、公開、サブスクライブ、消費できます。この環境は、指定されたプロジェクトのすべてのメンバーが利用できます。すべての環境はプロジェクトで所有されており、プロジェクトのユーザーは環境にアクセスできます。

- 環境ロール - この環境で Amazon DataZone に Amazon S3 や Glue などの既存の AWS サービスやリソースへのアクセスを許可する既存の IAM AWS ロールを指定します。 Amazon S3

> **Note**
>
> Amazon DataZone ではこのロールはプロビジョニングされません。この環境で有効にする既存の AWS サービスとリソースへのアクセス許可を持つ既存の IAM ロールが必要です。
> この IAM ロールに必要な最小限のアクセス許可があること、つまり、この環境で有効にする AWS サービスとリソースにのみアクセスできるように、範囲が絞り込まれていることを確認してください。
> AWS Policy Generator を使用して、要件に合ったポリシーを構築し、使用するカスタム IAM ロールにアタッチできます。
> 規則に従うには、ロールが `AmazonDataZone` で始まるようにしてください。これは必須ではありませんが、推奨されます。IAM 管理者が `AmazonDataZoneFullAccess` ポリシーを使用している場合は、パスロール確認検証があるため、この規則に従う必要があります。
> カスタムロールを作成するときは、その信頼ポリシーで `datazone.amazonaws.com` を信頼するように確認してください。
>
> JSON

```
{
    "Version":"2012-10-17",
    "Statement": [
        {
            "Effect": "Allow",
            "Principal": {
                "Service": [
                    "datazone.amazonaws.com"
                ]
            },
            "Action": [
                "sts:AssumeRole",
                "sts:TagSession"
            ]
        }
    ]
}
```

- AWS region - この環境を作成する AWS リージョンを指定します。

カスタム AWS サービス環境でアクションを作成する

カスタム AWS サービス環境でアクションを作成するには、次の手順を実行します。カスタム AWS サービス環境でアクションを作成することで、Amazon DataZone データポータルへのディープリンクを、この環境で利用可能な分析ツールに追加します。

1. AWS マネジメントコンソールにサインインし、https://console.aws.amazon.com/datazone で Amazon DataZone マネジメントコンソールを開きます。
2. ドメインを表示を選択し、カスタム AWS サービスブループリントが有効になっているドメインを選択します。
3. [ブループリント] タブを選択し、有効な AWS サービスブループリントを選択して、アクションを追加する AWS サービス環境を選択します。
4. AWS コンソールリンクページで、人気リンクまたはカスタムリンクセクションから AWS リンク (アクション) を選択して、Amazon DataZone データポータルを介してこの環境から Amazon S3 バケット、Amazon Athena ワークグループ、 AWS Glue ジョブ、またはその他のカスタム AWS コンソールリソースへのディープリンクを有効にします。 AWS
5. この環境の[概要] セクションからデータポータルリンクを使用してデータポータルのこの環境に移動すると、[分析ツール] セクションに追加したディープリンクが表示されます。

カスタム AWS サービス環境にプロジェクトメンバーを追加する

プロジェクトメンバーを AWS サービス環境に追加するには、次の手順を実行します。

1. AWS マネジメントコンソールにサインインし、https://console.aws.amazon.com/datazone で Amazon DataZone マネジメントコンソールを開きます。
2. プロジェクトタブを選択し、メンバーを追加する AWS サービス環境内のプロジェクトを選択します。
3. [追加] を選択し、[メンバーを追加] ページで、IAM ユーザー、SSO ユーザー、または SSO グループからメンバーを検索して追加します。所有者、コントリビューター、コンシューマー、スチュワード、またはビューアのいずれか割り当てられているプロジェクトロールを指定します。メンバーの検索と追加が完了したら、[メンバーを追加] を選択します。

AWS サービス環境でデータソースを設定する

AWS サービス環境でデータソースを設定するには、次の手順を実行します。

1. AWS マネジメントコンソールにサインインし、https://console.aws.amazon.com/datazone で Amazon DataZone マネジメントコンソールを開きます。
2. [ブループリント] タブを選択し、カスタム AWS サービスのブループリントを選択します。
3. 作成済み環境で、データソースを設定する AWS サービス環境を選択します。
4. [データソース] タブを選択して [追加] を選択し、以下を指定してから [追加] を選択します。

   - [名前] - データソース名。
   - リソース - AWS Glue または Amazon Redshift を選択します。
     - Glue AWS で、リソースデータベースを指定します。
     - Amazon Redshift では、クラスターまたはサーバーレスを選択し、Redshift 認証情報を指定します。これには、新規または既存の AWS シークレット、環境の作成時に使用するクラスターまたはサーバーレスワークグループ、環境の作成時に使用するデータベース、指定されたデータベース内のスキーマが含まれます。
   - アクセス許可 - Amazon DataZone に AWS Lake Formation (Glue 用) のテーブルへのアクセスの取り込みと管理を許可するか、Amazon DataZone AWS に Amazon Redshift のテーブルへのアクセスの取り込みと管理を許可する管理アクセスロールを指定します。
   - [データの消費に使用] - Amazon DataZone では、プロジェクトメンバーは、プロジェクトでサブスクライブしたデータへのアクセスを有効にするために Amazon DataZone で使用されるサブスクリプションターゲットを介して、データを消費できます。このデータソースをサブスクリプションターゲットとして追加するかどうかも指定します。

AWS サービス環境でサブスクリプションターゲットを設定する

AWS サービス環境でサブスクリプションターゲットを設定するには、以下の手順を実行します。

1. AWS マネジメントコンソールにサインインし、https://console.aws.amazon.com/datazone で Amazon DataZone マネジメントコンソールを開きます。
2. [ブループリント] タブを選択し、 AWS サービスブループリントを選択します。
3. 作成済み環境 で、サブスクリプションターゲットを設定する AWS サービス環境を選択します。

4. [サブスクリプションターゲット] タブを選択して [追加] を選択し、以下を指定してから [追加] を選択します。

   - [名前] - サブスクリプションターゲット名。
   - リソース - AWS Glue または Amazon Redshift を選択します。
     - Glue AWS で、リソースデータベースを指定します。
     - Amazon Redshift では、クラスターまたはサーバーレスを選択し、Redshift 認証情報を指定します。これには、新規または既存の AWS シークレット、環境の作成時に使用するクラスターまたはサーバーレスワークグループ、環境の作成時に使用するデータベース、指定されたデータベース内のスキーマが含まれます。
   - アクセス許可 - Amazon DataZone に AWS Lake Formation (AWS Glue 用) のテーブルへのアクセスの取り込みと管理を許可するか、Amazon DataZone に Amazon Redshift のテーブルへのアクセスの取り込みと管理を許可する管理アクセスロールを指定します。
   - [データの消費に使用] - Amazon DataZone では、メタデータの取り込みを許可するデータソースを使用してデータをデータカタログに公開できます。このサブスクリプションターゲットをデータソースとして追加するかどうかも指定します。

Amazon DataZone の関連付けられているアカウント

AWS アカウントを Amazon DataZone ドメインに関連付けると、ドメインユーザーはこれらの AWS アカウントのデータを公開して使用できます。アカウントの関連付けを設定するには、3 つのステップがあります。

- まず、関連付けをリクエストして、ドメインを目的の AWS アカウントと共有します。 AWS アカウントがドメインの AWS アカウントと異なる場合、Amazon DataZone は AWS Resource Access Manager (RAM) を使用します。アカウントの関連付けを開始できるのは、Amazon DataZone ドメインのみです。
- 2 つ目は、アカウント所有者に関連付けリクエストを承認してもらいます。
- 3 つ目は、アカウント所有者に目的の環境ブループリントを有効にしてもらいます。ブループリントを有効にすることで、アカウント所有者は、 Glue データベースや Amazon Redshift クラスターなどのアカウント内のリソースを作成およびアクセスするために必要な IAM AWS ロールとリソース設定をドメイン内のユーザーに提供します。

アカウントを Amazon DataZone に関連付けるには、以下のステップを実行します。

- ステップ 1 - 他の AWS アカウントとの関連付けをリクエストする
- ステップ 2 - Amazon DataZone ドメインからアカウントの関連付けリクエストを承認し、環境ブループリントを有効にする
- ステップ 3 - 関連付けられた AWS アカウントで環境ブループリントを有効にする

他の AWS アカウントとの関連付けをリクエストする

> **Note**
>
> 関連付けリクエストを別の AWS アカウントに送信することで、ドメインを他の AWS アカウントと AWS Resource Access Manager (RAM) と共有します。入力するアカウント ID に間違いがないことを必ず確認してください。

Amazon DataZone ドメインの Amazon DataZone コンソール内の他の AWS アカウントとの関連付けをリクエストするには、管理アクセス許可を持つアカウントの IAM ロールを引き受ける必要があります。 Amazon DataZone マネジメントコンソールを使用するために必要な IAM アクセス許可を

設定する は、アカウントの関連付けをリクエストするために必要な最小限のアクセス許可を取得します。

他の AWS アカウントとの関連付けをリクエストするには、次の手順を実行します。

1. AWS マネジメントコンソールにサインインし、https://console.aws.amazon.com/datazone で Amazon DataZone マネジメントコンソールを開きます。
2. [ドメインを表示] を選択し、リストからドメイン名を選択します。名前はハイパーリンクになっています。
3. [関連付けられているアカウント] タブまでスクロールダウンし、[関連付けをリクエスト] を選択します。
4. 関連付けをリクエストするアカウントの ID を入力します。アカウント ID のリストに問題がなければ、[関連付けをリクエスト] を選択します。
5. [RAM ポリシー] で、アカウントの関連付けの RAM ポリシーを指定します。関連付けられているアカウントが Amazon DataZone API を実行してデータポータルにアクセスできるようになる `AWSRAMPermissionDataZonePortalReadWrite` か、関連付けられているアカウントは Amazon DataZone API のみを実行でき、データポータルにはアクセスできない `AWSRAMPermissionDataZoneDefault` のどちらかを選択します。次に、Amazon DataZone は、入力されたアカウント ID (複数可) をプリンシパルとして、アカウントに代わって AWS Resource Access Manager にリソース共有を作成します。
6. リクエストを受け入れるには、他の AWS アカウントの所有者 (複数可) に通知する必要があります。招待の有効期限は 7 日間です。

カスタマーマネージド KMS キーへのアカウントアクセスを提供する

Amazon DataZone ドメインとそのメタデータは、 (デフォルトで) が保持するキーを使用するか AWS、 (オプションで) ドメインの作成時に所有および提供する AWS Key Management Service (KMS) のカスタマーマネージドキーを使用して暗号化されます。ドメインがカスタマーマネージドキーで暗号化されている場合は、以下の手順に従って、関連付けられているアカウントに KMS キーを使用するためのアクセス許可を付与します。

1. AWS マネジメントコンソールにサインインし、https://console.aws.amazon.com/kms/ で KMS コンソールを開きます。
2. ユーザーが作成および管理するアカウント内のキーを表示するには、ナビゲーションペインで [Customer managed keys] (カスタマーマネージドキー) を選択します。

3. ユーザーが作成および管理するアカウント内のキーを表示するには、ナビゲーションペインで [Customer managed keys] (カスタマーマネージドキー) を選択します。
4. KMS キーのリストで、確認する KMS キーのエイリアスまたはキー ID を選択します。
5. 外部 AWS アカウントによる KMS キーの使用を許可または禁止するには、ページの「その他の AWS アカウント」セクションのコントロールを使用します。これらのアカウントの IAM プリンシパル (適切な KMS アクセス許可を持つ) は、暗号化、復号化、再暗号化、データキーの生成などの暗号化操作で KMS キーを使用できます。

Amazon DataZone ドメインからアカウントの関連付けリクエストを承認し、環境ブループリントを有効にする

Amazon DataZone マネジメントコンソールで Amazon DataZone ドメインとの関連付けを承認するには、管理者権限を持つアカウントで IAM ロールを引き受ける必要があります。Amazon DataZone マネジメントコンソールを使用するために必要な IAM アクセス許可を設定することで、最小限の権限を取得します。

Amazon DataZone ドメインとの関連付けを承認するには、以下の手順を実行します。

1. AWS マネジメントコンソールにサインインし、https://console.aws.amazon.com/datazone で Amazon DataZone マネジメントコンソールを開きます。
2. [リクエストを表示] を選択し、リストから招待側のドメインを選択します。招待の状態は [リクエスト済み] になっているはずです。[リクエストを確認] を選択します。
3. データレイクおよびデータウェアハウス、またはそのどちらかのデフォルトの環境ブループリントを有効にするかどうかを選択するには、どちらのボックスも選択しないか、両方のボックスを選択するか、あるいはどちらか 1 つのボックスを選択します。これは後で実行できます。

   - データレイク環境ブループリントを選択すると、ドメインユーザーは AWS Glue、Amazon S3、Amazon Athena のリソースを作成および管理して、データレイクから公開および消費できます。
   - データウェアハウス環境ブループリントを選択すると、ドメインユーザーは Amazon Redshift リソースを作成および管理して、データウェアハウスから公開および消費できます。
4. デフォルトの環境ブループリントの 1 つまたは両方を選択する場合は、次のアクセス許可とリソースを設定します。

   - アクセスの管理 IAM ロールは、ドメインユーザーが Glue や Amazon Redshift などのテーブルへのアクセスを取り込んで管理できるようにするアクセス許可を Amazon DataZone AWS

に提供します。Amazon DataZone で新しい IAM ロールを作成して使用することも、既存の IAM ロールのリストから選択することもできます。

- プロビジョニング IAM ロールは、ドメインユーザーが Glue データベースなどの環境リソースを作成および設定できるようにするアクセス許可を Amazon DataZone AWS に提供します。Amazon DataZone で新しい IAM ロールを作成して使用することも、既存の IAM ロールのリストから選択することもできます。
- データレイク用の Amazon S3 バケットは、ドメインユーザーがデータレイクデータを保存するときに Amazon DataZone で使用されるバケットまたはパスです。Amazon DataZone で選択されたデフォルトのバケットを使用することも、パス文字列を入力して独自の既存の Amazon S3 パスを選択することもできます。独自の Amazon S3 パスを選択した場合は、IAM ポリシーを更新して、そのパスを使用するためのアクセス許可を Amazon DataZone に付与する必要があります。

5. 設定に問題がなければ、[関連付けを承認して設定] を選択します。

関連付けられた AWS アカウントで環境ブループリントを有効にする

Amazon DataZone マネジメントコンソールで環境ブループリントを有効にするには、管理者権限を持つアカウントで IAM ロールを引き受ける必要があります。Amazon DataZone マネジメントコンソールを使用するために必要な IAM アクセス許可を設定することで、最小限の権限を取得します。

関連付けられているドメインでブループリントを有効にするには、以下を完了します。

1. AWS マネジメントコンソールにサインインし、https://console.aws.amazon.com/datazone で Amazon DataZone マネジメントコンソールを開きます。
2. 左側のナビゲーションパネルを開き、[関連付けられているドメイン] を選択します。
3. 環境ブループリントを有効にするドメインを選択します。
4. [ブループリント] リストから、DefaultDataLake か DefaultDataWarehouse、または Amazon SageMaker、あるいはカスタム AWS サービスのブループリントのいずれかを選択します。

> **Note**
>
> カスタム AWS サービスブループリントを有効にする場合は、アクセスロールの管理を指定する必要はありません。カスタム AWS サービス Bluerpint のアクセス許可と認可メカニズムは、このブループリントを使用して環境を作成するときに処理されます。詳細

については、「カスタム AWS サービスブループリントを使用して環境を作成する」を参照してください。

5. 選択したブループリントの詳細ページで、[このアカウントで有効にする] を選択します。
6. [許可とリソース] ページで、以下を指定します。

- DefaultDataLake ブループリントを有効にする場合は、 Glue 管理アクセスロールに、Amazon DataZone に Glue と AWS Lake Formation の AWS テーブルへのアクセスを取り込んで管理する権限を付与する新規または既存のサービスロールを指定します。
- DefaultDataWarehouse ブループリントを有効にする場合は、Redshift 管理アクセスロールに、Amazon Redshift のデータ共有、テーブル、ビューへのアクセスを取り込んで管理するための許可を Amazon DataZone に付与する新規または既存のサービスロールを指定します。
- Amazon SageMaker ブループリントを有効にする場合は、SageMaker 管理アクセスロールに、Amazon SageMaker データをカタログに公開するためのアクセス許可を Amazon DataZone に付与する新規または既存のサービスロールを指定します。また、カタログ内で Amazon SageMaker によって公開されたアセットへのアクセスの付与やアクセスの取り消しを行うためのアクセス許可も Amazon DataZone に付与します。

> **Important**
>
> Amazon SageMaker ブループリントを有効にすると、Amazon DataZone では、Amazon DataZone の次の IAM ロールが現在のアカウントとリージョンに存在するかどうかの確認が行われます。これらのロールが存在しない場合、Amazon DataZone で自動的に作成されます。
>
> - AmazonDataZoneGlueAccess-<region>-<domainId>
> - AmazonDataZoneRedshiftAccess-<region>-<domainId>

- プロビジョニングロールには、環境アカウントとリージョンで AWS CloudFormation を使用して環境リソースを作成および設定する権限を Amazon DataZone に付与する新規または既存のサービスロールを指定します。
- Amazon SageMaker ブループリントを有効にする場合は、SageMaker-Glue データソース の Amazon S3 バケットに、 AWS アカウントのすべての SageMaker 環境で使用する Amazon S3 バケットを指定します。指定するバケットプレフィックスは、次のいずれかである必要があります。
  - amazon-datazone*
  - datazone-sagemaker*

- sagemaker-datazone*
- DataZone-Sagemaker*
- Sagemaker-DataZone*
- DataZone-SageMaker*
- SageMaker-DataZone*

7. [ブループリントを有効にする] を選択します。

選択したブループリントを有効にすると、アカウント内のブループリントを使用して環境プロファイルを作成できるプロジェクトを制御できます。これを行うには、プロジェクトの管理をブループリントの設定に割り当てます。

有効な DefaultDataLake または DefaultDataWarehouse のブループリントで管理プロジェクトを指定する

1. https://console.aws.amazon.com/datazone で Amazon DataZone コンソールに移動し、アカウントの認証情報を使用してサインインします。
2. 左側のナビゲーションパネルを開き、[関連付けられているドメイン] を選択してから、管理プロジェクトを追加するドメインを選択します。
3. [ブループリント] タブを選択し、DefaultDataLake または DefaultDataWareshouse のブループリントを選択します。
4. デフォルトでは、ドメイン内のすべてのプロジェクトで、アカウントの DefaultDataLake または DefaultDataWareshouse ブループリントを使用して環境プロファイルを作成できます。ただし、管理プロジェクトをブループリントに割り当てると、これを制限できます。管理プロジェクトを追加するには、[管理プロジェクトを選択] を選択し、ドロップダウンメニューから管理プロジェクトとして追加するプロジェクトを選択して、[管理プロジェクトを選択] を選択します。

AWS アカウントで DefaultDataWarehouse ブループリントを有効にすると、パラメータセットをブループリント設定に追加できます。パラメータセットは、Amazon DataZone が Amazon Redshift クラスターへの接続を確立するために必要なキーと値のグループであり、データウェアハウス環境を作成するために使用されます。これらのパラメータには、Amazon Redshift クラスターの名前、データベース、クラスターへの認証情報を保持する AWS シークレットが含まれます。

> **Important**
>
> デフォルトでは、環境ブループリントに指定されている管理プロジェクトはありません。つまり、Amazon DataZone ユーザーは環境ブループリント用にプロファイルを作成できます。そのため、環境ブループリントの管理プロジェクトを必ず指定してガバナンスを強化することを強くお勧めします。

DefaultDataWarehouse ブループリントへのパラメータセットの追加する

1. https://console.aws.amazon.com/datazone で Amazon DataZone コンソールに移動し、アカウントの認証情報を使用してサインインします。
2. 左側のナビゲーションパネルを開き、[関連付けられているドメイン] を選択し、パラメータセットを追加するドメインを選択します。
3. [ブループリント] タブを選択し、DefaultDataWareshouse ブループリントを選択してブループリントの詳細ページを開きます。
4. ブループリントの詳細ページの[パラメータセット] タブで、[パラメータセットを作成] を選択します。

   - パラメータセットの [名前] を指定します。
   - 必要に応じて、パラメータセットの説明を入力します。
   - リージョンの選択
   - Amazon Redshift クラスターまたは Amazon Redshift Serverless のどちらかを選択します。
   - 選択した Amazon Redshift クラスターまたは Amazon Redshift Serverless ワークグループの認証情報を保持する AWS シークレット ARN を選択します。パラメータセット内で使用するためには、 AWS シークレットに `AmazonDataZoneDomain : [Domain_ID]` タグを付ける必要があります。
     - 既存の AWS シークレットがない場合は、Create New Secret を選択して新しい AWS シークレットを作成することもできます。その場合はダイアログボックスが開き、そこでシークレットの名前、ユーザー名、パスワードを指定できます。新しい AWS シークレットの作成を選択すると、Amazon DataZone は AWS Secrets Manager サービスに新しいシークレットを作成し、パラメータセットを作成しようとしているドメインにシークレットがタグ付けされていることを確認します。
   - Amazon Redshift クラスターまたは Amazon Redshift Serverless のどちらかを選択します。

- 選択した Amazon Redshift クラスターまたは Amazon Redshift Serverless ワークグループ内のデータベースの名前を入力します。
- [パラメータセットを作成] を選択します。

> **Note**
>
> DefaultDataWarehouse ブループリントには最大 10 個のパラメータセットしか追加できません。

AWS アカウントで Amazon SageMaker ブループリントを有効にすると、パラメータセットをブループリント設定に追加できます。パラメータセットは、Amazon DataZone が Amazon SageMaker への接続を確立するために必要なキーと値のグループであり、sagemaker 環境を作成するために使用されます。

Amazon SageMaker ブループリントへのパラメータセットの追加

1. https://console.aws.amazon.com/datazone で Amazon DataZone コンソールに移動し、アカウントの認証情報を使用してサインインします。
2. [ドメインを表示] を選択し、パラメータセットを追加する有効なブループリントを含むドメインを選択します。
3. [ブループリント] タブを選択し、Amazon SageMaker ブループリントを選択してブループリントの詳細ページを開きます。
4. ブループリントの詳細ページの [パラメータセット] タブで、[パラメータセットを作成] を選択し、以下を指定します。
   - パラメータセットの [名前] を指定します。
   - 必要に応じて、パラメータセットの [説明] を入力します。
   - Amazon SageMaker ドメインの許可タイプを指定します。IAM または IAM アイデンティティセンター (SSO) のどちらかを選択できます。
   - AWS リージョンを指定します。
   - データ暗号化用の AWS KMS キーを指定します。既存のキーを選択することも、新しいキーを作成することもできます。
   - [環境パラメータ] で以下を指定します。

- [VPC ID] - Amazon SageMaker 環境の VPC に使用している ID。既存の VPC を使用することも、新しい VPC を作成することもできます。
- [サブネット] - VPC 内の特定のリソースに対する IP アドレスの範囲を示す 1 つ以上の ID。
- [ネットワークアクセス] - [VPC のみ] か [パブリックインターネットのみ] のどちらかを選択します。
- [セキュリティグループ] - VPC とサブネットを設定するときに使用するセキュリティグループ。

- [データソースパラメータ] で次のどちらかを選択します。
  - AWS Glue のみ
  - AWS Glue + Amazon Redshift Serverless。このオプションを選択する場合は、以下を指定する必要があります。
    - 選択した Amazon Redshift クラスターの認証情報を保持する AWS シークレット ARN を指定します。パラメータセット内で使用するためには、 AWS シークレットに `AmazonDataZoneDomain : [Domain_ID]` タグを付ける必要があります。

      既存の AWS シークレットがない場合は、Create New Secret を選択して新しい AWS シークレットを作成することもできます。その場合はダイアログボックスが開き、そこでシークレットの名前、ユーザー名、パスワードを指定できます。新しい AWS シークレットの作成を選択すると、Amazon DataZone は AWS Secrets Manager サービスに新しいシークレットを作成し、パラメータセットを作成しようとしているドメインでシークレットにタグが付けられていることを確認します。
    - 環境の作成時に使用する Amazon Redshift ワークグループを指定します。
    - 環境の作成時に使用する (選択したワークグループ内にある) データベースの名前を指定します。
  - AWS Glue のみ + Amazon Redshift クラスター
    - 選択した Amazon Redshift クラスターの認証情報を保持する AWS シークレット ARN を指定します。パラメータセット内で使用するためには、 AWS シークレットに `AmazonDataZoneDomain : [Domain_ID]` タグを付ける必要があります。

      既存の AWS シークレットがない場合は、Create New Secret を選択して新しい AWS シークレットを作成することもできます。その場合はダイアログボックスが開き、そこでシークレットの名前、ユーザー名、パスワードを指定できます。新しい AWS シークレットの作成を選択すると、Amazon DataZone は AWS Secrets Manager サービスに新しいシークレットを作成し、パラメータセットを作成しようとしているドメインにシークレットがタグ付けされていることを確認します。

- 環境の作成時に使用する Amazon Redshift クラスターを指定します。
- 環境の作成時に使用する (選択したクラスター内にある) データベースの名前を指定します。

5. [パラメータセットを作成] を選択します。

関連付けられた AWS アカウントの信頼されたサービスとして Amazon SageMaker を追加する

Amazon SageMaker ブループリントを有効にしている場合は、Amazon DataZone 内の信頼されたサービスの 1 つとして SageMaker も追加する必要があります。これを行うには、以下の手順を完了します。

1. https://console.aws.amazon.com/datazone で Amazon DataZone コンソールに移動し、アカウントの認証情報を使用してサインインします。
2. [ドメインを表示] を選択し、有効な SageMaker ブループリントを含むドメインを選択します。
3. [信頼されたサービス]、Amazon SageMaker、[有効化] の順に選択します。

Amazon DataZone ドメインからのアカウントの関連付けリクエストを拒否する

Amazon DataZone ドメインからの Amazon DataZone マネジメントコンソールの関連付けリクエストを拒否するには、管理者権限を持つアカウントで IAM ロールを引き受ける必要があります。Amazon DataZone マネジメントコンソールを使用するために必要な IAM アクセス許可を設定することで、最小限の権限を取得します。

Amazon DataZone ドメインからの関連付けリクエストを拒否するには、以下を実行します。

1. AWS マネジメントコンソールにサインインし、https://console.aws.amazon.com/datazone で Amazon DataZone マネジメントコンソールを開きます。
2. [リクエストを表示] を選択し、リストから招待側のドメインを選択します。招待の状態は [リクエスト済み] になっているはずです。[関連付けを拒否] を選択します。[関連付けを拒否] を選択して選択内容を確定します。

Amazon DataZone で関連付けられているアカウントを削除する

Amazon DataZone マネジメントコンソールで関連付けられた AWS アカウントを削除するには、管理アクセス許可を持つアカウントの IAM ロールを引き受ける必要があります。最小限のアクセス許可を取得するAmazon DataZone マネジメントコンソールを使用するために必要な IAM アクセス許可を設定するには、 が必要です。

関連付けられているアカウントをドメインから削除するには、以下の手順を実行します。

1. AWS マネジメントコンソールにサインインし、https://console.aws.amazon.com/datazone で Amazon DataZone マネジメントコンソールを開きます。
2. [ドメインを表示] を選択し、リストからドメイン名を選択します。名前はハイパーリンクになっています。
3. [関連付けられているアカウント] タブまでスクロールダウンします。削除するアカウントの AWS アカウント ID を選択します。
4. [関連付け解除] を選択してください。フィールドに「関連付けを解除」と入力し、[関連付けを解除] を選択して選択を確定します。
5. これでアカウントがドメインから削除され、ドメインのユーザーはデータを公開も使用もできなくなります。

Amazon DataZone データカタログ

Amazon DataZone ビジネスデータカタログを使用すると、ビジネスコンテキストを使用して組織全体のデータをカタログ化できるため、組織内のすべてのユーザーがデータをすばやく見つけて理解できます。

Amazon DataZone を使用してデータをカタログ化するには、まず Amazon DataZone のプロジェクトのインベントリとしてデータ (アセット) を取り込む必要があります。プロジェクトのインベントリを作成すると、そのプロジェクトのメンバーのみがアセットを検出できます。プロジェクトインベントリアセットは、明示的に公開されていない限り、すべてのドメインユーザーが検索/参照で利用できるわけではありません。

プロジェクトインベントリを作成した後、データ所有者は、ビジネス名 (アセットとスキーマ)、説明 (アセットとスキーマ)、README、用語集の用語 (アセットとスキーマ)、メタデータフォームを追加または更新することで、必要なビジネスメタデータを使用してインベントリアセットを管理できます。

Amazon DataZone を使用してデータをカタログ化する次のステップは、プロジェクトのインベントリアセットをドメインユーザーが検出できるようにすることです。これを行うには、インベントリアセットを Amazon DataZone カタログに公開します。カタログに公開できるのはインベントリアセットの最新バージョンのみであり、検出カタログでは最新の公開バージョンのみがアクティブになります。インベントリアセットを Amazon DataZone カタログに公開された後に更新する場合は、最新バージョンが検出カタログに含まれるように、インベントリアセットを明示的に再公開する必要があります。

詳細については、「Amazon DataZone の用語と概念」を参照してください。

トピック

- Amazon DataZone でビジネス用語集を作成する
- Amazon DataZone でビジネス用語集を編集する
- Amazon DataZone でビジネス用語集を削除する
- Amazon DataZone で用語集に用語を作成する
- Amazon DataZone で用語集の用語を編集する
- Amazon DataZone で用語集の用語を削除する
- Amazon DataZone でメタデータフォームを作成する

- Amazon DataZone でメタデータフォームを編集する
- Amazon DataZone でメタデータフォームを削除する
- Amazon DataZone でメタデータフォームのフィールドを作成する
- Amazon DataZone でメタデータフォームのフィールドを編集する
- Amazon DataZone でメタデータフォームのフィールドを削除する

Amazon DataZone でビジネス用語集を作成する

Amazon DataZone でビジネス用語集とは、アセット (データ) に関連付けられている可能性のあるビジネス用語 (単語) のコレクションです。データ分析時に組織全体で同じ定義が使用されるよう、ビジネスユーザー向けにビジネス用語とその定義をまとめたリストを含む適切な語彙を提供します。ビジネス用語集はカタログドメインで作成され、アセットや列に適用することで、そのアセットや列の主要な特性を理解するのに役立ちます。1 つ以上の用語集の用語を適用できます。ビジネス用語集は、ビジネス用語集の任意の用語を他の用語のサブリストに関連付けることができる用語のフラットリストです。詳細については、「Amazon DataZone の用語と概念」を参照してください。Amazon DataZone ドメインで用語集を作成、編集、または削除するには、そのドメインの適切なアクセス許可を持つ所有プロジェクトのメンバーである必要があります。

用語集を作成するには、以下のステップを実行します。

1. データポータル URL を使用して Amazon DataZone データポータルに移動し、SSO または AWS 認証情報を使用してログインします。Amazon DataZone 管理者の場合は、Amazon DataZone ドメインが作成された AWS アカウントの https://console.aws.amazon.com/datazone にある Amazon DataZone コンソールにアクセスして、データポータル URL を取得できます。
2. [検索] の横にある上部ナビゲーションバーの[カタログ] メニューに移動します。
3. Amazon DataZone データポータルで、[用語集] を選択し、[用語集を作成] を選択します。
4. 用語集の名前、説明、所有者を指定し、[用語集を作成] を選択します。
5. [有効] トグルを選択して、新しい用語集を有効にします。
6. 用語集の詳細ページで、[README を作成] を選択して、この用語集に関する追加情報を追加できます。

ビジネス用語集を無効または有効にするには、以下のステップを実行します。

1. データポータル URL を使用して Amazon DataZone データポータルに移動し、SSO または AWS 認証情報を使用してログインします。Amazon DataZone 管理者の場合は、Amazon

DataZone ドメインが作成された AWS アカウントの https://console.aws.amazon.com/datazone にある Amazon DataZone コンソールにアクセスして、データポータル URL を取得できます。

2. [検索] の横にある上部ナビゲーションバーの[カタログ] メニューに移動します。
3. Amazon DataZone データポータルで、[用語集] を選択し、無効化/有効化するビジネス用語集を見つけます。
4. 用語集の詳細ページで、[有効化/無効化] トグルを見つけ、それを使用して、選択した用語集を有効または無効にします。

> **Note**
>
> 用語集を無効にすると、それに含まれる用語もすべて無効になります。

Amazon DataZone でビジネス用語集を編集する

Amazon DataZone でビジネス用語集とは、アセット (データ) に関連付けられている可能性のあるビジネス用語 (単語) のコレクションです。データ分析時に組織全体で同じ定義が使用されるよう、ビジネスユーザー向けにビジネス用語とその定義をまとめたリストを含む適切な語彙を提供します。ビジネス用語集はカタログドメインで作成され、アセットや列に適用することで、そのアセットや列の主要な特性を理解するのに役立ちます。1 つ以上の用語集の用語を適用できます。ビジネス用語集は、ビジネス用語集の任意の用語を他の用語のサブリストに関連付けることができる用語のフラットリストです。詳細については、「Amazon DataZone の用語と概念」を参照してください。Amazon DataZone ドメインで用語集を編集するには、そのドメインの適切なアクセス許可を持つ所有プロジェクトのメンバーである必要があります。

ビジネス用語集を編集するには、以下のステップを実行します。

1. データポータル URL を使用して Amazon DataZone データポータルに移動し、SSO または AWS 認証情報を使用してログインします。Amazon DataZone 管理者の場合は、Amazon DataZone ドメインが作成された AWS アカウントの https://console.aws.amazon.com/datazone にある Amazon DataZone コンソールにアクセスして、データポータル URL を取得できます。
2. [検索] の横にある上部ナビゲーションバーの[カタログ] メニューに移動します。
3. Amazon DataZone データポータルで、[用語集] を選択し、編集するビジネス用語集を見つけます。
4. 用語集の詳細ページで、[アクション] を展開し、[編集] を選択して用語集を編集します。
5. 名前と説明を更新し、[保存] を選択します。

Amazon DataZone でビジネス用語集を削除する

Amazon DataZone でビジネス用語集とは、アセット (データ) に関連付けられている可能性のあるビジネス用語 (単語) のコレクションです。データ分析時に組織全体で同じ定義が使用されるよう、ビジネスユーザー向けにビジネス用語とその定義をまとめたリストを含む適切な語彙を提供します。ビジネス用語集はカタログドメインで作成され、アセットや列に適用することで、そのアセットや列の主要な特性を理解するのに役立ちます。1 つ以上の用語集の用語を適用できます。ビジネス用語集は、ビジネス用語集の任意の用語を他の用語のサブリストに関連付けることができる用語のフラットリストです。詳細については、「Amazon DataZone の用語と概念」を参照してください。Amazon DataZone ドメインで用語集を削除するには、そのドメインの適切なアクセス許可を持つ所有プロジェクトのメンバーである必要があります。

ビジネス用語集を削除するには、以下のステップを実行します。

1. データポータル URL を使用して Amazon DataZone データポータルに移動し、SSO または AWS 認証情報を使用してログインします。Amazon DataZone 管理者の場合は、Amazon DataZone ドメインが作成された AWS アカウントの https://console.aws.amazon.com/datazone にある Amazon DataZone コンソールにアクセスして、データポータル URL を取得できます。
2. [検索] の横にある上部ナビゲーションバーの[カタログ] メニューに移動します。
3. Amazon DataZone データポータルで、[用語集] を選択し、削除するビジネス用語集を見つけます。
4. 用語集の詳細ページで、[アクション] を展開し、[削除] を選択して用語集を削除します。

   > **Note**
   >
   > 用語集を削除する前に、用語集の既存の用語をすべて削除する必要があります。

5. [削除] を選択して用語集の削除を確定します。

Amazon DataZone で用語集に用語を作成する

Amazon DataZone でビジネス用語集とは、アセット (データ) に関連付けられている可能性のあるビジネス用語のコレクションです。詳細については、「Amazon DataZone の用語と概念」を参照してください。Amazon DataZone ドメインで用語集の用語を作成、編集、または削除するには、そのドメインの適切なアクセス許可を持つ所有プロジェクトのメンバーである必要があります。

Amazon DataZone では、ビジネス用語集の用語に詳細な説明を追加できます。特定の用語のコンテキストを設定するには、用語間の関係を指定します。用語の関係を定義すると、関連用語の定義に自動的に追加されます。Amazon DataZone で使用可能な用語集の用語関係には、次のようなものがあります。

- というタイプである - 現在の用語が識別された用語のタイプであることを示します。識別された用語が現在の用語の親であることを示します。
- 複数のタイプがある - 現在の用語が、指定された特定の用語の一般的な用語であることを示します。この関係は、一般的な用語の子用語を表すことができます。

新しい用語を作成するには、以下のステップを実行します。

1. データポータル URL を使用して Amazon DataZone データポータルに移動し、SSO または AWS 認証情報を使用してログインします。Amazon DataZone 管理者の場合は、Amazon DataZone ドメインが作成された AWS アカウントの https://console.aws.amazon.com/datazone にある Amazon DataZone コンソールにアクセスして、データポータル URL を取得できます。
2. [検索] の横にある上部ナビゲーションバーの[カタログ] メニューに移動します。
3. Amazon DataZone データポータルで、[用語集] を選択し、新しい用語を作成する用語集を選択します。
4. 用語の名前、説明、所有者を指定し、[用語を作成] を選択します。
5. [有効] トグルを選択して、新しい用語を有効にします。
6. Readme を追加するには、用語の詳細ページに移動し、[README を作成] を選択して、この用語集に関する追加情報を追加します。
7. 関係を追加するには、用語の詳細ページに移動し、[用語関係] セクションを選択し、[用語集の用語を追加] を選択します。ダイアログで、関連付ける関係と用語を選択し、[閉じる] を選択して適切な関係タイプに用語を追加します。この関係は、関連付けたすべての用語にも追加されます。

Amazon DataZone で用語集の用語を編集する

Amazon DataZone でビジネス用語集とは、アセット (データ) に関連付けられている可能性のあるビジネス用語のコレクションです。詳細については、「Amazon DataZone の用語と概念」を参照してください。Amazon DataZone ドメインで用語集の用語を作成、編集、または削除するには、そのドメインの適切なアクセス許可を持つ所有プロジェクトのメンバーである必要があります。

Amazon DataZone では、ビジネス用語集の用語に詳細な説明を追加できます。特定の用語のコンテキストを設定するには、用語間の関係を指定します。用語の関係を定義すると、関連用語の定義に自動的に追加されます。Amazon DataZone で使用可能な用語集の用語関係には、次のようなものがあります。

- というタイプである - 現在の用語が識別された用語のタイプであることを示します。識別された用語が現在の用語の親であることを示します。
- 複数のタイプがある - 現在の用語が、指定された特定の用語の一般的な用語であることを示します。この関係は、一般的な用語の子用語を表すことができます。

用語集の用語を編集するには、以下のステップを実行します。

1. データポータル URL を使用して Amazon DataZone データポータルに移動し、SSO または AWS 認証情報を使用してログインします。Amazon DataZone 管理者の場合は、Amazon DataZone ドメインが作成された AWS アカウントの https://console.aws.amazon.com/datazone にある Amazon DataZone コンソールにアクセスして、データポータル URL を取得できます。
2. [検索] の横にある上部ナビゲーションバーの[カタログ] メニューに移動します。
3. Amazon DataZone データポータルで、[用語集] を選択し、編集する用語を含んだ用語集を見つけて、その用語を選択します。
4. 用語の詳細ページで、[アクション] を展開し、[編集] を選択して用語を編集します。
5. 名前と説明を更新し、[保存] を選択します。

Amazon DataZone で用語集の用語を削除する

Amazon DataZone でビジネス用語集とは、アセット (データ) に関連付けられている可能性のあるビジネス用語のコレクションです。詳細については、「Amazon DataZone の用語と概念」を参照してください。Amazon DataZone ドメインで用語集の用語を作成、編集、または削除するには、そのドメインの適切なアクセス許可を持つ所有プロジェクトのメンバーである必要があります。

Amazon DataZone では、ビジネス用語集の用語に詳細な説明を追加できます。特定の用語のコンテキストを設定するには、用語間の関係を指定します。用語の関係を定義すると、関連用語の定義に自動的に追加されます。Amazon DataZone で使用可能な用語集の用語関係には、次のようなものがあります。

- というタイプである - 現在の用語が識別された用語のタイプであることを示します。識別された用語が現在の用語の親であることを示します。

- 複数のタイプがある - 現在の用語が、指定された特定の用語の一般的な用語であることを示します。この関係は、一般的な用語の子用語を表すことができます。

用語集の用語を削除するには、以下のステップを実行します。

1. データポータル URL を使用して Amazon DataZone データポータルに移動し、SSO または AWS 認証情報を使用してログインします。Amazon DataZone 管理者の場合は、Amazon DataZone ドメインが作成された AWS アカウントの https://console.aws.amazon.com/datazone にある Amazon DataZone コンソールにアクセスして、データポータル URL を取得できます。
2. [検索] の横にある上部ナビゲーションバーの[カタログ] メニューに移動します。
3. Amazon DataZone データポータルで、[用語集] を選択し、削除する用語を含んだ用語集を見つけて、その用語を選択します。
4. 用語集の詳細ページで、[アクション] を展開し、[削除] を選択して用語集を削除します。
5. [削除] を選択して用語の削除を確定します。

Amazon DataZone でメタデータフォームを作成する

Amazon DataZone では、メタデータフォームは、カタログのアセットメタデータに追加のビジネスコンテキストを付加するためのシンプルなフォームです。これは、データ所有者が、データユーザーによるデータの検索と検出に役立つ情報を使用してデータアセットを充実させることができる拡張可能なメカニズムとして機能します。メタデータフォームは、Amazon DataZone カタログに公開されるすべてのアセットに一貫性を持たせるメカニズムとしても機能します。

メタデータフォーム定義は 1 つ以上のフィールド定義で構成され、ブール値、日付、10 進数、整数、文字列、ビジネス用語集のフィールド値データ型をサポートしています。詳細については、「Amazon DataZone の用語と概念」を参照してください。Amazon DataZone ドメインでメタデータフォームを作成、編集、または削除するには、適切な認証情報を持つ所有プロジェクトのメンバーである必要があります。

メタデータフォームを作成するには、以下のステップを実行します。

1. データポータル URL を使用して Amazon DataZone データポータルに移動し、SSO または AWS 認証情報を使用してログインします。Amazon DataZone 管理者の場合は、Amazon DataZone ドメインが作成された AWS アカウントの https://console.aws.amazon.com/datazone にある Amazon DataZone コンソールにアクセスして、データポータル URL を取得できます。
2. [検索] の横にある上部ナビゲーションバーの[カタログ] メニューに移動します。

3. Amazon DataZone データポータルで、[メタデータフォーム] を選択し、[フォームを作成] を選択します。
4. メタデータフォーム名、説明、所有者を指定し、[フォームを作成] を選択します。

Amazon DataZone でメタデータフォームを編集する

Amazon DataZone では、メタデータフォームは、カタログのアセットメタデータに追加のビジネスコンテキストを付加するためのシンプルなフォームです。これは、データ所有者が、データユーザーによるデータの検索と検出に役立つ情報を使用してデータアセットを充実させることができる拡張可能なメカニズムとして機能します。メタデータフォームは、Amazon DataZone カタログに公開されるすべてのアセットに一貫性を持たせるメカニズムとしても機能します。

メタデータフォーム定義は 1 つ以上のフィールド定義で構成され、ブール値、日付、10 進数、整数、文字列、ビジネス用語集のフィールド値データ型をサポートしています。詳細については、「Amazon DataZone の用語と概念」を参照してください。Amazon DataZone ドメインでメタデータフォームを作成、編集、または削除するには、適切な認証情報を持つ所有プロジェクトのメンバーである必要があります。

メタデータフォームを編集するには、以下のステップを実行します。

1. データポータル URL を使用して Amazon DataZone データポータルに移動し、SSO または AWS 認証情報を使用してログインします。Amazon DataZone 管理者の場合は、Amazon DataZone ドメインが作成された AWS アカウントの https://console.aws.amazon.com/datazone にある Amazon DataZone コンソールにアクセスして、データポータル URL を取得できます。
2. [検索] の横にある上部ナビゲーションバーの[カタログ] メニューに移動します。
3. Amazon DataZone データポータルで、[メタデータフォーム] を選択し、編集するメタデータフォームを見つけます。
4. メタデータフォームの詳細ページで、[アクション] を展開し、[編集] を選択します。
5. 名前、説明、所有者のフィールドを更新し、[フォームを更新] を選択します。

Amazon DataZone でメタデータフォームを削除する

Amazon DataZone では、メタデータフォームは、カタログのアセットメタデータに追加のビジネスコンテキストを付加するためのシンプルなフォームです。これは、データ所有者が、データユーザーによるデータの検索と検出に役立つ情報を使用してデータアセットを充実させることができる拡張可

能なメカニズムとして機能します。メタデータフォームは、Amazon DataZone カタログに公開されるすべてのアセットに一貫性を持たせるメカニズムとしても機能します。

メタデータフォーム定義は 1 つ以上のフィールド定義で構成され、ブール値、日付、10 進数、整数、文字列、ビジネス用語集のフィールド値データ型をサポートしています。詳細については、「Amazon DataZone の用語と概念」を参照してください。Amazon DataZone ドメインでメタデータフォームを作成、編集、または削除するには、適切な認証情報を持つ所有プロジェクトのメンバーである必要があります。

メタデータフォームを削除するには、以下のステップを実行します。

> **Note**
>
> メタデータフォームを削除する前に、メタデータフォームが適用されるすべてのアセットタイプまたはアセットから削除する必要があります。

1. データポータル URL を使用して Amazon DataZone データポータルに移動し、SSO または AWS 認証情報を使用してログインします。Amazon DataZone 管理者の場合は、Amazon DataZone ドメインが作成された AWS アカウントの https://console.aws.amazon.com/datazone にある Amazon DataZone コンソールにアクセスして、データポータル URL を取得できます。
2. [検索] の横にある上部ナビゲーションバーの[カタログ] メニューに移動します。
3. Amazon DataZone データポータルで、[メタデータフォーム] を選択し、削除するメタデータフォームを見つけます。
4. 削除するメタデータフォームが有効になっている場合は、[有効] トグルを選択して、メタデータフォームを無効にします。
5. メタデータフォームの詳細ページで、[アクション] を展開し、[削除] を選択します。
6. [削除] を選択して削除を確定します。

Amazon DataZone でメタデータフォームのフィールドを作成する

Amazon DataZone では、メタデータフォームは、カタログのアセットメタデータに追加のビジネスコンテキストを付加するためのシンプルなフォームです。これは、データ所有者が、データユーザーによるデータの検索と検出に役立つ情報を使用してデータアセットを充実させることができる拡張可能なメカニズムとして機能します。メタデータフォームは、Amazon DataZone カタログに公開されるすべてのアセットに一貫性を持たせるメカニズムとしても機能します。

メタデータフォーム定義は 1 つ以上のフィールド定義で構成され、ブール値、日付、10 進数、整数、文字列、ビジネス用語集のフィールド値データ型をサポートしています。詳細については、「Amazon DataZone の用語と概念」を参照してください。Amazon DataZone ドメインでメタデータフォームのフィールドを作成、編集、または削除するには、適切な認証情報を持つ所有プロジェクトのメンバーである必要があります。

メタデータフォームのフィールドを作成するには、次のステップを実行します。

1. データポータル URL を使用して Amazon DataZone データポータルに移動し、SSO または AWS 認証情報を使用してログインします。Amazon DataZone 管理者の場合は、Amazon DataZone ドメインが作成された AWS アカウントの https://console.aws.amazon.com/datazone にある Amazon DataZone コンソールにアクセスして、データポータル URL を取得できます。
2. [検索] の横にある上部ナビゲーションバーの[カタログ] メニューに移動します。
3. Amazon DataZone データポータルで、[メタデータフォーム] を選択し、フィールドを作成するメタデータフォームを選択します。
4. フォームの詳細ページで、[フィールドを作成] を選択します。
5. フィールド名、説明、タイプ、およびこれが必須フィールドかどうかを指定し、[フィールドを作成] を選択します。

Amazon DataZone でメタデータフォームのフィールドを編集する

Amazon DataZone では、メタデータフォームは、カタログのアセットメタデータに追加のビジネスコンテキストを付加するためのシンプルなフォームです。これは、データ所有者が、データユーザーによるデータの検索と検出に役立つ情報を使用してデータアセットを充実させることができる拡張可能なメカニズムとして機能します。メタデータフォームは、Amazon DataZone カタログに公開されるすべてのアセットに一貫性を持たせるメカニズムとしても機能します。

メタデータフォーム定義は 1 つ以上のフィールド定義で構成され、ブール値、日付、10 進数、整数、文字列、ビジネス用語集のフィールド値データ型をサポートしています。詳細については、「Amazon DataZone の用語と概念」を参照してください。Amazon DataZone ドメインでメタデータフォームのフィールドを作成、編集、または削除するには、適切な認証情報を持つ所有プロジェクトのメンバーである必要があります。

メタデータフォームのフィールドを編集するには、以下のステップを実行します。

1. データポータル URL を使用して Amazon DataZone データポータルに移動し、SSO または AWS 認証情報を使用してログインします。Amazon DataZone 管理者の場合は、Amazon

DataZone ドメインが作成された AWS アカウントの https://console.aws.amazon.com/datazone にある Amazon DataZone コンソールにアクセスして、データポータル URL を取得できます。

2. [検索] の横にある上部ナビゲーションバーの[カタログ] メニューに移動します。
3. Amazon DataZone データポータルで、[メタデータフォーム] を選択し、フィールドを編集するメタデータフォームを選択します。
4. フォームの詳細ページで、編集するフィールドを選択してから [アクション] を展開し、[編集] を選択します。
5. フィールド名、説明、タイプ、およびこれが必須フィールドかどうかを更新し、[保存] を選択します。

Amazon DataZone でメタデータフォームのフィールドを削除する

Amazon DataZone では、メタデータフォームは、カタログのアセットメタデータに追加のビジネスコンテキストを付加するためのシンプルなフォームです。これは、データ所有者が、データユーザーによるデータの検索と検出に役立つ情報を使用してデータアセットを充実させることができる拡張可能なメカニズムとして機能します。メタデータフォームは、Amazon DataZone カタログに公開されるすべてのアセットに一貫性を持たせるメカニズムとしても機能します。

メタデータフォーム定義は 1 つ以上のフィールド定義で構成され、ブール値、日付、10 進数、整数、文字列、ビジネス用語集のフィールド値データ型をサポートしています。詳細については、「Amazon DataZone の用語と概念」を参照してください。Amazon DataZone ドメインでメタデータフォームのフィールドを作成、編集、または削除するには、適切な認証情報を持つ所有プロジェクトのメンバーである必要があります。

メタデータフォームのフィールドを削除するには、以下のステップを実行します。

1. データポータル URL を使用して Amazon DataZone データポータルに移動し、SSO または AWS 認証情報を使用してログインします。Amazon DataZone 管理者の場合は、Amazon DataZone ドメインが作成された AWS アカウントの https://console.aws.amazon.com/datazone にある Amazon DataZone コンソールにアクセスして、データポータル URL を取得できます。
2. [検索] の横にある上部ナビゲーションバーの[カタログ] メニューに移動します。
3. Amazon DataZone データポータルで、[メタデータフォーム] を選択し、フィールドを削除するメタデータフォームを選択します。
4. フォームの詳細ページで、削除するフィールドを選択してから [アクション] を展開し、[削除] を選択します。
5. [削除] を選択して削除を確定します。

Amazon DataZone プロジェクトと環境

Amazon DataZone でプロジェクトを使用すると、ユーザーのグループは、Amazon DataZone カタログ内のデータアセットの公開、検出、サブスクライブ、使用など、さまざまなビジネスユースケースでコラボレーションできます。Amazon DataZone プロジェクトごとに適用されるアクセス制御セットがあり、プロジェクトとプロジェクトでサブスクライブしているデータアセットにアクセスできるのは権限がある個人、グループ、およびロールのみで、また使用できるのはプロジェクトのアクセス許可によって定義されているツールのみです。プロジェクトは、基盤となるリソースへのアクセス許可の付与を受け取る ID プリンシパルとして機能し、個々のユーザーの認証情報に依存することなく組織のインフラストラクチャ内で Amazon DataZone を運用できます。

Amazon DataZone では、環境は、設定されたリソース (Amazon S3 バケット、AWS Glue データベース、Amazon Athena ワークグループなど) のコレクションであり、それらのリソースで操作できる特定の IAM プリンシパル (コントリビューターのアクセス許可が割り当てられている) のセットを備えています。各環境には、サブスクリプションとフルフィルメントを介してリソースにアクセスし、データへのアクセスを取得する権限があるユーザープリンシパルが含まれる場合もあります。環境は、実用的なリンクを AWS サービス、外部 IDE、コンソールに保存するように設計されています。プロジェクトのメンバーは、環境内で設定されているディープリンクを使用して、Amazon Athena コンソールなどのサービスにアクセスできます。プロジェクトの SSO ユーザーと IAM ユーザーについては、特定の環境を使用したり特定の環境にアクセスしたりできるよう、さらに範囲を絞り込むことができます。

Amazon DataZone では、環境プロファイルと呼ばれるテンプレートを使用して環境を作成します。環境プロファイルは、組み込みとカスタムの AWS サービスブループリントを使用して作成されます。環境プロファイルを使用すると、ドメイン管理者は事前に設定されたパラメータでブループリントをラップでき、データワーカーは既存の環境プロファイルを選択し、新しい環境の名前を指定することで、新しい環境を必要なだけすばやく作成できます。これにより、データワーカーは、ドメイン管理者が適用したデータガバナンスポリシーを確実に満たすと同時に、プロジェクトと環境を効率的に管理できます。

詳細については、Amazon DataZone の用語と概念を参照してください。

トピック

- 環境を編集する
- 環境を削除する
- 新しいプロジェクトを作成する
- プロジェクトを編集する
- プロジェクトを別のドメインユニットに移動する
- プロジェクトを削除する
- プロジェクトから移動する
- プロジェクトにチームメンバーを追加する
- プロジェクトからメンバーを削除する

環境ファイルを作成する

Amazon DataZone の環境プロファイルとは、環境の作成に使用できるテンプレートです。環境プロファイルの目的は、AWS アカウントやリージョンなどの配置情報をプロファイルに埋め込んで環境の作成を簡素化することです。詳細については、「Amazon DataZone の用語と概念」を参照してください。Amazon DataZone ドメインに環境プロファイルを作成するには、ユーザーは Amazon DataZone プロジェクトに属している必要があります。すべての環境プロファイルはプロジェクトが所有し、すべての権限があるユーザーはどのプロジェクトからでも環境プロファイルを使用して新しい環境を作成できます。

環境ファイルを作成するには

1. データポータル URL を使用して Amazon DataZone データポータルに移動し、SSO または AWS 認証情報を使用してログインします。Amazon DataZone 管理者の場合は、https://console.aws.amazon.com/datazone で、Amazon DataZone ドメインが作成された AWS アカウントの Amazon DataZone コンソールにアクセスするとデータポータル URL を取得できます。
2. データポータル内で、[プロジェクトを閲覧] を選択し、環境プロファイルを作成するプロジェクトを選択します。
3. プロジェクト内の [環境] タブに移動し、[環境プロファイルを作成] を選択します。
4. 以下のフィールドを設定します。

    - [名前] – 環境プロファイルの名前。
    - [説明] – (オプション) 環境プロファイルの説明。
    - [所有者プロジェクト] - このフィールドでは、プロファイルが作成されているプロジェクトがデフォルトで選択されます。

- [ブループリント] – このプロファイルが作成されるブループリント。デフォルトの Amazon DataZone ブループリント (データレイクまたはデータウェアハウス) のいずれかを選択できます。

  データウェアハウスのブループリントを指定した場合は、以下を実行します。

  - パラメータセットを指定します。既存のパラメータセットを選択するには、[パラメータセットを選択] オプションを選択します。独自のパラメータを入力する場合は、[独自のものを入力] を選択します。
  - 既存のパラメータを選択する場合は、以下を実行します。
    - ドロップダウンから AWS アカウントを選択します。
    - ドロップダウンからパラメータセットを選択します。
  - 独自のパラメータを入力する場合は、以下を実行します。
    - ドロップダウンから AWS アカウントとリージョンを選択して、AWS パラメータを指定します。
    - Redshift データウェアハウスのパラメータを指定します。
      - Amazon Redshift クラスターまたは Amazon Redshift Serverless のどちらかを選択します。
      - 選択した Amazon Redshift クラスターまたは Amazon Redshift Serverless ワークグループの認証情報を保持する AWS シークレット ARN を入力します。AWS シークレットには、環境プロファイルを作成するドメイン ID とプロジェクト ID をタグ付けする必要があります。
        - `AmazonDataZoneDomain: [Domain_ID]`
        - `AmazonDataZoneProject: [Project_ID]`
      - Amazon Redshift クラスターまたは Amazon Redshift Serverless ワークグループの名前を入力します。
      - 選択した Amazon Redshift クラスターまたは Amazon Redshift Serverless ワークグループ内のデータベースの名前を入力します。
    - [許可されたプロジェクト] セクションで、環境プロファイルを使用して環境を作成できるプロジェクトを指定します。デフォルトでは、ドメイン内のすべてのプロジェクトで、アカウントの環境プロファイルを使用して環境を作成できます。このデフォルト設定を維持するには、[すべてのプロジェクト] を選択します。ただし、許可されたプロジェクトを環境に割り当てると、これを制限できます。そのためには、[許可されたプロジェクトのみ] を選択し、このプロジェクトプロファイルを使用して環境を作成できるプロジェクトを指定します。

- [公開] セクションで、次のいずれかのオプションを選択します。
  - [任意のスキーマから公開]: このオプションを選択した場合、この環境プロファイルを使用して作成された環境は、上記の Redshift パラメータで選択したデータベース内の任意のスキーマから公開するのに使用できます。この環境プロファイルを使用して作成された環境のユーザーは、独自の Amazon Redshift パラメータを指定して、環境プロファイルで選択されている AWS アカウントとリージョン内の任意のスキーマから公開することもできます。
  - [デフォルトの環境スキーマからのみ公開]: このオプションを選択した場合、これを使用して作成された環境は、その環境に対して Amazon DataZone で作成されたデフォルトのスキーマからのみ公開するのに使用できます。この環境プロファイルを使用して作成された環境のユーザーは、独自の Amazon Redshift パラメータを指定できません。
  - [公開を許可しない]: このオプションを選択した場合、この環境プロファイルを使用して作成された環境は、データのサブスクライブと消費にのみ使用できます。環境を使用してデータを公開することはできません。

データレイクのブループリントを指定した場合は、以下を実行します。

- [AWS アカウントパラメータ] セクションで、環境が作成される可能性のある AWS アカウント番号と AWS アカウントリージョンを指定します。
- [許可されたプロジェクト] セクションで、組み込みのデータレイクの環境プロファイルと共に環境プロファイルを使用して環境を作成できるプロジェクトを指定します。デフォルトでは、ドメイン内のすべてのプロジェクトで、アカウントのデータレイクのブループリントを使用して環境プロファイルを作成できます。このデフォルト設定を維持するには、[すべてのプロジェクト] を選択します。ただし、プロジェクトをブループリントに割り当てると、これを制限できます。そのためには、[許可されたプロジェクトのみ] を選択し、このプロジェクトプロファイルを使用して環境を作成できるプロジェクトを指定します。
- [データベース] セクションで、[任意のデータベース] を選択して、環境を作成する AWS アカウントとリージョン内の任意のデータベースからの公開を有効にするか、[デフォルトデータベースのみ] を選択して、環境で作成されるデフォルトの公開データベースからの公開のみを有効にします。

5. [環境プロファイルを作成] を選択します。

環境プロファイルを編集する

Amazon DataZone の環境プロファイルとは、環境の作成に使用できるテンプレートです。詳細については、「Amazon DataZone の用語と概念」を参照してください。Amazon DataZone ドメインの

既存の環境プロファイルを編集するには、ユーザーは Amazon DataZone プロジェクトに属している必要があります。

環境プロファイルを編集するには

1. Amazon DataZone データポータル URL に移動し、シングルサインオン (SSO) または AWS 認証情報を使用してサインインします。Amazon DataZone 管理者の場合は、https://console.aws.amazon.com/datazone で Amazon DataZone コンソールに移動し、ドメインが作成されたでサインインすると、AWS アカウント[データポータルを開く] を選択できます。
2. データポータル内で、[プロジェクトを閲覧] を選択し、環境プロファイルを編集するプロジェクトを選択します。
3. プロジェクト内の [環境] タブに移動し、[環境プロファイル] を選択して、編集する環境プロファイルを選択します。

   データウェアハウスの環境プロファイルを編集する場合は、既存の環境プロファイルの名前と説明のみを編集できます。

   データレイクの環境プロファイルを編集する場合は、プロファイルの名前と説明を編集できます。また、このプロファイルを使用して環境を作成する権限のあるプロジェクトを編集したり、データベースを編集したりできます。これらの設定を編集するには、以下を実行します。

   - [許可されたプロジェクト] セクションで、組み込みのデータレイクの環境プロファイルと共に環境プロファイルを使用して環境を作成できるプロジェクトを指定します。デフォルトでは、ドメイン内のすべてのプロジェクトで、アカウントのデータレイクのブループリントを使用して環境プロファイルを作成できます。このデフォルト設定を維持するには、[すべてのプロジェクト] を選択します。ただし、プロジェクトをブループリントに割り当てると、これを制限できます。そのためには、[許可されたプロジェクトのみ] を選択し、このプロジェクトプロファイルを使用して環境を作成できるプロジェクトを指定します。
   - [データベース] セクションで、[任意のデータベース] を選択して、環境を作成する AWS アカウントとリージョン内の任意のデータベースからの公開を有効にするか、[デフォルトデータベースのみ] を選択して、環境で作成されるデフォルトの公開データベースからの公開のみを有効にします。

   編集が完了したら、[環境プロファイルを編集] を選択します。

環境プロファイルを削除する

Amazon DataZone の環境プロファイルとは、環境の作成に使用できるテンプレートです。環境プロファイルの目的は、AWS アカウントやリージョンなどの配置情報をプロファイルに埋め込んで環境の作成を簡素化することです。詳細については、「Amazon DataZone の用語と概念」を参照してください。Amazon DataZone ドメインの環境プロファイルを削除するには、ユーザーは Amazon DataZone プロジェクトに属している必要があります。

> **Note**
>
> 環境プロファイルを削除すると、このプロファイルを使用して環境を作成できなくなります。

環境プロファイルを削除するには

1. Amazon DataZone データポータル URL に移動し、シングルサインオン (SSO) または AWS 認証情報を使用してサインインします。Amazon DataZone 管理者の場合は、https://console.aws.amazon.com/datazone で Amazon DataZone コンソールに移動し、ドメインが作成されたでサインインすると、AWS アカウント[データポータルを開く] を選択できます。
2. データポータル内で、[プロジェクトを閲覧] を選択し、環境プロファイルを削除するプロジェクトを選択します。
3. プロジェクト内の [環境] タブに移動し、[環境プロファイル] を選択し、削除する環境プロファイルを選択します。
4. 削除する環境プロファイルを選択し、[アクション]、[削除] を選択して削除を確定します。

新しい環境を作成する

Amazon DataZone プロジェクトでは、環境は設定されたリソース (Amazon S3 バケット、AWS Glue データベース、Amazon Athena ワークグループなど) のコレクションであり、それらのリソースを操作できる所有者またはコントリビューターのアクセス許可を持つ特定の IAM プリンシパル (環境ユーザーロール) のセットが含まれます。詳細については、「Amazon DataZone の用語と概念」を参照してください。

データポータルにアクセスするために必要なアクセス許可を持つ Amazon DataZone ユーザーは、プロジェクト内に Amazon DataZone 環境を作成できます。

新しい開発環境を作成するには、以下の手順を実行します。

1. Amazon DataZone データポータル URL に移動し、シングルサインオン (SSO) または AWS 認証情報を使用してサインインします。Amazon DataZone 管理者の場合は、https://console.aws.amazon.com/datazone で Amazon DataZone コンソールに移動し、ドメインが作成されたでサインインすると、AWS アカウント[データポータルを開く] を選択できます。
2. [すべてのプロジェクトを見る] を選択し、新しい環境を作成するプロジェクトを選択します。
3. [環境を作成] を選択し、次のフィールドの値を指定して [環境を作成] を選択します。

   - [名前] – 環境名
   - [説明] – 環境の説明
   - [環境プロファイル] – 既存の環境プロファイルを選択するか、新しいプロファイルを作成します。環境プロファイルとは、環境の作成に使用できるテンプレートです。詳細については、「Amazon DataZone の用語と概念」を参照してください。

     環境プロファイルを選択したら、[パラメータ] セクションで、この環境プロファイルに含まれるフィールドの値を指定します。

環境を編集する

Amazon DataZone プロジェクトでは、環境は設定されたリソース (Amazon S3 バケット、AWS Glue データベース、Amazon Athena ワークグループなど) のコレクションであり、それらのリソースを操作できる所有者またはコントリビューターのアクセス許可を持つ特定の IAM プリンシパル (環境ユーザーロール) のセットが含まれます。詳細については、「Amazon DataZone の用語と概念」を参照してください。

データポータルにアクセスするために必要なアクセス許可を持つ Amazon DataZone ユーザーは、プロジェクト内の Amazon DataZone 環境を編集できます。

既存の環境を編集するには、以下の手順を実行します。

1. Amazon DataZone データポータル URL に移動し、シングルサインオン (SSO) または AWS 認証情報を使用してサインインします。Amazon DataZone 管理者の場合は、https://console.aws.amazon.com/datazone で Amazon DataZone コンソールに移動し、ドメインが作成されたでサインインすると、AWS アカウント[データポータルを開く] を選択できます。
2. 上部のナビゲーションペインから [プロジェクトを閲覧] を選択し、編集する環境を含むプロジェクトを選択します。

3. 環境を見つけて選択し、詳細ページを開きます。次に、[アクション] を展開し、[環境を編集] を選択します。
4. 環境の名前と説明を編集し、[変更を保存] を選択します。

環境を削除する

Amazon DataZone プロジェクトでは、環境は設定されたリソース (Amazon S3 バケット、AWS Glue データベース、Amazon Athena ワークグループなど) のコレクションであり、それらのリソースを操作できる所有者またはコントリビューターのアクセス許可を持つ特定の IAM プリンシパル (環境ユーザーロール) のセットが含まれます。詳細については、「Amazon DataZone の用語と概念」を参照してください。

データポータルにアクセスするために必要なアクセス許可を持つ Amazon DataZone ユーザーは、プロジェクト内の Amazon DataZone 環境を削除できます。

既存の環境を削除するには、以下の手順を実行します。

1. Amazon DataZone データポータル URL に移動し、シングルサインオン (SSO) または AWS 認証情報を使用してサインインします。Amazon DataZone 管理者の場合は、https://console.aws.amazon.com/datazone で Amazon DataZone コンソールに移動し、ドメインが作成されたでサインインすると、AWS アカウント[データポータルを開く] を選択できます。
2. 上部のナビゲーションペインから [プロジェクトを閲覧] を選択し、削除する環境を含むプロジェクトを選択します。
3. 環境を見つけて選択し、詳細ページを開き、[アクション] を展開して [環境を削除] を選択します。
4. [環境を削除] ポップアップウィンドウで、フィールドに `Delete` と入力して [環境を削除] を選択し、削除を確定します。

   この環境への依存関係を持つすべてのエンティティが削除された後にのみ、環境を正常に削除できます。環境を削除するには、まずは関連付けられているデータソースとサブスクリプションターゲットをすべて削除する必要があります。

新しいプロジェクトを作成する

Amazon DataZone でプロジェクトを使用すると、ユーザーのグループは、Amazon DataZone カタログ内のデータアセットの公開、検出、サブスクライブ、使用など、さまざまなビジネスユースケー

スでコラボレーションできます。詳細については、「Amazon DataZone の用語と概念」を参照してください。

データポータルにアクセスするために必要なアクセス許可を持つ Amazon DataZone ユーザーは、Amazon DataZone プロジェクトを作成できます。

新しいプロジェクトを作成するには、以下の手順を実行します。

1. Amazon DataZone データポータル URL に移動し、シングルサインオン (SSO) または AWS 認証情報を使用してサインインします。Amazon DataZone 管理者の場合は、https://console.aws.amazon.com/datazone で Amazon DataZone コンソールに移動し、ドメインが作成されたでサインインすると、AWS アカウント[データポータルを開く] を選択できます。
2. Amazon DataZone データポータルで、[プロジェクトを作成] を選択します。
3. 次のフィールドの値を指定し、[プロジェクトを作成] を選択します。

   - [名前] – プロジェクト名。
   - [説明] - プロジェクトの説明。
   - [ドメインユニット] – このプロジェクトを作成するドメインユニット。

プロジェクトを編集する

Amazon DataZone でプロジェクトを使用すると、ユーザーのグループは、Amazon DataZone カタログ内のデータアセットの公開、検出、サブスクライブ、使用など、さまざまなビジネスユースケースでコラボレーションできます。詳細については、「Amazon DataZone の用語と概念」を参照してください。Amazon DataZone プロジェクトを編集するには、そのプロジェクトの所有者であるか、このプロジェクトを含むドメインのドメイン管理者である必要があります。

既存のプロジェクトを編集するには、以下の手順を実行します。

1. Amazon DataZone データポータル URL に移動し、シングルサインオン (SSO) または AWS 認証情報を使用してサインインします。Amazon DataZone 管理者の場合は、https://console.aws.amazon.com/datazone で Amazon DataZone コンソールに移動し、ドメインが作成されたでサインインすると、AWS アカウント[データポータルを開く] を選択できます。
2. [プロジェクトを閲覧] を選択します。
3. 編集するプロジェクトを選択します。プロジェクトのリストですぐに見つけられない場合は、[プロジェクトを検索] フィールドにプロジェクト名を指定して検索します。
4. [アクション] を展開し、[プロジェクトを編集] を選択します。

5. プロジェクト名と説明を更新し、[保存] を選択します。

プロジェクトを別のドメインユニットに移動する

Amazon DataZone でプロジェクトを使用すると、ユーザーのグループは、Amazon DataZone カタログ内のデータアセットの公開、検出、サブスクライブ、使用など、さまざまなビジネスユースケースでコラボレーションできます。詳細については、「Amazon DataZone の用語と概念」を参照してください。

Amazon DataZone プロジェクトを別のドメインユニットに移動するには、次の要件を満たす必要があります。

- プロジェクトを移動するドメインユニットでプロジェクトを作成するためのポリシー許可が必要です。
- プロジェクトのすべてのメンバーは、プロジェクトを移動するドメインユニットでプロジェクトメンバーシップのアクセス許可を持っている必要があります。
- プロジェクトを移動するドメインユニットのドメインユニット所有者である必要があります。
- ユーザーは、このプロジェクトの所有者である必要があります。

既存のプロジェクトを別のドメインユニットに移動するには、次の手順を実行します。

1. Amazon DataZone データポータル URL に移動し、シングルサインオン (SSO) または AWS 認証情報を使用してサインインします。Amazon DataZone 管理者の場合は、https://console.aws.amazon.com/datazone で Amazon DataZone コンソールに移動し、ドメインが作成されたでサインインすると、AWS アカウント[データポータルを開く] を選択できます。
2. [プロジェクトを閲覧] を選択します。
3. 移動するプロジェクトを選択します。プロジェクトのリストですぐに見つけられない場合は、[プロジェクトを検索] フィールドにプロジェクト名を指定して検索します。
4. [アクション] を展開し、[プロジェクトを移動] を選択します。
5. このプロジェクトを移動するドメインユニットを指定し、[移動] を選択します。

プロジェクトを削除する

Amazon DataZone でプロジェクトを使用すると、ユーザーのグループは、Amazon DataZone カタログ内のデータアセットの公開、検出、サブスクライブ、使用など、さまざまなビジネスユースケー

スでコラボレーションできます。詳細については、「Amazon DataZone の用語と概念」を参照してください。

プロジェクトを削除する操作は変更できません。削除すると、データソース、環境、アセット、用語集、メタデータフォームなど、プロジェクトのコンテンツが完全に削除され、元に戻すことはできません。Amazon DataZone は、Amazon DataZone が Lake Formation と Amazon Redshift を介してマネージドアセットに付与した許可を取り消します。プロジェクトを削除しても、Amazon DataZone を使用して作成した可能性のある Amazon DataZone 以外の AWS リソースは削除されません。これらの AWS リソースが不要になった場合は、それぞれの AWS サービスとアカウントで削除します。

Amazon DataZone プロジェクトを削除するには、プロジェクトの所有者である必要があります。

既存のプロジェクトを削除するには、以下の手順を実行します。

1. Amazon DataZone データポータル URL に移動し、シングルサインオン (SSO) または AWS 認証情報を使用してサインインします。IAM プリンシパルは、https://console.aws.amazon.com/datazone で Amazon DataZone コンソールに移動し、ドメインが作成された AWS アカウントでサインインすると [データポータルを開く] を選択できます。
2. 上部のナビゲーションペインから [プロジェクトを閲覧] を選択します。
3. 削除するプロジェクトを選択します。プロジェクトのリストで見つけられない場合は、[プロジェクトを検索] フィールドにプロジェクト名を指定して検索します。
4. [アクション] を展開し、[プロジェクトを削除] を選択します。

   プロジェクトを削除することで考えられる影響についての情報を含んだ警告を確認します。
5. 警告を受け入れる場合は、確認テキストを入力し、[削除] を選択します。

> **Important**
>
> プロジェクトの削除は取り消しができない操作で、ユーザーも AWS も元に戻せません。

> **Note**
>
> ユーザーまたはドメインユーザーがプロジェクト内に環境を作成すると、Amazon DataZone ではドメインまたは関連付けられているアカウントに AWS リソースが作成され、ユーザーとドメインユーザーが機能を利用できるようになります。以下は、Amazon DataZone でプロジェクト用に作成される可能性のある AWS リソースのリストとデフォルト名です。プロジェクトを削除しても、AWS アカウント内のこれらの AWS リソースは削除されません。

- IAM ロール: datazone_usr_<environmentId>。
- Glue データベース: (1) <environmentName>_pub_db-*、(2) <environmentName>_sub_db-*。この名前の既存のデータベースが既に存在する場合、Amazon DataZone はその環境 ID を追加します。
- Athena ワークグループ: <environmentName>-*。この名前の既存のワークグループが既に存在する場合、Amazon DataZone はその環境 ID を追加します。
- CloudWatch ロググループ: datazone_<environmentId>

プロジェクトから移動する

Amazon DataZone でプロジェクトを使用すると、ユーザーのグループは、Amazon DataZone カタログ内のデータアセットの公開、検出、サブスクライブ、使用など、さまざまなビジネスユースケースでコラボレーションできます。詳細については、「Amazon DataZone の用語と概念」を参照してください。

既存のプロジェクトから移動するには、以下の手順を実行します。

1. Amazon DataZone データポータル URL に移動し、シングルサインオン (SSO) または AWS 認証情報を使用してサインインします。Amazon DataZone 管理者の場合は、https://console.aws.amazon.com/datazone で Amazon DataZone コンソールに移動し、ドメインが作成されたでサインインすると、AWS アカウント[データポータルを開く] を選択できます。
2. 上部のナビゲーションペインから [プロジェクトを選択] を選択し、プロジェクトを選択します。
3. 移動するプロジェクトを選択します。プロジェクトのリストですぐに見つけられない場合は、[プロジェクトを検索] フィールドにプロジェクト名を指定して検索します。
4. [アクション] を展開し、[プロジェクトから移動] を選択します。

プロジェクトにチームメンバーを追加する

Amazon DataZone でプロジェクトを使用すると、ユーザーのグループは、Amazon DataZone カタログ内のデータアセットの公開、検出、サブスクライブ、使用など、さまざまなビジネスユースケースでコラボレーションできます。詳細については、「Amazon DataZone の用語と概念」を参照してください。

メンバーをプロジェクトに追加するには、プロジェクトの所有者またはコントリビューターである必要があります。SSO グループ、SSO ユーザー、または IAM プリンシパル (ロールまたはユーザー) をプロジェクトメンバーとして追加できます。

既存のプロジェクトにメンバーを追加するには、以下の手順を実行します。

1. Amazon DataZone データポータル URL に移動し、シングルサインオン (SSO) または AWS 認証情報を使用してサインインします。Amazon DataZone 管理者の場合は、https://console.aws.amazon.com/datazone で Amazon DataZone コンソールに移動し、ドメインが作成されたでサインインすると、AWS アカウント[データポータルを開く] を選択できます。
2. 上部のナビゲーションペインから [プロジェクトを選択] を選択し、プロジェクトを選択します。
3. メンバーを追加するプロジェクトを選択します。プロジェクトのリストですぐに見つけられない場合は、[プロジェクトを検索] フィールドにプロジェクト名を指定して検索します。
4. プロジェクトの詳細ページで、[メンバー] タブを選択し、[すべてのメンバー] ノードを選択します。
5. プロジェクトの [メンバー] タブで、[メンバーを追加] を選択します。
6. [メンバーをプロジェクトに追加] ポップアップウィンドウで、追加するユーザーを指定し、プロジェクト内のロール (所有者、コントリビューター、コンシューマー、スチュワード、ビューア) を指定して、[メンバーを追加] を選択します。

> **Important**
>
> プロジェクトメンバーとして追加できるのは、このプロジェクトが属しているドメインユニットに対して設定されているプロジェクトメンバーシップ認可ポリシーにより、このプロジェクトのメンバーになる権限のあるユーザーのみです。詳細については、「Amazon DataZone ドメインユニット内のユーザーとグループに認可ポリシーを割り当てる」を参照してください。

> **Note**
>
> IAM プリンシパルがドメインの Amazon DataZone ユーザープロファイルを既に持っている場合は、そのプリンシパルをプロジェクトメンバーとして追加できます。Amazon DataZone は、ポータル、API、または CLI を介してドメインと正常にやり取りする際、IAM プリンシパルのユーザープロファイルを自動的に作成します。IAM プリンシ

パルのユーザープロファイルを作成することはできません。IAM プリンシパルがドメインに既存の Amazon DataZone ユーザープロファイルを持っていない場合に IAM プリンシパルをプロジェクトメンバーとして追加するには、IAM コンソールのドメインの AmazonDataZoneDomainExecutionRole に、`iam:GetUser` と `iam:GetRole` の 2 つの IAM アクセス許可を追加するように管理者に依頼します。これとは別に、ドメインでアクションを実行するには、IAM プリンシパルは、そのようなアクションに対応する IAM アクセス許可を持っている必要があります。

プロジェクトからメンバーを削除する

Amazon DataZone でプロジェクトを使用すると、ユーザーのグループは、Amazon DataZone カタログ内のデータアセットの公開、検出、サブスクライブ、使用など、さまざまなビジネスユースケースでコラボレーションできます。詳細については、「Amazon DataZone の用語と概念」を参照してください。プロジェクトからメンバーを削除するには、プロジェクト所有者である必要があります。

既存のプロジェクトからメンバーを削除するには、以下の手順を実行します。

1. データポータル URL を使用して Amazon DataZone データポータルに移動し、SSO または AWS 認証情報を使用してログインします。Amazon DataZone 管理者の場合は、https://console.aws.amazon.com/datazone で、Amazon DataZone ドメインが作成された AWS アカウントの Amazon DataZone コンソールにアクセスするとデータポータル URL を取得できます。
2. 上部のナビゲーションペインから [プロジェクトを選択] を選択し、プロジェクトを選択します。
3. メンバーを削除するプロジェクトを選択します。プロジェクトのリストですぐに見つけられない場合は、[プロジェクトを検索] フィールドにプロジェクト名を指定して検索します。
4. プロジェクトの詳細ページで、[メンバー] タブを選択し、[すべてのメンバー] ノードを選択します。
5. プロジェクトの [メンバー] タブで、プロジェクトから削除するメンバーを選択し、[削除] を選択します。
6. [メンバーを削除] ポップアップウィンドウで、[メンバーを削除] を選択して削除を確定します。

Amazon DataZone のデータインベントリと公開

このセクションでは、Amazon DataZone でデータのインベントリを作成し、Amazon DataZone でデータを公開するために実行するタスクと手順について説明します。

Amazon DataZone を使用してデータをカタログ化するには、まず Amazon DataZone のプロジェクトのインベントリとしてデータ (アセット) を取り込む必要があります。特定のプロジェクトのインベントリを作成すると、そのプロジェクトのメンバーのみがアセットを検出できます。プロジェクトインベントリアセットは、明示的に公開されていない限り、すべてのドメインユーザーが検索/参照で利用できるわけではありません。プロジェクトインベントリを作成した後、データ所有者は、ビジネス名 (アセットとスキーマ)、説明 (アセットとスキーマ)、README、用語集の用語 (アセットとスキーマ)、メタデータフォームを追加または更新することで、必要なビジネスメタデータを使用してインベントリアセットを管理できます。

Amazon DataZone を使用してデータをカタログ化する次のステップは、プロジェクトのインベントリアセットをドメインユーザーが検出できるようにすることです。これを行うには、インベントリアセットを Amazon DataZone カタログに公開します。カタログに公開できるのはインベントリアセットの最新バージョンのみであり、検出カタログでは最新の公開バージョンのみがアクティブになります。インベントリアセットを Amazon DataZone カタログに公開された後に更新する場合は、最新バージョンが検出カタログに含まれるように、インベントリアセットを明示的に再公開する必要があります。

詳細については、Amazon DataZone の用語と概念を参照してください。

トピック

- Amazon DataZone に Lake Formation アクセス許可を設定する
- Amazon DataZone でカスタムアセットタイプを作成する
- の Amazon DataZone データソースを作成して実行する AWS Glue Data Catalog
- Amazon Redshift の Amazon DataZone データソースを作成して実行する
- Amazon DataZone でのデータソースの編集
- Amazon DataZone でのデータソースの削除
- プロジェクトインベントリから Amazon DataZone カタログにアセットを公開する
- Amazon DataZone でのインベントリの管理とアセットのキュレート
- Amazon DataZone でアセットを手動で作成する
- Amazon DataZone カタログからアセットを非公開にする

- Amazon DataZone アセットを削除する
- Amazon DataZone でデータソース実行を手動で開始する
- Amazon DataZone のアセットのリビジョン
- Amazon DataZone のデータ品質
- Amazon DataZone での機械学習と生成 AI の使用
- Amazon DataZone のデータリネージュのサポート
- 公開のためのメタデータ適用ルール

Amazon DataZone に Lake Formation アクセス許可を設定する

組み込みのデータレイク設計図 (DefaultDataLake) を使用して環境を作成すると、この環境の作成プロセスの一環として AWS Glue データベースが Amazon DataZone に追加されます。この AWS Glue データベースからアセットを発行する場合、追加のアクセス許可は必要ありません。

ただし、Amazon DataZone 環境外に存在する AWS Glue データベースからアセットを公開してサブスクライブする場合は、この外部 Glue データベースのテーブルにアクセスするアクセス許可を Amazon DataZone AWS に明示的に付与する必要があります。これを行うには、 AWS Lake Formation で次の設定を完了し、必要な Lake Formation アクセス許可を AmazonDataZoneGlueAccess-<region>-<domainId> にアタッチする必要があります。

- Lake Formation アクセス許可モードまたはハイブリッドアクセスモードで、 AWS Lake Formation のデータレイクの Amazon S3 の場所を設定します。詳細については、https://docs.aws.amazon.com/lake-formation/latest/dg/register-data-lake.html を参照してください。
- Amazon DataZone がアクセス許可を処理する Amazon Lake Formation テーブルから `IAMAllowedPrincipals` アクセス許可を削除します。詳細については、https://docs.aws.amazon.com/lake-formation/latest/dg/upgrade-glue-lake-formation-background.html を参照してください。
- に次の AWS Lake Formation アクセス許可をアタッチしますAmazonDataZoneGlueAccess-<region>-<domainId>。
  - テーブルが存在するデータベースに対する `Describe` および `Describe grantable` アクセス許可
  - DataZone がユーザーに代わってアクセスを管理する上記のデータベース内のすべてのテーブルに対する、`Describe`、`Select`、`Describe Grantable`、`Select Grantable` アクセス許可。

> **Note**
>
> Amazon DataZone は AWS Lake Formation Hybrid モードをサポートしています。Lake Formation ハイブリッドモードでは、Lake Formation AWS を通じて Glue データベースとテーブルに対するアクセス許可の管理を開始できますが、これらのテーブルとデータベースに対する既存の IAM アクセス許可は維持されます。詳細については、Amazon DataZone と AWS Lake Formation ハイブリッドモードの統合を参照してください。

詳細については、「Amazon DataZone の AWS Lake Formation アクセス許可のトラブルシューティング」を参照してください。

Amazon DataZone と AWS Lake Formation ハイブリッドモードの統合

Amazon DataZone は AWS Lake Formation ハイブリッドモードと統合されています。この統合により、最初に AWS Lake Formation AWS に登録することなく、Amazon DataZone を介して Glue テーブルを簡単に公開および共有できます。ハイブリッドモードでは、これらのテーブルに対する既存の IAM アクセス許可を維持したまま、 AWS Lake Formation を通じて AWS Glue テーブルに対するアクセス許可の管理を開始できます。

開始するには、Amazon DataZone マネジメントコンソールの DefaultDataLake ブループリントで [データの場所の登録] の設定を有効にします。

AWS Lake Formation ハイブリッドモードとの統合を有効にする

1. https://console.aws.amazon.com/datazone で Amazon DataZone コンソールに移動し、アカウントの認証情報を使用してサインインします。
2. ドメインを表示を選択し、 AWS Lake Formation ハイブリッドモードとの統合を有効にするドメインを選択します。
3. ドメインの詳細ページで、[ブループリント] タブに移動します。
4. [ブループリント] リストから、DefaultDataLake ブループリントを選択します。
5. DefaultDataLake ブループリントが有効になっていることを確認します。有効になっていない場合は、「Amazon DataZone ドメインを所有する AWS アカウントで組み込みブループリントを有効にする」の手順に従って AWS アカウントで有効にします。
6. DefaultDataLake の詳細ページで、[プロビジョニング] タブを開き、ページの右上隅にある [編集] ボタンを選択します。
7. [データの場所の登録] でチェックボックスをオンにしてデータの場所の登録を有効にします。

8. データの場所の管理ロールでは、新しい IAM ロールを作成するか、既存の IAM ロールを選択できます。Amazon DataZone は、このロールを使用して、 AWS Lake Formation ハイブリッドアクセスモードを使用して Data Lake 用に選択した Amazon S3 バケット (複数可) への読み取り/書き込みアクセスを管理します。詳細については、「AmazonDataZoneS3Manage-<region>-<domainId>」を参照してください。
9. オプションで、Amazon DataZone でハイブリッドモードにより自動的に登録しない場合は、特定の Amazon S3 の場所を除外できます。その場合、次の手順を完了します。
   - トグルボタンを選択して、指定した Amazon S3 の場所を除外します。
   - 除外する Amazon S3 バケットの URL を指定します。
   - バケットをさらに追加するには、[S3 の場所を追加] を選択します。

     > **Note**
     >
     > Amazon DataZone では、ルート S3 の場所のみを除外できます。ルート S3 の場所のパス内にある S3 の場所は、自動的に登録から除外されます。

   - [Save changes] (変更の保存) をクリックします。

アカウント AWS でデータロケーション登録設定を有効にすると、データコンシューマーが IAM アクセス許可で管理されている AWS Glue テーブルにサブスクライブすると、Amazon DataZone はまずこのテーブルの Amazon S3 ロケーションをハイブリッドモードで登録し、 AWS Lake Formation を通じてテーブルに対するアクセス許可を管理してデータコンシューマーへのアクセスを許可します。これにより、既存のワークフローを中断することなく、テーブルに対する IAM アクセス許可が新しく付与された AWS Lake Formation アクセス許可で引き続き存在します。

Amazon DataZone で AWS Lake Formation ハイブリッドモード統合を有効にするときに暗号化された Amazon S3 の場所を処理する方法

カスタマーマネージドまたは AWS マネージド KMS キーで暗号化された Amazon S3 の場所を使用している場合は、AmazonDataZoneS3Manage ロールには KMS キーでデータを暗号化および復号するためのアクセス許可が必要です。または、KMS キーポリシーでキーに対するアクセス許可をロールに付与する必要があります。

Amazon S3 ロケーションが AWS マネージドキーで暗号化されている場合は、AmazonDataZoneDataLocationManagement ロールに次のインラインポリシーを追加します。

JSON

```
{
    "Version":"2012-10-17",
    "Statement": [
        {
            "Effect": "Allow",
            "Action": [
                "kms:Encrypt",
                "kms:Decrypt",
                "kms:ReEncrypt*",
                "kms:GenerateDataKey*",
                "kms:DescribeKey"
            ],
            "Resource": "arn:aws:kms:us-
east-1:111122223333:key/1234abcd-12ab-34cd-56ef-1234567890ab"
        }
    ]
}
```

Amazon S3 の場所がカスタマーマネージドキーで暗号化されている場合は、以下を実行します。

1. https://console.aws.amazon.com/kms で AWS KMS コンソールを開き、Identity and Access Management (IAM) 管理ユーザーとして AWS 、または場所の暗号化に使用される KMS キーのキーポリシーを変更できるユーザーとしてログインします。
2. ナビゲーションペインで [カスタマーマネージドキー] を選択してから、目的の KMS キーの名前を選択します。
3. KMS キーの詳細ページで [キーポリシー] タブを選択してから、以下のいずれかを行って、カスタムロールまたは Lake Formation サービスリンクロールを KMS キーユーザーとして追加します。

   - デフォルトビュー (キー管理者、キー削除、キーユーザー、その他の AWS アカウントセクションを含む) が表示されている場合は、キーユーザーセクションに AmazonDataZoneDataLocationManagement ロールを追加します。
   - キーポリシー (JSON) が表示されている場合 – 次の例に示すように、ポリシーを編集して AmazonDataZoneDataLocationManagement ロールを「キーの使用を許可」オブジェクトに追加します

```
...
        {
            "Sid": "Allow use of the key",
            "Effect": "Allow",
            "Principal": {
                "AWS": [
                    "arn:aws:iam::111122223333:role/service-role/
AmazonDataZoneDataLocationManage-<region>-<domain-id>"
                ]
            },
            "Action": [
                "kms:Encrypt",
                "kms:Decrypt",
                "kms:ReEncrypt*",
                "kms:GenerateDataKey*",
                "kms:DescribeKey"
            ],
            "Resource": "*"
        },
        ...
```

> **Note**
>
> KMS キーまたは Amazon S3 の場所がデータカタログと同じ AWS アカウント内にない場合は、「アカウント間で AWS 暗号化された Amazon S3 の場所を登録する」の手順に従います。

Amazon DataZone でカスタムアセットタイプを作成する

Amazon DataZone では、アセットはデータベーステーブル、ダッシュボード、機械学習モデルなどの特定のタイプのデータリソースを表します。カタログアセットを記述する際に一貫性と標準化を実現するには、Amazon DataZone ドメインに、カタログでアセットをどのように表すか定義するアセットタイプのセットが必要です。アセットタイプで特定のタイプのアセットのスキーマを定義します。アセットタイプには、必須およびオプションの名前付け可能なメタデータフォームタイプのセットがあります (govForm や GovernanceFormType など)。Amazon DataZone のアセットタイプ

はバージョニングされます。アセットが作成されると、アセットタイプ (通常は最新バージョン) で定義されたスキーマが検証され、無効な構造が指定されている場合、アセットの作成は失敗します。

システムアセットタイプ - Amazon DataZone は、サービス所有のシステムアセットタイプ (GlueTableAssetType、GlueViewAssetType、RedshiftTableAssetType、RedshiftViewAssetType、S3Object を含む) とシステムフォームタイプ (DataSourceReferenceFormType、AssetCommonDetailsFormType、SubscriptionTermsFormType を含む) をプロビジョニングします。システムアセットタイプは編集できません。

カスタムアセットタイプ - カスタムアセットタイプを作成する場合、最初にフォームタイプで使用するメタデータフォームタイプと用語集を作成します。次に、名前、説明、および関連付けられたメタデータフォーム (必須またはオプション) を指定することで、カスタムアセットタイプを作成できます。

構造化データを持つアセットタイプの場合、データポータルで列スキーマを表すために、`RelationalTableFormType` を使用して、列名、説明、データ型など、技術的なメタデータを列に追加し、 `ColumnBusinessMetadataForm`を使用して、ビジネス名、用語集の用語、カスタムキー値のペアなど、列のビジネス説明を追加できます。

データポータルを使用してカスタムアセットタイプを作成するには、次の手順を実行します。

1. Amazon DataZone データポータル URL に移動し、シングルサインオン (SSO) または AWS 認証情報を使用してサインインします。Amazon DataZone 管理者の場合は、https://console.aws.amazon.com/datazone で Amazon DataZone コンソールに移動し、ドメインが作成された AWS アカウント でサインインすると、[データポータルを開く] を選択できます。
2. 上部のナビゲーションペインから [プロジェクトを選択] を選択し、カスタムアセットタイプを作成するプロジェクトを選択します。
3. プロジェクトの [データ] タブに移動します。
4. 左側のナビゲーションペインから [アセットタイプ] を選択し、[アセットタイプを作成] を選択します。
5. 次のフィールドを指定して [作成] を選択します。
   - 名前 - カスタムアセットタイプの名前
   - 説明 - カスタムアセットタイプの説明。
   - メタデータフォームを追加 を選択して、メタデータフォームをこのカスタムアセットタイプに追加します。
6. カスタムアセットタイプを作成したら、それを使用してアセットを作成できます。

API を使用してカスタムアセットタイプを作成するには、次の手順を実行します。

1. CreateFormType API アクションを呼び出してメタデータフォームタイプを作成します。

   Amazon SageMaker の例を次に示します。

```
m_model = "

structure SageMakerModelFormType {
   @required
   @amazon.datazone#searchable
   modelName: String

   @required
   modelArn: String

   @required
   creationTime: String
}
"

CreateFormType(
    domainIdentifier="my-dz-domain",
    owningProjectIdentifier="d4bywm0cja1dbb",
    name="SageMakerModelFormType",
    model=m_model
    status="ENABLED"
    )
```

2. 次に、CreateAssetType API アクションを呼び出すことで、アセットタイプを作成できます。アセットタイプは、利用可能なシステムフォームタイプ (下の例の SubscriptionTermsFormType) またはカスタムフォームタイプを使用して、Amazon DataZone API 経由でのみ作成できます。システムフォームタイプの場合、タイプ名は amazon.datazone で始まる必要があります。

```
CreateAssetType(
    domainIdentifier="my-dz-domain",
    owningProjectIdentifier="d4bywm0cja1dbb",
    name="SageMakerModelAssetType",
```

```
    formsInput={
        "SageMakerModelForm": {
            "typeIdentifier": "SageMakerModelFormType",
            "typeRevision": 7,
            "required": True,
        },
        "SubscriptionTerms": {
            "typeIdentifier": "amazon.datazone.SubscriptionTermsFormType",
            "typeRevision": 1,
            "required": False,
        },
    },
)
```

構造化データのアセットタイプを作成する例を次に示します。

```
CreateAssetType(
    domainIdentifier="my-dz-domain",
    owningProjectIdentifier="d4bywm0cja1dbb",
    name="OnPremMySQLAssetType",
    formsInput={
        "OnpremMySQLForm": {
            "typeIdentifier": "OnpremMySQLFormType",
            "typeRevision": 5,
            "required": True,
        },
        "RelationalTableForm": {
            "typeIdentifier": "amazon.datazone.RelationalTableFormType",
            "typeRevision": 1,
            "required": True,
        },
        "ColumnBusinessMetadataForm": {
            "typeIdentifier": "amazon.datazone.ColumnBusinessMetadataFormType",
            "typeRevision": 1,
            "required": False,
        },
        "SubscriptionTerms": {
            "typeIdentifier": "amazon.datazone.SubscriptionTermsFormType",
            "typeRevision": 1,
            "required": False,
        },
    },
```

```
)
```

3. これで、上記のステップで作成したカスタムアセットタイプを使用してアセットを作成できます。

```
CreateAsset(
   domainIdentifier="my-dz-domain",
   owningProjectIdentifier="d4bywm0cja1dbb",
   typeIdentifier="SageMakerModelAssetType",
   name="MyModelAsset",
   glossaryTerms="xxx",
   formsInput=[{
        "formName": "SageMakerModelForm",
        "typeIdentifier": "SageMakerModelFormType",
        "content": "{\n \"ModelName\" : \"sample-ModelName\",\n \"ModelArn\" :
 \"999999911111\",\n \"CreationTime\" : \"2025-01-01 18:00:00.000\"}"
        }
        ]
)
```

この例では、構造化データアセットを作成します。

```
CreateAsset(
   domainIdentifier="my-dz-domain",
   owningProjectIdentifier="d4bywm0cja1dbb",
   typeIdentifier="OnPremMySQLAssetType",
   name="MyModelAsset",
   glossaryTerms="xxx",
   formsInput=[{
        "formName": "RelationalTableForm",
        "typeIdentifier": "amazon.datazone.RelationalTableFormType",
        "content": ".."
        },
        {
        "formName": "OnpremMySQLForm",
        "typeIdentifier": "OnpremMySQLFormType",
        "content": ".."
        },
        {
```

```
        "formName": "mySQLTableForm",
        "typeIdentifier": "MySQLTableFormType",
        "typeRevision": "1",
        "content": ".."
        },
        {
        "formName": "AssetCommonDetailsForm",
        "typeIdentifier": "amazon.datazone.AssetCommonDetailsFormType",
        "content": "..."
        },
        .....
        ]
)
```

の Amazon DataZone データソースを作成して実行する AWS Glue Data Catalog

Amazon DataZone では、データベーステーブルの技術メタデータを からインポートするために AWS Glue Data Catalog データソースを作成できます AWS Glue。のデータソースを追加するには AWS Glue Data Catalog、ソースデータベースがすでに存在している必要があります AWS Glue。

AWS Glue データソースを作成して実行するときは、ソース AWS Glue データベースから Amazon DataZone プロジェクトのインベントリにアセットを追加します。 AWS Glue データソースは、設定されたスケジュールまたはオンデマンドで実行して、アセットの技術メタデータを作成または更新できます。データソースの実行中に、オプションでアセットを Amazon DataZone カタログに公開することを選択すると、すべてのドメインユーザーが検出できます。ビジネスメタデータを編集した後で、プロジェクトインベントリアセットを公開することもできます。ドメインユーザーは、公開されたアセットを検索して検出し、これらのアセットのサブスクリプションをリクエストできます。

AWS Glue データソースを追加するには

1. Amazon DataZone データポータル URL に移動し、シングルサインオン (SSO) または AWS 認証情報を使用してサインインします。Amazon DataZone 管理者の場合は、https://console.aws.amazon.com/datazone で Amazon DataZone コンソールに移動し、ドメインが作成された AWS アカウント でサインインすると、[データポータルを開く] を選択できます。
2. 上部のナビゲーションペインから [プロジェクトを選択] を選択し、データソースを追加するプロジェクトを選択します。

3. プロジェクトの [データ] タブに移動します。
4. 左側のナビゲーションペインで [データソース] を選択してから、[データソースを作成] を選択します。
5. 以下のフィールドを設定します。

   - 名前 – データソース名。
   - 説明 – データソースの説明。
6. [データソースのタイプ] で、AWS Glue を選択します。
7. 「環境の選択」で、 AWS Glue テーブルを発行する環境を指定します。
8. データ選択で、 AWS Glue データベースを指定し、テーブル選択基準を入力します。例えば、[包含] を選択して `*corporate` を入力すると、データベースには `corporate` という単語で終わるすべてのソーステーブルが含まれます。

   ドロップダウンから AWS Glue データベースを選択するか、データベース名を入力します。ドロップダウンには、公開データベースと環境のサブスクリプションデータベースの 2 つのデータベースが含まれます。環境によって作成されていないデータベースからアセットを取り込む場合は、ドロップダウンから選択する代わりにデータベースの名前を入力する必要があります。

   1 つのデータベース内のテーブルに対して、複数の包含ルールと除外ルールを追加できます。[別のデータベースを追加] ボタンを使用して、複数のデータベースを追加することもできます。

9. [データ品質] では、[このデータソースのデータ品質を有効化] を選択できます。これを行うと、Amazon DataZone は既存の AWS Glue データ品質出力を Amazon DataZone カタログにインポートします。デフォルトでは、Amazon DataZone は Glue から有効期限のない最新の既存の 100 AWS 件の品質レポートをインポートします。

   Amazon DataZone のデータ品質メトリクスは、データソースの完全性と正確性を理解するのに役立ちます。Amazon DataZone は、ビジネスデータカタログ検索中など、特定の時点にコンテキストを提供するために、これらのデータ品質メトリクスを AWS Glue から取得します。データユーザーは、サブスクライブしているアセットのデータ品質メトリクスが時間の経過とともにどのように変化するかを確認できます。データプロデューサーは、スケジュールに従って AWS Glue Data Quality のスコアを取り込むことができます。Amazon DataZone ビジネスデータカタログには、データ品質 API を介してサードパーティーシステムからのデータ品質メトリクスを表示することもできます。詳細については、Amazon DataZone のデータ品質を参照してください。
10. [次へ] を選択します。

11. [公開設定] では、アセットをビジネスデータカタログで即座に検出可能にするかどうかを選択します。インベントリにのみ追加する場合は、後でサブスクリプション条件を選択し、ビジネスデータカタログに公開できます。
12. [自動的なビジネス名の生成] では、ソースからインポートされるアセットのメタデータを自動的に生成するかどうかを選択します。
13. (オプション) [メタデータフォーム] には、アセットが Amazon DataZone にインポートされたときに収集および保存されるメタデータを定義するフォームを追加します。詳細については、「the section called “メタデータフォームを作成する”」を参照してください。
14. [実行設定] では、データソースを実行するタイミングを選択します。
    - [スケジュールに従って実行] - データソースを実行する日時を指定します。
    - [オンデマンドで実行] — データソースの実行を手動で開始できます。
15. [次へ] を選択します。
16. データソース設定を確認したら、[作成] をクリックします。

> **Note**
>
> AWS Glue データソースが作成されると、Amazon DataZone は、データソースの作成に使用される環境の IAM ロールに対する Lake Formation の「読み取り専用」アクセス許可を作成し、データソースで使用される AWS Glue データベース内のすべてのテーブルにアクセスします。これらのグラントのステータスは、環境の詳細ページのデータソースでモニタリングできます。Amazon DataZone は、公開環境の AWS IAM ロールへのアクセスを許可するときに、次の AWS タグを Glue データベースに追加します。 `DataZoneDiscoverable_${domainId}: true`
> Amazon DataZone の現在のリリース前に作成された環境では、プロジェクトメンバーは Amazon Athena で付与されたテーブルを表示できません。

Amazon Redshift の Amazon DataZone データソースを作成して実行する

Amazon DataZone では、Amazon Redshift データウェアハウスからデータベーステーブルとビューの技術的メタデータをインポートするために、Amazon Redshift データソースを作成できます。Amazon Redshift に Amazon DataZone データソースを追加するには、ソースデータウェアハウスが Amazon Redshift に既に存在している必要があります。

Amazon Redshift データソースを作成して実行する場合は、ソース Amazon Redshift データウェアハウスのアセットを Amazon DataZone プロジェクトのインベントリに追加します。Amazon Redshift データソースは、設定されたスケジュールで、またはオンデマンドで実行して、アセットの技術メタデータを作成または更新できます。データソースの実行中に、オプションでプロジェクトインベントリアセットを Amazon DataZone カタログに公開することを選択すると、すべてのドメインユーザーが検出できます。ビジネスメタデータを編集した後にインベントリアセットを公開することもできます。ドメインユーザーは、公開されたアセットを検索して検出し、これらのアセットのサブスクリプションをリクエストできます。

Amazon Redshift データソースを追加するには

1. Amazon DataZone データポータル URL に移動し、シングルサインオン (SSO) または AWS 認証情報を使用してサインインします。Amazon DataZone 管理者の場合は、https://console.aws.amazon.com/datazone で Amazon DataZone コンソールに移動し、ドメインが作成された AWS アカウント でサインインすると、[データポータルを開く] を選択できます。
2. 上部のナビゲーションペインから [プロジェクトを選択] を選択し、データソースを追加するプロジェクトを選択します。
3. プロジェクトの [データ] タブに移動します。
4. 左側のナビゲーションペインで [データソース] を選択してから、[データソースを作成] を選択します。
5. 以下のフィールドを設定します。
   - 名前 – データソース名。
   - 説明 – データソースの説明。
6. [データソースのタイプ] で、[Amazon Redshift] を選択します。
7. [環境を選択] で、Amazon Redshift テーブルを公開する環境を指定します。
8. 選択した環境に応じて、Amazon DataZone は環境から直接 Amazon Redshift 認証情報やその他のパラメータを自動的に適用するか、独自のパラメータを選択するオプションを提供します。
   - 環境のデフォルトの Amazon Redshift スキーマからの公開のみを許可する環境を選択した場合、Amazon DataZone は Amazon Redshift 認証情報と、Amazon Redshift クラスターまたはワークグループ名、 AWS シークレット、データベース名、スキーマ名などの他のパラメータを自動的に適用します。これらの自動入力されたパラメータは編集できません。
   - データの公開を許可しない環境を選択すると、データソースの作成を続行できなくなります。

- 任意のスキーマからのデータの公開を許可する環境を選択すると、環境の認証情報やその他の Amazon Redshift パラメータを使用するか、独自の認証情報/パラメータを入力するオプションが表示されます。

9. 独自の認証情報を使用してデータソースを作成する場合は、次の詳細を指定します。

   - [Amazon Redshift 認証情報を提供する] で、データソースとして、プロビジョニングされた Amazon Redshift クラスターを使用するか、Amazon Redshift Serverless ワークスペースを使用するかを選択します。
   - 上記のステップで選択した内容に応じて、ドロップダウンメニューから Amazon Redshift クラスターまたはワークスペースを選択し、認証に使用する AWS Secrets Manager のシークレットを選択します。既存のシークレットを選択するか、新しいシークレットを作成できます。
   - 既存のシークレットをドロップダウンに表示するには、 AWS Secrets Manager のシークレットに次のタグ (キー/値) が含まれていることを確認してください。
     - AmazonDataZoneProject: <projectID>
     - AmazonDataZoneDomain: <domainID>

     新しいシークレットを作成することを選択した場合、シークレットには上記のタグが自動的にタグ付けされるため、追加のステップは必要ありません。詳細については、「データベース認証情報の保存 AWS Secrets Manager」を参照してください。

     データソースの作成用に提供された AWS シークレットの Amazon Redshift ユーザーには、公開されるテーブルに対するSELECTアクセス許可が必要です。Amazon DataZone がユーザーに代わってサブスクリプション (アクセス権) も管理する場合は、 AWS シークレットのデータベースユーザーには次のアクセス許可も必要です。

     - `CREATE DATASHARE`
     - `ALTER DATASHARE`
     - `DROP DATASHARE`

10. [データ選択] で Amazon Redshift データベース、スキーマを指定し、テーブルまたはビューの選択基準を入力します。例えば、[包含] を選択して `*corporate` を入力すると、アセットには `corporate` という単語で終わるすべてのソーステーブルが含まれます。

    1 つのデータベース内のテーブルに対して、複数の包含ルールを追加できます。[別のデータベースを追加] ボタンを使用して、複数のデータベースを追加することもできます。

11. [次へ] を選択します。

12. [公開設定] では、アセットをデータカタログで即座に検出できるかどうかを選択します。インベントリにのみ追加する場合は、後でサブスクリプション条件を選択し、ビジネスデータカタログに公開できます。
13. [自動的なビジネス名の生成] では、公開され、ソースから更新されるアセットのメタデータを自動的に生成するかどうかを選択します。
14. (オプション) [メタデータフォーム] には、アセットが Amazon DataZone にインポートされたときに収集および保存されるメタデータを定義するフォームを追加します。詳細については、「the section called “メタデータフォームを作成する”」を参照してください。
15. [実行設定] では、データソースを実行するタイミングを選択します。
    - [スケジュールに従って実行] - データソースを実行する日時を指定します。
    - [オンデマンドで実行] — データソースの実行を手動で開始できます。
16. [次へ] を選択します。
17. データソース設定を確認したら、[作成] をクリックします。

> **Note**
>
> Amazon Redshift データソースが作成されると、Amazon DataZone は、データソースの作成に使用される環境への読み取り専用アクセスを許可し、データソースで使用される Amazon Redshift スキーマ内のすべてのテーブルにアクセスします。これらのグラントのステータスは、環境の詳細ページのデータソースでモニタリングできます。
> 環境の作成に使用したものとは異なる Amazon Redshift クラスターまたは Serverless ワークグループを使用する場合は、次の AWS タグがクラスターまたはワークグループに追加されていることを確認する必要があります。これは、環境ユーザーが Amazon Redshift Query Editor V2 で付与されたデータベースを表示できるようにするために必要です:
> `DataZoneDiscoverable_${domainId}: true`
> Amazon DataZone の現在のリリースより前に作成された環境では、プロジェクトメンバーは Amazon Redshift で付与されたテーブルを表示できません。

Amazon DataZone でのデータソースの編集

Amazon DataZone データソースを作成したら、いつでも変更してソースの詳細またはデータ選択基準を変更できます。不要になったデータソースは削除できます。

これらのステップを完了するには、AmazonDataZoneFullAccess AWS 管理ポリシーがアタッチされている必要があります。詳細については、「the section called “AWS 管理ポリシー”」を参照してください。

Amazon DataZone データソースを編集して、テーブル選択基準の追加、削除、変更など、データ選択設定を変更できます。データベースを追加または削除することもできます。データソースタイプまたはデータソースが公開される環境を変更することはできません。

データソースを編集するには

1. Amazon DataZone データポータル URL に移動し、シングルサインオン (SSO) または AWS 認証情報を使用してサインインします。Amazon DataZone 管理者の場合は、https://console.aws.amazon.com/datazone で Amazon DataZone コンソールに移動し、ドメインが作成された AWS アカウント でサインインすると、[データポータルを開く] を選択できます。
2. 上部のナビゲーションペインから [プロジェクトの選択] を選択し、データソースが属するプロジェクトを選択します。
3. プロジェクトの [データ] タブに移動します。
4. 左側のナビゲーションペインから [データソース] を選択し、変更するデータソースを選択します。
5. [データソース定義] タブに移動し、[編集] を選択します。
6. データソース定義を変更します。データソースの詳細を更新し、データ選択基準を変更することができます。
7. 変更が完了したら、[保存] を選択します。

Amazon DataZone でのデータソースの削除

Amazon DataZone データソースを作成したら、いつでも変更してソースの詳細またはデータ選択基準を変更できます。

これらのステップを完了するには、AmazonDataZoneFullAccess AWS 管理ポリシーがアタッチされている必要があります。詳細については、「the section called “AWS 管理ポリシー”」を参照してください。

不要になった Amazon DataZone データソースは、完全に削除できます。データソースを削除しても、そのデータソースから生成されたすべてのアセットはカタログで引き続き利用でき、ユーザーはそのままそのアセットをサブスクライブできます。ただし、アセットはソースからの更新の受信を停止します。削除する前に、まず依存アセットを別のデータソースに移動することをお勧めします。

> **Note**
>
> 削除する前に、データソースのすべてのフルフィルメントを削除する必要があります。詳細については、「データの検出、サブスクリプション、消費」を参照してください。

データソースを削除するには

1. プロジェクトの [データ] タブで、左側のナビゲーションペインから [データソース] を選択します。
2. 削除するデータソースを選択します。
3. [アクション]、[データソースを削除] の順に選択し、削除を確定します。

プロジェクトインベントリから Amazon DataZone カタログにアセットを公開する

Amazon DataZone アセットとそのメタデータは、プロジェクトインベントリから Amazon DataZone カタログに公開できます。カタログに公開できるのは、アセットの最新バージョンのみです。

アセットをカタログに公開する場合は、次の点を考慮してください。

- アセットをカタログに公開するには、そのプロジェクトの所有者またはコントリビューターである必要があります。
- Amazon Redshift アセットの場合、Amazon DataZone が Redshift テーブルとビューへのアクセスを管理するために、パブリッシャークラスターとサブスクライバークラスターの両方に関連付けられた Amazon Redshift クラスターが Amazon Redshift データ共有のすべての要件を満たしていることを確認します。「Amazon Redshift のデータ共有概念」を参照してください。
- Amazon DataZone は、 AWS Glue Data Catalog および Amazon Redshift から公開されたアセットのアクセス管理のみをサポートします。Amazon S3 オブジェクトなどの他のすべてのアセットについては、Amazon DataZone は承認されたサブスクライバーのアクセス権を管理しません。これらのアンマネージドアセットをサブスクライブすると、次のメッセージが表示されます。

  ```
  Subscription approval does not provide access to data. Subscription
  grants on this asset are not managed by Amazon DataZone. For more
  information or help, reach out to your administrator.
  ```

Amazon DataZone でアセットを公開する

データソースの作成時にアセットをデータカタログで即座に検出できるように選択しなかった場合は、次のステップを実行して後で公開します。

アセットを公開するには

1. Amazon DataZone データポータル URL に移動し、シングルサインオン (SSO) または AWS 認証情報を使用してサインインします。Amazon DataZone 管理者の場合は、https://console.aws.amazon.com/datazone で Amazon DataZone コンソールに移動し、ドメインが作成された AWS アカウント でサインインすると、[データポータルを開く] を選択できます。
2. 上部のナビゲーションペインから [プロジェクトを選択] を選択し、アセットが属するプロジェクトを選択します。
3. プロジェクトの [データ] タブに移動します。
4. 左側のナビゲーションペインから [インベントリデータ] を選択し、公開するアセットを選択します。

   > **Note**
   >
   > デフォルトでは、すべてのアセットにはサブスクリプション承認が必要です。つまり、データ所有者はアセットへのすべてのサブスクリプションリクエストを承認する必要があります。アセットを公開する前にこの設定を変更する場合は、アセットの詳細を開き、[サブスクリプションの承認] の横にある [編集] を選択します。アセットをカタログに公開する場合は、次の点を考慮してください。

5. [アセットを公開] を選択します。アセットはカタログに直接公開されます。

   承認要件の変更など、アセットに変更を加える場合は、[再公開] を選択してカタログに更新を公開できます。

Amazon DataZone でのインベントリの管理とアセットのキュレート

Amazon DataZone を使用してデータをカタログ化するには、まず Amazon DataZone のプロジェクトのインベントリとしてデータ (アセット) を取り込む必要があります。特定のプロジェクトのインベントリを作成すると、そのプロジェクトのメンバーのみがアセットを検出できます。

アセットがプロジェクトインベントリに作成されると、メタデータをキュレートできます。例えば、アセットの名前、説明、Read me を編集できます。アセットを編集するたびに、アセットの新しいバージョンが作成されます。アセットの詳細ページの [履歴] タブを使用して、すべてのアセットバージョンを表示できます。

[Read Me] セクションを編集し、アセットの詳細な説明を追加できます。[Read Me] セクションはマークダウンをサポートしているため、必要に応じて説明をフォーマットし、アセットに関する重要な情報をコンシューマーに説明できます。

用語集の用語は、利用可能なフォームに入力することで、アセットレベルで追加できます。

スキーマをキュレートするには、列を確認し、ビジネス名、説明を追加し、列レベルで用語集の用語を追加できます。

データソースの作成時にメタデータの自動生成が有効になっている場合、アセットと列のビジネス名は、個別に、または一度にすべてを確認して承認または拒否できます。

サブスクリプション条件を編集して、アセットの承認が必要かどうかを指定することもできます。

Amazon DataZone のメタデータフォームを使用すると、カスタム定義属性 (販売地域、販売年、販売四半期など) を追加して、データアセットのメタデータモデルを拡張できます。アセットタイプにアタッチされているメタデータフォームは、そのアセットタイプから作成されたすべてのアセットに適用されます。データソース実行の一部として、または作成後に、個々のアセットにさらにメタデータフォームを追加することもできます。新しいフォームの作成については、「the section called “メタデータフォームを作成する”」を参照してください。

アセットのメタデータを更新するには、アセットが属するプロジェクトの所有者またはコントリビューターである必要があります。

アセットのメタデータを更新するには

1. Amazon DataZone データポータル URL に移動し、シングルサインオン (SSO) または AWS 認証情報を使用してサインインします。Amazon DataZone 管理者の場合は、https://console.aws.amazon.com/datazone で Amazon DataZone コンソールに移動し、ドメインが作成された AWS アカウント でサインインすると、[データポータルを開く] を選択できます。
2. 上部のナビゲーションペインから [プロジェクトを選択] を選択し、メタデータを更新するアセットを含むプロジェクトを選択します。
3. プロジェクトの [データ] タブに移動します。
4. 左側のナビゲーションペインから [インベントリデータ] を選択し、メタデータを更新するアセットの名前を選択します。

5. アセットの詳細ページの [メタデータフォーム] で、[編集] を選択し、必要に応じて既存のフォームを編集します。追加のメタデータフォームをアセットにアタッチすることもできます。詳細については、「the section called “追加のメタデータフォームをアセットにアタッチする”」を参照してください。
6. 更新が完了したら、[フォームを保存] を選択します。

   フォームを保存すると、Amazon DataZone によりアセットの新しいインベントリバージョンが生成されます。更新されたバージョンをカタログに公開するには、[アセットの再公開] を選択します。

追加のメタデータフォームをアセットにアタッチする

デフォルトでは、ドメインにアタッチされたメタデータフォームは、そのドメインに公開されたすべてのアセットにアタッチされます。データパブリッシャーは、追加のコンテキストを提供するために、追加のメタデータフォームを個々のアセットに関連付けることができます。

追加のメタデータフォームをアセットにアタッチするには

1. Amazon DataZone データポータル URL に移動し、シングルサインオン (SSO) または AWS 認証情報を使用してサインインします。Amazon DataZone 管理者の場合は、https://console.aws.amazon.com/datazone で Amazon DataZone コンソールに移動し、ドメインが作成された AWS アカウント でサインインすると、[データポータルを開く] を選択できます。
2. 上部のナビゲーションペインから [プロジェクトを選択] を選択し、メタデータを追加するアセットを含むプロジェクトを選択します。
3. プロジェクトの [データ] タブに移動します。
4. 左側のナビゲーションペインから [インベントリデータ] を選択し、メタデータを追加するアセットの名前を選択します。
5. アセットの詳細ページの [メタデータフォーム] で [フォームを追加] を選択します。
6. アセットに追加するフォーム (複数可) を選択し、[フォームを追加] を選択します。
7. 各メタデータフィールドに値を入力し、[フォームを保存] を選択します。

   フォームを保存すると、Amazon DataZone によりアセットの新しいインベントリバージョンが生成されます。更新されたバージョンをカタログに公開するには、[アセットの再公開] を選択します。

Amazon DataZone でキュレーション後にアセットをカタログに公開する

アセットキュレーションに満足し、データ所有者がアセットバージョンを Amazon DataZone カタログに公開すると、すべてのドメインユーザーが検出できます。アセットには、インベントリバージョンと公開バージョンが表示されます。検出カタログには、最新の公開バージョンのみが表示されます。公開後にメタデータが更新されると、新しいインベントリバージョンがカタログに公開できるようになります。

Amazon DataZone でアセットを手動で作成する

Amazon DataZone では、アセットは、単一の物理データオブジェクト (テーブル、ダッシュボード、ファイルなど) または仮想データオブジェクト (ビューなど) を表示するエンティティです。詳細については、「Amazon DataZone の用語と概念」を参照してください。アセットを手動で公開するのは 1 回限りの操作です。アセットの実行スケジュールを指定しないため、ソースが変更されても自動的に更新されません。

プロジェクトでアセットを手動で作成するには、そのプロジェクトの所有者またはコントリビューターである必要があります。

アセットを手動で作成するには

1. Amazon DataZone データポータル URL に移動し、シングルサインオン (SSO) または AWS 認証情報を使用してサインインします。Amazon DataZone 管理者の場合は、https://console.aws.amazon.com/datazone で Amazon DataZone コンソールに移動し、ドメインが作成された AWS アカウント でサインインすると、[データポータルを開く] を選択できます。
2. 上部のナビゲーションペインから [プロジェクトを選択] を選択し、アセットを作成するプロジェクトを選択します。
3. プロジェクトの [データ] タブに移動します。
4. 左側のナビゲーションペインで [データソース] を選択してから、[データアセットを作成] を選択します。
5. アセットの詳細 については、次の設定を行います。
   - アセットタイプ – アセットのタイプ。
   - 名前 - アセットの名前。
   - 説明— アセットの説明。
6. [S3 の場所] には、ソース S3 バケットの Amazon リソースネーム (ARN) を入力します。

必要に応じて、S3 アクセスポイントを入力します。詳細については、「Amazon S3 アクセスポイントによるデータアクセスの管理」を参照してください。

7. [公開設定] では、アセットをカタログで即座に検出できるかどうかを選択します。インベントリにのみ追加する場合は、後でサブスクリプション条件を選択してカタログに公開できます。
8. [作成] を選択します。

   アセットが作成されると、カタログ内のアクティブなアセットとして直接公開されるか、公開を決定するまでインベントリに保存されます。

Amazon DataZone カタログからアセットを非公開にする

カタログから Amazon DataZone アセットを非公開にすると、グローバル検索結果に表示されなくなります。新規ユーザーはカタログ内のアセットリストを検索またはサブスクライブすることはできませんが、既存のサブスクリプションはすべて同じままです。

アセットを非公開にするには、アセットが属するプロジェクトの所有者またはコントリビューターである必要があります。

アセットを非公開にするには

1. Amazon DataZone データポータル URL に移動し、シングルサインオン (SSO) または AWS 認証情報を使用してサインインします。Amazon DataZone 管理者の場合は、https://console.aws.amazon.com/datazone で Amazon DataZone コンソールに移動し、ドメインが作成された AWS アカウント でサインインすると、[データポータルを開く] を選択できます。
2. 上部のナビゲーションペインから [プロジェクトを選択] を選択し、アセットが属するプロジェクトを選択します。
3. プロジェクトの [データ] タブに移動します。
4. 左側のナビゲーションペインで [公開されたデータ] を選択します。
5. 公開されたアセットのリストから目的のアセットを見つけ、[非公開] を選択します。

   アセットがカタログから削除されます。[公開] を選択すると、いつでもアセットを再公開できます。

Amazon DataZone アセットを削除する

Amazon DataZone の不要になったアセットは、完全に削除できます。アセットの削除は、カタログからアセットを非公開にするのとは異なります。カタログ内のアセットとその関連リストを削除して、検索結果に表示されないようにすることができます。アセットリストを削除するには、まずそのすべてのサブスクリプションを取り消す必要があります。

アセットを削除するには、アセットが属するプロジェクトの所有者またはコントリビューターである必要があります。

> **Note**
>
> アセットリストを削除するには、まずアセットへの既存のサブスクリプションをすべて取り消す必要があります。既存のサブスクライバーを持つアセットリストは削除できません。

アセットを削除するには

1. Amazon DataZone データポータル URL に移動し、シングルサインオン (SSO) または AWS 認証情報を使用してサインインします。Amazon DataZone 管理者の場合は、https://console.aws.amazon.com/datazone で Amazon DataZone コンソールに移動し、ドメインが作成された AWS アカウント でサインインすると、[データポータルを開く] を選択できます。
2. 上部のナビゲーションペインから [プロジェクトを選択] を選択し、削除するアセットを含むプロジェクトを選択します。
3. プロジェクトの [データ] タブに移動します。
4. 左側のナビゲーションペインから [公開されたデータ] を選択し、削除するアセットを見つけて選択します。選択すると、アセットの詳細ページが開きます。
5. [アクション]、[削除] を選択し、削除を確定します。

   アセットを削除すると、そのアセットは表示できなくなり、ユーザーはアセットをサブスクライブできなくなります。

Amazon DataZone でデータソース実行を手動で開始する

データソースを実行すると、Amazon DataZone はソースから新しいメタデータまたは変更されたメタデータをすべてプルし、インベントリ内の関連するアセットを更新します。Amazon DataZone に

データソースを追加するときに、ソースの実行設定を指定します。これにより、ソースをスケジュールで実行するか、オンデマンドで実行するかを定義します。ソースをオンデマンドで実行する場合は、データソース実行を手動で開始する必要があります。

ソースをスケジュールで実行している場合でも、いつでも手動で実行できます。アセットにビジネスメタデータを追加したら、アセットを選択し、Amazon DataZone カタログに公開して、これらのアセットをすべてのドメインユーザーが検出できるようにします。他のドメインユーザーが検索できるのは、公開されたアセットのみです。

データソースを手動で実行するには

1. Amazon DataZone データポータル URL に移動し、シングルサインオン (SSO) または AWS 認証情報を使用してサインインします。Amazon DataZone 管理者の場合は、https://console.aws.amazon.com/datazone で Amazon DataZone コンソールに移動し、ドメインが作成された AWS アカウント でサインインすると、[データポータルを開く] を選択できます。
2. 上部のナビゲーションペインから [プロジェクトの選択] を選択し、データソースが属するプロジェクトを選択します。
3. プロジェクトの [データ] タブに移動します。
4. 左側のナビゲーションペインから [データソース] を選択し、実行するデータソースを見つけて選択します。これにより、データソースの詳細ページが開きます。
5. [オンデマンドで実行] を選択します。

   Amazon DataZone がアセットメタデータをソースの最新のデータで更新すると、データソースのステータスが `Running` に変わります。[データソース実行] タブで実行のステータスをモニタリングできます。

Amazon DataZone のアセットのリビジョン

Amazon DataZone は、ビジネスメタデータまたは技術メタデータを編集するときに、アセットのリビジョンをインクリメントします。これらの編集には、アセット名、説明、用語集の用語、列名、メタデータフォーム、メタデータフォームフィールド値の変更が含まれます。これらの変更は、手動編集、データソースジョブの実行、または API オペレーションによって発生する可能性があります。Amazon DataZone は、アセットを編集するたびに新しいアセットリビジョンを自動的に生成します。

アセットを更新して新しいリビジョンを生成したら、更新してサブスクライバーが利用できるように、カタログに新しいリビジョンを公開する必要があります。詳細については、「the section called

“プロジェクトインベントリからカタログにアセットを公開する”」を参照してください。カタログに公開できるのは、アセットの最新バージョンのみです。

アセットの過去のリビジョンを表示するには

1. Amazon DataZone データポータル URL に移動し、シングルサインオン (SSO) または AWS 認証情報を使用してサインインします。Amazon DataZone 管理者の場合は、https://console.aws.amazon.com/datazone で Amazon DataZone コンソールに移動し、ドメインが作成された AWS アカウント でサインインすると、[データポータルを開く] を選択できます。
2. 上部のナビゲーションペインから [プロジェクトを選択] を選択し、アセットを含むプロジェクトを選択します。
3. プロジェクトの [データ] タブに移動し、アセットを見つけて選択します。選択すると、アセットの詳細ページが開きます。
4. [履歴] タブに移動し、アセットの過去のリビジョンのリストを表示します。

Amazon DataZone のデータ品質

Amazon DataZone のデータ品質メトリクスは、データソースの完全性、適時性、精度など、さまざまな品質メトリクスを理解するのに役立ちます。Amazon DataZone は AWS Glue Data Quality と統合され、サードパーティーのデータ品質ソリューションのデータ品質メトリクスを統合する APIs を提供します。データユーザーは、サブスクライブしているアセットのデータ品質メトリクスが時間の経過とともにどのように変化するかを確認できます。データ品質ルールを作成して実行するには、AWS Glue データ品質などの任意のデータ品質ツールを使用できます。Amazon DataZone のデータ品質メトリクスを使用すると、データコンシューマーはアセットと列のデータ品質スコアを視覚化できるため、意思決定に使用するデータの信頼性を構築できます。

前提条件と IAM ロールの変更

Amazon DataZone の AWS 管理ポリシーを使用している場合、追加の設定手順はなく、これらの 管理ポリシーは自動的に更新され、データ品質がサポートされます。サポートされているサービスと相互運用するために必要なアクセス許可を Amazon DataZone に付与するロールに独自のポリシーを使用している場合は、これらのロールにアタッチされているポリシーを更新して、 で AWS Glue データ品質情報を読み取るためのサポートを有効にAWS 管理ポリシー: AmazonDataZoneGlueManageAccessRolePolicyし、 AWS 管理ポリシー: AmazonDataZoneDomainExecutionRolePolicy および で時系列 APIs のサポートを有効にする必要がありますAWS マネージドポリシー: AmazonDataZoneFullUserAccess。

Glue AWS アセットのデータ品質の有効化

Amazon DataZone AWS は、ビジネスデータカタログの検索中など、特定の時点にコンテキストを提供するために、 Glue からデータ品質メトリクスを取得します。データユーザーは、サブスクライブしているアセットのデータ品質メトリクスが時間の経過とともにどのように変化するかを確認できます。データプロデューサーは、スケジュールに従って AWS Glue データ品質スコアを取り込むことができます。Amazon DataZone ビジネスデータカタログには、データ品質 API を介してサードパーティーシステムからのデータ品質メトリクスを表示することもできます。詳細については、「AWS Glue Data Quality」および「データカタログの AWS Glue Data Quality の開始方法」を参照してください。

Amazon DataZone アセットのデータ品質メトリクスは、次の方法で有効にできます。

- データポータルまたは Amazon DataZone APIs を使用して、新規作成時または既存の AWS Glue データソースの編集時に、Amazon DataZone データポータルを介して AWS Glue データソースのデータ品質を有効にします。

  ポータル経由でデータソースのデータ品質を有効にする方法の詳細については、「の Amazon DataZone データソースを作成して実行する AWS Glue Data Catalog」を参照してください。

  > **Note**
  >
  > データポータルを使用して、 AWS Glue インベントリアセットのデータ品質のみを有効にできます。このリリースでは、データポータルを介して Amazon Redshift またはカスタムタイプのアセットのデータ品質を有効にする Amazon DataZone はサポートされていません。

  API を使用して、新規または既存のデータソースのデータ品質を有効にすることもできます。これを行うには、CreateDataSource または UpdateDataSource を呼び出し、`autoImportDataQualityResult` パラメータを [True] に設定します。

  データ品質を有効にしたら、オンデマンドまたはスケジュールに従ってデータソースを実行できます。各実行では、アセットごとに最大 100 個のメトリクスを取得できます。データソースをデータ品質に使用する場合に、フォームを作成したり、メトリクスを手動で追加したりする必要はありません。アセットが公開されると、データ品質フォームに対して行われた更新 (履歴ルールごとに最大 30 個データポイント) がコンシューマーのリストに反映されます。その後、アセットにメト

リクスが新しく追加されるたびに、自動的にリストに追加されます。コンシューマーが最新のスコアを使用できるように、アセットを再公開する必要はありません。

カスタムアセットタイプのデータ品質の有効化

Amazon DataZone API を使用して、任意のカスタムタイプのアセットのデータ品質を有効にできます。詳細については次を参照してください:

- PostTimeSeriesDataPoints
- ListTimeSeriesDataPoints
- GetTimeSeriesDataPoint
- DeleteTimeSeriesDataPoints

次の手順では、API または CLI を使用して Amazon DataZone のアセットのサードパーティーメトリクスをインポートする例を示します。

1. `PostTimeSeriesDataPoints` API を次のように呼び出します。

```
aws datazone post-time-series-data-points  \
--cli-input-json file://createTimeSeriesPayload.json \
```

次のペイロードを使用します。

```
"domainId": "dzd_5oo7xzoqltu8mf",
    "entityId": "4wyh64k2n8czaf",
    "entityType": "ASSET",
    "form": {
        "content": "{\n  \"evaluations\" : [ {\n    \"types\" : [ \"MaximumLength
\" ],\n    \"description\" : \"ColumnLength \\\"ShippingCountry\\\" <= 6\",\n
   \"details\" : { },\n    \"applicableFields\" : [ \"ShippingCountry\" ],\n
   \"status\" : \"PASS\"\n  }, {\n    \"types\" : [ \"MaximumLength\" ],\n
 \"description\" : \"ColumnLength \\\"ShippingState\\\" <= 2\",\n    \"details
\" : { },\n    \"applicableFields\" : [ \"ShippingState\" ],\n    \"status\" :
 \"PASS\"\n  }, {\n    \"types\" : [ \"MaximumLength\" ],\n    \"description
\" : \"ColumnLength \\\"ShippingCity\\\" <= 8\",\n    \"details\" : { },\n
 \"applicableFields\" : [ \"ShippingCity\" ],\n    \"status\" : \"PASS\"\n  },
```

```
 {\n    \"types\" : [ \"Completeness\" ],\n    \"description\" : \"Completeness \
\\"ShippingStreet\\\" >= 0.59\",\n    \"details\" : { },\n    \"applicableFields
\" : [ \"ShippingStreet\" ],\n    \"status\" : \"PASS\"\n  }, {\n    \"types\" :
 [ \"MaximumLength\" ],\n    \"description\" : \"ColumnLength \\\"ShippingStreet\\
\" <= 101\",\n    \"details\" : { },\n    \"applicableFields\" : [ \"ShippingStreet
\" ],\n    \"status\" : \"PASS\"\n  }, {\n    \"types\" : [ \"MaximumLength\" ],\n
    \"description\" : \"ColumnLength \\\"BillingCountry\\\" <= 6\",\n    \"details
\" : { },\n    \"applicableFields\" : [ \"BillingCountry\" ],\n    \"status\" :
 \"PASS\"\n  }, {\n    \"types\" : [ \"Completeness\" ],\n    \"description\" :
 \"Completeness \\\"biLlingcountry\\\" >= 0.5\",\n    \"details\" : {\n
 \"EVALUATION_MESSAGE\" : \"Value: 0.26666666666666666 does not meet the constraint
 requirement!\"\n    },\n    \"applicableFields\" : [ \"biLlingcountry\" ],\n
    \"status\" : \"FAIL\"\n  }, {\n    \"types\" : [ \"Completeness\" ],\n
 \"description\" : \"Completeness \\\"Billingstreet\\\" >= 0.5\",\n    \"details
\" : { },\n    \"applicableFields\" : [ \"Billingstreet\" ],\n    \"status\" :
 \"PASS\"\n  } ],\n  \"passingPercentage\" : 88.0,\n  \"evaluationsCount\" : 8\n}",
        "formName": "shortschemaruleset",
        "id": "athp9dyw75gzhj",
        "timestamp": 1.71700477757E9,
        "typeIdentifier": "amazon.datazone.DataQualityResultFormType",
        "typeRevision": "8"
    },
    "formName": "shortschemaruleset"
}
```


このペイロードを取得するには、GetFormType アクションを呼び出します。

```
aws datazone get-form-type --domain-identifier <your_domain_id> --form-type-
identifier amazon.datazone.DataQualityResultFormType --region <domain_region> --
output text --query 'model.smithy'
```

2. DeleteTimeSeriesDataPoints API を次のように呼び出します。

```
aws datazone delete-time-series-data-points\
--domain-identifier dzd_bqqlk3nz21zp2f \
--entity-identifier dzd_bqqlk3nz21zp2f \
--entity-type ASSET \
--form-name rulesET1 \
```

Amazon DataZone での機械学習と生成 AI の使用

> **Note**
>
> Amazon Bedrock を利用: 自動不正検出 AWS を実装します。Amazon DataZone の説明 の AI レコメンデーション機能は Amazon Bedrock 上に構築されているため、ユーザーは Amazon Bedrock に実装されているコントロールを引き継ぎ、AI の安全性、セキュリティ、責任ある使用を実現できます。

Amazon DataZone の現在のリリースでは、名前および説明の AI レコメンデーション機能を使用して、データの検出とカタログ作成を自動化できます。Amazon DataZone での生成 AI のサポートにより、アセットと列のビジネス名と説明が作成されます。これらの名前と説明を使用して、データのビジネスコンテキストを追加し、データセットの分析を推奨できます。これにより、データの検出結果を向上できます。

Amazon Bedrock の大規模言語モデルを搭載した Amazon DataZone のデータアセットの名前と説明に関する AI レコメンデーションは、データが理解しやすく、簡単に検出できることを確認するのに役立ちます。AI レコメンデーションでは、データセットに最も適した分析アプリケーションも提案します。手動ドキュメントタスクを減らし、適切なデータ使用量をアドバイスすることにより、自動生成された名前と説明は、データの信頼性を高め、貴重なデータを見落とさないようにして、情報に基づいた意思決定を加速するのに役立ちます。

サポート対象のリージョン

現在の Amazon DataZone リリースでは、名前と説明の AI レコメンデーション機能は、次のリージョンでサポートされています。

- 米国東部 (バージニア北部)
- 米国西部 (オレゴン)
- アジアパシフィック (東京)
- 欧州 (フランクフルト)
- アジアパシフィック (シドニー)
- カナダ (中部)
- 欧州 (ロンドン)
- 南米 (サンパウロ)

- 欧州 (アイルランド)
- アジアパシフィック (シンガポール)
- 米国東部 (オハイオ)
- アジアパシフィック (ソウル)

Amazon DataZone は、以下のリージョンでビジネス説明の生成をサポートしています。

- アジアパシフィック (ムンバイ)
- 欧州 (パリ)

Amazon DataZone は、以下のリージョンでビジネス名の生成をサポートしています。

- 欧州 (ストックホルム)

> **Bedrock クロスリージョン推論**
>
> Amazon DataZone は、Amazon Bedrock のクロスリージョン推論エンドポイントを活用して、米国東部 (オハイオ) リージョンのレコメンデーションを提供します。他のすべてのリージョンでは、リージョン内エンドポイントが使用されます。

生成 AI を使用するステップ

次の手順では、Amazon DataZone で名前と説明の AI レコメンデーションを生成する方法について説明します。

- Amazon DataZone データポータル URL に移動し、シングルサインオン (SSO) または AWS 認証情報を使用してサインインします。Amazon DataZone 管理者の場合は、https://console.aws.amazon.com/datazone の DataZone コンソールに移動し、ドメインを作成された AWS アカウント でサインインし、[データポータルを開く] を選択します。
- 上部のナビゲーションペインで、[プロジェクトを選択] を選択し、説明の AI レコメンデーションを生成するアセットを含むプロジェクトを選択します。

ビジネスの説明と概要の生成

- プロジェクトの [データ] タブに移動します。

- 左側のナビゲーションペインで、[インベントリデータ] を選択し、アセットに関する説明の AI レコメンデーションを生成するアセットの名前を選択します。
- アセットの詳細ページの [ビジネスメタデータ] タブで、[説明を生成] を選択します。

ビジネス名の生成

- プロジェクトの [データ] タブに移動します。
- 左側のナビゲーションペインで、[データソース] を選択し、ビジネス名の生成を有効にするデータソースを選択します。
- [詳細] タブに移動し、[自動的なビジネス名の生成] 設定を有効にします。
- また、CreateAsset API ペイロードの predictionConfiguration で businessNameGeneration フラグを有効にすることにより、アセットの作成時にプログラムで BusinessNames を生成することもできます。

予測の承認/拒否

- 説明が生成されたら、編集、承認、または拒否できます。
- データアセットに関して自動生成された各メタデータの説明の横には、緑色のアイコンが表示されます。[ビジネスメタデータ] タブで、自動生成された [概要] の横にある緑色のアイコンを選択し、[編集]、[承認]、[拒否] のいずれかを選択して生成された説明に対処できます。
- [ビジネスメタデータ] タブが選択されている場合、ページの上部に表示される [すべて承認] または [すべて拒否] オプションを選択して、自動的生成されたすべての説明に対して選択したアクションを実行することもできます。
- または、[スキーマ] タブを選択し、一度に 1 つ列の説明の緑色のアイコンを選択して [承認] または [拒否] を選択し、自動生成された説明に個別に対処できます。
- [スキーマ] タブで [すべて承認] または [すべて拒否] を選択して、自動生成されたすべての説明に対して選択したアクションを実行することもできます。

生成された説明を使用してアセットをカタログに公開するには、[アセットを公開] を選択し、[アセットを公開] ポップアップウィンドウで [アセットを公開] を再度選択して、このアクションを確定します。

> **Note**
>
> アセットに関して生成された説明を承認も拒否もせず、このアセットを公開した場合、この未確認の自動生成されたメタデータは公開されたデータアセットに含まれません。

カスタムリレーショナルアセットタイプのサポート

Amazon DataZone は、カスタムアセットタイプの生成 AI 機能をサポートしています。以前は、この機能はマネージド AWS Glue および AMazon Redshift アセットタイプでのみサポートされていました。

この機能を有効にするには、独自のアセットタイプ定義を作成し、フォームの 1 つとして `RelationalTableFormType` をアタッチします。Amazon DataZone はそのようなフォームの存在を自動的に検出し、これらのアセットの生成 AI 機能を有効にします。全体的なエクスペリエンスは、ビジネス名の生成 (CreateAsset API の predictionConfiguration 経由) と businessDescription (アセットの詳細ページの [説明の生成] ボタンをクリック) で変わりません。

カスタムアセットタイプの作成に関する詳細については、「Amazon DataZone でカスタムアセットタイプを作成する」を参照してください。

クォータ

Amazon DataZone は、ビジネス名の生成とビジネス説明の生成にさまざまなクォータをサポートしています。これらのクォータの引き上げについては、 AWS サポートチームにお問い合わせください。

- BusinessDescriptionGeneration: 1 万呼び出し/月
- BusinessNameGeneration: 5 万呼び出し/月

Amazon DataZone のデータリネージュのサポート

Amazon DataZone のデータリネージュは、OpenLineage 互換機能であり、OpenLineage 対応システムまたは API を介してリネージュイベントをキャプチャして視覚化し、データオリジンを追跡し、変化を追跡して、組織間のデータ消費を表示できます。これにより、データアセットを包括的に表示して、アセットのオリジンとその接続チェーンを確認できます。リネージュデータには、カタログ化されたアセットと、それらのアセットのサブスクライバーに関する情報などの、Amazon

DataZone のビジネスデータカタログ内のアクティビティに関する情報と、API を使用してプログラムでキャプチャされたビジネスデータカタログ外で発生するアクティビティに関する情報が含まれます。

トピック

- Amazon DataZone のリネージュノードのタイプ
- リネージュノードの主要な属性
- データリネージュの視覚化
- Amazon DataZone のデータリネージュ認証
- Amazon DataZone でのデータリネージュのサンプルエクスペリエンス
- マネジメントコンソールでデータリネージュを有効にする
- Amazon DataZone データリネージュのプログラムによる使用
- Glue AWS カタログの系統を自動化する
- Amazon Redshift からリネージュを自動化する

Amazon DataZone AWS に追加されると、 Glue および Amazon Redshift データベースから自動的にキャプチャされるように系統を設定できます。さらに、Spark ETL ジョブは Glue (v5.0 以降) AWS コンソールまたはノートブックで実行され、Amazon DataZone ドメインに系統イベントを送信するように設定できます。

Amazon DataZone では、ドメイン管理者はデータレイクとデータウェアハウスの組み込みブループリントをセットアップしながらリネージュを設定できます。これにより、これらのリソースから作成されたすべてのデータソース実行がリネージュの自動キャプチャで有効になります。

Amazon DataZone の OpenLineage 互換 APIs を使用すると、ドメイン管理者とデータプロデューサーは、Amazon S3、Glue、その他の サービスでの変換など、Amazon DataZone で利用できる以上の系統イベントをキャプチャして保存できます。 AWS これにより、データコンシューマーに包括的なビューが提供され、アセットのオリジンの信頼性を高めることができます。一方、データプロデューサーは、アセットの使用状況を理解することで、アセットの変化の影響を評価できます。さらに、Amazon DataZone バージョンは各イベントを使用してリネージュを実行し、ユーザーが任意の時点でリネージュを視覚化したり、アセットまたはジョブの履歴全体の変化を比較したりできます。この履歴のリネージュにより、データアセットの整合性のトラブルシューティング、監査、確認に不可欠な、データの進化方法をより深く理解できます。

データリネージュを使用すると、Amazon DataZone で以下を実行できます。

- データの出所を理解する: データの出所を理解することで、データオリジン、依存関係、変化を明確に理解し、データへの信頼性を向上させることができます。この透明性は、自信を持ってデータに基づくの意思決定を行うのに役立ちます。
- データパイプラインへの変更の影響を理解する: データパイプラインに変更を加えると、リネージュを使用して、影響を受けるすべてのダウンストリームコンシューマーを特定できます。これにより、重要なデータフローを中断することなく変更が行われます。
- データ品質問題の根本原因を特定する: ダウンストリームレポートでデータ品質の問題が検出された場合、リネージュの中でも特に列レベルのリネージュを使用してデータをトレースし (列レベルで)、問題を特定してソースに戻すことができます。これにより、データエンジニアは問題を特定して修正できます。
- データガバナンスとコンプライアンスの向上: 列レベルのリネージュを使用して、データガバナンスとプライバシー規制へのコンプライアンスを示すことができます。例えば、列レベルのリネージュを使用して、機密データ (PII など) の保存場所とダウンストリームアクティビティでの処理方法を表示できます。

Amazon DataZone のリネージュノードのタイプ

Amazon DataZone では、データリネージュ情報はテーブルとビューを表すノードに表示されます。例えば、データポータルの左上で選択されたプロジェクトなど、プロジェクトのコンテキストに応じて、プロデューサーはインベントリアセットと公開アセットの両方を表示できますが、コンシューマーは公開アセットのみを表示できます。アセットの詳細ページでリネージュタブを初めて開くと、カタログ化されたデータセットノードがリネージュグラフのリネージュノードをアップストリームまたはダウンストリームに移動する出発点になります。

Amazon DataZone でサポートされているデータリネージュノードのタイプを次に示します。

- データセットノード - このノードタイプには、特定のデータアセットに関するデータリネージュ情報が含まれます。
  - Amazon DataZone カタログで公開された AWS Glue または Amazon Redshift アセットに関する情報を含むデータセットノードは自動生成され、ノード内に対応する AWS Glue または Amazon Redshift アイコンが含まれます。
  - Amazon DataZone カタログで公開されていないアセットに関する情報を含むデータセットノードは、ドメイン管理者 (プロデューサー) によって手動で作成され、ノード内のデフォルトのカスタムアセットアイコンで表されます。

- ジョブ (実行) ノード - このノードタイプには、特定のジョブの最新実行と実行の詳細など、ジョブの詳細が表示されます。このノードはジョブの複数の実行もキャプチャし、ノードの詳細の [履歴] タブで表示できます。ノードアイコンを選択すると、ノードの詳細を表示できます。

リネージュノードの主要な属性

リネージュノードの sourceIdentifier 属性は、データセットで発生するイベントを表します。リネージュノードの sourceIdentifier は、データセットの識別子 (テーブル/ビューなど) です。リネージュノードでの一意性の適用に使用されます。例えば、同じ sourceIdentifier を持つ 2 つのリネージュノードを使用することはできません。以下は、さまざまなタイプのノードの sourceIdentifier 値の例です。

- それぞれのデータセットタイプを持つデータセットノードの場合 :
  - アセット: amazon.datazone.asset/<assetId>
  - リスト (公開されたアセット): amazon.datazone.listing/<listingId>
  - AWS Glue テーブル: arn:aws:glue:<region>:<account-id>:table/<database>/<table-name>
  - Amazon Redshift table/view: arn:aws:<redshift/redshift-serverless>:<region>:<account-id>:<table-type(table/view etc)>/<clusterIdentifier/workgroupName>/<database>/<schema>/<table-name>
  - オープンリネージュ実行イベントを使用してインポートされた他のタイプのデータセットノードでは、入力/出力データセットの <namespace>/<name> がノードの sourceIdentifier として使用されます。
- ジョブの場合:
  - オープンリネージュ実行イベントを使用してインポートされたジョブノードの場合、<jobs_namespace>.<job_name> が sourceIdentifier として使用されます。
- ジョブ実行の場合:
  - オープンリネージュ実行イベントを使用してインポートされたジョブ実行ノードの場合、<jobs_namespace>.<job_name>/<run_id> が sourceIdentifier として使用されます。

createAsset API を使用して作成されたアセットの場合、アセットをアップストリームリソースにマッピングできるようにするには、createAssetRevision API を使用して sourceIdentifier を更新する必要があります。

データリネージュの視覚化

Amazon DataZone のアセット詳細ページでは、データリネージュをグラフィカルに表現できるため、アップストリームまたはダウンストリームのデータ関係を簡単に視覚化できます。アセットの詳細ページには、グラフを操作するための以下の機能があります。

- 列レベルのリネージュ: データセットノードで使用可能な場合は、列レベルのリネージュを拡張します。これにより、ソース列の情報が利用可能な場合、アップストリームまたはダウンストリームのデータセットノードとの関係が自動的に表示されます。
- 列検索: 列数のデフォルト表示が 10 の場合。列が 10 列を超える場合、ページ分割がアクティブになり、残りの列に移動できます。特定の列をすばやく表示するには、検索した列のみを一覧表示するデータセットノードで検索できます。
- データセットノードのみを表示: データセットリネージュノードのみを表示し、ジョブノードを除外するように切り替える場合は、グラフビューワーの左上にあるオープンビューコントロールアイコンを選択し、[データセットノードのみを表示] オプションに切り替えることができます。これにより、すべてのジョブノードがグラフから削除され、データセットノードのみを表示できます。データセットノードのみの表示がオンになっている場合、グラフをアップストリームまたはダウンストリームに拡張することはできません。
- 詳細ペイン: 各リネージュノードの詳細がキャプチャされ、選択時に表示されます。
  - データセットノードには詳細ペインがあり、特定のタイムスタンプでそのノードについてキャプチャされたすべての詳細が表示されます。すべてのデータセットノードには、リネージュ情報、スキーマ、履歴タブの 3 つのタブがあります。履歴タブには、そのノードでキャプチャされたリネージュイベントのさまざまなバージョンが一覧表示されます。API からキャプチャされたすべての詳細は、メタデータフォームまたは JSON ビューワーを使用して表示されます。
  - ジョブノードには、ジョブ情報、履歴などのタブでジョブの詳細を表示する詳細ペインがあります。詳細ペインは、ジョブ実行の一環としてキャプチャされたクエリまたは式もキャプチャします。履歴タブには、そのジョブでキャプチャされたジョブ実行イベントのさまざまなバージョンが一覧表示されます。API からキャプチャされたすべての詳細は、メタデータフォームまたは JSON ビューワーを使用して表示されます。
- バージョンタブ: Amazon DataZone データリネージュのすべてのリネージュノードにバージョニングがあります。すべてのデータセットノードまたはジョブノードについて、バージョンが履歴としてキャプチャされるため、異なるバージョン間を移動して、時間とともに何が変更されたかを特定できます。各バージョンでは、リネージュページに新しいタブが開き、比較やコントラストに役立ちます。

Amazon DataZone のデータリネージュ認証

書き込みアクセス許可 - リネージュデータを Amazon DataZone に公開するには、PostLineageEvent API の ALLOW アクションを含むアクセス許可ポリシーを持つ IAM ロールが必要です。この IAM 認証は API ゲートウェイレイヤーで行われます。

読み取りアクセス許可 - GetLineageNode と ListLineageNodeHistory の 2 つのオペレーションがあります。これらは AmazonDataZoneDomainExecutionRolePolicy マネージドポリシーに含まれているため、Amazon DataZone ドメインのすべてのユーザーがこれらを呼び出してデータリネージュグラフをトラバースできます。

Amazon DataZone でのデータリネージュのサンプルエクスペリエンス

データリネージュのサンプルエクスペリエンスを使用して、データリネージュグラフのアップストリームまたはダウンストリームのトラバース、バージョンと列レベルリネージュの探索など、Amazon DataZone のデータリネージュを参照して理解できます。

Amazon DataZone でデータリネージュのサンプルエクスペリエンスを試すには、以下の手順を実行します。

1. Amazon DataZone データポータル URL に移動し、シングルサインオン (SSO) または AWS 認証情報を使用してサインインします。Amazon DataZone 管理者の場合は、https://console.aws.amazon.com/datazone で Amazon DataZone コンソールに移動し、ドメインが作成された AWS アカウント でサインインすると、[データポータルを開く] を選択できます。
2. 使用可能なデータアセットを選択して、アセットの詳細ページを開きます。
3. アセットの詳細ページで、[リネージュ] タブを選択し、情報アイコンにマウスカーソルを合わせ、[サンプルリネージュを試す] を選択します。
4. データリネージュポップアップウィンドウで、[データリネージュのガイド付きツアーを開始] を選択します。

   この時点で、リネージュ情報のすべてのスペースを提供する全画面タブが表示されます。サンプルデータリネージュグラフは、最初は、アップストリームとダウンストリームの両端に 1 深度のベースノードで表示されます。グラフはアップストリームまたはダウンストリームに展開できます。列情報は、リネージュがノードをどのように流れるかを選択して確認することもできます。

マネジメントコンソールでデータリネージュを有効にする

デフォルトデータレイクとデフォルトデータウェアハウスのブループリントの設定の一環として、データリネージュを有効にできます。

デフォルトデータレイクのブループリントのデータリネージュを有効にするには、次の手順を実行します。

1. https://console.aws.amazon.com/datazone で Amazon DataZone コンソールに移動し、アカウントの認証情報を使用してサインインします。
2. [ドメインを表示] を選択し、DefaultDataLake ブループリントのデータリネージュを有効にするドメインを選択します。
3. ドメインの詳細ページで、[ブループリント] タブに移動します。
4. DefaultDataLake ブループリントの詳細ページで、[リージョン] タブを選択します。
5. DefaultDataLake ブループリントのリージョンの追加の一環として、データリネージュを有効にできます。したがって、リージョンが既に追加されているが、そのリージョンのデータリネージュ機能が有効になっていない場合 ([データリネージュをインポート] 列に [いいえ] が表示される場合) は、まずこのリージョンを削除する必要があります。データリネージュを有効にするには、[リージョンを追加] を選択して追加するリージョンを選択し、[リージョンを追加] ポップアップウィンドウで [データリネージュのインポートを有効化] チェックボックスをオンにします。

DefaultDataWarehouse ブループリントのデータリネージュを有効にするには、次の手順を実行します。

1. https://console.aws.amazon.com/datazone で Amazon DataZone コンソールに移動し、アカウントの認証情報を使用してサインインします。
2. [ドメインを表示] を選択し、DefaultDataWarehouse ブループリントのデータリネージュを有効にするドメインを選択します。
3. ドメインの詳細ページで、[ブループリント] タブに移動します。
4. DefaultDataWarehouse ブループリントの詳細ページで、[パラメータセット] タブを選択します。
5. DefaultDataWarehouse ブループリントのパラメータセットの追加の一環として、データリネージュを有効にできます。これを行うには、[パラメータセットを作成] を選択します。
6. [パラメータセットを作成] ページで、以下を指定し、[パラメータセットを作成] を選択します。

- パラメータセットの名前。
- パラメータセットの説明。
- AWS 環境を作成するリージョン。
- Amazon DataZone がこれらのパラメータを使用して Amazon Redshift クラスターまたはサーバーレスワークグループへの接続を確立するかどうかを指定します。
- AWS シークレットを指定します。
- 環境の作成時に使用するクラスターまたはサーバーレスワークグループを指定します。
- 環境の作成時に使用する (指定したクラスターまたはワークグループ内にある) データベースの名前を指定します。
- [データリネージュをインポート] で、[データリネージュのインポートを有効化] をオンにします。

Amazon DataZone データリネージュのプログラムによる使用

Amazon DataZone でデータリネージュ機能を使用するには、次の API を呼び出します。

- GetLineageNode
- ListLineageNodeHistory
- PostLineageEvent

Glue AWS カタログの系統を自動化する

AWS Glue データベースとテーブルが Amazon DataZone カタログに追加されると、データソース実行を使用してそれらのテーブルの系統抽出が自動化されます。このソースでは、リネージュの自動化が適用されている方法は限られています。

- ブループリント設定 - ブループリントを設定する管理者は、リネージュを自動的にキャプチャするようにブループリントを設定できます。これにより、管理者はデータプロデューサーがデータをカタログ化するのではなく、リネージュのキャプチャにとって重要なデータソースを定義できます。詳細については、「マネジメントコンソールでデータリネージュを有効にする」を参照してください。
- データソース設定 - データプロデューサーは、 AWS Glue データベースのデータソース実行を設定するときに、データソースの自動データリネージについて通知するために、Data Quality とともにビューが表示されます。

- リネージュ設定は、[データソース定義] タブで表示できます。データプロデューサーはこの値を編集できません。
- データソース実行の系統コレクションは、テーブルメタデータから情報を取得して系統を構築します。 AWS Glue クローラはさまざまなタイプのソースをサポートし、データソース実行の一部として系統がキャプチャされるソースには、Amazon S3、DynamoDB、カタログ、Delta Lake、Iceberg テーブル、および Amazon S3 に保存されている Hudi テーブルが含まれます。JDBC および DocumentDB または MongoDB は現在、ソースとしてサポートされていません。
- 制限 - テーブルの数が 100 を超える場合、リネージュの実行は 100 個のテーブルの後に失敗します。実行時に 100 を超えるテーブルを取り込むように AWS Glue クローラが設定されていないことを確認します。

- AWS Glue (v5.0) 設定 - Glue Studio AWS で AWS Glue ジョブを実行するときに、ジョブが系統イベントを Amazon DataZone ドメインに直接送信するようにデータ系統を設定できます。

  1. https://console.aws.amazon.com/gluestudio AWS の Glue コンソールに移動し、アカウントの認証情報を使用してサインインします。
  2. [ETL ジョブ] を選択し、新しいジョブを作成するか、既存のジョブのいずれかをクリックします。
  3. [ジョブの詳細] (ETL フロージョブを含む) タブに移動し、下にスクロールして [リネージュイベントの生成] セクションに移動します。
  4. チェックボックスをオンにしてリネージュイベントの送信を有効にして展開し、Amazon DataZone ドメイン ID を入力する入力フィールドを表示します。

- AWS Glue (V5.0) ノートブック設定 - ノートブックでは、%%configure マジックを追加することで Spark 実行のコレクションを自動化できます。この設定は、Amazon DataZone ドメインにイベントを送信します。

```
%%configure --name project.spark -f
{
    "--
conf":"spark.extraListeners=io.openlineage.spark.agent.OpenLineageSparkListener
 --conf spark.openlineage.transport.type=amazon_datazone_api --
conf spark.openlineage.transport.domainId={DOMAIN_ID}  --conf
 spark.glue.accountId={ACCOUNT_ID} --conf
 spark.openlineage.facets.custom_environment_variables=[AWS_DEFAULT_REGION;GLUE_VERSION;GLUE_
 --conf spark.glue.JOB_NAME={JOB_NAME}"
}
```

デフォルトのパラメータは以下のとおりです。

- `spark.extraListeners=io.openlineage.spark.agent.OpenLineageSparkListener` - OpenLineageSparkListener が作成され、Spark のリスナーバスに登録されます
- `spark.openlineage.transport.type=amazon_datazone_api` - これは、DataZone API トランスポートを使用して DataZone の PostLineageEvent API にリネージュイベントを出力するように OpenLineage プラグインに指示する OpenLineage 仕様です。詳細については、「https://openlineage.io/docs/integrations/spark/configuration/spark_conf」を参照してください。
- `spark.openlineage.transport.domainId={DOMAIN_ID}` - このパラメータは、API トランスポートがリネージュイベントを送信する先のドメインを確立します。
- `spark.openlineage.facets.custom_environment_variables [AWS_DEFAULT_REGION;GLUE_VERSION;GLUE_COMMAND_CRITERIA;GLUE_PYTHON_VERSION;]` - Glue インタラクティブセッションが入力する次の環境変数 (AWS_DEFAULT_REGION、GLUE_VERSION、GLUE_COMMAND_CRITERIA、および GLUE_PYTHON_VERSION) が LineageEvent に追加されます
- `spark.glue.accountId=<ACCOUNT_ID>` - メタデータが存在する Glue データカタログのアカウント ID。このアカウント ID は、リネージュイベントで Glue ARN を構築するために使用されます。
- `spark.glue.JOB_NAME` - リネージュイベントのジョブ名。ノートブックのジョブ名は `spark.glue.JOB_NAME: ${projectId}.${pathToNotebook}` として設定できます。

- AWS Glue から Amazon DataZone への通信を設定するパラメータを設定する

  パラメータキー: --conf

  パラメータ値:

```
spark.extraListeners=io.openlineage.spark.agent.OpenLineageSparkListener
--conf spark.openlineage.transport.type=amazon_datazone_api
--conf spark.openlineage.transport.domainId=<DOMAIN_ID>
--conf
 spark.openlineage.facets.custom_environment_variables=[AWS_DEFAULT_REGION;GLUE_VERSION;GLUE_
--conf spark.glue.accountId=<ACCOUNT_ID> (replace <DOMAIN_ID> and <ACCOUNT_ID> with
 the right values)
```

ノートブックには、さらに次のパラメータを追加します。

```
--conf spark.glue.JobName=<SessionId> --conf spark.glue.JobRunId=<SessionId or NONE?>
replace <SessionId> and <SessionId> with the right values
```

Amazon Redshift からリネージュを自動化する

管理者が設定したデータウェアハウスのブループリントを使用して Amazon Redshift サービスからリネージュをキャプチャすると、リネージュは Amazon DataZone によって自動的にキャプチャされます。リネージュ実行は、特定のデータベースに対して実行されたクエリをキャプチャし、Amazon DataZone に保存されてデータプロデューサーまたはデータコンシューマーが特定のアセットに移動するときに表示されるリネージュイベントを生成します。

リネージュは、次の設定を使用して自動化できます。

- ブループリント設定: ブループリントを設定する管理者は、リネージュを自動的にキャプチャするようにブループリントを設定できます。これにより、管理者はデータプロデューサーがデータをカタログ化するのではなく、リネージュのキャプチャにとって重要なデータソースを定義できます。セットアップするには、「マネジメントコンソールでデータリネージュを有効にする」を参照してください。
- データソース設定: データプロデューサーは、Amazon Redshift データベースのデータソース実行を設定する際に、そのデータソースの自動データリネージュ設定が表示されます。

  リネージュ設定は、[データソース定義] タブで表示できます。データプロデューサーはこの値を編集できません。

公開のためのメタデータ適用ルール

Amazon DataZone で公開するためのメタデータ適用ルールは、ドメインユニットの所有者がデータプロデューサーの明確なメタデータ要件を確立し、アクセスリクエストを合理化し、データガバナンスを向上させることにより、データガバナンスを強化します。

この機能は、Amazon DataZone が現在利用可能なすべての AWS 商用リージョンでサポートされています。

ドメインユニットの所有者は、次の手順を実行して Amazon DataZone でメタデータの適用を設定できます。

1. データポータル URL を使用して Amazon DataZone データポータルに移動し、SSO または AWS 認証情報を使用してログインします。Amazon DataZone 管理者の場合は、Amazon DataZone ドメインが作成された AWS アカウントの https://console.aws.amazon.com/datazone にある Amazon DataZone コンソールにアクセスして、データポータル URL を取得できます。
2. [ドメイン] を選択し、[ドメインユニット] タブに移動して、操作するドメインユニットを選択します。
3. [ルール] タブを選択し、[追加] を選択します。
4. [必要なメタデータフォームルールを作成] ページで、次の操作を行い、[ルールを追加] を選択します。

   - ルールの名前を指定します。
   - [アクション] で、[データアセットと製品の公開] を選択します。
   - [必須フォーム] で、[メタデータフォームを追加] を選択し、このルールに追加するドメイン/ドメインユニット内のメタデータフォームを選択して、[追加] を選択します。1 件のルールあたり最大 5 個のメタデータフォームを追加できます。
   - [スコープ] で、これらのフォームを関連付けるデータエンティティを指定します。データ製品やデータアセットを選択できます。
   - [データアセットタイプ] で、ルールをすべてのアセットタイプに適用するか、選択したアセットタイプに制限するかを指定します。
   - [プロジェクト] で、必要なフォームを、すべてのプロジェクトによって発行されたデータ製品やアセットに関連付けるか、このドメインユニット内の選択したプロジェクトのみに関連付けるかを指定します。また、子ドメインユニットがこの要件を継承する場合は、[子ドメインユニットに対するカスケードルール] を確認してください。

Amazon DataZone データ製品

Amazon DataZone を使用すると、データプロデューサーはデータアセットを、特定のビジネスユースケースに合わせてカスタマイズされた、データ製品と呼ばれる明確に定義された自己完結型のパッケージにグループ化できます。一貫性のある、ビジネスに合ったデータ製品を使用すると、公開プロセスとサブスクリプションプロセスの両方が強化されます。データコンシューマーは、相互接続されたデータアセットを 1 つのユニットとして検索して見つけることで、簡単に識別できます。このアプローチにより、すべての関連情報を見つけるために必要な時間と労力が削減され、重要なデータが欠落するリスクが軽減されます。また、データ製品では、統合アクセスモデルを実装することで、データへのアクセスが 1 つのリクエストで済むため簡素化されます。これにより、複数のアクセス許可が不要になり、データ分析の開始が迅速化されます。さらに、アセットをデータ製品としてカタログ化することで、データプロデューサーはメタデータとアクセスコントロールの管理を、個別ではなく、データ製品レベルで有効にして、管理上のオーバーヘッドを削減できます。さらに、これらの専用のグループ化されたアセットを消費用に表示できるため、アクセスガバナンスとデータ使用が効率化され、ビジネス目標に沿ったものとなり、使用目的に合わせて簡単に利用できるようになります。データガバナンスチームは、こうしたデータ製品の消費率をモニタリングし、データリテラシーの成熟度に関する貴重なインサイトを提供できます。詳細については、「Amazon DataZone の用語と概念」を参照してください。

トピック

- Amazon DataZone で新しいデータ製品を作成する
- Amazon DataZone でデータ製品を公開する
- Amazon DataZone でデータ製品を編集する
- Amazon DataZone でデータ製品を非公開にする
- Amazon DataZone でデータ製品を削除する
- Amazon DataZone でデータ製品をサブスクライブする
- サブスクリプションリクエストを確認し、Amazon DataZone でデータ製品にサブスクリプションを付与する
- Amazon DataZone でデータ製品を再公開する

Amazon DataZone で新しいデータ製品を作成する

Amazon DataZone を使用すると、データプロデューサーはデータアセットを、特定のビジネスユースケースに合わせてカスタマイズされた、データ製品と呼ばれる明確に定義された自己完結型のパッ

ケージにグループ化できます。詳細については、「Amazon DataZone の用語と概念」を参照してください。

データ製品を作成するには、そのプロジェクトの所有者または寄稿者である必要があります。

新しいデータ製品を作成するには、以下の手順を完了します。

1. Amazon DataZone データポータル URL に移動し、シングルサインオン (SSO) または AWS 認証情報を使用してサインインします。Amazon DataZone 管理者の場合は、https://console.aws.amazon.com/datazone で Amazon DataZone コンソールに移動し、ドメインが作成された AWS アカウント でサインインすると、[データポータルを開く] を選択できます。
2. Amazon DataZone データポータルで、データ製品を作成するプロジェクトを選択します。
3. [データ] タブ、[インベントリデータ]、[新しいデータ製品を作成] の順に選択します。
4. [新しいデータ製品を作成] ページで、データ製品の名前と説明を指定し、[アセットを選択] を選択してデータ製品にさまざまなアセットを追加します。[アセットを選択] ポップアップウィンドウで、このデータ製品に追加するアセットを選択し、[選択] を選択します。データ製品の作成を完了するには、[作成] を選択します。

Amazon DataZone でデータ製品を公開する

Amazon DataZone を使用すると、データプロデューサーはデータアセットを、特定のビジネスユースケースに合わせてカスタマイズされた、データ製品と呼ばれる明確に定義された自己完結型のパッケージにグループ化できます。詳細については、「Amazon DataZone の用語と概念」を参照してください。

データ製品を公開するには、そのプロジェクトの所有者または寄稿者である必要があります。公開のメタデータ適用ルールを設定して、データプロデューサーの明確なメタデータ要件を確立し、データ製品を公開できるタイミングを制限できます。

データ製品を公開するには、以下の手順を完了します。

1. Amazon DataZone データポータル URL に移動し、シングルサインオン (SSO) または AWS 認証情報を使用してサインインします。Amazon DataZone 管理者の場合は、https://console.aws.amazon.com/datazone で Amazon DataZone コンソールに移動し、ドメインが作成された AWS アカウント でサインインすると、[データポータルを開く] を選択できます。
2. Amazon DataZone データポータルで、公開するデータ製品が含まれているプロジェクトを選択します。

3. [データ] タブ、[インベントリデータ]、[データ製品] フィルターの順に選択します。これにより、非公開の既存のデータ製品がすべて表示されます。
4. 公開するデータ製品を選択し、[公開] を選択します。[データ製品を公開] を選択して、このデータ製品の公開を確定します。

> **Note**
>
> このデータ製品に含まれる非公開のデータアセットは公開されますが、このデータ製品を通じてのみ使用可能です。

Amazon DataZone でデータ製品を編集する

Amazon DataZone を使用すると、データプロデューサーはデータアセットを、特定のビジネスユースケースに合わせてカスタマイズされた、データ製品と呼ばれる明確に定義された自己完結型のパッケージにグループ化できます。詳細については、「Amazon DataZone の用語と概念」を参照してください。

データ製品を編集するには、データ製品が属するプロジェクトの所有者または寄稿者である必要があります。

データ製品を編集するには、以下の手順を完了します。

1. Amazon DataZone データポータル URL に移動し、シングルサインオン (SSO) または AWS 認証情報を使用してサインインします。Amazon DataZone 管理者の場合は、https://console.aws.amazon.com/datazone で Amazon DataZone コンソールに移動し、ドメインが作成された AWS アカウント でサインインすると、[データポータルを開く] を選択できます。
2. Amazon DataZone データポータルで、公開するデータ製品が含まれているプロジェクトを選択します。
3. [データ] タブ、[インベントリデータ] または [公開データ]、[データ製品] フィルターの順に選択します。
4. 編集するデータ製品を選択します。データ製品の編集の一環として、以下を実行できます。
   - [README を作成] を選択して README を追加すると、ユーザーがこのページをよりよく理解できるようになります。
   - 用語集の用語を追加するには、[用語を追加] を選択します。 ウィンドウで用語集の用語を選択し、[用語を追加] を選択します。

- [メタデータフォームを追加] を選択し、[メタデータフォームを追加] ウィンドウでフォームを選択してから [追加] を選択します。
- [アクション] を展開し、[編集] を選択して、データ製品の名前と説明を編集してから [更新] を選択します。

Amazon DataZone でデータ製品を非公開にする

Amazon DataZone を使用すると、データプロデューサーはデータアセットを、特定のビジネスユースケースに合わせてカスタマイズされた、データ製品と呼ばれる明確に定義された自己完結型のパッケージにグループ化できます。詳細については、「Amazon DataZone の用語と概念」を参照してください。

データ製品を非公開にするには、データ製品が属するプロジェクトの所有者または寄稿者である必要があります。

データ製品を非公開にするには、以下の手順を完了します。

1. Amazon DataZone データポータル URL に移動し、シングルサインオン (SSO) または AWS 認証情報を使用してサインインします。Amazon DataZone 管理者の場合は、https://console.aws.amazon.com/datazone で Amazon DataZone コンソールに移動し、ドメインが作成された AWS アカウント でサインインすると、[データポータルを開く] を選択できます。
2. Amazon DataZone データポータルで、非公開にするデータ製品が含まれているプロジェクトを選択します。
3. [データ] タブ、[インベントリデータ] または [公開データ]、[データ製品] フィルターの順に選択します。これにより、既存のデータ製品がすべて表示されます。
4. 非公開にするデータ製品を選択し、[アクション] を展開して [非公開] を選択します。[非公開] を選択して、このデータ製品の非公開を確定します。

> **Note**
>
> データ製品を非公開にすると、次の効果があります。
>
> - このデータ製品は表示やサブスクライブができなくなります。
> - このデータ製品でのみ使用可能なデータアセットは使用できなくなります。
> - このデータ製品のアクティブなサブスクリプションは、すべてそのまま残ります。
> - 個別に公開されたデータアセットは影響を受けません。

Amazon DataZone でデータ製品を削除する

Amazon DataZone を使用すると、データプロデューサーはデータアセットを、特定のビジネスユースケースに合わせてカスタマイズされた、データ製品と呼ばれる明確に定義された自己完結型のパッケージにグループ化できます。詳細については、「Amazon DataZone の用語と概念」を参照してください。

データ製品を削除するには、データ製品が属するプロジェクトの所有者または寄稿者である必要があります。

データ製品を削除するには、以下の手順を完了します。

1. Amazon DataZone データポータル URL に移動し、シングルサインオン (SSO) または AWS 認証情報を使用してサインインします。Amazon DataZone 管理者の場合は、https://console.aws.amazon.com/datazone で Amazon DataZone コンソールに移動し、ドメインが作成された AWS アカウント でサインインすると、[データポータルを開く] を選択できます。
2. Amazon DataZone データポータルで、削除するデータ製品が含まれているプロジェクトを選択します。
3. [データ] タブ、[インベントリデータ] または [公開データ]、[データ製品] フィルターの順に選択します。これにより、既存のデータ製品がすべて表示されます。
4. 削除するデータ製品を選択し、[アクション] を展開して [削除] を選択します。テキストフィールドに `delete` を入力し、[削除] を選択して、このデータ製品の削除を確定します。

> **Note**
>
> データ製品を削除すると、次の効果があります。
>
> - データ製品は、公開も表示もサブスクライブもできなくなります。
> - このデータ製品でのみ使用可能なデータアセットは、データカタログに表示されなくなります。インベントリアセットから削除されることはありません。

Amazon DataZone でデータ製品をサブスクライブする

Amazon DataZone を使用すると、データプロデューサーはデータアセットを、特定のビジネスユースケースに合わせてカスタマイズされた、データ製品と呼ばれる明確に定義された自己完結型のパッケージにグループ化できます。詳細については、「Amazon DataZone の用語と概念」を参照してください。

データポータルにアクセスするために必要なアクセス許可を持つ Amazon DataZone ユーザーは、Amazon DataZone データ製品をサブスクライブできます。

データ製品をサブスクライブするかサブスクリプション解除をするには、以下の手順を完了します。

1. Amazon DataZone データポータル URL に移動し、シングルサインオン (SSO) または AWS 認証情報を使用してサインインします。Amazon DataZone 管理者の場合は、https://console.aws.amazon.com/datazone で Amazon DataZone コンソールに移動し、ドメインが作成された AWS アカウント でサインインすると、[データポータルを開く] を選択できます。
2. [カタログを閲覧] を選択してサブスクライブするデータ製品を検索し、そのデータ製品を選択します。
3. データ製品の詳細ページで、[サブスクライブ] を選択します。
4. プロジェクトとサブスクライブの理由を指定し、[サブスクライブ] を選択します。

サブスクリプションリクエストを確認し、Amazon DataZone でデータ製品にサブスクリプションを付与する

Amazon DataZone を使用すると、データプロデューサーはデータアセットを、特定のビジネスユースケースに合わせてカスタマイズされた、データ製品と呼ばれる明確に定義された自己完結型のパッケージにグループ化できます。詳細については、「Amazon DataZone の用語と概念」を参照してください。

データ製品の所有プロジェクトは、Amazon DataZone データ製品へのサブスクリプションを確認して付与できます。

サブスクリプションリクエストを確認し、データ製品にサブスクリプションを付与するには、以下のステップを実行します。

1. Amazon DataZone データポータル URL に移動し、シングルサインオン (SSO) または AWS 認証情報を使用してサインインします。Amazon DataZone 管理者の場合は、https://console.aws.amazon.com/datazone で Amazon DataZone コンソールに移動し、ドメインが作成された AWS アカウント でサインインすると、[データポータルを開く] を選択できます。
2. 確認する受信サブスクリプションリクエストがあるデータ製品を所有するプロジェクトを選択します。
3. [データ] タブを選択し、[受信リクエスト] を選択します。

4. 確認するリクエストを選択し、[サブスクリプションリクエスト] ウィンドウで [承認] または [拒否] を選択し、決定に関するコメントを入力します。

Amazon DataZone でデータ製品を再公開する

Amazon DataZone を使用すると、データプロデューサーはデータアセットを、特定のビジネスユースケースに合わせてカスタマイズされた、データ製品と呼ばれる明確に定義された自己完結型のパッケージにグループ化できます。詳細については、「Amazon DataZone の用語と概念」を参照してください。

データ製品を再公開するには、プロジェクトの所有者または寄稿者である必要があります。公開のメタデータ適用ルールを設定して、データプロデューサーの明確なメタデータ要件を確立し、データ製品を再公開できるタイミングを制限できます。

データ製品を再公開するには、以下の手順を完了します。

1. Amazon DataZone データポータル URL に移動し、シングルサインオン (SSO) または AWS 認証情報を使用してサインインします。Amazon DataZone 管理者の場合は、https://console.aws.amazon.com/datazone で Amazon DataZone コンソールに移動し、ドメインが作成された AWS アカウント でサインインすると、[データポータルを開く] を選択できます。
2. Amazon DataZone データポータルで、再公開するデータ製品が含まれているプロジェクトを選択します。
3. [データ] タブ、[公開データ]、[データ製品] フィルターの順に選択します。
4. 再公開するデータ製品を選択し、[アセット] タブを選択します。
5. [アセット] タブで、次のいずれかを実行します。
   - データ製品内の既存のアセットの 1 つを選択し、アクションアイコンを展開して[アセットを削除] を選択し、そのアセットを削除します。[アセットを削除] ポップアップウィンドウで [削除] を選択して、アセットの削除を確定します。再公開すると、このアセットはこのデータ製品のすべてのサブスクライバーから削除されます。
   - [追加] ボタンを選択し、データ製品に追加するアセットを 1 つ以上選択して、データ製品に新しいアセットを追加します。
6. データ製品の詳細ページで、[再公開] を選択します。[データ製品を再公開] ポップアップウィンドウで [再公開] を選択して、このアクションを確定します。

> **Note**
>
> このデータ製品を再公開すると、すべてのサブスクライバーについて以下が更新されます。
>
> - データ製品からアセットが削除された場合、サブスクライバーはこれらのアセットにアクセスできなくなります。
> - アセットがデータ製品に追加された場合、サブスクライバーはこれらのアセットにアクセスできます。
> - データアセットの新しい公開バージョンが使用可能になります。

Amazon DataZone でのデータの検出、サブスクリプション、消費

Amazon DataZone では、アセットがドメインに公開されると、サブスクライバーはこのアセットを検出してサブスクリプションリクエストできます。サブスクリプションプロセスは、サブスクライバーがカタログを検索してブラウズし、必要なアセットを見つけることから開始されます。Amazon DataZone ポータルから、リクエストの正当性と理由を入力したサブスクリプションリクエストを送信することで、アセットのサブスクライブを選択します。アセットの所有者がリクエストを確認します。リクエストは承認または拒否できます。

サブスクリプションが付与されると、フルフィルメントプロセスで、サブスクライバーはアセットにアクセスしやすくなります。アセットのアクセスコントロールとフルフィルメントには、Amazon DataZone マネージドアセットと、Amazon DataZone アンマネージドアセットの 2 つの主要なモードがあります。

- マネージドアセット – Amazon DataZone は、 AWS Glue テーブルや Amazon Redshift テーブルやビューなどのマネージドアセットのフルフィルメントとアクセス許可を管理できます。
- アンマネージドアセット – Amazon DataZone は、アクションに関連する標準イベント (サブスクリプションリクエストに対する承認など) を Amazon EventBridge に公開します。これらの標準イベントを使用して、カスタム統合のために他の AWS サービスやサードパーティーのソリューションと統合できます。

トピック

- Amazon DataZone のアンマネージドアセットへの承認済みサブスクリプションへのアクセス許可を付与する
- Amazon DataZone の Amazon Athena または Amazon Redshift でデータをクエリする
- サブスクリプションリクエストのメタデータ適用ルール
- JDBC 接続を介して外部分析アプリケーションで Amazon DataZone サブスクライブデータを分析する

Amazon DataZone カタログ内のアセットを検索して表示する

Amazon DataZone には、効率的なデータ検索方法があります。データポータルへのアクセス許可を持つ Amazon DataZone ユーザーは、Amazon DataZone カタログ内のアセットを検索し、アセット名とそれに割り当てられたメタデータを表示できます。アセットの詳細については、詳細ページを参照してください。

> **Note**
>
> アセットに含まれる実際のデータを表示するには、まずアセットをサブスクライブし、サブスクリプションリクエストの承認を受けてアクセスを付与してもらう必要があります。

Amazon DataZone での検索 (新規および既存のドメイン) には、キーワードおよびセマンティック一致に基づく結果が含まれます。検索アルゴリズムはキーワード一致に優先順位を付け、セマンティック一致でキーワード一致を追加します。

セマンティック検索機能により、さまざまなロールや部門のユーザーが組織のデータアセットをより効果的に検出、アクセス、活用できるようになり、意思決定、コラボレーション、全体的なデータ駆動型機能が向上します。セマンティック検索では、キーワード入力は単純なキーワード一致結果に加えて、シノニムベースおよび意味ベースの検索結果を生成します。例えば、セマンティック検索では、検索入力として「flower」と入力すると、名前に「rose」という単語を含むデータアセットが検索結果に返されます。検索入力として「movie」と入力すると、名前に「film」という単語を含むデータアセットが検索結果に返されます。検索入力として「football」と入力すると、名前に「soccer」という単語を含むデータアセットを検索結果に返すことができます。

キーワード検索を使用すると、サブスクライブしたアセットを検索しながら、さまざまなキーワードを入力できます。例えば、`Catalog Sales Data` という名前のアセットがある場合、`catalog_sales`、`Catalog Sales`、`CatalogSales`、または `catalogsales` のいずれかのキーワードを入力すると、検索結果に返されます。

Amazon DataZone は、列名やテーブル名などの技術識別子に対して正確な完全一致機能と部分一致機能を有効にすることで、検索エクスペリエンスも強化します。この新しい機能により、キーワードを二重引用符 (" ") で囲み、テクニカル名に完全または部分的に一致する結果を確保して検索を実行できます。この機能はキーワードとセマンティック検索機能に基づいて構築されており、概念や関連用語でアセットを検出できます。技術識別子の精度レイヤーを追加して、複雑な技術命名規則を持つ大規模なデータカタログを管理できます。

データを検索するときに、ユースケースをサポートする特定の技術アセットを見つける必要がある場合があります。技術的な識別子を検索する機能により、アセットを正確に取得できるため、時間を節約し、検出プロセスを合理化できます。例えば、"customer_id" などのクエリは正確な識別子を持つ列またはテーブルを返し、"sales_" などの部分的なクエリは sales_summary や sales_data_2024 などの関連アセットを識別できます。この機能強化により、データコンシューマーは必要なアセットを効率的に見つけることができるようになり、生産性が向上します。

カタログ内のアセットを検索するには

1. Amazon DataZone データポータル URL に移動し、シングルサインオン (SSO) または AWS 認証情報を使用してサインインします。Amazon DataZone 管理者の場合は、https://console.aws.amazon.com/datazone で Amazon DataZone コンソールに移動し、ドメインが作成された AWS アカウント でサインインすると、[データポータルを開く] を選択できます。
2. データポータルのホームページの検索バーに、探しているアセットの名前を入力できます。
3. 名前空間を参照するには、ページの右上で [カタログ] を選択してカタログを開きます。カタログでは、ファセット検索エクスペリエンスを利用して、データ所有者、用語集の語句などの条件でアセットを検索できます。
4. 検索ボックスに検索語句を入力します。検索を実行したら、さまざまなフィルターを適用して結果を絞り込むことができます。フィルターには、アセットタイプ、ソースアカウント、アセットが属 AWS リージョン する が含まれます。
5. 特定のアセットの詳細を表示するには、アセットを選択して詳細ページを開きます。詳細ページには、以下の情報が含まれます。

   - アセット名、データソース (AWS Glue、Amazon Redshift、または Amazon S3)、タイプ (テーブル、ビュー、または S3 オブジェクト)、列数、サイズ。
   - アセットの説明。
   - 現在公開されているアセットのリビジョン、所有者、サブスクリプションの承認が必要かどうか、名前空間、および更新履歴。
   - 用語集の用語とメタデータフォームを含む [概要] タブ。

- ビジネスおよび技術列名、データ型、列のビジネス説明など、アセットのスキーマを表示する [スキーマ] タブ。[スキーマ] タブは、テーブルとビューにのみ表示されます (Amazon S3 オブジェクトには表示されません)。
- ドメインへのサブスクライバーのリストを含む [サブスクリプション] タブ。
- アセットの過去のリビジョンのリストを含む [履歴] タブ。

Amazon DataZone 内のアセットへのサブスクリプションをリクエストする

Amazon DataZone では、Amazon DataZone カタログ内のアセットを検索、アクセス、消費できます。アクセスするアセットをカタログで見つけたら、アセットをサブスクライブするために、サブスクリプションリクエストを作成する必要があります。その後、承認者はリクエストを承認またはリクエストできます。

そのプロジェクト内のアセットへのサブスクリプションをリクエストするには、プロジェクトのメンバーである必要があります。

アセットをサブスクライブするには

1. Amazon DataZone データポータル URL に移動し、シングルサインオン (SSO) または AWS 認証情報を使用してサインインします。Amazon DataZone 管理者の場合は、https://console.aws.amazon.com/datazone で Amazon DataZone コンソールに移動し、ドメインが作成された AWS アカウント でサインインすると、[データポータルを開く] を選択できます。
2. 検索バーを使用して、サブスクライブするアセットを検索して選択し、[サブスクライブ] を選択します。
3. [サブスクライブ] ポップアップウィンドウで、次の情報を入力します。
   - アセットをサブスクライブするプロジェクト。
   - サブスクリプションリクエストの簡単な理由。
4. [サブスクライブ] を選択します。

   パブリッシャーがリクエストを承認すると、データポータルに通知が送信されます。

サブスクリプションリクエストのステータスを表示するには、アセットをサブスクライブしているプロジェクトを見つけて選択します。プロジェクトの [データ] タブに移動し、左側のナビゲーションペインから [リクエストされたデータ] を選択します。このページには、プロジェクトがアクセスを

リクエストしたアセットが一覧表示されます。リクエストのステータスでリストをフィルタリングできます。

Amazon DataZone でサブスクリプションリクエストを承認または拒否する

Amazon DataZone では、Amazon DataZone カタログ内のアセットを検索、アクセス、消費できます。アクセスするアセットをカタログで見つけたら、アセットをサブスクライブするために、サブスクリプションリクエストを作成する必要があります。その後、承認者はリクエストを承認または拒否できます。

サブスクリプションリクエストを承認または拒否するには、所有プロジェクト (アセットを公開したプロジェクト) のメンバーである必要があります。

サブスクリプションリクエストを承認または拒否するには

1. Amazon DataZone データポータル URL に移動し、シングルサインオン (SSO) または AWS 認証情報を使用してサインインします。Amazon DataZone 管理者の場合は、https://console.aws.amazon.com/datazone で Amazon DataZone コンソールに移動し、ドメインが作成された AWS アカウント でサインインすると、[データポータルを開く] を選択できます。
2. データポータルで、[プロジェクトリストを参照] を選択し、サブスクリプションリクエストのあるアセットを含むプロジェクトを選択します。
3. [データ] タブに移動し、左側のナビゲーションペインから [受信リクエスト] を選択します。
4. リクエストを見つけて [リクエストを表示] を選択します。[保留中] でフィルタリングすると、未処理のリクエストのみを表示できます。
5. サブスクリプションリクエストとアクセス理由を確認し、承認するか拒否するかを決定します。
6. 承認するには、次の 2 つのオプションから選択します。

   - フルアクセス: フルアクセスオプションでサブスクリプションを承認すると、サブスクライバーはデータアセット内のすべての行と列にアクセスできます。
   - [行と列のフィルターを使用して承認する]: データの特定の行と列へのアクセスを制限するには、行と列のフィルターを使用して承認するオプションを選択できます。詳細については、「Amazon DataZone でのデータへのきめ細かなアクセスコントロール」を参照してください。
     - [フィルターを選択] を選択してドロップダウンから、サブスクリプションに適用する使用可能なフィルターを 1 つ以上選択します。

- 新しいフィルターを作成するには、[新しいフィルターを作成] オプションを選択して新しいページを開き、新しい行または列フィルターを作成します。詳細については、「Amazon DataZone で列フィルターを作成する」および「Amazon DataZone で行フィルターを作成する」を参照してください。

7. (オプション) リクエストを承諾または拒否する理由を説明するレスポンスを入力します。
8. [承認] または [拒否] を選択します。

プロジェクト所有者は、いつでもサブスクリプションを取り消すことができます。詳細については、「the section called “既存のサブスクリプションを取り消す”」を参照してください。

すべてのサブスクリプションリクエストを表示するには、「イベントと通知」を参照してください。

> **Note**
>
> Amazon DataZone は、Glue AWS テーブル、Amazon Redshift テーブル、Amazon Redshift ビューのきめ細かなアクセスコントロールをサポートしています。

サブスクリプションリクエストの自動承認

デフォルトでは、公開されたアセットへのサブスクリプションリクエストには、データ所有者による手動承認が必要です。ただし、Amazon DataZone は、サブスクリプションリクエストを自動的に承認できる 2 つのシナリオをサポートしています。

- アセットの公開中に承認が無効になる - データアセットを公開するときに、サブスクリプション承認を必要としないように選択できます。この場合、そのアセットへのすべての受信サブスクリプションリクエストが自動的に承認されます。アセットの承認を無効にする方法については、「プロジェクトインベントリから Amazon DataZone カタログにアセットを公開する」を参照してください。
- リクエスタは、アセットを公開したプロジェクトの所有者または寄稿者です。リクエスタがアセットを手動で承認する権限を既に持っている場合、サブスクリプションリクエストも自動的に承認されます。具体的には、アセットを公開したプロジェクトとアクセスをリクエストするプロジェクトの両方のメンバーである場合です。

  自動承認の対象となるには:

  - リクエスタは、アセットが最初に公開されたプロジェクトで所有者または寄稿者としてリストされている必要があります。

- リクエスタは、サブスクリプションリクエストを行うプロジェクトで所有者または寄稿者としてリストされている必要があります。

これで、リクエスタが両方のプロジェクトで可視性とアクセス許可を持っている場合にのみ、自動承認が行われるようになります。1 つがアセットを共有し、もう 1 つがアクセスをリクエストします。リクエスタが両方の条件を満たしている場合、システムはリクエストを自動承認します。

Amazon DataZone で既存のサブスクリプションを取り消す

Amazon DataZone では、Amazon DataZone カタログ内のアセットを検索、アクセス、消費できます。アクセスするアセットをカタログで見つけたら、アセットをサブスクライブするために、サブスクリプションリクエストを作成する必要があります。その後、承認者はリクエストを承認またはリクエストできます。間違って承認したり、サブスクライバーがアセットにアクセスする必要がなくなったために、承認後にサブスクリプションの取り消しが必要な場合があります。

サブスクリプションを取り消すには、所有プロジェクト (アセットを公開したプロジェクト) のメンバーである必要があります。

サブスクリプションを取り消すには

1. Amazon DataZone データポータル URL に移動し、シングルサインオン (SSO) または AWS 認証情報を使用してサインインします。Amazon DataZone 管理者の場合は、https://console.aws.amazon.com/datazone で Amazon DataZone コンソールに移動し、ドメインが作成された AWS アカウント でサインインすると、[データポータルを開く] を選択できます。
2. 上部のナビゲーションペインから [プロジェクトを選択] を選択し、取り消すサブスクリプションを含むプロジェクトを選択します。
3. [データ] タブに移動し、左側のナビゲーションペインから [受信リクエスト] を選択します。
4. 取り消すサブスクリプションを見つけ、[サブスクリプションを表示] を選択します。
5. (オプション) チェックボックスを有効にすると、サブスクライバーはプロジェクトのサブスクリプションターゲットにアセットを保持できます。サブスクリプションターゲットは、サブスクライブするデータを環境内で利用可能にできる一連のリソースへの参照です。

   後でサブスクリプションターゲットからアセットへのアクセスを取り消す場合は、 AWS Lake Formationで取り消す必要があります。
6. [サブスクリプションを取り消す] を選択します。

サブスクリプションを取り消すと、再承認することはできません。サブスクライバーは、アセットを承認するために、アセットに再度サブスクライブする必要があります。

> **Note**
>
> サブスクリプションを取り消すと、特定のユーザー、つまりサブスクリプションが取り消されるサブスクライバーのアセットへのアクセスのみに影響します。アセットはそのまま残り、ユーザー (サブスクライバー) もそのまま残ります。このユーザーは、送信して別のサブスクリプションリクエストの承認を取得するまでアセットにアクセスできません。

Amazon DataZone でサブスクリプションリクエストをキャンセルする

Amazon DataZone では、Amazon DataZone カタログ内のアセットを検索、アクセス、消費できます。アクセスするアセットをカタログで見つけたら、アセットをサブスクライブするために、サブスクリプションリクエストを作成する必要があります。その後、承認者はリクエストを承認またはリクエストできます。保留中のサブスクリプションリクエストは、誤って送信したか、アセットへの読み取りアクセスが不要になったために、キャンセルが必要な場合があります。

サブスクリプションリクエストをキャンセルするには、プロジェクト所有者またはコントロビューターである必要があります。

サブスクリプションリクエストをキャンセルするには

1. Amazon DataZone データポータル URL に移動し、シングルサインオン (SSO) または AWS 認証情報を使用してサインインします。Amazon DataZone 管理者の場合は、https://console.aws.amazon.com/datazone で Amazon DataZone コンソールに移動し、ドメインが作成された AWS アカウント でサインインすると、[データポータルを開く] を選択できます。
2. 上部のナビゲーションペインから [プロジェクトを選択] を選択し、サブスクリプションリクエストを含むプロジェクトを選択します。
3. プロジェクトの [データ] タブに移動し、左側のナビゲーションペインから [リクエストされたデータ] を選択します。このページには、プロジェクトがアクセスをリクエストしたアセットが一覧表示されます。
4. [リクエスト済み] でフィルタリングして、保留中のリクエストのみを表示します。リクエストを見つけて [リクエストを表示] を選択します。
5. サブスクリプションリクエストを確認し、[リクエストをキャンセル] を選択します。

アセット (または別のアセット) を再サブスクライブする場合は、「the section called “アセットへのサブスクリプションをリクエストする”」を参照してください。

> **Note**
>
> 保留中のサブスクリプションリクエストは、アセットへの「読み取り」アクセスが不要になった場合にキャンセルできます。アセットと保留中のサブスクリプションリクエストがキャンセルされたユーザーは、このアクションの影響を受けません。

Amazon DataZone でアセットをサブスリプション解除する

Amazon DataZone では、Amazon DataZone カタログ内のアセットを検索、アクセス、消費できます。アクセスするアセットをカタログで見つけたら、アセットをサブスクライブするために、サブスクリプションリクエストを作成する必要があります。その後、承認者はリクエストを承認またはリクエストできます。誤ってサブスクライブして承認されたか、アセットへの読み取りアクセスが不要になったために、アセットのサブスクリプション解除が必要な場合があります。

いずれかのアセットをサブスクリプション解除するには、プロジェクトのメンバーである必要があります。

アセットをサブスクリプション解除するには

1. Amazon DataZone データポータル URL に移動し、シングルサインオン (SSO) または AWS 認証情報を使用してサインインします。Amazon DataZone 管理者の場合は、https://console.aws.amazon.com/datazone で Amazon DataZone コンソールに移動し、ドメインが作成された AWS アカウント でサインインすると、[データポータルを開く] を選択できます。
2. 上部のナビゲーションペインから [プロジェクトを選択] を選択し、サブスクリプション解除するアセットを含むプロジェクトを選択します。
3. プロジェクトの [データ] タブに移動し、左側のナビゲーションペインから [リクエストされたデータ] を選択します。このページには、プロジェクトがアクセスをリクエストしたアセットが一覧表示されます。
4. [承認済み] でフィルタリングして、承認済みのリクエストのみを表示します。リクエストを見つけ、[サブスクリプションを表示] を選択します。
5. サブスクリプションを確認し、[サブスクリプション解除] を選択します。

アセット (または別のアセット) を再サブスクライブする場合は、「the section called “アセットへのサブスクリプションをリクエストする”」を参照してください。

> **Note**
>
> ユーザーがアセットにアクセスする必要がなくなった場合は、[サブスクリプション解除] オプションを選択できます。アセットはそのまま残り、このアクションの結果としてリソースは削除されません。

既存の IAM ロールを使用して Amazon DataZone サブスクリプションを実現する

現在のリリースでは、Amazon DataZone は、既存の IAM ロールを使用してデータにアクセスできるようにサポートしています。これを達成するには、サブスクリプションを実現するために使用している Amazon DataZone 環境でサブスクリプションターゲットを作成できます。関連付けられた AWS アカウントの 1 つで環境のサブスクリプションターゲットを作成するには、次のステップを使用します。

ステップ 1: Amazon DataZone ドメインが RAM ポリシーのバージョン 2 以降を使用していることを確認する

1. RAM コンソールの「共有元: リソース共有」ページに移動します。 AWS
2. RAM AWS リソース共有は特定の AWS リージョンに存在するため、コンソールの右上隅にあるドロップダウンリストから適切な AWS リージョンを選択します。
3. Amazon DataZone ドメインに対応するリソース共有を選択し、[変更] を選択します。`DataZone-<domain-name>-<domain-id>` という名前で作成されるため、Amazon DataZone ドメインの RAM 共有は、ドメインの名前または ID を使用して識別できます。
4. [次へ] を選択して次のステップに進み、RAM ポリシーのバージョンを確認して変更できます。
5. RAM ポリシーのバージョンがバージョン 2 以降であることを確認します。そうでない場合は、ドロップダウンを使用してバージョン 2 以降を選択します。
6. 「ステップ 4: 確認して更新する」にスキップ を選択します。
7. [リソース共有を更新] を選択します。

ステップ 2: 関連付けられたアカウントからサブスクリプションターゲットを作成する

- 現在のリリースでは、Amazon DataZone は API を使用したサブスクリプションターゲットの作成のみをサポートしています。以下は、 Glue テーブルと Amazon Redshift AWS テーブルまたはビューのサブスクリプションを達成するためのサブスクリプションターゲットを作成するために使用できるペイロードの例です。詳細については、「CreateSubscriptionTarget」を参照してください。

  Glue AWS のサブスクリプションターゲットの例

```
{
        "domainIdentifier": "<DOMAIN_ID>",
        "environmentIdentifier": "<ENVIRONMENT_ID>",
        "name": "<SUBSCRIPTION_TARGET_NAME>",
        "type": "GlueSubscriptionTargetType",
        "authorizedPrincipals" : ["IAM_ROLE_ARN"],
        "subscriptionTargetConfig" : [{"content": "{\"databaseName\":
 \"<DATABASE_NAME>\"}", "formName": "GlueSubscriptionTargetConfigForm"}],
        "manageAccessRole": "<GLUE_DATA_ACCESS_ROLE_IN_ASSOCIATED_ACCOUNT_ARN>",
        "applicableAssetTypes" : ["GlueTableAssetType"],
        "provider": "Amazon DataZone"
}
```

  Amazon Redshift のサブスクリプションターゲットの例:

```
{
        "domainIdentifier": "<DOMAIN_ID>",
        "environmentIdentifier": "<ENVIRONMENT_ID>",
        "name": "<SUBSCRIPTION_TARGET_NAME>",
        "type": "RedshiftSubscriptionTargetType",
        "authorizedPrincipals" : ["REDSHIFT_DATABASE_ROLE_NAME"],
        "subscriptionTargetConfig" : [{"content": "{\"databaseName\":
 \"<DATABASE_NAME>\", \"secretManagerArn\": \"<SECRET_MANAGER_ARN>
\",\"clusterIdentifier\": \"<CLUSTER_IDENTIFIER>\"}", "formName":
 "RedshiftSubscriptionTargetConfigForm"}],
        "manageAccessRole":
 "<REDSHIFT_DATA_ACCESS_ROLE_IN_ASSOCIATED_ACCOUNT_ARN>",
        "applicableAssetTypes" : ["RedshiftViewAssetType",
 "RedshiftTableAssetType"],
```

```
        "provider": "Amazon DataZone"
}
```

> **Important**
>
> - 上記の API コールで使用する environmentIdentifier は、API コールを行うのと同じ関連付けられたアカウントに存在する必要があります。そうでない場合、API コールは成功しません。
> - 「authorizedPrincipals」で使用する IAM ロール ARN は、サブスクライブしているアセットがサブスクリプションターゲットに追加された後に Amazon DataZone がアクセスを許可するロールです。これらの承認されたプリンシパルは、サブスクリプションターゲットが作成される環境と同じアカウントに属している必要があります。
> - Amazon DataZone がサブスクリプションフルフィルメントを完了できるようにするには、プロバイダーフィールドの値が「Amazon DataZone」である必要があります。
> - subscriptionTargetConfig で指定されたデータベース名は、ターゲットが作成されるアカウントに既に存在している必要があります。Amazon DataZone はこのデータベースを作成しません。また、アクセスロールの管理ロールに、このデータベースに対する CREATE TABLE アクセス許可があることを確認してください。
> - また、承認されたプリンシパルとして提供されるロール (Glue AWS の IAM ロールと Amazon Redshift のデータベースロール) が環境アカウントに既に存在していることを確認します。Amazon Redshift サブスクリプションターゲットの場合、クラスターへの接続中に引き受けるロールには追加の更新が必要です。このロールでは、RedshiftDbRoles タグがロールにアタッチされている必要があります。タグの値は、カンマ区切りのリストである場合もあります。値は、サブスクリプションターゲットの作成時に承認されたプリンシパルとして提供されたデータベースロールである必要があります。

ステップ 3: 新しいテーブルをサブスクライブし、新しいターゲットのサブスクリプションを実現する

- サブスクリプションターゲットを作成したら、新しいテーブルをサブスクライブでき、Amazon DataZone はそれを上記のターゲットに対して実現します。

Amazon DataZone のマネージド AWS Glue Data Catalog アセットへのアクセスを許可する

Amazon DataZone では、サブスクリプションリクエストと、アセットへの読み取りアクセス権に対する承認または付与されたサブスクリプションは、アセットの所有者によって管理されます。

> **Note**
>
> LF-TBAC AWS Lake Formation メソッドを使用した AWS Glue Data Catalog アセットのアクセス管理はサポートされていません。
> でのアセットのクロスリージョン共有のサポート AWS Glue Data Catalog はサポートされていません。

マネージド AWS Glue Data Catalog アセットへのサブスクリプションリクエストが承認されると、Amazon DataZone はこれらのアセットをプロジェクト内のすべての既存のデータレイク環境に自動的に追加します。Amazon DataZone は、ユーザーに代わって を通じて承認済み AWS Glue Data Catalog テーブルへのアクセスを許可および管理します AWS Lake Formation。サブスクライバープロジェクトの場合、付与されたアセットは アカウント内のリソース AWS Glue Data Catalog として に表示されます。その後、Amazon Athena を使用してテーブルをクエリできます。

> **Note**
>
> サブスクライブされた AWS Glue Data Catalog アセットが既存のデータレイク環境に自動的に追加された後に新しいデータレイク環境がプロジェクトに追加される場合は、これらのサブスクライブされた AWS Glue Data Catalog アセットをこの新しいデータレイク環境に手動で追加する必要があります。これを行うには、Amazon DataZone データポータルのプロジェクトの概要ページの [データ] タブで、[付与を追加] オプションを選択します。

Amazon DataZone が Glue Data Catalog AWS テーブルへのアクセスを許可するには、次の条件を満たす必要があります。

- Amazon DataZone は Lake Formation アクセス許可を管理してアクセスを許可するため、 AWS Glue テーブルは Lake Formation が管理している必要があります。
- AWS Glue Data Catalog テーブルの発行に使用されるデータレイク環境のアクセスロールの管理には、次の Lake Formation アクセス許可が必要です。

- DESCRIBE 公開されたテーブルを含む AWS Glue データベースに対する および アクセスDESCRIBE GRANTABLE許可。
- Lake Formation で公開されたテーブル自体に対する DESCRIBE、SELECT、DESCRIBE GRANTABLE、SELECT GRANTABLE アクセス許可。

詳細については、「AWS Lake Formation デベロッパーガイド」の「カタログリソースに対するアクセス許可の付与と取り消し」を参照してください。

Amazon DataZone のマネージド Amazon Redshift アセットへのアクセス権を付与する

Amazon Redshift テーブルまたはビューのサブスクリプションが承認されると、Amazon DataZone では、プロジェクト内のすべてのデータウェアハウス環境にサブスクライブされたアセットを自動的に追加できるため、プロジェクトのメンバーは、環境内の Amazon Redshift クエリエディタリンクを使用してデータをクエリできます。Amazon DataZone は、内部でソースとサブスクリプションターゲット間で必要なグラントとデータ共有を作成します。

アクセス権を付与するプロセスは、ソースデータベース (パブリッシャー) とターゲットデータベース (サブスクライバー) の場所によって異なります。

- 同じクラスター、同じデータベース - 同じデータベース内でデータを共有する必要がある場合、Amazon DataZone はソーステーブルにアクセス許可を直接付与します。
- 同じクラスター、異なるデータベース - 同じクラスター内の 2 つのデータベース間でデータを共有する必要がある場合、Amazon DataZone はターゲットデータベースにビューを作成し、作成されたビューにアクセス許可が付与されます。
- 同じアカウント、異なるクラスター - Amazon DataZone は、ソースクラスターとターゲットクラスター間のデータ共有を作成し、共有テーブルの上にビューを作成します。アクセス許可はビューに付与されます。
- クロスアカウント - 上記と同じですが、プロデューサークラスター側でクロスアカウントデータ共有を承認するための追加のステップと、コンシューマークラスター側でデータ共有を関連付けるためのもう 1 つのステップが必要です。

> **Note**
>
> サブスクライブされた Amazon Redshift アセットが既存のデータウェアハウス環境に自動的に追加された後に、新しいデータウェアハウス環境がプロジェクトに追加される場合は、これらのサブスクライブされた Amazon Redshift アセットをこの新しいデータウェアハウス環境に手動で追加する必要があります。これを行うには、Amazon DataZone データポータルのプロジェクトの概要ページの [データ] タブで、[付与を追加] オプションを選択します。

Amazon Redshift クラスターの公開とサブスクライブが、Amazon Redshift データ共有のすべての要件を満たしていることを確認します。詳細については、「Amazon Redshift デベロッパーガイド」を参照してください。

> **Note**
>
> Amazon DataZone は、Amazon Redshift クラスターと Amazon Redshift Serverless の両方のアセットに対するサブスクリプションの自動的付与をサポートしています。
> Amazon Redshift を使用するクロスリージョンデータ共有はサポートされていません。

Amazon DataZone のアンマネージドアセットへの承認済みサブスクリプションへのアクセス許可を付与する

Amazon DataZone では、サブスクリプションリクエストと、アセットへの読み取りアクセス権に対する承認または付与されたサブスクリプションは、アセットの所有者によって管理されます。

Amazon DataZone を使用すると、ユーザーはビジネスデータカタログに任意のタイプのアセットを公開できます。これらのアセットの一部に対して、Amazon DataZone はアクセスグラントを自動的に管理できます。これらのアセットはマネージドアセットと呼ばれ、Lake Formation が管理する AWS Glue データカタログテーブルと、Amazon Redshift テーブルおよびビューが含まれます。Amazon DataZone が自動的にサブスクリプションを付与できないその他のアセットはすべて、アンマネージドと呼ばれます。

Amazon DataZone は、ユーザーがアンマネージドアセットのアクセスグラントを管理するためのパスを提供します。ビジネスデータカタログ内のアセットへのサブスクリプションがデータ所有者によって承認されると、Amazon DataZone は、ソースとターゲットの間にアクセスグラントをユーザーが作成するために必要なペイロード内のすべての情報を含めて、アカウントの Amazon

EventBridge にイベントを発行します。ユーザーは、このイベントを受信すると、イベント内の情報を使用して必要なグラントまたはアクセス許可を作成できるカスタムハンドラーをトリガーできます。アクセス権を付与したら、Amazon DataZone でサブスクリプションのステータスをレポートして更新し、アセットをサブスクライブしているユーザーにアセットの消費を開始できることを通知できます。詳細については、「Amazon DataZone イベントと通知」を参照してください。

Amazon DataZone の Amazon Athena または Amazon Redshift でデータをクエリする

Amazon DataZone では、サブスクライバーがカタログ内のアセットにアクセスできると、Amazon Athena または Amazon Redshift Query Editor V2 を使用して、アセットを消費 (クエリと分析) できます。このタスクを完了するには、プロジェクト所有者またはコントロビューターである必要があります。プロジェクトで有効なブループリントに応じて、Amazon DataZone は、データポータルのプロジェクトページの右側ペインに Amazon Athena や Amazon Redshift Query Editor V2 へのリンクを提供します。

1. Amazon DataZone データポータル URL に移動し、シングルサインオン (SSO) または AWS 認証情報を使用してサインインします。Amazon DataZone 管理者の場合は、https://console.aws.amazon.com/datazone で Amazon DataZone コンソールに移動し、ドメインが作成された AWS アカウント でサインインすると、[データポータルを開く] を選択できます。
2. Amazon DataZone データポータルで、[プロジェクトを閲覧]を選択し、分析するデータがあるプロジェクトを検索して選択します。
3. このプロジェクトでデータレイクブループリントが有効になっている場合、Amazon Athena へのリンクがプロジェクトのホームページの右側のサイドパネルに表示されます。

   このプロジェクトでデータウェアハウスブループリントが有効になっている場合、クエリエディタへのリンクがプロジェクトのホームページの右側のサイドパネルに表示されます。

> **Note**
>
> ブループリントは、プロジェクトが作成される環境プロファイルで定義されます。

トピック

- Amazon Athena を使用してデータをクエリする
- Amazon Redshift を使用してデータをクエリする

Amazon Athena を使用してデータをクエリする

Amazon Athena リンクを選択し、認証にプロジェクトの認証情報を使用して、ブラウザの新しいタブで Amazon Athena クエリエディタを開きます。クエリエディタでは、作業中の Amazon DataZone プロジェクトが現在のワークグループとして自動的に選択されます。

Amazon Athena クエリエディタで、クエリを入力して実行します。一般的なタスクは以下のとおりです。

- サブスクライブしているアセットのクエリと分析
- 新しいテーブルを作成する
- 外部の S3 バケットからのクエリ結果からテーブルを作成する (CTAS)

サブスクライブしているアセットのクエリと分析

プロジェクトがサブスクライブしているアセットへのアクセス権が Amazon DataZone によって自動的に付与されない場合は、基になるデータへのアクセスする権の承認が必要です。これらのアセットへのアクセス権を付与する方法の詳細については、「Amazon DataZone のアンマネージドアセットへの承認済みサブスクリプションへのアクセス許可を付与する」を参照してください。

プロジェクトがサブスクライブしているアセットへのアクセス権が Amazon DataZone によって自動的に付与される場合は、テーブルで SQL クエリを実行し、Amazon Athena で結果を確認できます。Amazon Athena で SQL を使用方法の詳細については、「Athena の SQL リファレンス」を参照してください。

プロジェクトのホームページにある右側のサイドパネルで Amazon Athena リンクを選択した後、Amazon Athena クエリエディタに移動すると、Amazon Athena クエリエディタの右上隅に [プロジェクト] ドロップダウンが表示され、プロジェクトのコンテキストが自動的に選択されます。

[データベース] ドロップダウンには、以下のデータベースが表示されます。

- 公開データベース (*{environmentname}*_pub_db)。このデータベースの目的は、プロジェクトのコンテキスト内で新しいデータを生成し、そのデータを Amazon DataZone カタログに公開できる環境を提供することです。プロジェクトの所有者とコントロビューターは、このデータベースへの読み取りおよび書き込みアクセス権を保有しています。プロジェクトビューワーは、このデータベースへの読み取りアクセス許可のみ保有しています。

- サブスクリプションデータベース (*{environmentname}*_sub_db)。このデータベースの目的は、Amazon DataZone カタログでプロジェクトメンバーとしてサブスクライブしているデータを共有し、そのデータをクエリできるようにすることです。

新しいテーブルを作成する

外部 S3 バケットに接続している場合は、Amazon Athena を使用して、外部 Amazon S3 バケットからアセットをクエリおよび分析できます。このシナリオでは、Amazon DataZone には、外部 Amazon S3 バケット内の基元になるデータへの直接アクセス権を付与するアクセス許可はなく、プロジェクト外で作成された外部 Amazon S3 データは Lake Formation で自動的に管理されず、Amazon DataZone によって管理することはできません。別の方法として、Amazon Athena の CREATE TABLE ステートメントを使用して、外部の Amazon S3 バケットからプロジェクトの Amazon S3 バケット内の新しいテーブルにデータをコピーすることもできます。Amazon Athena で CREATE TABLE クエリを実行する場合は、 AWS Glue Data Catalogにテーブルを登録します。

次の例に示すように、Amazon S3 内のデータへのパスを指定するには、LOCATION プロパティを使用します。

```
CREATE EXTERNAL TABLE 'test_table'(
...
)
ROW FORMAT ...
STORED AS INPUTFORMAT ...
OUTPUTFORMAT ...
LOCATION 's3://bucketname/folder/'
```

詳細については、「Amazon S3 のテーブルの場所」を参照してください。

外部の S3 バケットからのクエリ結果からテーブルを作成する (CTAS)

アセットをサブスクライブすると、基盤となるデータへのアクセス権は読み取り専用になります。Amazon Athena を使用して、テーブルのコピーを作成できます。Amazon Athena では、A CREATE TABLE AS SELECT (CTAS) クエリは、別のクエリからの SELECT ステートメントの結果から、Amazon Athena に新しいテーブルを作成します。CTAS 構文については、「CREATE TABLE AS」を参照してください。

次の例では、テーブルのすべての列をコピーしてテーブルを作成します。

```
CREATE TABLE new_table AS
SELECT *
FROM old_table;
```

同じ例の次のバリエーションでは、SELECT ステートメントに WHERE 句も含まれます。この場合、クエリはテーブルから、WHERE 句を満たす行のみを選択します。

```
CREATE TABLE new_table AS
SELECT *
FROM old_table WHERE condition;
```

次の例では、別のテーブルからの列のセットで実行される新しいクエリが作成されます。

```
CREATE TABLE new_table AS
SELECT column_1, column_2, ... column_n
FROM old_table;
```

同じ例のこのバリエーションでは、複数のテーブルの特定の列から新しいテーブルを作成します。

```
CREATE TABLE new_table AS
SELECT column_1, column_2, ... column_n
FROM old_table_1, old_table_2, ... old_table_n;
```

これらの新しく作成されたテーブルは、プロジェクトの AWS Glue データベースの一部になりました。データをアセットとして Amazon DataZone カタログに公開することで、他のユーザーが検出したり、他の Amazon DataZone プロジェクトと共有したりできます。

Amazon Redshift を使用してデータをクエリする

Amazon DataZone データポータルで、データウェアハウスのブループリントを使用する環境を開きます。環境ページの右側のパネルにある Amazon Redshift リンクを選択します。これによ

り、Amazon Redshift Query Editor V2.0 で環境の Amazon Redshift クラスターまたは Amazon Redshift Serverless ワークグループへの接続を確立するのに役立つ、必要な詳細を含む確認ダイアログが開きます。接続を確立するために必要な詳細を特定したら、[Amazon Redshift を開く] ボタンを選択します。これにより、Amazon DataZone 環境の一時的な認証情報を使用して、ブラウザの新しいタブで Amazon Redshift Query Editor V2.0 が開きます。

クエリエディタで、環境が Amazon Redshift Serverless ワークグループを使用しているか、Amazon Redshift クラスターを使用しているかに応じて、以下の手順に従います。

Amazon Redshift Serverless ワークグループの場合:

1. クエリエディタで、Amazon DataZone 環境の Amazon Redshift Serverless ワークグループを特定し、右クリックして [接続を作成] を選択します。
2. 認証に [フェデレーションユーザー] を選択します。
3. Amazon DataZone 環境のデータベースの名前を指定します。
4. [接続を作成] を選択します。

Amazon Redshift クラスターの場合:

1. クエリエディタで、Amazon DataZone 環境の Amazon Redshift クラスターを特定し、右クリックして [接続を作成] を選択します。
2. 認証に [IAM アイデンティティを使用する一時的な認証情報] を選択します。
3. 上記の認証方法が利用できない場合は、左下隅の歯車ボタンを選択して [アカウント設定] を開き、[IAM 認証情報で認証] を選択して保存します。これは 1 回限りの設定です。
4. 接続を作成する Amazon DataZone 環境のデータベースの名前を指定します。
5. [接続を作成] を選択します。

これで、Amazon DataZone 環境に設定された Amazon Redshift クラスターまたは Amazon Redshift Serverless ワークグループ内のテーブルとビューに対するクエリを開始できます。

サブスクライブしている Amazon Redshift テーブルまたはビューは、環境に設定された Amazon Redshift クラスターまたは Amazon Redshift Serverless ワークグループにリンクされます。テーブルとビューをサブスクライブしたり、環境のクラスターまたはデータベースに作成した新しいテーブルとビューを公開したりできます。

例えば、環境が `redshift-cluster-1` という Amazon Redshift クラスターと、そのクラスター内の `dev` というデータベースにリンクされているシナリオを考えてみましょう。Amazon DataZone

データポータルを使用して、環境に追加されるテーブルとビューをクエリできます。データポータルの右側のサイドペインにある [Analytics tools] セクションで、この環境の Amazon Redshift リンクを選択すると、クエリエディタが開きます。その後、redshift-cluster-1 クラスターを右クリックし、[IAM ID を使用した一時的な認証情報] を使用して接続を作成できます。接続が確立されると、環境がアクセスできるすべてのテーブルとビューが dev データベースに表示されます。

サブスクリプションリクエストのメタデータ適用ルール

Amazon DataZone におけるサブスクリプションリクエスト機能のメタデータ適用ルールは、ドメインユニットの所有者がデータコンシューマーの明確なメタデータ要件を確立し、アクセスリクエストを合理化し、データガバナンスを向上させることにより、データガバナンスを強化します。この機能により、組織は組織のメタデータ標準に準拠し、カスタムワークフローを実装して、一貫性のある管理されたデータアクセスエクスペリエンスを提供できます。

この機能は、Amazon DataZone が現在利用可能なすべての AWS 商用リージョンでサポートされています。

ドメインユニットの所有者は、次の手順を実行して Amazon DataZone でメタデータの適用を設定できます。

1. データポータル URL を使用して Amazon DataZone データポータルに移動し、SSO または AWS 認証情報を使用してログインします。Amazon DataZone 管理者の場合は、Amazon DataZone ドメインが作成された AWS アカウントの https://console.aws.amazon.com/datazone にある Amazon DataZone コンソールにアクセスして、データポータル URL を取得できます。
2. [ドメイン] を選択し、[ドメインユニット] タブに移動して、操作するドメインユニットを選択します。
3. [ルール] タブを選択し、[追加] を選択します。
4. [必要なメタデータフォームルールを作成] ページで、次の操作を行い、[ルールを追加] を選択します。

    - ルールの名前を指定します。
    - [アクション] で、[サブスクリプションリクエスト] を選択します。
    - [必須フォーム] で、[メタデータフォームを追加] を選択し、このルールに追加するドメイン/ドメインユニット内のメタデータフォームを選択して、[追加] を選択します。1 件のルールあたり最大 5 個のメタデータフォームを追加できます。
    - [スコープ] で、これらのフォームを関連付けるデータエンティティを指定します。データ製品やデータアセットを選択できます。

- [データアセットタイプ] で、ルールをすべてのアセットタイプに適用するか、選択したアセットタイプに制限するかを指定します。
- [プロジェクト] で、必要なフォームを、すべてのプロジェクトによって発行されたデータ製品やアセットに関連付けるか、このドメインユニット内の選択したプロジェクトのみに関連付けるかを指定します。また、子ドメインユニットがこの要件を継承する場合は、[子ドメインユニットに対するカスケードルール] を確認してください。

メタデータの適用が設定されると、データコンシューマーは次の手順を実行してアクセスをリクエストできます。

1. データポータル URL を使用して Amazon DataZone データポータルに移動し、SSO または AWS 認証情報を使用してログインします。Amazon DataZone 管理者の場合は、Amazon DataZone ドメインが作成された AWS アカウントの https://console.aws.amazon.com/datazone にある Amazon DataZone コンソールにアクセスして、データポータル URL を取得できます。
2. 検索バーを使用して、サブスクライブするアセットを検索して選択し、[サブスクライブ] を選択します。
3. [サブスクライブ] ポップアップウィンドウで、次の情報を入力します。
   - アセットをサブスクライブするプロジェクト。
   - サブスクリプションリクエストの簡単な理由。
   - 必須メタデータの入力 - ドメインユニットで指定された必須メタデータフィールドを特定します。必須フィールドが不完全な場合は強調表示され、解決されるまで送信は無効になります。すべての必須フィールドを入力したら、[適用] を選択します。
4. [リクエスト] を選択してサブスクリプションリクエストを送信します。送信後、EventBridge でイベントが生成され、必要に応じて Amazon DataZone 外のカスタムワークフローで使用できます。パブリッシャーがリクエストを承認すると、データポータルに通知が送信されます。

データプロデューサーは、次の手順を実行してサブスクリプションリクエストを承認できます。

サブスクリプションリクエストを承認または拒否するには

1. Amazon DataZone データポータル URL に移動し、シングルサインオン (SSO) または AWS 認証情報を使用してサインインします。Amazon DataZone 管理者の場合は、https://console.aws.amazon.com/datazone で Amazon DataZone コンソールに移動し、ドメインが作成された AWS アカウント でサインインすると、[データポータルを開く] を選択できます。

2. データポータルで、[プロジェクトリストを参照] を選択し、サブスクリプションリクエストのあるアセットを含むプロジェクトを選択します。
3. [データ] タブに移動し、左側のナビゲーションペインから [受信リクエスト] を選択します。
4. リクエストを見つけて [リクエストを表示] を選択します。[保留中] でフィルタリングすると、未処理のリクエストのみを表示できます。
5. サブスクリプションリクエストとアクセス理由を確認し、承認するか拒否するかを決定します。

   データプロデューサーは、ドキュメントリンクやアカウント ID など、提供されたメタデータを確認して、アクセスを許可する前にリクエストがコンプライアンスおよびワークフロー要件を満たしているかどうかを判断できます。
6. 承認するには、次の 2 つのオプションから選択します。

   - フルアクセス: フルアクセスオプションでサブスクリプションを承認すると、サブスクライバーはデータアセット内のすべての行と列にアクセスできます。
   - [行と列のフィルターを使用して承認する]: データの特定の行と列へのアクセスを制限するには、行と列のフィルターを使用して承認するオプションを選択できます。詳細については、「Amazon DataZone でのデータへのきめ細かなアクセスコントロール」を参照してください。
     - [フィルターを選択] を選択してドロップダウンから、サブスクリプションに適用する使用可能なフィルターを 1 つ以上選択します。
     - 新しいフィルターを作成するには、[新しいフィルターを作成] オプションを選択して新しいページを開き、新しい行または列フィルターを作成します。詳細については、「Amazon DataZone で列フィルターを作成する」および「Amazon DataZone で行フィルターを作成する」を参照してください。
7. (オプション) リクエストを承諾または拒否する理由を説明するレスポンスを入力します。
8. [承認] するかどうかを選択します。

JDBC 接続を介して外部分析アプリケーションで Amazon DataZone サブスクライブデータを分析する

Amazon DataZone を使用すると、データコンシューマーは 1 つのプロジェクト内の複数のソースからのデータを簡単に見つけてサブスクライブし、Amazon Athena、Amazon Redshift クエリエディタ、Amazon SageMaker を使用してこのデータを分析できます。

Amazon DataZone は、Athena JDBC ドライバーを介した認証もサポートしています。これにより、ユーザーは、SQL Workbench、DBeaver、Tableau、Domino、Power BI などの一般的な外部 SQL および分析ツールを使用して、サブスクライブした Amazon DataZone データをクエリできます。ユーザーは SSO または IAM を通じて企業の認証情報を使用して認証し、Amazon DataZone プロジェクト内でサブスクライブしたデータの分析を開始できます。

Amazon DataZone による Athena JDBC ドライバーのサポートには、次の利点があります。

- データコンシューマーは、JDBC 接続をサポートする幅広い分析ツールから好みのツールを使用して Amazon DataZone に接続できます。これにより、データ消費のために新しくツールを学ばなくても、使い慣れたソフトウェアを引き続き使用できます。
- プログラムによるアクセス - サーバーまたはカスタムアプリケーションを介してアクセス管理データに JDBC 接続することにより、データコンシューマーは自動的でより複雑なデータオペレーションを実行できます。

JDBC URL を使用して、外部分析ツールを Amazon DataZone サブスクライブデータに接続できます。JDBC URL を取得するには、次の手順を実行します。

> **Important**
>
> 現在のリリースでは、Amazon DataZone は Amazon Athena JDBC ドライバーを使用した認証をサポートしています。この手順を完了するには、選択した分析アプリケーション用の最新の Athena JDBC ドライバーをダウンロードしてインストールしていることを確認します。

1. Amazon DataZone データポータル URL に移動し、シングルサインオン (SSO) または AWS 認証情報を使用してサインインします。Amazon DataZone 管理者の場合は、https://console.aws.amazon.com/datazone で Amazon DataZone コンソールに移動し、ドメインが作成された AWS アカウント でサインインすると、[データポータルを開く] を選択できます。
2. Amazon DataZone データポータルで、[プロジェクトを閲覧]を選択し、分析するデータがあるプロジェクトを検索して選択します。
3. プロジェクトのホームページの右側のサイドパネルで、[JDBC と接続] を選択します。
4. [JDBC パラメータ] のポップアップウィンドウで、認証方法 (SSO 認証情報または IAM 認証情報) を選択し、JDBC URL の文字列または個々のパラメータをコピーします。その後、これを使用して外部分析アプリケーションに接続できます。

JBDC クエリまたはパラメータを使用して外部分析アプリケーションを Amazon DataZone に接続すると、RedeemAccessToken API が呼び出されます。RedeemAccessToken API は Identity Center アクセストークンを AmazonDataZoneDomainExecutionRole 認証情報と交換します。認証情報は GetEnvironmentCredentials API の呼び出しに使用されます。

IAM 認証情報を使用して Athena の Amazon DataZone が管理するデータに接続する認証メカニズムの詳細については、「DataZone IAM 認証情報プロバイダー」を参照してください。IAM Identity Center を使用して Athena の Amazon DataZone が管理するデータへの接続を有効にする認証メカニズムの詳細については、「DataZone IDC 認証情報プロバイダー」を参照してください。

RedeemAccessToken API リファレンス

リクエストの構文

```
POST /sso/redeem-token HTTP/1.1
Content-type: application/json

{
   "domainId": "string",
   "accessToken": "string"
}
```

リクエストパラメータ

このリクエストでは、次のパラメータを使用します。

DomainId

Amazon DataZone ドメインの ID。

パターン: ^dzd[-_][a-zA-Z0-9_-]{1,36}$

必須: はい

accessToken

Identity Center アクセストークン。

タイプ: 文字列

必須: はい

レスポンスの構文

```
HTTP/1.1 200
Content-type: application/json

{
   "credentials": AwsCredentials
}
```

レスポンス要素

認証情報

GetEnvironmentCredentials API の呼び出しに使用される AmazonDataZoneDomainExecutionRole 認証情報。

タイプ: AwsCredentials オブジェクトの配列。このデータタイプには次のプロパティが含まれます。

- accessKeyId: AccessKeyId
- secretAccessKey: SecretAccessKey
- sessionToken: SessionToken
- expiration: Timestamp

accessToken

Identity Center アクセストークン。

タイプ: 文字列

必須: はい

エラー

AccessDeniedException

このアクションを実行する十分なアクセス権限がありません。

HTTP ステータスコード: 403

ResourceNotFoundException

指定されたリソースが見つかりません。

HTTP ステータスコード: 404

ValidationException

入力が、 AWS サービスで指定された制約を満たしていません。

HTTP ステータスコード: 400

InternalServerException

リクエストは、不明なエラー、例外、または障害により実行できませんでした。

HTTP ステータスコード: 500

Amazon DataZone でのデータへのきめ細かなアクセスコントロール

Amazon DataZone の現在のリリースでは、データへのきめ細かなアクセスコントロールがサポートされているため、機密データをきめ細かく制御できます。Amazon DataZone ビジネスデータカタログに公開されたデータアセット内の特定のデータレコードにアクセスできるプロジェクトを制御できます。Amazon DataZone は、きめ細かなアクセスコントロールを実装するための行と列のフィルターをサポートしています。

行フィルターを使用すると、定義した条件に基づいて特定の行へのアクセスを制限できます。例えば、テーブルに 2 つのリージョン (米国と欧州) のデータが含まれており、欧州の従業員がそのリージョンに関連するデータにのみアクセスできるようにする場合は、そのリージョンが欧州である行 (リージョン = '欧州' など) を含む行フィルターを作成できます。これにより、欧州の従業員は米国のデータにアクセスできなくなります。

列フィルターを使用すると、データアアセット内の特定の列へのアクセスを制限できます。例えば、テーブルに個人を特定できる情報 (PII) などの機密情報が含まれている場合、PII 列を除外する列フィルターを作成できます。これにより、サブスクライバーは機密データ以外のデータにのみアクセスできます。

きめ細かなアクセスコントロールを利用するには、Amazon DataZone で AWS Glue アセットと Amazon Redshift アセットの行フィルターと列フィルターを作成できます。データアセットにアクセスするサブスクリプションリクエストを受け取ったら、適切な行と列のフィルターを適用して承認できます。Amazon DataZone では、サブスクライバーがサブスクリプション承認時に適用したフィルターで許可された行と列にのみアクセスできます。

トピック

Amazon DataZone で行フィルターを作成する

Amazon DataZone では、サブスクライバーが行フィルターで定義されているデータ行にのみアクセスできるように、サブスクリプションの承認時に使用できる行フィルターを作成できます。行フィルターを作成するには、以下の手順に従います。

1. Amazon DataZone データポータル URL に移動し、シングルサインオン (SSO) または AWS 認証情報を使用してサインインします。Amazon DataZone 管理者の場合は、https://console.aws.amazon.com/datazone で Amazon DataZone コンソールに移動し、ドメインが作成された AWS アカウント でサインインすると、[データポータルを開く] を選択できます。
2. 上部のナビゲーションペインから [プロジェクトを選択] を選択し、アセットが属するプロジェクトを選択します。
3. プロジェクトの [データ] タブに移動します。
4. 左側のナビゲーションペインから [公開されたデータ] を選択し、行フィルターを作成するアセットを選択します。Amazon DataZone のデータアセットが Glue AWS テーブル、Amazon Redshift テーブル、または Amazon Redshift ビューのタイプである場合は、行フィルターを追加できます。
5. アセットの詳細ページで [アセットフィルター] タブに移動し、[アセットフィルターを追加] を選択します。
6. 以下のフィールドを設定します。
   - 名前 - フィルターの名前
   - 説明 – フィルターの説明
7. [フィルタータイプ] で [行フィルター] を選択します。
8. [行のフィルター式] で行フィルターに 1 つ以上の式を指定します。
   - [列] ドロップダウンから列を選択します。
   - [演算子] ドロップダウンから演算子を選択します。
   - [値] フィールドに値を入力します。
9. フィルター式に別の条件を追加するには、[条件を追加] を選択します。
10. 行フィルター式で複数の条件を使用する場合は、[および] または [または] を選択して条件をリンクします。
11. [フィルターを作成] をクリックします。

サブスクリプションに行フィルターを適用する方法については、「Amazon DataZone でサブスクリプションリクエストを承認または拒否する」を参照してください。

Amazon DataZone で列フィルターを作成する

Amazon DataZone では、サブスクライバーが列フィルターで定義されているデータ列にのみアクセスできるように、サブスクリプションの承認時に使用できる列フィルターを作成できます。列フィルターを作成するには、以下の手順に従います。

1. Amazon DataZone データポータル URL に移動し、シングルサインオン (SSO) または AWS 認証情報を使用してサインインします。Amazon DataZone 管理者の場合は、https://console.aws.amazon.com/datazone で Amazon DataZone コンソールに移動し、ドメインが作成された AWS アカウント でサインインすると、[データポータルを開く] を選択できます。
2. 上部のナビゲーションペインから [プロジェクトを選択] を選択し、アセットが属するプロジェクトを選択します。
3. プロジェクトの [データ] タブに移動します。
4. 左側のナビゲーションペインから [公開されたデータ] を選択し、列フィルターを作成するアセットを選択します。Amazon DataZone のデータアセットのタイプが AWS Glue テーブル、Amazon Redshift テーブル、または Amazon Redshift ビューの場合、列フィルターを追加できます。
5. [アセットの詳細] ページで、[アセットフィルター] タブに移動し、[アセットフィルターを追加] を選択します。
6. 以下のフィールドを設定します。
   - 名前 - フィルターの名前
   - 説明 – フィルターの説明
7. [フィルタータイプ] で、[列フィルター] を選択します。
8. データアセットの列のチェックボックスをもう一度使用して、フィルターに含める列を選択します。
9. [フィルターを作成] をクリックします。

サブスクリプションに列フィルターを適用する方法の詳細については、「Amazon DataZone でサブスクリプションリクエストを承認または拒否する」を参照してください。

Amazon DataZone で行または列フィルターを削除する

行または列フィルターを削除するには、以下の手順に従います。

1. Amazon DataZone データポータル URL に移動し、シングルサインオン (SSO) または AWS 認証情報を使用してサインインします。Amazon DataZone 管理者の場合は、https://console.aws.amazon.com/datazone で Amazon DataZone コンソールに移動し、ドメインが作成された AWS アカウント でサインインすると、[データポータルを開く] を選択できます。
2. プロジェクトの [データ] タブに移動します。
3. 左側のナビゲーションペインから [公開されたデータ] または [インベントリデータ] を選択し、行または列フィルターを削除するアセットを選択します。
4. [アセットの詳細] ページで [アセットフィルター] タブに移動し、削除するフィルターを開きます。
5. [アクション]、[削除] を選択し、削除を確定します。

> **Note**
>
> フィルターは、アクティブなサブスクリプションで使用されていない場合にのみ削除できます。

Amazon DataZone で行または列フィルターを編集する

行または列フィルターを編集するには、以下の手順に従います。

1. Amazon DataZone データポータル URL に移動し、シングルサインオン (SSO) または AWS 認証情報を使用してサインインします。Amazon DataZone 管理者の場合は、https://console.aws.amazon.com/datazone で Amazon DataZone コンソールに移動し、ドメインが作成された AWS アカウント でサインインすると、[データポータルを開く] を選択できます。
2. プロジェクトの [データ] タブに移動します。
3. 左側のナビゲーションペインから [公開されたデータ] または [インベントリデータ] を選択し、行または列フィルターを編集するアセットを選択します。
4. [アセットの詳細] ページで [アセットフィルター] タブに移動し、編集するフィルターを開きます。
5. 以下のフィールドを編集できます。

- 説明 – フィルターの説明

6. 行フィルターを編集している場合は、行フィルター式を更新できます。
7. 列フィルターを編集している場合は、フィルターで選択した列を追加または削除できます。
8. 変更を行ったら、[アセットフィルターを編集] を選択します。

> **Note**
>
> アクティブなサブスクリプションで使用されているフィルターを編集すると、Amazon DataZone はサブスクライバープロジェクトに付与されたアクセス許可を自動的に更新します。つまり、サブスクライバーは、更新されたフィルターで定義されている行または列にのみアクセスでき、これにより、アクセスポリシーが一貫して適用されます。

Amazon DataZone でフィルターを使用してアクセスを許可する

Amazon DataZone は、定義された行と列のフィルターを AWS Lake Formation と Amazon Redshift の適切な許可に変換することで、きめ細かなアクセスコントロールを可能にします。以下は、Amazon DataZone が Glue AWS テーブルと Amazon Redshift の両方でこれらのフィルターをマテリアライズする方法の説明です。

AWS Glue テーブル

行フィルターや列フィルターを含む AWS Glue テーブルへのサブスクリプションが承認されると、Amazon DataZone はデータセルフィルターを使用して AWS Lake Formation で許可を作成することでサブスクリプションをマテリアライズし、サブスクライバープロジェクトのメンバーは、サブスクリプションに適用されたフィルターに基づいてアクセスが許可されている行と列にのみアクセスできるようにします。

Amazon DataZone は、まず Amazon DataZone で適用された行および列フィルターを AWS Lake Formation データセルフィルターに変換します。複数の行および列フィルターが使用されている場合、Amazon DataZone はすべての列とすべての行フィルター条件を結合して、行レベルと列レベルの両方で有効なアクセス許可を計算します。Amazon DataZone は、有効な行および列のアクセス許可を使用して、単一の AWS Lake Formation データセルフィルターを作成します。

データセルフィルターが作成されると、Amazon DataZone は、このデータセルフィルターを使用して AWS Lake Formation で読み取り専用 (SELECT) アクセス許可を作成して、サブスクライバープロジェクトとサブスクライバーテーブルを共有します。

Amazon Redshift

行および/または列フィルターを使用した Amazon Redshift テーブル/ビューのサブスクリプションが承認されると、Amazon DataZone は、Amazon Redshift でスコープダウンされた遅延バインディングビューを作成してサブスクリプションをマテリアライズし、サブスクライバープロジェクトのメンバーが、サブスクリプションに適用された行および列フィルターに基づいてアクセスが許可されている行と列にのみアクセスできるようにします。

Amazon DataZone は、まず Amazon DataZone のサブスクリプションに適用される行と列のフィルターを Amazon Redshift 遅延バインディングビューに変換します。複数の行および列フィルターが使用されている場合、Amazon DataZone はすべての列とすべての行のフィルター条件を結合して、行レベルと列レベルの両方で有効なアクセス許可を計算します。次に、Amazon DataZone は、有効な行および列のアクセス許可を使用して遅延バインディングビューを作成します。

遅延バインディングビューが作成されると、Amazon DataZone は Amazon Redshift で読み取り専用 (SELECT) アクセス許可を作成して、このビューをサブスクライバープロジェクトのメンバーと共有します。

Amazon DataZone イベントと通知

Amazon DataZone では、サブスクリプションリクエスト、更新、コメント、システムイベントなど、データポータル内の重要なアクティビティの最新情報を常に確認できます。Amazon DataZone は、データポータルの専用受信トレイにメッセージを配信するか、Amazon EventBridge のデフォルトバス経由でメッセージを配信し、この情報を提供します。

Amazon DataZone データポータルの専用受信トレイを介したイベント

Amazon DataZone には、メッセージを表示してアクションを実行できる専用受信トレイがデータポータルに用意されています。最近のメッセージは、ホームページ、プロジェクトページ、カタログページにも表示されます。例えば、ユーザーがデータアセットへのアクセスを要求すると、そのアセットを公開しているプロジェクトの所有者とコントリビューターは、データポータルでその要求を確認します。そして、アクションが実行されると、この要求に関連するプロジェクトをサブスクライブしているプロジェクトメンバーは、データポータルで通知を確認できます。メッセージには 2 種類あります。

- タスク - このメッセージは、アクションが必要な場所があることを受信者に通知します。追跡に使用できるオプションの [ステータス] フィールドがあります。
- イベント - このメッセージは情報提供用であり、ステータスは割り当てられません。イベントの場合は、最近の更新について監査証跡を利用できます。

Amazon DataZone では、次のイベントタイプに対してメッセージが生成されます。

イベントカテゴリ	イベント名	イベントの説明	イベントタイプ
サブスクリプション	サブスクリプションリクエストが作成されました	サブスクリプションリクエストが作成されるとイベントが生成されます	タスク
サブスクリプション	サブスクリプションリクエストが承諾されました	サブスクリプションリクエストが承諾さ	イベント

イベントカテゴリ	イベント名	イベントの説明	イベントタイプ
		れるとイベントが生成されます	
サブスクリプション	サブスクリプションリクエストが拒否されました	サブスクリプションリクエストが拒否されるとイベントが生成されます	イベント
サブスクリプション	サブスクリプションリクエストが削除されました	サブスクリプションリクエストが削除されるとイベントが生成されます	イベント
プロジェクト	プロジェクトが正常に作成されました	プロジェクトが正常に作成されるとイベントが生成されます	イベント
プロジェクトメンバーシップ	プロジェクトメンバーが正常に追加されました	新しいメンバーがプロジェクトに追加されるとイベントが生成されます	イベント
プロジェクトメンバーシップ	プロジェクトメンバーが正常に削除されました	メンバーがプロジェクトから削除されるとイベントが生成されます	イベント
プロジェクトメンバーシップ	プロジェクトメンバーのロールが正常に変更されました	プロジェクトのメンバーのロールが変更されるとイベントが生成されます	イベント
環境	環境デプロイが開始されました	環境デプロイが開始されるとイベントが生成されます	イベント

イベントカテゴリ	イベント名	イベントの説明	イベントタイプ
環境	環境デプロイが完了しました	環境デプロイが正常に完了するとイベントが生成されます	イベント
環境	環境デプロイに失敗しました	環境デプロイが失敗するとイベントが生成されます	イベント
環境	環境デプロイのカスタムワークフローが開始されました	カスタムワークフローのある環境が開始されるときイベントが生成されます	イベント
データアセット	アセットがインベントリに追加されました	新しいデータアセットがインベントリに追加 (つまりドラフト状態でカタログに追加) されるとイベントが生成されます	イベント
データアセット	アセットが公開されました	新しいデータアセットが公開される (つまりサブスクリプションで使用可能になる) とイベントが生成されます	イベント
データアセット	アセットスキーマが変更されました	前回の取り込みジョブ以降にアセットスキーマが変更されるとイベントが生成されます	イベント

イベントカテゴリ	イベント名	イベントの説明	イベントタイプ
登録中	サブスクリプションが作成されました	データアセットのサブスクライブがリクエストされるとイベントが生成されます	タスク
登録中	サブスクリプションが承認されました	公開プロジェクトの所有者またはコントリビューターがサブスクリプションを承認するとイベントが生成されます	イベント
登録中	サブスクリプションが拒否されました	公開プロジェクトの所有者またはコントリビューターがサブスクリプションを拒否するとイベントが生成されます	イベント
登録中	サブスクリプションが削除されました	サブスクライバーがサブスクリプションをキャンセルするとイベントが生成されます	イベント
登録中	サブスクリプション付与がリクエストされました	アセットへのアクセスがリクエストされるとイベントが生成されます	イベント

イベントカテゴリ	イベント名	イベントの説明	イベントタイプ
登録中	サブスクリプション付与が完了しました	公開プロジェクトの所有者またはコントリビューターがアセットへのアクセスをサブスクリプションに付与するとイベントが生成されます	イベント
登録中	サブスクリプション付与に失敗しました	サブスクリプション付与が失敗するとイベントが生成されます	イベント
登録中	サブスクリプション付与の取り消しをリクエストしました	公開プロジェクトの所有者またはコントリビューターがサブスクリプション付与の取り消しを開始するとイベントが生成されます	イベント
登録中	サブスクリプション付与の取り消しが完了しました	サブスクリプション付与の取り消しが完了するとイベントが生成されます	イベント
登録中	サブスクリプション付与の取り消しに失敗しました	サブスクリプション付与の取り消しが失敗するとイベントが生成されます	イベント
自動的なビジネス名の生成	ビジネス名が正常に生成されました	自動的なビジネス名の生成ジョブが正常に完了するとイベントが生成されます	イベント

イベントカテゴリ	イベント名	イベントの説明	イベントタイプ
自動的なビジネス名の生成	ビジネス名の生成に失敗しました	自動的なビジネス名の生成ジョブが失敗するとイベントが生成されます	イベント
データソースの実行	データソースが作成されました	新しいデータソースが作成されるとイベントが生成されます	イベント
データソースの実行	データソースが更新されました	既存のデータソースが更新されるとイベントが生成されます	イベント
データソースの実行	データソース実行がトリガーされました	データソースの実行が開始されるとイベントが生成されます	イベント
データソースの実行	データソースの実行に成功しました	データソースの実行が成功するとイベントが生成されます	イベント
データソースの実行	データソースの実行に失敗しました	データソースの実行が失敗するとイベントが生成されます	イベント

データポータルの受信トレイにあるタスクを表示するには、次の手順を実行します。

1. データポータル URL を使用して Amazon DataZone データポータルに移動し、SSO または AWS 認証情報を使用してログインします。Amazon DataZone 管理者の場合は、Amazon DataZone ドメインが作成された AWS アカウントの https://console.aws.amazon.com/datazone にある Amazon DataZone コンソールにアクセスして、データポータル URL を取得できます。
2. データポータルで、最近のタスクセットを含むポップアップを表示するには、検索バーの横にあるベルアイコンを選択します。
3. [すべて表示] を選択して、すべてのタスクを表示します。[イベント] タブを選択すると、ビューを変更してすべてのイベントを表示できます。

4. イベントの件名、アクティブまたは非アクティブのステータス、あるいは日付範囲で検索をフィルタリングできます。
5. 個々のタスクを選択して、そのタスクに対応できる場所に移動します。

データポータルの受信トレイにあるイベントを表示するには、次の手順を実行します。

1. データポータル URL を使用して Amazon DataZone データポータルに移動し、SSO または AWS 認証情報を使用してログインします。Amazon DataZone 管理者の場合は、Amazon DataZone ルートドメインが作成された AWS アカウントの https://console.aws.amazon.com/datazone にある Amazon DataZone コンソールにアクセスして、データポータル URL を取得できます。
2. データポータルで、最近のイベントセットのポップアップを表示するには、検索バーの横にあるベルアイコンを選択します。
3. [すべて表示] を選択して、すべてのイベントを表示します。[タスク] タブを選択すると、ビューを変更してすべてのタスクを表示できます。
4. イベントの件名または日付範囲で検索をフィルタリングします。
5. 個々のイベントを選択して、そのイベントの詳細を表示できる場所に移動します。

Amazon EventBridge のデフォルトバス経由のイベント

DataZone は、データポータルの専用受信トレイにメッセージを送信するだけでなく、Amazon DataZone ルートドメインがホストされているのと同じ AWS アカウントの Amazon EventBridge のデフォルトイベントバスにもメッセージを送信します。これにより、サブスクリプションフルフィルメントや他のツールとのカスタム統合など、イベント駆動型の自動化が可能になります。受信 Amazon EventBridge events を照合し、処理のために Amazon EventBridge targets に送信するルールを作成できます。1 つのルールで複数のターゲットにイベントを送信し、それを並行して実行することができます。

イベントの例を次に示します。

```
{
  "version": "0",
  "id": "bd3d6239-2877-f464-0572-b1d76760e085",
  "detail-type": "Subscription Request Created",
  "source": "aws.datazone",
```

```
  "account": "111111111111",
  "time": "2023-11-13T17:57:00Z",
  "region": "us-east-1",
  "resources": [],
  "detail": {
    "version": "655",
    "metadata": {
      "domain": "dzd_bc8e1ez8r2a6xz",
      "user": "44f864b8-50a1-70cc-736f-c1f763934ab7",
      "id": "5jbc0lie0sr99j",
      "version": "1",
      "typeName": "SubscriptionRequestEntityType",
      "owningProjectId": "6oy92hwk937pgn",
      "awsAccountId": "111111111111",
      "clientToken": "e781b7b5-78c5-4608-961e-3792a6c3ff0d"
    },
    "data": {
      "autoApproved": true,
      "requesterId": "44f864b8-50a1-70cc-736f-c1f763934ab7",
      "status": "PENDING",
      "subscribedListings": [
        {
          "id": "ayzstznnx4dxyf",
          "ownerProjectId": "5a3se66qm88947",
          "version": "12"
        }
      ],
      "subscribedPrincipals": [
        {
          "id": "6oy92hwk937pgn",
          "type": "PROJECT"
        }
      ]
    }
  }
}
```


Amazon DataZone でサポートされている詳細タイプの完全なリストは次のとおりです。

- サブスクリプションリクエストが作成されました
- サブスクリプションリクエストが承諾されました
- サブスクリプションリクエストが拒否されました

- サブスクリプションリクエストが削除されました
- サブスクリプション付与がリクエストされました
- サブスクリプション付与が完了しました
- サブスクリプション付与に失敗しました
- サブスクリプション付与の取り消しをリクエストしました
- サブスクリプション付与の取り消しが完了しました
- サブスクリプション付与の取り消しに失敗しました
- アセットがインベントリに追加されました
- アセットがカタログに追加されました
- アセットスキーマが変更されました
- データソースのステータスの変更
- データソースが作成されました
- データソースが更新されました
- データソース実行がトリガーされました
- データソースの実行に成功しました
- データソースの実行に失敗しました
- ドメインの作成に成功しました
- ドメインの作成に失敗しました
- ドメインの削除に成功しました
- ドメインの削除に失敗しました
- 環境デプロイが開始されました
- 環境デプロイが完了しました
- 環境デプロイに失敗しました
- 環境の削除が開始されました
- 環境の削除が完了しました
- 環境の削除に失敗しました
- プロジェクトが正常に作成されました
- プロジェクトメンバーが正常に追加されました
- プロジェクトメンバーが正常に削除されました
- プロジェクトメンバーのロールが正常に変更されました

- 環境デプロイのカスタマーワークフローが開始されました
- ビジネス名が正常に生成されました
- ビジネス名の生成に失敗しました

詳細については、Amazon EventBridge を参照してください。

Amazon DataZone のセキュリティ

でのクラウドセキュリティが最優先事項 AWS です。お客様は AWS 、セキュリティを最も重視する組織の要件を満たすように構築されたデータセンターとネットワークアーキテクチャからメリットを得られます。

セキュリティは、 AWS とお客様の間の責任共有です。責任共有モデルではこれをクラウドのセキュリティおよびクラウド内のセキュリティと説明しています。

- クラウドのセキュリティ – AWS は、 で AWS サービスを実行するインフラストラクチャを保護する責任を担います AWS クラウド。 は、お客様が安全に使用できるサービス AWS も提供します。サードパーティーの監査者は、AWS コンプライアンスプログラムコンプライアンスプログラムの一環として、当社のセキュリティの有効性を定期的にテストおよび検証。Amazon DataZone に適用されるコンプライアンスプログラムの詳細については、「コンプライアンスプログラムAWS による対象範囲内のサービスコンプライアンスプログラム」を参照してください。
- クラウドのセキュリティ – お客様の責任は、使用する AWS サービスによって決まります。また、ユーザーは、データの機密性、会社の要件、適用される法律や規制など、その他の要因についても責任を負います。

このドキュメントは、Amazon DataZone 使用時における責任共有モデルの適用法を理解するのに役立ちます。次のトピックでは、セキュリティおよびコンプライアンスの目標を達成するため、Amazon DataZone を構成する方法について説明します。また、Amazon DataZone リソースのモニタリングや保護に役立つ他の AWS サービスの使用方法についても説明します。

トピック

- Amazon DataZone でのデータ保護
- Amazon DataZone での認証
- IAM を使用した Amazon DataZone リソースへのアクセスコントロール
- Amazon DataZone のコンプライアンス検証
- Amazon DataZone のセキュリティのベストプラクティス
- Amazon DataZone におけるレジリエンス
- Amazon DataZone のインフラストラクチャセキュリティ
- Amazon DataZone におけるサービス間の混乱した代理の防止
- Amazon DataZone の設定と脆弱性の分析

- 許可リストに追加するドメイン

Amazon DataZone でのデータ保護

責任 AWS 共有モデル、Amazon DataZone でのデータ保護に適用されます。このモデルで説明されているように、 AWS はすべての を実行するグローバルインフラストラクチャを保護する責任があります AWS クラウド。ユーザーは、このインフラストラクチャでホストされるコンテンツに対する管理を維持する責任があります。また、使用する「 AWS のサービス 」のセキュリティ設定と管理タスクもユーザーの責任となります。データプライバシーの詳細については、データプライバシーに関するよくある質問を参照してください。欧州でのデータ保護の詳細については、AWS セキュリティブログに投稿された「AWS 責任共有モデルおよび GDPR」のブログ記事を参照してください。

データ保護の目的で、認証情報を保護し AWS アカウント 、 AWS IAM アイデンティティセンターまたは AWS Identity and Access Management (IAM) を使用して個々のユーザーを設定することをお勧めします。この方法により、それぞれのジョブを遂行するために必要な権限のみが各ユーザーに付与されます。また、次の方法でデータを保護することもお勧めします:

- 各アカウントで多要素認証 (MFA) を使用します。
- SSL/TLS を使用して AWS リソースと通信します。TLS 1.2 は必須ですが、TLS 1.3 を推奨します。
- で API とユーザーアクティビティのログ記録を設定します AWS CloudTrail。CloudTrail 証跡を使用して AWS アクティビティをキャプチャする方法については、「 AWS CloudTrail ユーザーガイド」のCloudTrail 証跡の使用」を参照してください。
- AWS 暗号化ソリューションと、 内のすべてのデフォルトのセキュリティコントロールを使用します AWS のサービス。
- Amazon Macie などの高度な管理されたセキュリティサービスを使用します。これらは、Amazon S3 に保存されている機密データの検出と保護を支援します。
- コマンドラインインターフェイスまたは API AWS を介して にアクセスするときに FIPS 140-3 検証済み暗号化モジュールが必要な場合は、FIPS エンドポイントを使用します。利用可能な FIPS エンドポイントの詳細については、「連邦情報処理規格 (FIPS) 140-3」を参照してください。

お客様の E メールアドレスなどの極秘または機密情報を、タグ、または [名前] フィールドなどの自由形式のテキストフィールドに含めないことを強くお勧めします。これは、コンソール、API、または SDK を使用して Amazon DataZone AWS CLIまたは他の AWS のサービス を使用する場合も同様です。 AWS SDKs タグ、または名前に使用される自由記述のテキストフィールドに入力したデー

タは、請求または診断ログに使用される場合があります。外部サーバーに URL を提供する場合、そのサーバーへのリクエストを検証できるように、認証情報を URL に含めないことを強くお勧めします。

データ暗号化

アクセス許可を付与する場合、どのユーザーにどの Amazon DataZone リソースに対してどのアクセス許可を付与するかは、ユーザーが決定します。ユーザーは、それらのリソースで許可する特定のアクションを有効にします。そのため、タスクの実行に必要なアクセス許可のみを付与する必要があります。最小特権アクセスの実装は、セキュリティリスクと、エラーや悪意によってもたらされる可能性のある影響の低減における基本です。

保管中の暗号化

Amazon DataZone は、 がユーザーに代わって AWS 所有および管理する AWS Key Management Service (AWS KMS) キーを使用して、デフォルトですべてのデータを暗号化します。また、 AWS KMS で管理するキーを使用して、Amazon DataZone カタログに格納されているデータを暗号化することもできます。

Amazon DataZone でドメインを作成するときは、[データ暗号化] の [暗号化設定のカスタマイズ (アドバンスト)] の横にあるチェックボックスを選択し、KMS キーを指定することで、暗号化設定を提供できます。

転送中の暗号化

Amazon DataZone は、転送時の暗号化のために Transport Layer Security (TLS) とクライアント側の暗号化を使用します。Amazon DataZone との通信は常に HTTPS 経由で行われるため、データは転送時に常に暗号化されます。

ネットワーク間トラフィックのプライバシー

アカウント間の接続を保護するために、Amazon DataZone ではサービスロールと IAM ロールを使用して顧客アカウントに安全に接続し、顧客に代わってオペレーションを実行します。

トピック

- Amazon DataZone での保管中のデータ暗号化
- Amazon DataZone 用インターフェイス VPC エンドポイントの使用

Amazon DataZone での保管中のデータ暗号化

デフォルトでは、保管中のデータを暗号化することで、機密データの保護に伴う運用のオーバーヘッドと複雑な作業を軽減できます。同時に、セキュリティを重視したアプリケーションを構築することで、暗号化のコンプライアンスと規制の厳格な要件を満たすことができます。

Amazon DataZone は、デフォルト所有 AWSのキーを使用して、保管中のデータを自動的に暗号化します。 AWS 所有キーの使用を表示、管理、または監査することはできません。詳細については、「AWS owned keys」を参照してください。

この暗号化層を無効にしたり、別の暗号化タイプを選択したりすることはできませんが、Amazon DataZone ドメインを作成する際にカスタマーマネージドキーを選択できます。Amazon DataZone は、作成、所有、管理できる対称カスタマーマネージドキーの使用をサポートしています。暗号化はユーザーが完全に制御できるため、以下のタスクを実行できます。

- キーポリシーの確立と維持
- IAM ポリシーとグラントの確立と維持
- キーポリシーの有効化と無効化
- キー暗号化マテリアルのローテーション
- タグを追加
- キーエイリアスの作成
- キー削除のスケジュール

独自のキーを使用するには、Amazon DataZone ドメインを作成する際にカスタマーマネージドキーを選択します。

詳細については、「カスタマーマネージドキー」を参照してください。

> **Note**
>
> Amazon DataZone は AWS 、所有キーを使用して保管時の暗号化を自動的に有効にし、顧客データを無償で保護します。
> AWS KMS 料金は、カスタマーマネージドキーの使用に適用されます。料金の詳細については、「AWS Key Management Service の料金」を参照してください。

Amazon DataZone が KMS AWS で許可を使用する方法

Amazon DataZone では、カスタマーマネージドキーを使用するために 2 つの権限が必要です。カスタマーマネージドキーで暗号化された Amazon DataZone ドメインを作成すると、Amazon DataZone は CreateGrant リクエストを AWS KMS に送信することで、ユーザーに代わって許可を作成します。KMS AWS の許可は、Amazon DataZone にアカウントの KMS キーへのアクセスを許可するために使用されます。Amazon DataZone は、以下の内部オペレーションでユーザーのカスタマーマネージドキーを使用するために、以下のグラントを作成します。

以下のオペレーションのために保管中のデータを暗号化するための 1 つのグラント:

- DescribeKey リクエストを AWS KMS に送信して、Amazon DataZone ドメインの作成時に入力された対称カスタマーマネージド KMS キー ID が有効であることを確認します。
- GenerateDataKey を AWS KMS に送信して、カスタマーマネージドキーによって暗号化されたデータキーを生成します。
- Decrypt リクエストを送信することにより、Amazon DataZone は保存されたデータを復号できます。
- RetireGrant は、ドメインが削除されたときにグラントを廃止します。

データの検索、検出、エクスポートのための 1 つの許可:

- DescribeKey – カスタマーマネージドキーの詳細を提供し、Amazon DataZone がキーを検証できるようにします。
- Decrypt - Amazon DataZone が保存されたデータを復号できるようにします。

いつでも権限のアクセス許可を取り消して、カスタマーマネージドキーに対するアクセス許可を削除できます。これを行うと、Amazon DataZone はカスタマーマネージドキーによって暗号化されたすべてのデータにアクセスできなくなり、そのデータに依存するオペレーションが影響を受けます。

カスタマーマネージドキーを作成する

対称カスタマーマネージドキーは、 AWS マネジメントコンソールまたは KMS APIs AWS を使用して作成できます。

対称カスタマーマネージドキーを作成するには、 AWS 「 Key Management Service デベロッパーガイド」の「対称カスタマーマネージドキーの作成」の手順に従います。

キーポリシー - キーポリシーは、カスタマーマネージドキーへのアクセスを制御します。すべてのカスタマーマネージドキーには、キーポリシーが 1 つだけ必要です。このポリシーには、そのキーを使用できるユーザーとその使用方法を決定するステートメントが含まれています。キーポリシーは、カスタマーマネージドキーの作成時に指定できます。詳細については、 AWS 「 Key Management Service デベロッパーガイド」の「カスタマーマネージドキーへのアクセスの管理」を参照してください。

Amazon DataZone リソースでカスタマーマネージドキーを使用するには、キーポリシーで次の API オペレーションを許可する必要があります。

- kms:CreateGrant – カスタマーマネージドキーにグラントを追加します。グラントによって指定された KMS キーへのアクセスを制御します。これにより、Amazon DataZone が必要とするグラントオペレーションへのアクセスが許可されます。Grants の使用の詳細については、 AWS 「 Key Management Service デベロッパーガイド」を参照してください。
- kms:DescribeKey – カスタマーマネージドキーの詳細を提供し、Amazon DataZone がキーを検証できるようにします。
- kms:GenerateDataKey - AWS KMS の外部で使用する一意の対称データキーを返します。
- kms:Decrypt – KMS キーによって暗号化された暗号文を復号します。

Amazon DataZone に追加できるポリシーステートメントの例を以下に示します。

```
"Statement": [
    {
      "Sid": "Enable IAM User Permissions for DescribeKey",
      "Effect": "Allow",
      "Principal": {
        "AWS": "arn:aws:iam::111122223333:root"
      },
      "Action": "kms:DescribeKey",
      "Resource": "arn:aws:kms:region:111122223333:key/key_ID"
    },
    {
      "Sid": "Allow access to principals authorized to manage Amazon DataZone",
      "Effect": "Allow",
      "Principal": {
        "AWS": "arn:aws:iam::111122223333:root"
      },
      "Action": [
        "kms:Decrypt",
```

```
        "kms:GenerateDataKey"
      ],
      "Resource": "arn:aws:kms:region:111122223333:key/key_ID",
      "Condition": {
        "ForAnyValue:StringEquals": {
          "kms:EncryptionContextKeys": "aws:datazone:domainId"
        }
      }
    },
    {
      "Sid": "Allow creating grants when creating an Amazon DataZone for all principals
 in the account that are authorized to manage Amazon DataZone",
      "Effect": "Allow",
      "Principal": {
        "AWS": "arn:aws:iam::111122223333:root"
      },
      "Action": "kms:CreateGrant",
      "Resource": "arn:aws:kms:region:111122223333:key/key_ID",
      "Condition": {
        "StringLike": {
          "kms:CallerAccount": "111122223333",
          "kms:ViaService": "datazone.region.amazonaws.com"
        },
        "Bool": {
          "kms:GrantIsForAWSResource": "true"
        },
        "ForAnyValue:StringEquals": {
          "kms:EncryptionContextKeys": "aws:datazone:domainId"
        }
      }
    }
]
```

> **Note**
>
> Amazon DataZone データポータルには、ドメイン実行ロールプリンシパルを介してカスタマーマネージドキーへのアクセス許可が付与されます。

ポリシーでのアクセス許可の指定の詳細については、 AWS 「 Key Management Service デベロッパーガイド」を参照してください。

キーアクセスのトラブルシューティングの詳細については、 AWS 「 Key Management Service デベロッパーガイド」を参照してください。

Amazon DataZone のカスタマーマネージドキーの指定

ドメインの作成時に、カスタマーマネージドキーを 2 番目のレイヤー暗号化として指定できます。

Amazon DataZone 暗号化コンテキスト

暗号化コンテキストは、データに関する追加のコンテキスト情報を含むキーと値のペアのオプションセットです。

AWS KMS は、追加の認証済みデータとして暗号化コンテキストを使用して、認証済み暗号化をサポートします。データを暗号化するリクエストに暗号化コンテキストを含めると、 AWS KMS は暗号化コンテキストを暗号化されたデータにバインドします。データを復号化するには、そのリクエストに (暗号化時と) 同じ暗号化コンテキストを含めます。

Amazon DataZone では、次の暗号化コンテキストを使用します。

```
"encryptionContextSubset": {
    "aws:datazone:domainId": "{dzd_samleid}"
}
```

モニタリングに暗号化コンテキストを使用する - 対称カスタマーマネージドキーを使用して Amazon DataZone を暗号化する場合は、監査レコードとログで暗号化コンテキストを使用して、カスタマーマネージドキーがどのように使用されているかを特定することもできます。暗号化コンテキストは、AWS CloudTrail または Amazon CloudWatch Logs によって生成されたログにも表示されます。

対称カスタマーマネージドキーへのアクセスコントロールに暗号化コンテキストを使用する - 対称カスタマーマネージドキーへのアクセスを制御するための条件として、キーポリシーと IAM ポリシーで暗号化コンテキストを使用できます。グラントに暗号化コンテキストの制約を使用することもできます。

Amazon DataZone は、グラントに暗号化コンテキスト制約を使用して、アカウントまたはリージョン内のカスタマーマネージドキーへのアクセスを制御します。グラントの制約では、指定された暗号化コンテキストの使用をグラントが許可するオペレーションが必要です。

次に、特定の暗号化コンテキストのカスタマーマネージドキーへのアクセスを付与するキーポリシーステートメントの例を示します。

```
{
     "Sid": "Enable DescribeKey",
     "Effect": "Allow",
     "Principal": {
       "AWS": "arn:aws:iam::111122223333:role/ExampleRole"
     },
     "Action": "kms:DescribeKey",
     "Resource": "arn:aws:kms:region:111122223333:key/key_ID"
   },
   {
     "Sid": "Allow access to principal to manage an Amazon DataZone domain with the
given domain id",
     "Effect": "Allow",
     "Principal": {
       "AWS": "arn:aws:iam::111122223333:role/ExampleRole"
     },
     "Action": [
       "kms:Decrypt",
       "kms:GenerateDataKey"
     ],
     "Resource": "arn:aws:kms:region:111122223333:key/key_ID",
     "Condition": {
       "StringEquals": {
         "kms:EncryptionContext:aws:datazone:domainId": "dzd_sampleid"
       }
     }
   },
   {
     "Sid": "Allow creating grants when creating an Amazon DataZone domain to
principal",
     "Effect": "Allow",
     "Principal": {
       "AWS": "arn:aws:iam::111122223333:role/ExampleRole"
     },
     "Action": "kms:CreateGrant",
     "Resource": "arn:aws:kms:region:111122223333:key/key_ID",
     "Condition": {
       "StringLike": {
         "kms:CallerAccount": "111122223333",
         "kms:ViaService": "datazone.region.amazonaws.com"
       },
       "Bool": {
```

```
          "kms:GrantIsForAWSResource": "true"
        },
        "ForAnyValue:StringEquals": {
          "kms:EncryptionContextKeys": "aws:datazone:domainId"
        }
      }
    }
```

Amazon DataZone の暗号化キーのモニタリング

Amazon DataZone リソースで AWS KMS カスタマーマネージドキーを使用すると、AWS CloudTrail を使用して Amazon DataZone が AWS KMS に送信するリクエストを追跡できます。次の例はCreateGrant、カスタマーマネージドキーによって暗号化されたデータにアクセスRetireGrantするために Amazon DataZone によって呼び出される KMS オペレーションをモニタリングするための Decrypt、、GenerateDataKey、および の AWS CloudTrail イベントです。

CreateGrant

AWS KMS カスタマーマネージドキーを使用して Amazon DataZone ドメインを暗号化すると、Amazon DataZone はユーザーに代わって AWS アカウントの KMS キーにアクセスするCreateGrantリクエストを送信します。Amazon DataZone が作成する権限は、KMS AWS カスタマーマネージドキーに関連付けられたリソースに固有です。さらに、Amazon DataZone は、ドメインを削除する際に、グラントを削除する RetireGrant オペレーションを使用します。

次に、CreateGrant オペレーションを記録するイベントの例を示します。

```
{
    "eventVersion": "1.11",
    "userIdentity": {
        "type": "AssumedRole",
        "principalId": "AROAIGDTESTANDEXAMPLE:Sampleuser01",
        "arn": "arn:aws:sts::111122223333:assumed-role/Example/Sampleuser01",
        "accountId": "111122223333",
        "accessKeyId": "AKIAIOSFODNN7EXAMPLE3",
        "sessionContext": {
            "sessionIssuer": {
                "type": "Role",
                "principalId": "AROAIGDTESTANDEXAMPLE",
                "arn": "arn:aws:iam::111122223333:role/Example",
```

```
                "accountId": "111122223333",
                "userName": "Example"
            },
            "attributes": {
                "creationDate": "2024-04-22T17:02:00Z",
                "mfaAuthenticated": "false"
            }
        },
        "invokedBy": "datazone.amazonaws.com"
    },
    "eventTime": "2024-04-22T17:02:00Z",
    "eventSource": "kms.amazonaws.com",
    "eventName": "CreateGrant",
    "awsRegion": "us-east-2",
    "sourceIPAddress": "datazone.amazonaws.com",
    "userAgent": "datazone.amazonaws.com",
    "requestParameters": {
        "retiringPrincipal": "datazone.us-east-2.amazonaws.com",
        "operations": [
            "GenerateDataKey",
            "RetireGrant",
            "DescribeKey",
            "Decrypt"
        ],
        "granteePrincipal": "datazone.us-east-2.amazonaws.com",
        "constraints": {
            "encryptionContextSubset": {
                "aws:datazone:domainId": "dzd_sampleid"
            }
        },
        "keyId": "arn:aws:kms:us-
east-2:111122223333:key/1234abcd-12ab-34cd-56ef-123456SAMPLE"
    },
    "responseElements": {
        "grantId":
 "0ab0ac0d0b000f00ea00cc0a0e00fc00bce000c000f0000000c0bc0a0000aaafSAMPLE",
        "keyId": "arn:aws:kms:us-
east-2:111122223333:key/1234abcd-12ab-34cd-56ef-123456SAMPLE"
    },
    "requestID": "ff000af-00eb-00ce-0e00-ea000fb0fba0SAMPLE",
    "eventID": "ff000af-00eb-00ce-0e00-ea000fb0fba0SAMPLE",
    "readOnly": false,
    "resources": [
        {
```

```
            "accountId": "111122223333",
            "type": "AWS::KMS::Key",
            "ARN": "arn:aws:kms:us-
east-2:111122223333:key/1234abcd-12ab-34cd-56ef-123456SAMPLE"
        }
    ],
    "eventType": "AwsApiCall",
    "managementEvent": true,
    "recipientAccountId": "111122223333",
    "eventCategory": "Management",
    "sessionCredentialFromConsole": "true"
}
```

```
{
    "eventVersion": "1.11",
    "userIdentity": {
        "type": "AssumedRole",
        "principalId": "AROAIGDTESTANDEXAMPLE:Sampleuser01",
        "arn": "arn:aws:sts::111122223333:assumed-role/Example/Sampleuser01",
        "accountId": "111122223333",
        "accessKeyId": "AKIAIOSFODNN7EXAMPLE3",
        "sessionContext": {
            "sessionIssuer": {
                "type": "Role",
                "principalId": "AROAIGDTESTANDEXAMPLE",
                "arn": "arn:aws:iam::111122223333:role/Example",
                "accountId": "111122223333",
                "userName": "Example"
            },
            "attributes": {
                "creationDate": "2024-04-22T17:10:00Z",
                "mfaAuthenticated": "false"
            }
        },
        "invokedBy": "datazone.amazonaws.com"
    },
    "eventTime": "2024-04-22T17:49:00Z",
    "eventSource": "kms.amazonaws.com",
    "eventName": "CreateGrant",
    "awsRegion": "us-east-2",
    "sourceIPAddress": "datazone.amazonaws.com",
```

```
    "userAgent": "datazone.amazonaws.com",
    "requestParameters": {
        "retiringPrincipal": "datazone.us-east-2.amazonaws.com",
        "operations": [
            "DescribeKey",
            "Decrypt"
        ],
        "granteePrincipal": "datazone.us-east-2.amazonaws.com",
        "constraints": {
            "encryptionContextSubset": {
                "aws:datazone:domainId": "dzd_sampleid"
            }
        },
        "keyId": "arn:aws:kms:us-
east-2:111122223333:key/1234abcd-12ab-34cd-56ef-123456SAMPLE"
    },
    "responseElements": {
        "grantId":
 "0ab0ac0d0b000f00ea00cc0a0e00fc00bce000c000f0000000c0bc0a0000aaafSAMPLE",
        "keyId": "arn:aws:kms:us-
east-2:111122223333:key/1234abcd-12ab-34cd-56ef-123456SAMPLE"
    },
    "requestID": "ff000af-00eb-00ce-0e00-ea000fb0fba0SAMPLE",
    "eventID": "ff000af-00eb-00ce-0e00-ea000fb0fba0SAMPLE",
    "readOnly": false,
    "resources": [
        {
            "accountId": "111122223333",
            "type": "AWS::KMS::Key",
            "ARN": "arn:aws:kms:us-
east-2:111122223333:key/1234abcd-12ab-34cd-56ef-123456SAMPLE"
        }
    ],
    "eventType": "AwsApiCall",
    "managementEvent": true,
    "recipientAccountId": "111122223333",
    "eventCategory": "Management",
    "sessionCredentialFromConsole": "true"
}
```

GenerateDataKey

Amazon DataZone ドメインの AWS KMS カスタマーマネージドキーを有効にすると、Amazon DataZone はデータキーを生成します。ドメインの AWS KMS カスタマーマネージドキーを指定するGenerateDataKeyリクエストを AWS KMS に送信します。

次に、GenerateDataKey オペレーションを記録するイベントの例を示します。

```
{
    "eventVersion": "1.11",
    "userIdentity": {
        "type": "AssumedRole",
        "principalId": "AROAIGDTESTANDEXAMPLE:AmazonSageMakerDomainExecution",
        "arn": "arn:aws:sts::111122223333:assumed-role/
AmazonSageMakerDomainExecution/AmazonSageMakerDomainExecution",
        "accountId": "111122223333",
        "accessKeyId": "AKIAIOSFODNN7EXAMPLE3",
        "sessionContext": {
            "sessionIssuer": {
                "type": "Role",
                "principalId": "AROAIGDTESTANDEXAMPLE",
                "arn": "arn:aws:iam::111122223333:role/service-role/
AmazonSageMakerDomainExecution",
                "accountId": "111122223333",
                "userName": "AmazonSageMakerDomainExecution"
            },
            "attributes": {
                "creationDate": "2024-04-22T19:50:39Z",
                "mfaAuthenticated": "false"
            }
        },
        "invokedBy": "datazone.amazonaws.com"
    },
    "eventTime": "2024-04-22T19:50:40Z",
    "eventSource": "kms.amazonaws.com",
    "eventName": "GenerateDataKey",
    "awsRegion": "us-east-2",
    "sourceIPAddress": "datazone.amazonaws.com",
    "userAgent": "datazone.amazonaws.com",
    "requestParameters": {
        "keySpec": "AES_256",
        "encryptionContext": {
```

```
            "aws:datazone:domainId": "dzd_sampleid",
            "V": "2024-04-22T17:49:12.98177136Z|cacf3df7-7b99-49f6-ae14-sample",
            "version": "0",
            "N": "dzd_sampleid|arn:aws:kms:us-
east-2:111122223333:key/1234abcd-12ab-34cd-56ef-123456SAMPLE",
            "*aws-kms-table*": "awsdatazoneroaring-data-store-datakeys-prod-us-
east-2"
        },
        "keyId": "arn:aws:kms:us-
east-2:111122223333:key/1234abcd-12ab-34cd-56ef-123456SAMPLE"
    },
    "responseElements": null,
    "requestID": "ff000af-00eb-00ce-0e00-ea000fb0fba0SAMPLE",
    "eventID": "ff000af-00eb-00ce-0e00-ea000fb0fba0SAMPLE",
    "readOnly": true,
    "resources": [
        {
            "accountId": "111122223333",
            "type": "AWS::KMS::Key",
            "ARN": "arn:aws:kms:us-
east-2:111122223333:key/1234abcd-12ab-34cd-56ef-123456SAMPLE"
        }
    ],
    "eventType": "AwsApiCall",
    "managementEvent": true,
    "recipientAccountId": "111122223333",
    "eventCategory": "Management"
}
```

```
{
    "eventVersion": "1.11",
    "userIdentity": {
        "type": "AWSService",
        "invokedBy": "AWS Internal"
    },
    "eventTime": "2024-04-22T19:50:40Z",
    "eventSource": "kms.amazonaws.com",
    "eventName": "GenerateDataKey",
    "awsRegion": "us-east-2",
    "sourceIPAddress": "AWS Internal",
    "userAgent": "AWS Internal",
```

```
    "requestParameters": {
        "encryptionContext": {
            "aws:datazone:domainId": "dzd_sampleid",
            "aws:s3:arn": "arn:aws:s3:::amazon-datazone-us-
east-2-422ceee9465430bdb354d1c9efsample"
        },
        "keyId": "arn:aws:kms:us-
east-2:111122223333:key/1234abcd-12ab-34cd-56ef-123456SAMPLE",
        "keySpec": "AES_256"
    },
    "responseElements": null,
    "requestID": "ff000af-00eb-00ce-0e00-ea000fb0fba0SAMPLE",
    "eventID": "ff000af-00eb-00ce-0e00-ea000fb0fba0SAMPLE",
    "readOnly": true,
    "resources": [
        {
            "accountId": "111122223333",
            "type": "AWS::KMS::Key",
            "ARN": "arn:aws:kms:us-
east-2:111122223333:key/1234abcd-12ab-34cd-56ef-123456SAMPLE"
        }
    ],
    "eventType": "AwsApiCall",
    "managementEvent": true,
    "recipientAccountId": "111122223333",
    "sharedEventID": "ff000af-00eb-00ce-0e00-ea000fb0fba0SAMPLE",
    "eventCategory": "Management"
}
```


Decrypt

ユーザーが暗号化された Amazon DataZone ドメインにアクセスすると、Amazon DataZone は `Decrypt` オペレーションを呼び出し、保存されている暗号化されたデータキーを使用して暗号化済みのデータにアクセスします。

以下のイベント例は、`Decrypt` オペレーションを記録したものです。


```
{
    "eventVersion": "1.11",
    "userIdentity": {
        "type": "AssumedRole",
```

```
        "principalId": "AROAIGDTESTANDEXAMPLE:AmazonSageMakerDomainExecution",
        "arn": "arn:aws:sts::111122223333:assumed-role/
AmazonSageMakerDomainExecution/AmazonSageMakerDomainExecution",
        "accountId": "111122223333",
        "accessKeyId": "AKIAIOSFODNN7EXAMPLE3",
        "sessionContext": {
            "sessionIssuer": {
                "type": "Role",
                "principalId": "AROAIGDTESTANDEXAMPLE",
                "arn": "arn:aws:iam::111122223333:role/service-role/
AmazonSageMakerDomainExecution",
                "accountId": "111122223333",
                "userName": "AmazonSageMakerDomainExecution"
            },
            "attributes": {
                "creationDate": "2024-04-22T19:50:39Z",
                "mfaAuthenticated": "false"
            }
        },
        "invokedBy": "datazone.amazonaws.com"
    },
    "eventTime": "2024-04-22T19:51:54Z",
    "eventSource": "kms.amazonaws.com",
    "eventName": "Decrypt",
    "awsRegion": "us-east-2",
    "sourceIPAddress": "datazone.amazonaws.com",
    "userAgent": "datazone.amazonaws.com",
    "requestParameters": {
        "encryptionAlgorithm": "SYMMETRIC_DEFAULT",
        "encryptionContext": {
            "aws:datazone:domainId": "dzd_sampleid",
            "V": "2024-04-22T17:49:12.98177136Z|cacf3df7-7b99-49f6-ae14-sample",
            "version": "0",
            "N": "dzd_sampleid|arn:aws:kms:us-
east-2:111122223333:key/1234abcd-12ab-34cd-56ef-123456SAMPLE",
            "*aws-kms-table*": "awsdatazoneroaring-data-store-datakeys-prod-us-
east-2"
        }
    },
    "responseElements": null,
    "requestID": "ff000af-00eb-00ce-0e00-ea000fb0fba0SAMPLE",
    "eventID": "ff000af-00eb-00ce-0e00-ea000fb0fba0SAMPLE",
    "readOnly": true,
    "resources": [
```

```
        {
            "accountId": "111122223333",
            "type": "AWS::KMS::Key",
            "ARN": "arn:aws:kms:us-
east-2:111122223333:key/1234abcd-12ab-34cd-56ef-123456SAMPLE"
        }
    ],
    "eventType": "AwsApiCall",
    "managementEvent": true,
    "recipientAccountId": "111122223333",
    "eventCategory": "Management"
}
```

```
{
    "eventVersion": "1.11",
    "userIdentity": {
        "type": "AWSService",
        "invokedBy": "datazone.amazonaws.com"
    },
    "eventTime": "2024-04-22T19:51:54Z",
    "eventSource": "kms.amazonaws.com",
    "eventName": "Decrypt",
    "awsRegion": "us-east-2",
    "sourceIPAddress": "datazone.amazonaws.com",
    "userAgent": "datazone.amazonaws.com",
    "requestParameters": {
        "encryptionContext": {
            "aws:datazone:domainId": "dzd_sampleid",
            "V": "2024-04-22T17:49:12.98177136Z|cacf3df7-7b99-49f6-ae14-sample",
            "version": "0",
            "N": "dzd_sampleid|arn:aws:kms:us-
east-2:111122223333:key/1234abcd-12ab-34cd-56ef-123456SAMPLE",
            "*aws-kms-table*": "awsdatazoneroaring-data-store-datakeys-prod-us-
east-2"
        },
        "encryptionAlgorithm": "SYMMETRIC_DEFAULT"
    },
    "responseElements": null,
    "requestID": "ff000af-00eb-00ce-0e00-ea000fb0fba0SAMPLE",
    "eventID": "ff000af-00eb-00ce-0e00-ea000fb0fba0SAMPLE",
    "readOnly": true,
```

```
    "resources": [
        {
            "accountId": "111122223333",
            "type": "AWS::KMS::Key",
            "ARN": "arn:aws:kms:us-
east-2:111122223333:key/1234abcd-12ab-34cd-56ef-123456SAMPLE"
        }
    ],
    "eventType": "AwsApiCall",
    "managementEvent": true,
    "recipientAccountId": "111122223333",
    "sharedEventID": "ff000af-00eb-00ce-0e00-ea000fb0fba0SAMPLE",
    "eventCategory": "Management"
}
```

```
{
    "eventVersion": "1.11",
    "userIdentity": {
        "type": "AWSService",
        "invokedBy": "AWS Internal"
    },
    "eventTime": "2024-04-22T19:51:54Z",
    "eventSource": "kms.amazonaws.com",
    "eventName": "Decrypt",
    "awsRegion": "us-east-2",
    "sourceIPAddress": "AWS Internal",
    "userAgent": "AWS Internal",
    "requestParameters": {
        "encryptionAlgorithm": "SYMMETRIC_DEFAULT",
        "encryptionContext": {
            "aws:datazone:domainId": "dzd_sampleid",
            "aws:s3:arn": "arn:aws:s3:::amazon-datazone-us-
east-2-422ceee9465430bdb354d1c9efsample"
        }
    },
    "responseElements": null,
    "requestID": "ff000af-00eb-00ce-0e00-ea000fb0fba0SAMPLE",
    "eventID": "ff000af-00eb-00ce-0e00-ea000fb0fba0SAMPLE",
    "readOnly": true,
    "resources": [
        {
```

```
            "accountId": "111122223333",
            "type": "AWS::KMS::Key",
            "ARN": "arn:aws:kms:us-
east-2:111122223333:key/1234abcd-12ab-34cd-56ef-123456SAMPLE"
        }
    ],
    "eventType": "AwsApiCall",
    "managementEvent": true,
    "recipientAccountId": "111122223333",
    "sharedEventID": "ff000af-00eb-00ce-0e00-ea000fb0fba0SAMPLE",
    "eventCategory": "Management"
}
```

RetireGrant

以下のイベント例は、RetireGrant オペレーションを記録したものです。

```
{
    "eventVersion": "1.11",
    "userIdentity": {
        "type": "AWSService",
        "invokedBy": "datazone.amazonaws.com"
    },
    "eventTime": "2025-04-29T22:18:50Z",
    "eventSource": "kms.amazonaws.com",
    "eventName": "RetireGrant",
    "awsRegion": "us-east-2",
    "sourceIPAddress": "datazone.amazonaws.com",
    "userAgent": "datazone.amazonaws.com",
    "requestParameters": null,
    "responseElements": {
        "keyId": "arn:aws:kms:us-
east-2:111122223333:key/1234abcd-12ab-34cd-56ef-123456SAMPLE"
    },
    "additionalEventData": {
        "grantId":
 "0ab0ac0d0b000f00ea00cc0a0e00fc00bce000c000f0000000c0bc0a0000aaafSAMPLE"
    },
    "requestID": "294308c0-7617-4727-b5c9-34eaf75aa8e3",
    "eventID": "273708f7-5fbb-3a90-b04d-2b3138bf0ec9",
    "readOnly": false,
    "resources": [
```

```
        {
            "accountId": "111122223333",
            "type": "AWS::KMS::Key",
            "ARN": "arn:aws:kms:us-
east-2:111122223333:key/1234abcd-12ab-34cd-56ef-123456SAMPLE"
        }
    ],
    "eventType": "AwsApiCall",
    "managementEvent": true,
    "recipientAccountId": "111122223333",
    "sharedEventID": "b46377d7-b3c3-4bfd-a257-722bd3f3411d",
    "eventCategory": "Management"
}
```

暗号化された Glue カタログを含む Data Lake AWS 環境の作成

高度なユースケースでは、暗号化された Glue AWS カタログを使用する場合は、カスタマーマネージド KMS キーを使用する Amazon DataZone サービスへのアクセスを許可する必要があります。これを行うには、カスタム KMS ポリシーを更新し、キーにタグを追加します。暗号化された Glue カタログのデータを操作する Amazon DataZone AWS サービスへのアクセスを許可するには、次の手順を実行します。

- カスタム KMS キーに次のポリシーを追加します。詳細については、「キーポリシーの変更」を参照してください。

  JSON

```
{
    "Version":"2012-10-17",
    "Statement": [
        {
            "Sid": "Allow datazone environment roles to decrypt using the key",
            "Effect": "Allow",
            "Principal": {
                "AWS": "*"
            },
            "Action": [
                "kms:Decrypt"
            ],
            "Resource": "*",
            "Condition": {
```

```
                "StringEquals": {
                    "kms:EncryptionContext:glue_catalog_id":
 "<GLUE_CATALOG_ID>"
                },
                "ArnLike": {
                    "aws:PrincipalArn": [
                        "arn:aws:iam::111122223333:role/*datazone_usr*",
                        "arn:aws:iam::444455556666:role/*datazone_usr*"
                    ]
                }
            }
        },
        {
            "Sid": "Allow datazone environment roles to describe the key",
            "Effect": "Allow",
            "Principal": {
                "AWS": "*"
            },
            "Action": [
                "kms:DescribeKey"
            ],
            "Resource": "*",
            "Condition": {
                "ArnLike": {
                    "aws:PrincipalArn": [
                    "arn:aws:iam::111122223333:role/*datazone_usr*",
                    "arn:aws:iam::444455556666:role/*datazone_usr*"
                    ]
                }
            }
        }
    ]
}
```

Important

- 環境を作成するアカウント ID を使用して、ポリシーの `"aws:PrincipalArn"` ARN を変更する必要があります。環境を作成する各アカウントは、ポリシーに `"aws:PrincipalArn"` としてリストされている必要があります。
- また、<GLUE_CATALOG_ID> を Glue カタログがある有効な AWS アカウント ID AWS に置き換える必要があります。

- このポリシーは、指定されたアカウント (複数可) 内のすべての Amazon DataZone 環境ユーザーロールにキーを使用するアクセスを許可することに注意してください。特定の環境ユーザーロールにのみキーの使用を許可する場合は、ワイルドカード形式ではなく、環境ユーザーロール名全体 (例: `arn:aws:iam::<ENVIRONMENT_ACCOUNT_ID>:role/datazone_usr_<ENVIRONMENT_ID>` <ENVIRONMENT_ID> は環境の ID) を指定する必要があります。

- カスタム KMS キーに次のタグを追加します。詳細については、「タグを使用して KMS キーへのアクセスを制御する」を参照してください。

```
key: AmazonDataZoneEnvironment
value: all
```

Amazon DataZone 用インターフェイス VPC エンドポイントの使用

Amazon Virtual Private Cloud (Amazon VPC) を使用して AWS リソースをホストする場合は、Amazon VPC と Amazon DataZone 間の接続を確立できます。この Amazon DataZone との接続は、パブリックインターネットを経由せずに使用できます。

Amazon VPC では、カスタム仮想ネットワークで AWS リソースを起動できます。VPC を使用して、IP アドレス範囲、サブネット、ルートテーブル、ネットワークゲートウェイなどのネットワーク設定を制御できます。Amazon VPC の詳細については、「Amazon VPC ユーザーガイド」を参照してください。

Amazon VPC を Amazon DataZone に接続するには、まずインターフェイス VPC エンドポイントを定義する必要があります。これにより、VPC を他の AWS サービスに接続できます。このエンドポイントを使用すると、インターネットゲートウェイやネットワークアドレス変換 (NAT) インスタンス、VPN 接続などを使用せずに、信頼性の高いスケーラブルな接続ができます。VPC エンドポイントの作成方法の詳細と詳細な手順については、Amazon VPC ユーザーガイドの「インターフェイス VPC エンドポイント (AWS PrivateLink)」を参照してください。

> **Important**
>
> VPC では、エンドポイントポリシーはリソースベースのポリシーであり、VPC エンドポイントにアタッチして、エンドポイントを使用して サービスにアクセスできる AWS プリンシパルを AWS 制御できます。
> Amazon DataZone の現在のリリースでは、エンドポイントポリシーの使用は、Amazon VPC と Amazon DataZone エンドポイント間の接続の確立と使用においてサポートされています。

Amazon DataZone での認証

Amazon DataZone のインターフェイスは、 内のマネジメントコンソール AWS とコンソール外のウェブアプリケーション (データポータル) で構成されます。

Amazon DataZone マネジメントコンソールは、 AWS 管理者がtop-level-resource APIs に使用できます。これには、ドメインの作成と管理、これらのドメインの AWS アカウント関連付け、Amazon DataZone にアクセス管理を委任するデータソースが含まれます。Amazon DataZone マネジメントコンソールを使用して、明示的に設定された AWS アカウントの Amazon DataZone サービスにアクセス管理コントロールを委任するために必要なすべての IAM ロールと設定を管理できます。Amazon DataZone データポータルは、SSO ユーザー向けのファーストパーティ AWS の Identity Center アプリケーションです。有効にすると、SSO アイデンティティを使用する代わりに、承認された IAM プリンシパルでコンソールを使用して、データポータルにフェデレートすることができます。

Amazon DataZone のデータポータルは、データへのアクセスを管理し、データの公開、検出、サブスクリプション、分析タスクを実行するために、 AWS IAM アイデンティティセンターで認証されたユーザーが主に使用するように設計されています。

Amazon DataZone コンソールでの承認

Amazon DataZone コンソール承認モデルは IAM 承認を使用します。コンソールは、主にセットアップのために管理者が使用します。Amazon DataZone はドメイン管理者 AWS アカウントとメンバー AWS アカウントの概念を使用し、コンソールはこれらのすべてのアカウントから使用され、 AWS 組織の境界を尊重しながら信頼関係を構築します。

Amazon DataZone ポータルでの承認

Amazon DataZone データポータル承認モデルは、管理者とビューワーを含む静的ロールアーキタイプ (プロファイル) を持つ階層 ACL です。例えば、ユーザーは管理者またはユーザーのプロファイル

を持つことができます。ドメインのレベルでは、データ所有者のドメインユーザーの指定がある場合があります。プロジェクトのレベルでは、ユーザーは所有者または共同作成者になることができます。これらのプロファイルは、ユーザーとグループの 2 つのタイプのいずれかとして設定できます。その後、これらのプロファイルはドメインとプロジェクトに関連付けられ、これらのアクセス許可の状態は関連付けテーブルに保存されます。

Amazon DataZone では、ユーザーがこの承認モデル内でユーザーおよびグループのアクセス許可を管理できます。ユーザーは、プロジェクトメンバーシップの管理、プロジェクトへのメンバーシップのリクエスト、メンバーシップの承認を行います。ユーザーは、データの公開、データのサブスクライブ、サブスクリプションの承認を行います。

ユーザーは、Amazon DataZone が特定のプロジェクトコンテキストにおいて、ユーザーの有効なプロファイルに基づいて生成する IAM セッション認証情報を、データポータルクライアントがリクエストしたときに、特定のプロジェクトでデータ分析を実行します。このセッションは、ユーザーのアクセス許可と特定のプロジェクトのリソースの両方を対象としています。次に、ユーザーは Athena または Redshift にドロップして関連データをクエリすると、基盤となるすべての IAM 動作が完全に抽象化されます。

Amazon DataZone プロファイルとロール

ユーザーが認証されると、認証されたコンテキストはユーザープロファイル ID にマッピングされます。このユーザープロファイルには、ユーザーの承認に使用される複数の異なる関連付け (プロジェクト所有者、ドメイン管理者など) を含めることができます。各関連付け (プロジェクト所有者、ドメイン管理者など) には、コンテキストに基づく特定のアクティビティに対するアクセス許可があります。例えば、ドメイン管理者の関連付けを持つユーザーは、追加のドメインを作成し、他のドメイン管理者をドメインに割り当て、ドメイン内にプロジェクトテンプレートを作成できます。プロジェクト所有者は、プロジェクトのプロジェクトメンバーを追加または削除したり、アセットをドメインに公開したりできます。

IAM を使用した Amazon DataZone リソースへのアクセスコントロール

AWS Identity and Access Management (IAM) は、以下のセキュリティ関連のタスクを完了する必要があります。

- AWS アカウントにユーザーとグループを作成する。
- AWS アカウントの各ユーザーに一意のセキュリティ認証情報を割り当てる。
- AWS リソースを使用してタスクを実行する各ユーザーのアクセス許可を制御します。

- 別の のユーザーに AWS リソース AWS アカウント の共有を許可します。
- のロールを作成し AWS アカウント 、それらを引き受けることができるユーザーまたはサービスを定義します。
- エンタープライズの既存の ID を使用して、 AWS リソースを使用してタスクを実行するためのアクセス許可を付与する

IAM の詳細については、以下を参照してください。

- AWS Identity and Access Management (IAM)
- IAM の開始方法
- IAM ユーザーガイド

以下のセクションでは、Amazon DataZone と、ドメイン (ドメインを含む)、関連付けられたアカウント、プロジェクト、データソースなどのコンポーネントを設定するために必要なポリシーとアクセス許可について説明します。詳細については、「Amazon DataZone の用語と概念」を参照してください。

内容

- AWS Amazon DataZone の マネージドポリシー
- Amazon DataZone の IAM ロール
- 一時認証情報
- プリンシパルアクセス権限

AWS Amazon DataZone の マネージドポリシー

AWS 管理ポリシーは、 によって作成および管理されるスタンドアロンポリシーです AWS。 AWS 管理ポリシーは、ユーザー、グループ、ロールにアクセス許可の割り当てを開始できるように、多くの一般的なユースケースにアクセス許可を付与するように設計されています。

AWS 管理ポリシーは、すべての AWS お客様が使用できるため、特定のユースケースに対して最小特権のアクセス許可を付与しない場合があることに注意してください。ユースケースに固有のカスタマー管理ポリシーを定義して、アクセス許可を絞り込むことをお勧めします。

AWS 管理ポリシーで定義されているアクセス許可は変更できません。が AWS マネージドポリシーで定義されたアクセス許可 AWS を更新すると、ポリシーがアタッチされているすべてのプリンシパル ID (ユーザー、グループ、ロール) に影響します。 AWS は、新しい が起動されるか、新しい API

オペレーション AWS のサービス が既存のサービスで使用できるようになったときに、 AWS マネージドポリシーを更新する可能性が最も高くなります。

詳細については、「IAM ユーザーガイド」の「AWS マネージドポリシー」を参照してください。

内容

AWS 管理ポリシー: AmazonDataZoneFullAccess

`AmazonDataZoneFullAccess` ポリシーを IAM アイデンティティにアタッチできます。

このポリシーは、 AWS マネジメントコンソール経由で Amazon DataZone へのフルアクセスを提供します。このポリシーには、暗号化された AWS SSM パラメータの KMS へのアクセス許可もあります。SSM パラメータの復号を可能にするには、KMS キーに EnableKeyForAmazonDataZone のタグを付ける必要があります。

アクセス許可の詳細

このポリシーには、以下のアクセス許可が含まれています。

- `datazone` – プリンシパルに、 AWS マネジメントコンソール経由で Amazon DataZone へのフルアクセスを付与します。
- `kms` — プリンシパルにエイリアスの一覧表示、キーの記述、キーの復号を許可します。
- `s3` – プリンシパルに、Amazon DataZone データを保存するために、既存の S3 バケットの選択および新規作成を許可します。

- ram – プリンシパルに、 AWS アカウント経由での Amazon DataZone ドメインの共有を許可します。
- iam — プリンシパルに、ロールの一覧表示とパス (渡すこと)、およびポリシーの取得を許可します。
- sso – プリンシパルに、 AWS IAM アイデンティティセンター が有効化されているリージョンの取得を許可します。
- secretsmanager – プリンシパルに、特定のプレフィックスが追加されたシークレットの作成、タグ付け、一覧表示を許可します。
- aoss – プリンシパルに OpenSearch Serverless セキュリティポリシーの情報の作成および取得を許可します。
- bedrock – プリンシパルに、推論プロファイルと基盤モデルの情報の作成、一覧表示、取得を許可します。
- codeconnections – プリンシパルに、接続の削除、情報の取得、接続の一覧表示、タグの管理を許可します。
- codewhisperer – プリンシパルに CodeWhisperer プロファイルの一覧表示を許可します。
- ssm – プリンシパルにパラメータの情報の入力、削除、取得を許可します。
- redshift – プリンシパルにクラスターの記述、サーバーレスワークグループの一覧表示を許可します。
- glue – プリンシパルにデータベースの取得を許可します。

このポリシーの許可を確認するには、「AWS マネージドポリシーリファレンス」の「AmazonDataZoneFullAccess」を参照してください。

ポリシーの考慮事項と制限事項

AmazonDataZoneFullAccess ポリシーの範囲に含まれない特定の機能があります。

- 独自の AWS KMS キーを使用して Amazon DataZone ドメインを作成する場合、ドメインの作成を成功させるkms:CreateGrantには に対するアクセス許可が必要です。そのキーが listDataSourcesや などの他の Amazon DataZone APIs を呼び出すには kms:GenerateDataKeykms:Decryptに対するアクセス許可が必要ですcreateDataSource。また、そのキーのリソースポリシーの kms:CreateGrant、kms:Decrypt、kms:GenerateDataKey、kms:DescribeKey へのアクセス許可も必要です。

これは、デフォルトのサービス所有の KMS キーを使用する場合は必要ありません。

詳細については、「AWS Key Management Service」を参照してください。

- Amazon DataZone コンソールで作成および更新ロール機能を使用する場合は、管理者権限か、IAM ロールの作成とポリシーの作成/更新に必要な IAM アクセス許可が必要です。必要なアクセス許可には、`iam:CreateRole`、`iam:CreatePolicy`、`iam:CreatePolicyVersion`、`iam:DeletePolicyV` へのアクセス許可が含まれます。
- AWS IAM アイデンティティセンター ユーザーログインを有効にして Amazon DataZone で新しいドメインを作成する場合、または Amazon DataZone の既存のドメインに対してドメインをアクティブ化する場合は、次のアクセス許可が必要です。
  - organizations:DescribeOrganization
  - organizations:ListDelegatedAdministrators
  - sso:CreateInstance
  - sso:ListInstances
  - sso:GetSharedSsoConfiguration
  - sso:PutApplicationGrant
  - sso:PutApplicationAssignmentConfiguration
  - sso:PutApplicationAuthenticationMethod
  - sso:PutApplicationAccessScope
  - sso:CreateApplication
  - sso:DeleteApplication
  - sso:CreateApplicationAssignment
  - sso:DeleteApplicationAssignment
  - sso-directory:CreateUser
  - sso-directory:SearchUsers
  - sso:ListApplications
- Amazon DataZone で AWS アカウント関連付けリクエストを受け入れるには、 アクセス`ram:AcceptResourceShareInvitation`許可が必要です。
- SageMaker Unified Studio ネットワーク設定に必要なリソースを作成する場合は、以下に対するアクセス許可を持ち、AmazonVpcFullAccess ポリシーをアタッチする必要があります。
  - iam:PassRole

- cloudformation:CreateStack

AWS マネージドポリシー: AmazonDataZoneFullUserAccess

このポリシーでは Amazon DataZone へのフルアクセスを付与しますが、ドメイン、ユーザー、または関連づけられたアカウントの管理は許可しません。

アクセス許可の詳細

このポリシーの許可を確認するには、「AWS マネージドポリシーリファレンス」の「AmazonDataZoneFullUserAccess」を参照してください。

AWS 管理ポリシー: AmazonDataZoneEnvironmentRolePermissionsBoundary

> **Note**
>
> このポリシーはアクセス許可の境界です。アクセス許可の境界で、アイデンティティベースのポリシーで IAM エンティティに付与することのできる許可の上限を設定します。Amazon DataZone アクセス許可の境界ポリシーは、自分で使用したりアタッチすることはできません。Amazon DataZone アクセス許可の境界ポリシーは、Amazon DataZone マネージドロールにのみアタッチされる必要があります。アクセス許可の境界の詳細については、「IAM ユーザーガイド」の「IAM エンティティのアクセス許可の境界」を参照してください。

Amazon DataZone データポータルを使用して環境を作成すると、Amazon DataZone はこのアクセス許可の境界を、環境の作成時に生成される IAM ロールに適用します。アクセス許可の境界により、Amazon DataZone が作成するロールとユーザーが作成するロールの範囲が制限されます。

Amazon DataZone は、`AmazonDataZoneEnvironmentRolePermissionsBoundary` マネージドポリシーを使用して、アタッチされているプロビジョニングされた IAM プリンシパルを制限します。プリンシパルは、Amazon DataZone がインタラクティブエンタープライズユーザーや分析サービス (AWS Glueなど) に代わって引き受けることができるユーザーロールという形を取り、Amazon S3 からの読み取りおよび書き込みや AWS Glue クローラーの実行などの、データ処理アクションを実行する場合があります。

この`AmazonDataZoneEnvironmentRolePermissionsBoundary`ポリシーは、Amazon DataZone の読み取りおよび書き込みアクセスを Amazon S3 AWS Glue、、Amazon Redshift AWS Lake Formation、Amazon Athena などのサービスに付与します。このポリシーは、ネットワークイ

ンターフェイスや AWS KMS キーなど、これらのサービスを使用するために必要な一部のインフラストラクチャリソースに読み取りおよび書き込みアクセス許可も付与します。

Amazon DataZone では、すべての Amazon DataZone 環境ロール (所有者と共同作成者) のアクセス許可の境界として `AmazonDataZoneEnvironmentRolePermissionsBoundary` AWS マネージドポリシーを適用します。このアクセス許可の境界により、これらのロールは、環境に必要なリソースとアクションへのアクセスのみを許可できるように制限されます。

このポリシーのアクセス許可を確認するには、「AWS マネージドポリシーリファレンス」の「AmazonDataZoneEnvironmentRolePermissionsBoundary」を参照してください。

AWS 管理ポリシー: AmazonDataZoneRedshiftGlueProvisioningPolicy

このAmazonDataZoneRedshiftGlueProvisioningPolicyポリシーは、 Glue および Amazon Redshift との相互運用に必要なアクセス許可を Amazon DataZone AWS に付与します。

このポリシーのアクセス許可を確認するには、「AWS マネージドポリシーリファレンス」の「AmazonDataZoneRedshiftGlueProvisioningPolicy」を参照してください。

AWS 管理ポリシー: AmazonDataZoneGlueManageAccessRolePolicy

このポリシーは、カタログに AWS Glue データを発行するアクセス許可を Amazon DataZone に付与します。また、 AWS Glue がカタログに公開したアセットへのアクセス権の付与や、アクセス権の取り消しを行うためのアクセス許可も Amazon DataZone に付与します。

このポリシーのアクセス許可を確認するには、「AWS マネージドポリシーリファレンス」の「AmazonDataZoneGlueManageAccessRolePolicy」を参照してください。

AWS 管理ポリシー: AmazonDataZoneRedshiftManageAccessRolePolicy

このポリシーは、Amazon Redshift データをカタログに公開するためのアクセス許可を Amazon DataZone に付与します。また、Amazon Redshift または Amazon Redshift Serverless がカタログに公開したアセットへのアクセス権の付与や、アクセス権の取り消しを行うためのアクセス許可も Amazon DataZone に付与します。

このポリシーのアクセス許可を確認するには、「AWS マネージドポリシーリファレンス」の「AmazonDataZoneRedshiftManageAccessRolePolicy」を参照してください。

AWS 管理ポリシー: AmazonDataZoneDomainExecutionRolePolicy

これは Amazon DataZone `DomainExecutionRole` サービスロールのデフォルトのポリシーです。このロールは、Amazon DataZone ドメイン内のデータをカタログ化、検出、管理、共有、分析する

ために Amazon DataZone で使用されます。このロールは、データポータルの使用に必要なすべての Amazon DataZone API へのアクセスと、Amazon DataZone ドメイン内の関連付けられたアカウントの使用をサポートする RAM アクセス許可を提供します。

`AmazonDataZoneDomainExecutionRole` に AmazonDataZoneDomainExecutionRolePolicy ポリシーをアタッチできます。

このポリシーのアクセス許可を確認するには、「AWS マネージドポリシーリファレンス」の「AmazonDataZoneDomainExecutionRolePolicy」を参照してください。

AWS 管理ポリシー: AmazonDataZoneSageMakerProvisioningRolePolicy

AmazonDataZoneSageMakerProvisioningRolePolicy ポリシーは、Amazon SageMaker との相互運用に必要なアクセス許可を Amazon DataZone に付与します。

このポリシーのアクセス許可を確認するには、「AWS マネージドポリシーリファレンス」の「AmazonDataZoneSageMakerProvisioningRolePolicy」を参照してください。

AWS 管理ポリシー: AmazonDataZoneSageMakerManageAccessRolePolicy

このポリシーは、Amazon SageMaker アセットをカタログに公開するアクセス許可を Amazon DataZone に付与します。また、Amazon SageMaker がカタログに公開したアセットへのアクセス権の付与や、アクセス権の取り消しを行うためのアクセス許可も Amazon DataZone に付与します。

このポリシーには以下を実行するための許可が含まれます。

- cloudtrail – CloudTrail 追跡に関する情報を取得します。
- cloudwatch – 現在の CloudWatch アラームを取得します。
- logs – CloudWatch ログのメトリクスフィルターを取得します。
- sns – SNS トピックのサブスクリプションリストを取得します。
- config – 設定レコーダー、リソース、および Config AWS ルールに関する情報を取得します。また、サービスにリンクされたロールが Config AWS ルールを作成および削除し、ルールに対して評価を実行できるようにします。
- iam – アカウントの認証情報レポートの取得と生成を実行します。
- organizations – 組織のアカウントおよび組織単位 (OU) 情報を取得します。
- securityhub – Security Hub サービス、標準およびコントロールの設定方法に関する情報を取得します。
- tag – リソースタグに関する情報を取得します。

このポリシーのアクセス許可を確認するには、「AWS マネージドポリシーリファレンス」の「AmazonDataZoneSageMakerManageAccessRolePolicy」を参照してください。

AWS 管理ポリシー: AmazonDataZoneSageMakerEnvironmentRolePermissionsBoundary

> **Note**
>
> このポリシーはアクセス許可の境界です。アクセス許可の境界で、アイデンティティベースのポリシーで IAM エンティティに付与することのできる許可の上限を設定します。Amazon DataZone アクセス許可の境界ポリシーは、自分で使用したりアタッチすることはできません。Amazon DataZone アクセス許可の境界ポリシーは、Amazon DataZone マネージドロールにのみアタッチされる必要があります。アクセス許可の境界の詳細については、「IAM ユーザーガイド」の「IAM エンティティのアクセス許可の境界」を参照してください。

Amazon DataZone データポータルを使用して Amazon SageMaker 環境を作成すると、Amazon DataZone はこのアクセス許可の境界を環境の作成中に生成される IAM ロールに適用します。アクセス許可の境界により、Amazon DataZone が作成するロールとユーザーが作成するロールの範囲が制限されます。

Amazon DataZone は、`AmazonDataZoneSageMakerEnvironmentRolePermissionsBoundary` マネージドポリシーを使用して、アタッチされているプロビジョニングされた IAM プリンシパルを制限します。プリンシパルは、Amazon DataZone がインタラクティブなエンタープライズユーザーまたは分析サービス (AWS SageMaker など) に代わって引き受けることができるユーザーロールの形式をとり、Amazon S3 または Amazon Redshift からの読み取りと書き込み、または AWS Glue クローラの実行などのデータを処理するためのアクションを実行する場合があります。

この`AmazonDataZoneSageMakerEnvironmentRolePermissionsBoundary`ポリシーは、Amazon DataZone の読み取りおよび書き込みアクセスを Amazon SageMaker、 AWS Glue、Amazon S3、 AWS Lake Formation、Amazon Redshift、Amazon Athena などのサービスに付与します。このポリシーは、ネットワークインターフェイス、Amazon ECR リポジトリ、KMS AWS キーなど、これらのサービスを使用するために必要な一部のインフラストラクチャリソースに読み取りおよび書き込みアクセス許可も付与します。さらに、Amazon SageMaker Canvas などの Amazon SageMaker アプリケーションへのアクセス許可も付与します。

Amazon DataZone では、すべての Amazon DataZone 環境ロール (所有者と共同作成者) のアクセス許可の境界として `AmazonDataZoneSageMakerEnvironmentRolePermissionsBoundary` マ

ネージドポリシーを適用します。このアクセス許可の境界により、これらのロールは、環境に必要なリソースとアクションへのアクセスのみを許可できるように制限されます。

このポリシーのアクセス許可を確認するには、「AWS マネージドポリシーリファレンス」の「AmazonDataZoneSageMakerEnvironmentRolePermissionsBoundary」を参照してください。

AWS マネージドポリシーに対する Amazon DataZone の更新

このサービスがこれらの変更の追跡を開始してからの Amazon DataZone の AWS マネージドポリシーの更新に関する詳細を表示します。このページへの変更に関する自動アラートを受け取るには、Amazon DataZone の [ドキュメント履歴] ページで RSS フィードをサブスクライブします。

変更	説明	日付
AmazonDataZoneDomainExecutionRolePolicy - ポリシーの更新	AmazonDataZoneDomainExecutionRolePolicy へのポリシーの更新 - グラフベースのエンティティ検索機能をサポートするQueryGraph アクションのアクセス許可を追加します。	2026 年 2 月 25 日
AmazonDataZoneGlueManageAccessRolePolicy - ポリシーの更新	AmazonDataZoneGlueManageAccessRolePolicy に対するポリシー更新 - AWS Glue の接続ベースのデータソースのデータリネージュキャプチャをサポートするアクセス許可を GetConnection アクションに追加しました。	2025 年 7 月 30 日
AmazonDataZoneFullAccess - ポリシーの更新	AmazonDataZoneFullAccess に対するポリシー更新 - SecretsManager の createと dzd_.. の代わりに dzd- の	2025 年 7 月 23 日

変更	説明	日付
	形式を持つ新しいドメインの tag アクセス許可のスコープを一般化しました。	
AmazonDataZoneFullAccess - ポリシーの更新	AmazonDataZoneFullAccess へのポリシーの更新 - コンソールが RAM リソース共有の AWS AWS マネージドアクセス許可をアタッチまたは更新できるようにします。	2025 年 5 月 22 日
AmazonDataZoneGlue ManageAccessRolePolicy - ポリシーの更新	AmazonDataZoneGlue ManageAccessRolePolicy に対するポリシー更新 - Amazon DataZone プロジェクトユーザーロールは、フェデレーティッドテーブルのデータ転送ロールとして使用されます。この更新により、`iam:PassRole` ステートメントに `datazone_usr_role*` が追加され、プロジェクトユーザーロールがこの目的で使用できるようになります。	2025 年 5 月 21 日
AmazonDataZoneSageMakerProvisioningRolePolicy - ポリシーの更新	AmazonDataZoneSageMakerProvisioningRolePolicy に対するポリシー更新 - `glue:GetConnection` アクションのサポートを追加しました。	2025 年 1 月 2 日

変更	説明	日付
AmazonDataZoneSageMakerEnvironmentRolePermissionsBoundary - ポリシーの更新	AmazonDataZoneSageMakerEnvironmentRolePermissionsBoundary に対するポリシー更新 - この変更により、アクセス許可の境界に `sagemaker:AddTags` が追加され、Amazon DataZone が必要なタグ `CreateUserProfile` で正常に呼び出せるようになります。	2024 年 12 月 3 日
AmazonDataZoneSageMakerAccess、および AmazonDataZoneGlueManageAccessRolePolicy - ポリシーの更新	AmazonDataZoneFullAccess、AmazonDataZoneSageMakerAccess、AmazonDataZoneGlueManageAccessRolePolicy に対するポリシー更新 - Amazon SageMaker Unified Studio エクスペリエンスのサポートを有効にしました。	2024 年 12 月 3 日
AmazonDataZoneDomainExecutionRolePolicy および AmazonDataZoneFullUserAccess - ポリシーの更新	AmazonDataZoneDomainExecutionRolePolicy および AmazonDataZoneFullUserAccess に対するポリシー更新 - サブスクリプションリクエストのメタデータ適用ルールのサポートを有効にしました。	2024 年 11 月 19 日

変更	説明	日付
AmazonDataZoneRedshiftGlueProvisioningPolicy - ポリシーの更新	AmazonDataZoneRedshiftGlueProvisioningPolicy へのポリシーの更新 - `datazone*` で作成されたポリシーのポリシーバージョンをユーザーが削除できるように `iam:DeletePolicyVersion` を追加しました。これにより、環境ユーザーロールポリシーを更新する必要があるユーザーのブロックを解除できます。	2024 年 10 月 22 日
AmazonDataZoneDomainExecutionRolePolicy および AmazonDataZoneFullUserAccess - ポリシーの更新	AmazonDataZoneDomainExecutionRolePolicy と AmazonDataZoneFullUserAccess へのポリシーの更新 - Amazon DataZone ドメインユニットとデータ製品の作成と管理に使用される新しい API のサポートを有効にできます。	2024 年 7 月 31 日
AmazonDataZoneGlueManageAccessRolePolicy - ポリシーの更新	AmazonDataZoneGlueManageAccessRolePolicy へのポリシーの更新 - Lake Formation で付与されるアクセス許可をスコープダウンするために、きめ細かなアクセスコントロール機能に使用される IAM アクセス許可を Amazon DataZone に追加しました。	2024 年 7 月 2 日

変更	説明	日付
AmazonDataZoneExecutionRolePolicy および AmazonDataZoneFullUserAccess - ポリシーの更新	AmazonDataZoneExecutionRolePolicy と AmazonDataZoneFullUserAccess へのポリシーの更新。データリネージュときめ細かなアクセスコントロール API のサポートを有効にしました。	2024 年 6 月 27 日
AmazonDataZoneGlueManageAccessRolePolicy - ポリシーの更新	AmazonDataZoneGlueManageAccessRolePolicy へのポリシーの更新。Lake Formation で付与するアクセス許可をスコープダウンするために、Amazon DataZone のセルフサブスクライブ機能に必要な IAM アクセス許可を追加しました。セルフサブスクライブ機能を使用すると、Lake Formation アクセス許可はタグ付けされたリソースにのみ付与できます。	2024 年 6 月 14 日
AmazonDataZoneDomainExecutionRolePolicy - ポリシーの更新	AmazonDataZoneDomainExecutionRolePolicy へのポリシーの更新。ユーザーが Amazon DataZone 環境のアクションを設定できるようにする新しい API を Amazon DataZone に追加しました。	2024 年 6 月 14 日

変更	説明	日付
AmazonDataZoneFullAccess - ポリシーの更新	AmazonDataZoneFullAccess へのポリシーの更新。Amazon DataZone マネジメントコンソールを有効にして、ドメインタグとプロジェクトタグの両方を使用してユーザーの代わりにシークレットを作成できます。また、ドメイン所有者アカウントから管理者を有効にして、関連付けられたアカウントのアカウント関連付けステータスを表示できるようにする `ram:ListResourceSharePermissions` アクションも含まれます。	2024 年 6 月 14 日
AmazonDataZoneSageMakerEnvironmentRolePermissionsBoundary - 新しいアクセス許可の境界	AmazonDataZoneSageMakerEnvironmentRolePermissionsBoundary という新しいアクセス許可の境界。Amazon DataZone データポータルを使用して Amazon SageMaker 環境を作成すると、Amazon DataZone はこのアクセス許可の境界を環境の作成中に生成される IAM ロールに適用します。アクセス許可の境界により、Amazon DataZone が作成するロールとユーザーが作成するロールの範囲が制限されます。	2024 年 4 月 30 日

変更	説明	日付
AmazonDataZoneSageMakerAccess - 新しいポリシー	AmazonDataZoneSageMakerAccess という新しいポリシーは、Amazon DataZone に Amazon SageMaker アセットをカタログに公開するアクセス許可を付与します。また、Amazon SageMaker がカタログに公開したアセットへのアクセス権の付与や、アクセス権の取り消しを行うためのアクセス許可も Amazon DataZone に付与します。	2024 年 4 月 30 日
AmazonDataZoneFullAccess - ポリシーの更新	AmazonDataZoneFullAccess ポリシーへの更新。コンソールでブループリントを設定するアカウント管理者の使いやすさを向上させる `DescribeSecurityGroups` アクションと、指定されたマネージドポリシーに関する情報の取得に役立つ `GetPolicy` アクションを追加しました。	2024 年 4 月 30 日
AmazonDataZoneSageMakerProvisioningRolePolicy - 新しいポリシー	AmazonDataZoneSageMakerProvisioningRolePolicy という新しいポリシーが、Amazon SageMaker との相互運用に必要なアクセス許可を Amazon DataZone に付与します。	2024 年 4 月 30 日

変更	説明	日付
AmazonDataZoneS3Manage-<region>-<domainId> - 新しいロール	Amazon DataZone が Lake Formation を呼び出して Amazon Simple Storage Service (Amazon S3) ロケーションを登録するときに使用される AmazonDataZoneS3Manage-<region>-<domainId> という新しいロール。 DataZone AWS Amazon S3 AWS Lake Formation は、その場所のデータにアクセスするときにこのロールを引き受けます。	2024 年 4 月 1 日
AmazonDataZoneGlueManageAccessRolePolicy - ポリシーの更新	AmazonDataZoneGlueManageAccessRolePolicy を更新して、Amazon DataZone に公開およびデータへのアクセスグラントを有効にすることを許可するアクセス許可のサポートを有効にしました。	2024 年 4 月 1 日
AmazonDataZoneDomainExecutionRolePolicy および AmazonDataZoneFullUserAccess - ポリシーの更新	`CancelMetadataGenerationRun` API のサポートを有効にするために、AmazonDataZoneDomainExecutionRolePolicy と AmazonDataZoneFullUserAccess を更新しました。	2024 年 3 月 29 日

変更	説明	日付
AmazonDataZoneFullAccess - ポリシーの更新	`AmazonDataZoneFullAccess` を更新して、ユーザーがテキストボックスに入力するのではなく、Amazon DataZone マネジメントコンソールでシークレット、クラスター、vpc、サブネットを選択できるようにしました。	2024 年 3 月 13 日
AmazonDataZoneDomainExecutionRolePolicy - ポリシーの更新	AmazonDataZoneDomainExecutionRolePolicy を更新して、どのアカウントとリージョンでどのブループリントが有効になっているかを特定することで、環境プロファイルの作成に必要な `ListEnvironmentBlueprintConfigurationSummaries` API のサポートを有効にしました。	2024 年 2 月 1 日
AmazonDataZoneGlueManageAccessRolePolicy - ポリシーの更新	AmazonDataZoneGlueManageAccessRolePolicy を更新して、 AWS Lake Formation ハイブリッドモードのサポートを有効にしました。	2023 年 12 月 14 日

変更	説明	日付
AmazonDataZoneFull UserAccess と AmazonDataZoneDomainExecutionRolePolicy - ポリシーの更新	AmazonDataZoneFull UserAccess および AmazonDataZoneDomainExecutionRolePolicy ポリシーを更新して、Amazon DataZone の生成 AI を活用したデータ説明機能をサポートするようにしました。	2023 年 11 月 28 日
AmazonDataZoneEnvironmentRolePermissionsBoundary - ポリシーの更新	Amazon DataZone では、AmazonDataZoneEnvironmentRolePermissionsBoundary マネージドポリシーを更新しました。このポリシーは、`ResourceTag` 条件でスコープダウンされた追加の `athena:GetQueryResultsStream` アクセス許可で構成されます。	2023 年 11 月 17 日
AmazonDataZoneRedshiftManageAccessRolePolicy - ポリシーの更新	Amazon DataZone では、`redshift:AssociateDataShareConsumer` アクションの組織 ID のチェックを削除して AmazonDataZoneRedshiftManageAccessRolePolicy を更新しました。これにより、 AWS 組織間でリソースを共有できます。	2023 年 11 月 16 日

変更	説明	日付
AmazonDataZoneFull UserAccess - ポリシーの更新	Amazon DataZone では、AmazonDataZoneFull UserAccess ポリシーを更新しました。これにより、Amazon DataZone へのフルアクセスを付与しますが、ドメイン、ユーザー、または関連付けられたアカウントの管理は許可しません。	2023 年 10 月 2 日
AmazonDataZonePort alFullAccessPolicy - ポリシーの廃止	Amazon DataZone では AmazonDataZonePort alFullAccessPolicy を廃止しました。	2023 年 9 月 29 日
AmazonDataZonePrev iewConsoleFullAccess - ポリシーの廃止	Amazon DataZone では AmazonDataZonePrev iewConsoleFullAccess を廃止しました。	2023 年 9 月 29 日

変更	説明	日付
AmazonDataZoneDomainExecutionRolePolicy - 新しいポリシー	Amazon DataZone では、AmazonDataZoneDomainExecutionRolePolicy という新しいポリシーを追加しました。 これは Amazon DataZone `AmazonDataZoneDomainExecutionRole` サービスロールのデフォルトのポリシーです。このロールは、Amazon DataZone ドメイン内のデータをカタログ化、検出、管理、共有、分析するために Amazon DataZone で使用されます。 `AmazonDataZoneDomainExecutionRole` に `AmazonDataZoneDomainExecutionRolePolicy` ポリシーをアタッチできます。	2023 年 9 月 25 日
AmazonDataZoneCrossAccountAdmin - 新しいポリシー	Amazon DataZone では、AmazonDataZoneCrossAccountAdmin という新しいポリシーを追加しました。このポリシーは、ユーザーは Amazon DataZone とそれに関連付けられたアカウントを使用できます。	2023 年 9 月 19 日

変更	説明	日付
AmazonDataZoneFull UserAccess - 新しいポリシー	Amazon DataZone では、AmazonDataZoneFull UserAccess という新しいポリシーを追加しました。このポリシーは、Amazon DataZone へのフルアクセスを付与しますが、ドメイン、ユーザーこのポリシーは、または関連付けられたアカウントの管理は許可しません。	2023 年 9 月 12 日
AmazonDataZoneReds hiftManageAccessRolePolicy - 新しいポリシー	Amazon DataZone は、AmazonDataZoneReds hiftManageAccessRolePolicy という新しいポリシーを追加しました。このポリシーは、Amazon DataZone に公開およびデータへのアクセスグラントを有効にすることを許可するアクセス許可を付与します。	2023 年 9 月 12 日

変更	説明	日付
AmazonDataZoneGlue ManageAccessRolePolicy - 新しいポリシー	Amazon DataZone はAmazonDataZoneGlue ManageAccessRolePolicy という新しいポリシーを追加し、カタログに AWS Glue データを発行するアクセス許可を Amazon DataZone に付与しました。また、カタログ内の Glue が公開したアセットへのアクセスを許可または取り消すアクセス許可を Amazon DataZone AWS に付与します。	2023 年 9 月 12 日
AmazonDataZoneRedshiftGlueProvisioningPolicy - 新しいポリシー	Amazon DataZone では、サポートされているデータソースとの相互運用に必要なアクセス許可を Amazon DataZone に付与する AmazonDataZoneRedshiftGlueProvisioningPolicy という新しいポリシーを追加しました。	2023 年 9 月 12 日
AmazonDataZoneEnvironmentRolePermissionsBoundary - 新しいポリシー	Amazon DataZone では、アタッチ先のプロビジョニングされた IAM プリンシパルを制限する AmazonDataZoneEnvironmentRolePermissionsBoundary という新しいポリシーを追加しました。	2023 年 9 月 12 日

変更	説明	日付
AmazonDataZoneFullAccess - 新しいポリシー	Amazon DataZone は、 AWS マネジメントコンソールを介して Amazon DataZone へのフルアクセスを提供する AmazonDataZoneFullAccess という新しいポリシーを追加しました。 DataZone	2023 年 9 月 12 日
マネージドポリシーの更新	追加の `iam:GetPolicy` アクセス許可で構成される AmazonDataZonePreviewConsoleFullAccess マネージドポリシーを更新しました。	2023 年 6 月 13 日
Amazon DataZone で変更の追跡を開始しました。	Amazon DataZone は、 AWS 管理ポリシーの変更の追跡を開始しました。	2023 年 3 月 20 日

Amazon DataZone の IAM ロール

トピック

- AmazonDataZoneProvisioningRole-<domainAccountId>
- AmazonDataZoneDomainExecutionRole
- AmazonDataZoneGlueAccess-<region>-<domainId>
- AmazonDataZoneRedshiftAccess-<region>-<domainId>
- AmazonDataZoneS3Manage-<region>-<domainId>
- AmazonDataZoneSageMakerManageAccessRole-<region>-<domainId>
- AmazonDataZoneSageMakerProvisioningRolePolicyRole-<domainAccountId>

AmazonDataZoneProvisioningRole-<domainAccountId>

AmazonDataZoneProvisioningRole-<domainAccountId> には AmazonDataZoneRedshiftGlueProvisioningPolicy がアタッチされています。このロールは、 Glue および Amazon Redshift との相互運用に必要なアクセス許可を Amazon DataZone AWS に付与します。

デフォルトの AmazonDataZoneProvisioningRole-<domainAccountId> には、次の信頼ポリシーがアタッチされています。

JSON

```
{
  "Version":"2012-10-17",
  "Statement": [
    {
      "Effect": "Allow",
      "Principal": {
        "Service": "datazone.amazonaws.com"
      },
      "Action": "sts:AssumeRole",
      "Condition": {
        "StringEquals": {
            "aws:SourceAccount": "{{domain_account}}"
        }
      }
    }
  ]
}
```

AmazonDataZoneDomainExecutionRole

AmazonDataZoneDomainExecutionRole には、 AWS 管理ポリシー AmazonDataZoneDomainExecutionRolePolicy がアタッチされています。Amazon DataZone は、ユーザーに代わってこのロールを作成します。データポータルの特定のアクションにおいて、Amazon DataZone ではロールが作成されたアカウントでこのロールを引き受け、このロールにアクションの実行が承認されていることを確認します。

AmazonDataZoneDomainExecutionRole ロールは、Amazon DataZone ドメインをホストする AWS アカウント で必要です。このロールは、Amazon DataZone ドメインを作成するときに自動的に作成されます。

デフォルトの AmazonDataZoneDomainExecutionRole ロールには、次の信頼ポリシーがあります。

JSON

```
{
    "Version":"2012-10-17",
    "Statement": [
        {
            "Effect": "Allow",
            "Principal": {
                "Service": "datazone.amazonaws.com"
            },
            "Action": [
                "sts:AssumeRole",
                "sts:TagSession"
            ],
            "Condition": {
                "StringEquals": {
                    "aws:SourceAccount": "{{source_account_id}}"
                },
                "ForAllValues:StringLike": {
                    "aws:TagKeys": [
                        "datazone*"
                    ]
                }
            }
        }
    ]
}
```

AmazonDataZoneGlueAccess-<region>-<domainId>

`AmazonDataZoneGlueAccess-<region>-<domainId>` ロールには `AmazonDataZoneGlueManageAccessRolePolicy` がアタッチされています。このロールは、カタログに AWS Glue データを発行するアクセス許可を Amazon DataZone に付与します。また、カ

タログ内の Glue が公開したアセットへのアクセスを許可または取り消すアクセス許可を Amazon DataZone AWS に付与します。

デフォルトの AmazonDataZoneGlueAccess-<region>-<domainId> ロールには、次の信頼ポリシーがアタッチされています。

JSON

```
{
  "Version":"2012-10-17",
  "Statement": [
    {
      "Effect": "Allow",
      "Principal": {
        "Service": "datazone.amazonaws.com"
      },
      "Action": "sts:AssumeRole",
      "Condition": {
            "StringEquals": {
            "aws:SourceAccount": "111122223333"
            },
            "ArnEquals": {
            "aws:SourceArn": "arn:aws:datazone:us-east-1:111122223333:domain/
dzd-12345"
            }
        }
    }
  ]
}
```

AmazonDataZoneRedshiftAccess-<region>-<domainId>

AmazonDataZoneRedshiftAccess-<region>-<domainId> ロールには AmazonDataZoneRedshiftManageAccessRolePolicy がアタッチされています。このロールは、Amazon Redshift データをカタログに公開するアクセス許可を Amazon DataZone に付与します。また、Amazon Redshift または Amazon Redshift Serverless がカタログに公開したアセットへのアクセス権の付与や、アクセス権の取り消しを行うためのアクセス許可も Amazon DataZone に付与します。

デフォルトの AmazonDataZoneRedshiftAccess-<region>-<domainId> ロールには、次のインラインアクセス許可ポリシーがアタッチされています。

JSON

```
{
   "Version":"2012-10-17",
   "Statement":[
      {
         "Sid": "RedshiftSecretStatement",
         "Effect":"Allow",
         "Action":"secretsmanager:GetSecretValue",
         "Resource":"*",
         "Condition":{
            "StringEquals":{
               "secretsmanager:ResourceTag/AmazonDataZoneDomain":"{{domainId}}"
            }
         }
      }
   ]
}
```

デフォルトの AmazonDataZoneRedshiftManageAccessRole<timestamp> には、次の信頼ポリシーがアタッチされています。

JSON

```
{
  "Version":"2012-10-17",
  "Statement": [
    {
      "Effect": "Allow",
      "Principal": {
        "Service": "datazone.amazonaws.com"
      },
      "Action": "sts:AssumeRole",
```

```
      "Condition": {
            "StringEquals": {
            "aws:SourceAccount": "111122223333"
            },
            "ArnEquals": {
            "aws:SourceArn": "arn:aws:datazone:us-east-1:111122223333:domain/
dzd-12345"
            }
        }
    }
  ]
}
```

AmazonDataZoneS3Manage-<region>-<domainId>

AmazonDataZoneS3Manage-<region>-<domainId> は、Amazon DataZone が AWS Lake Formation を呼び出して Amazon Simple Storage Service (Amazon S3) の場所を登録するときに使用されます。 AWS Lake Formation は、その場所のデータにアクセスするときにこのロールを引き受けます。手順については、「ロケーションの登録に使用されるロールの要件」を参照してください。

このロールには、次のインラインアクセス許可ポリシーがアタッチされています。

JSON

```
{
    "Version":"2012-10-17",
    "Statement": [
        {
            "Sid": "LakeFormationDataAccessPermissionsForS3",
            "Effect": "Allow",
            "Action": [
                "s3:PutObject",
                "s3:GetObject",
                "s3:DeleteObject"
            ],
            "Resource": "*",
            "Condition": {
                "StringEquals": {
                    "aws:ResourceAccount": "{{accountId}}"
```

```
                }
            }
        },
        {
            "Sid": "LakeFormationDataAccessPermissionsForS3ListBucket",
            "Effect": "Allow",
            "Action": [
                "s3:ListBucket"
            ],
            "Resource": "*",
            "Condition": {
                "StringEquals": {
                    "aws:ResourceAccount": "{{accountId}}"
                }
            }
        },
        {
            "Sid": "LakeFormationDataAccessPermissionsForS3ListAllMyBuckets",
            "Effect": "Allow",
            "Action": [
                "s3:ListAllMyBuckets"
            ],
            "Resource": "arn:aws:s3:::*",
            "Condition": {
                "StringEquals": {
                    "aws:ResourceAccount": "{{accountId}}"
                }
            }
        },
        {
            "Sid": "LakeFormationExplicitDenyPermissionsForS3",
            "Effect": "Deny",
            "Action": [
                "s3:PutObject",
                "s3:GetObject",
                "s3:DeleteObject"
            ],
            "Resource": [
                "arn:aws:s3:::[[BucketNames]]/*"
            ],
            "Condition": {
                "StringEquals": {
                    "aws:ResourceAccount": "{{accountId}}"
                }
```

```
            }
        },
        {
            "Sid": "LakeFormationExplicitDenyPermissionsForS3ListBucket",
            "Effect": "Deny",
            "Action": [
                "s3:ListBucket"
            ],
            "Resource": [
                "arn:aws:s3:::[[BucketNames]]"
            ],
            "Condition": {
                "StringEquals": {
                    "aws:ResourceAccount": "{{accountId}}"
                }
            }
        }
    ]
}
```

AmazonDataZoneS3Manage-<region>-<domainId> には、次の信頼ポリシーがアタッチされています。

JSON

```
{
    "Version":"2012-10-17",
    "Statement": [
        {
            "Sid": "TrustLakeFormationForDataLocationRegistration",
            "Effect": "Allow",
            "Principal": {
                "Service": "lakeformation.amazonaws.com"
            },
            "Action": "sts:AssumeRole",
            "Condition": {
                "StringEquals": {
                    "aws:SourceAccount": "{{source_account_id}}"
                }
```

```
            }
        }
    ]
}
```

AmazonDataZoneSageMakerManageAccessRole-<region>-<domainId>

AmazonDataZoneSageMakerManageAccessRole ロールに
は、AmazonDataZoneSageMakerAccess、AmazonDataZoneRedshiftManageAccessRolePolicy、A
がアタッチされています。このロールは、データレイク、データウェアハウス、および Amazon Sagemaker アセットのサブスクリプションを発行および管理するためのアクセス許可を Amazon DataZone に付与します。

AmazonDataZoneSageMakerManageAccessRole ロールには、次のインラインポリシーがアタッチされています。

JSON

```
{
   "Version":"2012-10-17",
   "Statement":[
      {
         "Sid": "RedshiftSecretStatement",
         "Effect":"Allow",
         "Action":"secretsmanager:GetSecretValue",
         "Resource":"*",
         "Condition":{
            "StringEquals":{
               "secretsmanager:ResourceTag/AmazonDataZoneDomain":"{{domainId}}"
            }
         }
      }
   ]
}
```

AmazonDataZoneSageMakerManageAccessRole ロールには、次の信頼ポリシーがアタッチされています。

JSON

```
{
  "Version":"2012-10-17",
  "Statement": [
    {
      "Sid": "DatazoneTrustPolicyStatement",
      "Effect": "Allow",
      "Principal": {
        "Service":  ["datazone.amazonaws.com",
                    "sagemaker.amazonaws.com"]
      },
      "Action": "sts:AssumeRole",
      "Condition": {
            "StringEquals": {
            "aws:SourceAccount": "111122223333"
            },
            "ArnEquals": {
            "aws:SourceArn": "arn:aws:datazone:us-east-1:111122223333:domain/
dzd-12345"
            }
        }
    }
]
}
```

AmazonDataZoneSageMakerProvisioningRolePolicyRole-<domainAccountId>

AmazonDataZoneSageMakerProvisioningRolePolicyRole ロールには AmazonDataZoneSageMakerProvisioningRolePolicy と AmazonDataZoneRedshiftGlueProvisioningPolicy がアタッチされています。このロールは、 Glue、Amazon Redshift、Amazon Sagemaker AWS との相互運用に必要なアクセス許可を Amazon DataZone に付与します。

AmazonDataZoneSageMakerProvisioningRolePolicyRole ロールには、次のインラインポリシーがアタッチされています。

JSON

```
{
    "Version":"2012-10-17",
    "Statement": [
        {
            "Sid": "SageMakerStudioTagOnCreate",
            "Effect": "Allow",
            "Action": [
                "sagemaker:AddTags"
            ],
            "Resource": "arn:aws:sagemaker:*:111122223333:*/*",
            "Condition": {
                "Null": {
                    "sagemaker:TaggingAction": "false"
                }
            }
        }
    ]
}
```

AmazonDataZoneSageMakerProvisioningRolePolicyRole ロールには、次の信頼ポリシーがアタッチされています。

JSON

```
{
  "Version":"2012-10-17",
  "Statement": [
    {
      "Sid": "DataZoneTrustPolicyStatement",
      "Effect": "Allow",
      "Principal": {
        "Service": "datazone.amazonaws.com"
```

```
      },
      "Action": "sts:AssumeRole",
      "Condition": {
        "StringEquals": {
            "aws:SourceAccount": "{{domain_account}}"
        }
      }
    }
  ]
}
```

一時認証情報

一部の AWS サービスは、一時的な認証情報を使用してサインインすると機能しません。一時的な認証情報を使用する AWS サービスなどの詳細については、IAM ユーザーガイドの「IAM AWS を使用するサービス」を参照してください。

ユーザー名とパスワード以外の AWS マネジメントコンソール 方法で にサインインする場合、一時的な認証情報を使用します。たとえば、会社のシングルサインオン (SSO) リンク AWS を使用してにアクセスすると、そのプロセスによって一時的な認証情報が自動的に作成されます。また、ユーザーとしてコンソールにサインインしてからロールを切り替える場合も、一時的な認証情報が自動的に作成されます。ロールの切り替えに関する詳細については、「IAM ユーザーガイド」の「ロールへの切り替え (コンソール)」を参照してください。

一時的な認証情報は、 AWS CLI または AWS API を使用して手動で作成できます。その後、これらの一時的な認証情報を使用してアクセスすることができます AWS。長期的なアクセスキーを使用する代わりに、一時的な認証情報を動的に生成 AWS することをお勧めします。詳細については、「IAM の一時的セキュリティ認証情報」を参照してください。

Amazon DataZone ポータルの一時的な認証情報

Amazon DataZone ポータルにサインインすると、AmazonDataZoneDomainExecutionRole の一時的な認証情報を受け取ります。AmazonDataZoneDomainExecutionRole を使用している間、これらの認証情報は使用時に自動的に更新されます。一定期間使用しない場合、自動的に期限切れになります。

プリンシパルアクセス権限

IAM ユーザーまたはロールを使用して でアクションを実行すると AWS、プリンシパルと見なされます。ポリシーによって、プリンシパルに許可が付与されます。一部のサービスを使用する際に、アクションを実行することで、別サービスの別アクションがトリガーされることがあります。この場合、両方のアクションを実行するためのアクセス許可が必要です。アクションがポリシーで追加の依存アクションを必要とするかどうかを確認するには、「サービス認可リファレンス」のAWS「Documentation Essentials のアクション、リソース、および条件キー」を参照してください。

Amazon DataZone のコンプライアンス検証

AWS のサービス が特定のコンプライアンスプログラムの範囲内にあるかどうかを確認するには、AWS のサービス「コンプライアンスプログラムによる対象範囲内のコンプライアンス」を参照し、関心のあるコンプライアンスプログラムを選択します。一般的な情報については、AWS「コンプライアンスプログラム」を参照してください。

を使用して、サードパーティーの監査レポートをダウンロードできます AWS Artifact。詳細については、「Downloading Reports in AWS Artifact」を参照してください。

を使用する際のお客様のコンプライアンス責任 AWS のサービス は、お客様のデータの機密性、貴社のコンプライアンス目的、適用される法律および規制によって決まります。を使用する際のコンプライアンス責任の詳細については AWS のサービス、AWS「 セキュリティドキュメント」を参照してください。

Amazon DataZone のセキュリティのベストプラクティス

Amazon DataZone には、独自のセキュリティポリシーを策定および実装する際に考慮すべきさまざまなセキュリティ機能が用意されています。以下のベストプラクティスは一般的なガイドラインであり、完全なセキュリティソリューションを説明するものではありません。これらのベストプラクティスはお客様の環境に適切ではないか、十分ではない場合があるため、これらは指示ではなく、有用な考慮事項と見なしてください。

最小特権アクセスの実装

アクセス許可を付与する場合、どのユーザーにどの Amazon DataZone リソースに対してどのアクセス許可を付与するかは、ユーザーが決定します。ユーザーは、それらのリソースで許可する特定のアクションを有効にします。このため、タスクの実行に必要なアクセス許可のみを付与する必要があり

ます。最小特権アクセスの実装は、セキュリティリスクと、エラーや悪意によってもたらされる可能性のある影響の低減における基本になります。

詳細については、「AWS Amazon DataZone の マネージドポリシー」および「サービスコントロールポリシー」を参照してください。

IAM ロールの使用

プロデューサーおよびクライアントアプリケーションは、Amazon DataZone リソースにアクセスするための有効な認証情報を持っている必要があります。 AWS 認証情報は、クライアントアプリケーションや Amazon S3 バケットに直接保存しないでください。これらは自動的にローテーションされない長期的な認証情報であり、漏洩するとビジネスに大きな影響が及ぶ場合があります。

代わりに、IAM ロールを使用して、Amazon DataZone リソースにアクセスするためのプロデューサーおよびクライアントアプリケーションの一時的な認証情報を管理してください。ロールを使用するときは、他のリソースにアクセスするために長期的な認証情報 (ユーザー名とパスワード、またはアクセスキーなど) を使用する必要がありません。

詳細については、「IAM ユーザーガイド」にある下記のトピックを参照してください。

- IAM ロール
- ロールの一般的なシナリオ: ユーザー、アプリケーション、およびサービス

依存リソースでのサーバー側の暗号化の実装

保管中のデータと転送中のデータは Amazon DataZone で暗号化できます。

CloudTrail を使用して API コールをモニタリングする

Amazon DataZone は AWS CloudTrail、Amazon DataZone のユーザー、ロール、または のサービスによって実行されたアクションを記録する AWS サービスである と統合されています。

CloudTrail により収集された情報を使用すると、Amazon DataZone に対して行われたリクエスト、リクエスト元の IP アドレス、リクエスト者、リクエストが行われた日時や、その他の詳細を確認できます。

Amazon DataZone での RAM の使用

AWS アカウントを Amazon DataZone ドメインに関連付けると、ドメインユーザーはこれらの AWS アカウントのデータを公開して使用できます。Amazon DataZone は、 AWS リソースアク

セスマネージャー (RAM) を使用してクロスアカウントアクセスを管理します。詳細については、「Amazon DataZone の関連付けられているアカウント」および「AWS RAM のセキュリティ」を参照してください。

Amazon DataZone におけるレジリエンス

AWS グローバルインフラストラクチャは、 AWS リージョン およびアベイラビリティーゾーンを中心に構築されています。 は、低レイテンシー、高スループット、高度に冗長なネットワークで接続された、物理的に分離および分離された複数のアベイラビリティーゾーン AWS リージョン を提供します。アベイラビリティーゾーンでは、ゾーン間で中断することなく自動的にフェールオーバーするアプリケーションとデータベースを設計および運用することができます。アベイラビリティーゾーンは、従来の単一または複数のデータセンターインフラストラクチャよりも可用性、フォールトトレランス、および拡張性が優れています。

AWS リージョン およびアベイラビリティーゾーンの詳細については、AWS 「 グローバルインフラストラクチャ」を参照してください。

Amazon DataZone は、 AWS グローバルインフラストラクチャに加えて、データの耐障害性とバックアップのニーズをサポートするのに役立ついくつかの機能を提供しています。

トピック

- データソースのレジリエンス
- アセットのレジリエンス
- アセットタイプとメタデータフォームのレジリエンス
- 用語集のレジリエンス
- グローバル検索のレジリエンス
- サブスクリプションのレジリエンス
- 環境のレジリエンス
- 環境ブループリントのレジリエンス
- プロジェクトのレジリエンス
- RAM のレジリエンス
- ユーザープロファイル管理のレジリエンス
- ドメインのレジリエンス

データソースのレジリエンス

Amazon DataZone 高可用性イベント中、DataSource ジョブは最大 24 時間定期的に再試行されます。設定ミスが原因でジョブが失敗すると、DataSourceRunFailed イベントが発行されます。Amazon DataZone ドメインが KMS キーで構成されてる場合に、ジョブの実行中に AmazonDataZoneDomainExecutionRole がこのキーへのアクセスを失うと、実行は INACCESSIBLE 状態で終了します。KMS アクセスが復元されたら、ジョブを手動で更新して、使用可能な状態への移行をトリガーする必要があります。

アセットのレジリエンス

Amazon DataZone のアセットはバージョニングされます。アセットのバージョンをロールバックする必要がある場合は、最後の安定バージョンのコンテンツを使用して新しいバージョンを作成できます。アセットのバージョンは公開できます。公開されたアセットのバージョンは、新しいバージョンの公開を除き、編集できません。公開されたアセット (別名リスティング) はサブスクライブできます。アセットへの新しいサブスクリプションを防ぐために、非公開にすることができます。アセットの公開を解除しても、既存のサブスクリプションには影響しません。アセットを削除すると、アセットのすべての非公開バージョンが削除されます。アセットの公開バージョンは個別に削除する必要があります。アセットの公開バージョンは、サブスクリプションがない場合にのみ削除できます。

アセットタイプとメタデータフォームのレジリエンス

Amazon DataZone のアセットタイプとメタデータフォームタイプはバージョニングされます。アセットタイプは、アセットで使用されている場合は削除できません。メタデータフォームタイプは、アセットタイプまたはアセットで使用されている場合は削除できません。特定のメタデータフォームタイプをキュレーションで使用しない場合は、既にアタッチされているメタデータフォームタイプに影響を与えないように、無効にすることができます。

用語集のレジリエンス

Amazon DataZone では、用語集や用語集の用語は使用されている場合は削除できません。特定の用語集や用語集の用語をキュレーションで使用しない場合は、既にアタッチされている用語集や用語集の用語に影響を与えないように、無効にすることができます。

グローバル検索のレジリエンス

Amazon DataZone では、公開されたアセット (別名リスティング) はグローバル検索で検出できます。アセットの公開は、アセットを非公開にすることでロールバックできます。アセットを非公開に

しても、既存のサブスクリプションには影響しません。公開されたアセットは、そのバージョンを再公開することで、特定のバージョンのアセットにロールバックできます。これは既存のサブスクリプションには影響しません。

サブスクリプションのレジリエンス

Amazon DataZone では、subscriptionGrant フルフィルメントは、失敗する前に 2 度の再試行を試みます。失敗した場合は、手動で削除して再試行する必要があります。Amazon DataZone がサブスクリプションのアクセス許可を取り消すことができない場合、サブスクリプションの削除が失敗する可能性があります。原因となっているエラーに対処してください。または、`DeleteSubscriptionGrant` API オペレーションで `retainPermissions` フラグを使用して、アクセス許可を取り消すことなく Amazon DataZone からグラントを強制的に削除できます。

Amazon DataZone ドメインが KMS キーで構成されている場合に、`AmazonDataZoneDomainExecutionRole` が `SubscriptionGrant` ワークフロー中にこのキーへのアクセスを失うと、グラントは `INACCESSIBLE` とマークされます。KMS アクセスが復元されたら、`INACCESSIBLE` グラントを削除して再作成する必要があります。

環境のレジリエンス

Amazon DataZone ドメインが KMS キーで構成されている場合に、`AmazonDataZoneDomainExecutionRole` が環境ワークフロー中にこのキーへのアクセスを失うと、環境は `INACCESSIBLE` とマークされます。KMS アクセスが復元されたら、`INACCESSIBLE` 環境を削除して再作成する必要があります。環境の作成は、失敗する前に 2 度の再試行を試みます。失敗した場合は、手動で削除して再試行する必要があります。環境ワークフローが失敗すると、環境は失敗状態になります。現時点では、削除して再作成のみできます。

環境ブループリントのレジリエンス

Amazon DataZone では、基になる環境プロファイルがある環境ブループリントは削除できません。

プロジェクトのレジリエンス

Amazon DataZone では、環境が含まれているプロジェクトは削除できません。

RAM のレジリエンス

RAM のレジリエンスについては、https://docs.aws.amazon.com/ram/latest/userguide/security-disaster-recovery-resiliency.html を参照してください。

ユーザープロファイル管理のレジリエンス

ユーザープロファイルのレジリエンスについては、「AWS アイデンティティセンター」を参照してください。

ドメインのレジリエンス

Amazon DataZone では、プロジェクトまたはデータソースが含まれているドメインは削除できません。

Amazon DataZone のインフラストラクチャセキュリティ

マネージドサービスである Amazon DataZone は、 AWS グローバルネットワークセキュリティで保護されています。 AWS セキュリティサービスと がインフラストラクチャ AWS を保護する方法については、AWS 「 クラウドセキュリティ」を参照してください。インフラストラクチャセキュリティのベストプラクティスを使用して環境を AWS 設計するには、「Security Pillar AWS Well-Architected Framework」の「Infrastructure Protection」を参照してください。

AWS 公開された API コールを使用して、ネットワーク経由で Amazon DataZone にアクセスします。クライアントは以下をサポートする必要があります。

- Transport Layer Security (TLS)。TLS 1.2 が必須で、TLS 1.3 をお勧めします。
- DHE (楕円ディフィー・ヘルマン鍵共有) や ECDHE (楕円曲線ディフィー・ヘルマン鍵共有) などの完全前方秘匿性 (PFS) による暗号スイート。これらのモードは Java 7 以降など、ほとんどの最新システムでサポートされています。

Amazon DataZone におけるサービス間の混乱した代理の防止

混乱した代理問題は、アクションを実行するアクセス許可を持たないエンティティが、より権限のあるエンティティにアクションの実行を強制できるセキュリティ上の問題です。では AWS、サービス間のなりすましにより、混乱した代理問題が発生する可能性があります。サービス間でのなりすましは、1 つのサービス (呼び出し元サービス) が、別のサービス (呼び出し対象サービス) を呼び出すときに発生する可能性があります。呼び出し元サービスは、本来ならアクセスすることが許可されるべきではない方法でその許可を使用して、別のお客様のリソースに対する処理を実行するように操作される場合があります。これを防ぐために、 は、アカウント内のリソースへのアクセス権が付与されたサービスプリンシパルを持つすべてのサービスのデータを保護するのに役立つツール AWS を提供します。

リソースポリシー内で aws:SourceAccount グローバル条件コンテキストキーを使用して、Amazon DataZone が別のサービスに付与するアクセス許可をリソースに制限することをお勧めします。そのアカウントのリソースをクロスサービスの使用に関連付けることを許可する場合は、aws:SourceAccount を使用します。

Amazon DataZone の設定と脆弱性の分析

AWS は、ゲストオペレーティングシステム (OS) やデータベースのパッチ適用、ファイアウォール設定、ディザスタリカバリなどの基本的なセキュリティタスクを処理します。これらの手順は適切なサードパーティーによって確認され、認証されています。詳細については、 AWS 「責任共有モデル」を参照してください。

許可リストに追加するドメイン

Amazon DataZone データポータルが Amazon DataZone サービスにアクセスするには、データポータルがサービスにアクセスしようとしているネットワーク上の許可リストに次のドメインを追加する必要があります。

- `*.api.aws`
- `*.on.aws`

Amazon DataZone のモニタリング

モニタリングは、Amazon DataZone とその他 AWS ソリューションの信頼性、可用性、およびパフォーマンスの維持における重要な要素です。AWS は、Amazon DataZone を監視し、問題が発生した場合には報告を行い、必要に応じて自動アクションを実行するために以下のモニタリングツールを提供しています。

- Amazon CloudWatch は、AWS のリソースおよび AWS で実行しているアプリケーションをリアルタイムでモニタリングします。メトリクスの収集と追跡、カスタマイズしたダッシュボードの作成、および指定したメトリクスが指定したしきい値に達したときに通知またはアクションを実行するアラームの設定を行うことができます。例えば、CloudWatch で Amazon EC2 インスタンスの CPU 使用率などのメトリクスを追跡し、必要に応じて新しいインスタンスを自動的に起動できます。詳細については、「Amazon CloudWatch ユーザーガイド」を参照してください。
- Amazon CloudWatch Logs では、Amazon EC2 インスタンス、CloudTrail、その他ソースから得たログファイルのモニタリング、保存、およびアクセスが可能です。CloudWatch Logs は、ログファイル内の情報をモニタリングし、特定のしきい値が満たされたときに通知します。高い耐久性を備えたストレージにログデータをアーカイブすることも可能です。詳細については、「Amazon CloudWatch Logs ユーザーガイド」を参照してください。
- Amazon EventBridge を使用すると、AWS のサービスを自動化し、アプリケーションの可用性の問題やリソースの変更などのシステムイベントに自動的に対応できます。AWS のサービスからのイベントは、ほぼリアルタイムに EventBridge に提供されます。簡単なルールを記述して、注目するイベントと、イベントがルールに一致した場合に自動的に実行するアクションを指定できます。詳細については、「Amazon EventBridge ユーザーガイド」を参照してください。
- AWS CloudTrail は、AWS アカウントにより、またはそのアカウントに代わって行われた API コールや関連イベントを取得し、指定した Amazon S3 バケットにログファイルを配信します。AWS を呼び出したユーザーとアカウント、呼び出し元の IP アドレス、および呼び出しの発生日時を特定できます。詳細については、「AWS CloudTrail ユーザーガイド」を参照してください。

Amazon EventBridge での Amazon DataZone イベントのモニタリング

お客様独自のアプリケーション、Software as a Service (SaaS) アプリケーション、AWS サービスからのリアルタイムデータのストリームを配信する EventBridge で、Amazon DataZone イベントをモニタリングできます。EventBridge は、そのデータを AWS Lambda や Amazon Simple Notification

Service などのターゲットにルーティングします。これらのイベントは、Amazon CloudWatch Events に表示されるイベントと同じで、AWS リソースの変更を記述するシステムイベントのほぼリアルタイムのストリームを提供します。

詳細については、「Amazon EventBridge のデフォルトバス経由のイベント」を参照してください。

AWS CloudTrail を使用した Amazon DataZone API コールの ログ記録

Amazon DataZone は AWS CloudTrail と統合され、このサービスは Amazon DataZone 内のユーザー、ロール、または AWS サービスによって実行されたアクションのレコードを提供します。CloudTrail は、Amazon DataZone へのすべての API コールをイベントとしてキャプチャします。キャプチャされる呼び出しには、Amazon DataZone コンソールからの呼び出しと、Amazon DataZone API オペレーションへのコード呼び出しが含まれます。証跡を作成する場合、Amazon DataZone のイベントを含め、Amazon S3 バケットへの CloudTrail イベントの継続的な配信を有効にすることができます。証跡を設定しない場合でも、CloudTrail コンソールの [イベント履歴] で最新のイベントを表示できます。CloudTrail により収集された情報を使用すると、Amazon DataZone に対して行われたリクエスト、リクエスト元の IP アドレス、リクエスト者、リクエストが行われた日時や、その他の詳細を確認できます。

CloudTrail の詳細については、「AWS CloudTrail ユーザーガイド」を参照してください。

CloudTrail の Amazon DataZone 情報

CloudTrail は、AWS アカウントを作成すると、その中で有効になります。Amazon DataZone マネジメントコンソールでアクティビティが発生すると、そのアクティビティは [イベント履歴] で AWS のその他のサービスのイベントとともに CloudTrail イベントに記録されます。最近のイベントは、AWS アカウント で表示、検索、ダウンロードできます。詳細については、「CloudTrail イベント履歴でのイベントの表示」を参照してください。

Amazon DataZone のイベントを含む AWS アカウント内の継続的なレコードのイベントには、証跡を作成します。証跡により、CloudTrail はログファイルを Amazon S3 バケットに配信できます。デフォルトでは、コンソールで証跡を作成するときに、証跡がすべての AWS リージョン に適用されます。証跡は、AWS パーティションのすべてのリージョンからのイベントをログに記録し、指定した Amazon S3 バケットにログファイルを配信します。さらに、CloudTrail ログで収集したイベントデータをより詳細に分析し、それに基づいて対応するため、他の AWS サービスを構成できます。詳細については、次を参照してください:

- 追跡を作成するための概要
- 「CloudTrail がサポートされているサービスと統合」
- CloudTrail の Amazon SNS 通知の設定
- 複数のリージョンから CloudTrail ログファイルを受け取るおよび複数のアカウントから CloudTrail ログファイルを受け取る

すべての Amazon DataZone アクションが Amazon CloudTrail により口グに記録されます。

Amazon DataZone のトラブルシューティング

Amazon DataZone を使用しているときにアクセス拒否などの問題が発生した場合は、このセクションのトピックを参照してください。

Amazon DataZone の AWS Lake Formation アクセス許可のトラブルシューティング

このセクションでは、Amazon DataZone に Lake Formation アクセス許可を設定するときに発生する可能性のある問題のトラブルシューティングの手順について説明します。

データポータルのエラーメッセージ	解決策
データアクセスロールを引き受けることができません。	このエラーは、アカウントで DefaultDataLakeBlueprint を有効にするために使用した AmazonDataZoneGlueDataAccessRole を Amazon DataZone が引き受けられない場合に表示されます。この問題を解決するには、データアセットが存在するアカウントの IAM AWS コンソールに移動し、AmazonDataZoneGlueDataAccessRole が Amazon DataZone サービスプリンシパルと適切な信頼関係にあることを確認します。詳細については、AmazonDataZoneGlueAccess-<region>-<domainId>を参照してください。
データアクセスロールには、サブスクライブしようとしているアセットのメタデータの読み取りに必要なアクセス許可がありません。	このエラーは、Amazon DataZone が AmazonDataZoneGlueDataAccessRole ロールを正常に引き受けるものの、ロールに必要なアクセス許可がない場合に表示されます。この問題を解決するには、データアセットが存在するアカウントの IAM AWS コンソールに移動し、ロールに AmazonDataZoneGlueManageAccessRolePolicy がアタッチされていることを確認します。詳細については、「AmazonDat

データポータルのエラーメッセージ	解決策
	aZoneGlueAccess-<region>-<domainId>」を参照してください。
アセットはリソースリンクです。Amazon DataZone では、リソースリンクのサブスクリプションはサポートされません。	このエラーは、Amazon DataZone に発行しようとしているアセットが Glue AWS テーブルへのリソースリンクである場合に表示されます。

データポータルのエラーメッセージ	解決策
アセットは AWS Lake Formation によって管理されません。	このエラーは、公開するアセットに AWS Lake Formation アクセス許可が適用されていないことを示します。これは、次の場合に発生します。 • アセットの Amazon S3 の場所が AWS Lake Formation に登録されていない。この問題を解決するには、テーブルが存在するアカウントの Lake Formation コンソールにログインし、Amazon S3 の場所を AWS Lake Formation モードまたはハイブリッドモードで登録します AWS 。詳細については、「Registering an Amazon S3 location」を参照してください。さらに変更が必要なシナリオがいくつかあります。これには、暗号化された AmazonS3 バケットまたはクロスアカウント S3 バケットと AWS Glue Catalog の設定が含まれます。このような場合には、KMS や S3 の設定の変更が必要になることがあります。詳細については、「Registering an encrypted Amazon S3 location」を参照してください。 • Amazon S3 の場所は AWS Lake Formation モードで登録されますが、IAMAllowedPrincipal がテーブルのアクセス許可に追加されます。問題を解決するには、テーブルのアクセス許可から IAMAllowedPrincipal を削除するか、ハイブリッドモードで S3 の場所を登録します。詳細については、「About upgrading to the Lake Formation permissions model」を参照してください。S3 の場所が暗号化されているか、S3 の場所が AWS Glue テーブルとは異なるアカウントにある

データポータルのエラーメッセージ	解決策
	場合は、「Registering an encrypted Amazon S3 location」の手順に従います。
データアクセスロールには、このアセットへのアクセスを付与するために必要な Lake Formation のアクセス許可がありません。	このエラーは、アカウントの DefaultDataLakeBlueprint を有効にするために使用している AmazonDataZoneGlueDataAccessRole に、公開されたアセットに対するアクセス許可を Amazon DataZone で管理するために必要なアクセス許可がないことを示します。問題を解決するには、 AWS Lake Formation 管理者として AmazonDataZoneGlueDataAccessRole を追加するか、公開するアセットの AmazonDataZoneGlueDataAccessRole に次のアクセス許可を付与します。 • アセットが存在するデータベースに対する Describe と Describe Grantable のアクセス許可 • ユーザーに代わって Amazon DataZone で管理するアクセスのデータベース内にあるすべてのアセットに対する、Describe、Select、Describe Grantable、Select Grantable のアクセス許可。

Amazon DataZone リネージュアセットとアップストリームデータセットのリンクに関するトラブルシューティング

このセクションでは、Amazon DataZone リネージュで発生する可能性のある問題のトラブルシューティング手順について説明します。一部の AWS Glue および Amazon Redshift 関連のオープンリネージ実行イベントでは、アセットリネージがアップストリームデータセットにリンクされていないことがあります。このトピックでは、問題を軽減するためのシナリオといくつかのアプローチについて説明します。リネージュの詳細については、「Amazon DataZone のデータリネージュのサポート」を参照してください。

リネージュノードの SourceIdentifier

リネージュノードの sourceIdentifier 属性は、データセットで発生するイベントを表します。詳細については、「Key attributes in lineage nodes」を参照してください。

リネージュノードは、対応するデータセットまたはジョブで発生するすべてのイベントを表します。リネージュノードには、対応するデータセット/ジョブの識別子を含む「sourceIdentifier」属性が含まれています。オープンリネージュイベントはサポートされているため、sourceIdentifier 値は、データセット、ジョブ、ジョブ実行の「名前空間」と「名前」を組み合わせたものとしてデフォルトで入力されます。

AWS Glue や Amazon Redshift などの AWS リソースsourceIdentifierの場合、 は AWS Glue テーブル ARN と Redshift テーブル ARNs になり、Amazon DataZone は次のように実行イベントやその他の詳細を構築します。

> **Note**
>
> では AWS、ARN には、すべてのリソースの accountId、リージョン、データベース、テーブルなどの情報が含まれます。

- これらのデータセットの OpenLineage イベントには、データベースとテーブル名が含まれます。
- リージョンは、実行の「環境プロパティ」ファセットで取得されます。存在しない場合、システムは呼び出し元の認証情報のリージョンを使用します。
- AccountId は呼び出し元の認証情報から取得します。

DataZone 内のアセットの SourceIdentifier

AssetCommonDetailForm には、アセットが表すデータセットの識別子を表「sourceIdentifier」という属性が含まれています。アセットリネージュノードをアップストリームデータセットにリンクするには、属性にデータセットノードの sourceIdentifier と一致する値を入力する必要があります。アセットがデータソースによってインポートされる場合、ワークフローは AWS Glue テーブル ARN/Redshift テーブル ARN sourceIdentifierとして自動的に入力されますが、CreateAssetAPI を介して作成された他のアセット (カスタムアセットを含む) には、呼び出し元がその値を入力する必要があります。

Amazon DataZone では sourceIdentifier は OpenLineage イベントからどのように作成されますか?

AWS Glue および Redshift アセットの場合、 sourceIdentifierは Glue および Redshift ARNs。Amazon DataZone での作成方法は次のとおりです。

AWS Glue ARN

目標は、出力リネージュノードの sourceIdentifier が以下のようになる OpenLineage イベントを作成することです。

```
arn:aws:glue:us-east-1:123456789012:table/testlfdb/testlftb-1
```

実行が のデータを使用しているかどうかを判断するには AWS Glue、environment-propertiesファセットに特定のキーワードがあるかどうかを確認します。特に、次の指定フィールドのいずれかが存在する場合、システムは RunEvent が AWS Glueから発生したものと想定します。

- GLUE_VERSION
- GLUE_COMMAND_CRITERIA
- GLUE_PYTHON_VERSION

```
"run": {
   "runId":"4e3da9e8-6228-4679-b0a2-fa916119fthr",
   "facets":{
      "environment-properties":{
         "_producer":"https://github.com/OpenLineage/OpenLineage/tree/1.9.1/
integration/spark",
         "_schemaURL":"https://openlineage.io/spec/2-0-2/OpenLineage.json#/$defs/
RunFacet",
         "environment-properties":{
            "GLUE_VERSION":"3.0",
            "GLUE_COMMAND_CRITERIA":"glueetl",
            "GLUE_PYTHON_VERSION":"3"
         }
      }
   }
```

AWS Glue 実行では、symlinksファセットの名前を使用して、ARN の構築に使用できるデータベース名とテーブル名を取得できます。

名前が databaseName.tableName であることを確認する必要があります。

```
"symlinks": {
   "_producer":"https://github.com/OpenLineage/OpenLineage/tree/1.9.1/integration/
spark",
   "_schemaURL":"https://openlineage.io/spec/facets/1-0-0/SymlinksDatasetFacet.json#/
$defs/SymlinksDatasetFacet",
   "identifiers":[
      {
         "namespace":"s3://object-path",
         "name":"testlfdb.testlftb-1",
         "type":"TABLE"
      }
   ]
}
```

サンプルの COMPLETE イベント:

```
{
   "eventTime":"2024-07-01T12:00:00.000000Z",
   "producer":"https://github.com/OpenLineage/OpenLineage/tree/1.9.1/integration/glue",
   "schemaURL":"https://openlineage.io/spec/2-0-2/OpenLineage.json#/$defs/RunEvent",
   "eventType":"COMPLETE",
   "run": {
      "runId":"4e3da9e8-6228-4679-b0a2-fa916119fthr",
      "facets":{
         "environment-properties":{
            "_producer":"https://github.com/OpenLineage/OpenLineage/tree/1.9.1/
integration/spark",
            "_schemaURL":"https://openlineage.io/spec/2-0-2/OpenLineage.json#/$defs/
RunFacet",
            "environment-properties":{
               "GLUE_VERSION":"3.0",
               "GLUE_COMMAND_CRITERIA":"glueetl",
               "GLUE_PYTHON_VERSION":"3"
            }
         }
      }
   },
   "job":{
```

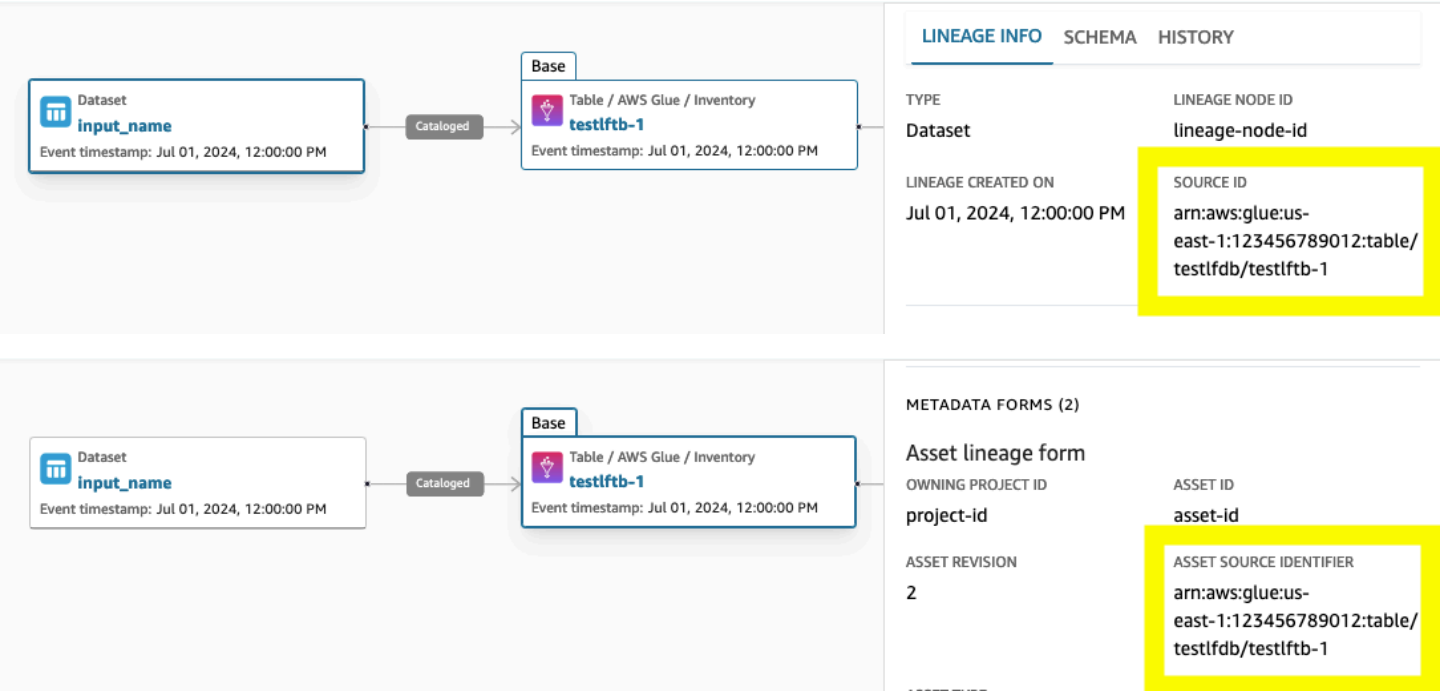
```
      "namespace":"namespace",
      "name":"job_name",
      "facets":{
         "jobType":{
            "_producer":"https://github.com/OpenLineage/OpenLineage/tree/1.9.1/
integration/glue",
            "_schemaURL":"https://openlineage.io/spec/facets/2-0-2/
JobTypeJobFacet.json#/$defs/JobTypeJobFacet",
            "processingType":"BATCH",
            "integration":"glue",
            "jobType":"JOB"
         }
      }
   },
   "inputs":[
      {
         "namespace":"namespace",
         "name":"input_name"
      }
   ],
   "outputs":[
      {
         "namespace":"namespace.output",
         "name":"output_name",
         "facets":{
            "symlinks":{
               "_producer":"https://github.com/OpenLineage/OpenLineage/tree/1.9.1/
integration/spark",
               "_schemaURL":"https://openlineage.io/spec/facets/1-0-0/
SymlinksDatasetFacet.json#/$defs/SymlinksDatasetFacet",
               "identifiers":[
                  {
                     "namespace":"s3://object-path",
                     "name":"testlfdb.testlftb-1",
                     "type":"TABLE"
                  }
               ]
            }
         }
      }
   ]
}
```

送信された OpenLineage イベントに基づいて、出力リネージュノードの sourceIdentifier は次のようになります。

```
arn:aws:glue:us-east-1:123456789012:table/testlfdb/testlftb-1
```

出力リネージュノードは、アセットの sourceIdentifier が次の場合、アセットのリネージュノードに接続されます。

```
arn:aws:glue:us-east-1:123456789012:table/testlfdb/testlftb-1
```



Amazon Redshift ARN

目標は、出力リネージュノードの sourceIdentifier が以下のようになる OpenLineage イベントを作成することです。

```
arn:aws:redshift:us-east-1:123456789012:table/workgroup-20240715/tpcds_data/public/
dws_tpcds_7
```

システムは名前空間に基づき、入力または出力が Redshift に保存されているかどうかを判断します。特に、名前空間が redshift:// で始まるか、redshift-serverless.amazonaws.com または redshift.amazonaws.com の文字列を含んでいる場合は、Redshift リソースになります。

```
"outputs": [
```

```
    {
        "namespace":"redshift://workgroup-20240715.123456789012.us-
east-1.redshift.amazonaws.com:5439",
        "name":"tpcds_data.public.dws_tpcds_7"
    }
]
```

名前空間は、次の形式である必要があります。

```
provider://{cluster_identifier}.{region_name}:{port}
```

redshift-serverless の場合:

```
"outputs": [
    {
        "namespace":"redshift://workgroup-20240715.123456789012.us-east-1.redshift-
serverless.amazonaws.com:5439",
        "name":"tpcds_data.public.dws_tpcds_7"
    }
]
```

以下の sourceIdentifier という結果になります

```
arn:aws:redshift-serverless:us-east-1:123456789012:table/workgroup-20240715/tpcds_data/
public/dws_tpcds_7
```

送信された OpenLineage イベントに基づいて、ダウンストリーム (つまり、イベントの出力) リネージュノードにマップされる sourceIdentifier は次のようになります。

```
arn:aws:redshift-serverless:us-e:us-east-1:123456789012:table/workgroup-20240715/
tpcds_data/public/dws_tpcds_7
```

これは、カタログ内のアセットのリネージュを視覚化するのに役立つマッピングです。

代替アプローチ

上記の条件がいずれも満たされない場合、システムは名前空間/名前を使用して sourceIdentifier を作成します。

```
"inputs": [
```

```
  {
     "namespace":"arn:aws:redshift:us-east-1:123456789012:table",
     "name":"workgroup-20240715/tpcds_data/public/dws_tpcds_7"
  }
],
"outputs": [
  {
     "namespace":"arn:aws:glue:us-east-1:123456789012:table",
     "name":"testlfdb/testlftb-1"
  }
]
```

アセットリネージュノードのアップストリームの欠如に関するトラブルシューティング

アセットリネージュノードのアップストリームが表示されない場合は、トラブルシーティングとして以下を実行し、データセットにリンクされていない理由を確認してください。

1. domainId と assetId を指定して、GetAsset を呼び出します。

```
aws datazone get-asset --domain-identifier <domain-id> --identifier <asset-id>
```

次のようにレスポンスが表示されます。

```
{
    .....
    "formsOutput": [
        .....
        {
            "content": "{\"sourceIdentifier\":\"arn:aws:glue:eu-
west-1:123456789012:table/testlfdb/testlftb-1\"}",
            "formName": "AssetCommonDetailsForm",
            "typeName": "amazon.datazone.AssetCommonDetailsFormType",
            "typeRevision": "6"
        },
        .....
    ],
    "id": "<asset-id>",
    ....
}
```

2. GetLineageNode を呼び出して、データセットリネージュノードの sourceIdentifier を取得します。対応するデータセットノードのリネージュノードを直接取得する方法がないため、GetLineageNode でジョブの実行を開始します。

```
aws datazone get-lineage-node --domain-identifier <domain-id> --identifier
 <job_namespace>.<job_name>/<run_id>

if you are using the getting started scripts, job name and run ID are printed in the
 console
and namespace is "default". Otherwise you can get these values from run event
 content.
```

レスポンス例は次のようになります。

```
{
    .....
    "downstreamNodes": [
        {
            "eventTimestamp": "2024-07-24T18:08:55+08:00",
            "id": "afymge5k4v0euf"
        }
    ],
    "formsOutput": [
        <some forms corresponding to run and job>
    ],
    "id": "<system generated node-id for run>",
    "sourceIdentifier": "default.redshift.create/2f41298b-1ee7-3302-
a14b-09addffa7580",
    "typeName": "amazon.datazone.JobRunLineageNodeType",
    ....
    "upstreamNodes": [
        {
            "eventTimestamp": "2024-07-24T18:08:55+08:00",
            "id": "6wf2z27c8hghev"
        },
        {
            "eventTimestamp": "2024-07-24T18:08:55+08:00",
            "id": "4tjbcsnre6banb"
        }
    ]
}
```

3. データセットに対応するダウンストリーム/アップストリームのノード識別子 (アセットノードにリンクされていると思われるもの) を渡して、GetLineageNode を再度呼び出します。

   上記のレスポンス例を使用したサンプルコマンド:

```
aws datazone get-lineage-node --domain-identifier <domain-id> --identifier
 afymge5k4v0euf
```

   これにより、データセットに対応するリネージュノードの詳細 (afymge5k4v0euf) が返されます。

```
{
    .....
    "domainId": "dzd_cklzc5s2jcr7on",
    "downstreamNodes": [],
    "eventTimestamp": "2024-07-24T18:08:55+08:00",
    "formsOutput": [
        .....
    ],
    "id": "afymge5k4v0euf",
    "sourceIdentifier": "arn:aws:redshift:us-east-1:123456789012:table/
workgroup-20240715/tpcds_data/public/dws_tpcds_7",
    "typeName": "amazon.datazone.DatasetLineageNodeType",
    "typeRevision": "1",
    ....
    "upstreamNodes": [
        ...
    ]
}
```

4. このデータセットノードの sourceIdentifier と GetAsset からのレスポンスを比較します。リンクされていない場合は一致しないため、リネージュ UI には表示されません。

一致しないシナリオと緩和策

以下は、これらが一致しない一般的なシナリオとその緩和策です。

根本原因: テーブルが、Amazon DataZone ドメインアカウントのアカウントとは異なるアカウントにあります。

緩和策: 関連するアカウントから PostLineageEvent 操作を呼び出します。ARN を作成するための accountId は呼び出し元の認証情報から取得されるため、開始スクリプトを実行するとき、ま

たは PostLineageEvent を呼び出すときに、テーブルを含むアカウントからロールを引き受けます。そうすることで、ARN を正確に作成し、アセットノードにリンクできます。

根本原因: Redshift テーブル/ビューの ARN には、OpenLineage 実行イベントの対応するデータセット情報の名前空間と名前の属性に基づいた Redshift/Redshift-serverless が含まれます。

緩和策: 指定された名前がクラスターまたはワークグループに属しているかどうかを判断する決定論的な方法がないため、次のヒューリスティックを使用します。

- データセットに対応する「名前」に「redshift-serverless.amazonaws.com」が含まれている場合は、ARN の一部として redshift-serverless が使用され、それ以外の場合はデフォルトで「redshift」が使用されます。
- 上記は、ワークグループ名のエイリアスが機能しないことを意味します。

根本原因: カスタムアセットのアップストリームデータセットが正しくリンクされていません。

緩和策: データセットノードの sourceIdentifier (カスタムノードの場合は <namespace>/<name>) と一致する CreateAsset/CreateAssetRevision を呼び出して、アセットに sourceIdentifier を入力します。

Amazon DataZone のクォータ

AWS アカウントには、AWS のサービスごとにデフォルトのクォータ (以前は制限と呼ばれていました) があります。特に明記されていない限り、クォータはリージョンごとに存在します。

Amazon DataZone には次のクォータと制限があります。

Amazon DataZone クォータ

リソース	説明	値
データアセットタイプ	DataZone ドメインで作成できるデータアセットタイプの最大数	1,000
データアセット	Amazon DataZone ドメインで作成できるデータアセットの最大数	100 万件
用語集	ドメインで作成できるビジネス用語集の最大数	1,000
ビジネス用語集の用語	ドメインで作成できるビジネス用語集の用語の最大数	10000
ドメイン内の環境	Amazon DataZone ドメイン内の環境の最大数	500
アセットあたりのアセットフィルターの数	Amazon DataZone アセットあたりのアセットフィルターの最大数	100
サブスクリプションあたりのフィルターの数	Amazon DataZone サブスクリプションあたりのフィルターの最大数	5
ドメイン内のドメインユニット	Amazon DataZone ドメイン内のドメインユニットの最大数	500

リソース	説明	値
ドメインユニットの階層レベル	ドメインユニットの階層レベルの最大数	5
ドメインユニットあたりのポリシーごとの付与	ドメインユニットあたりのポリシーごとの付与の最大数	20
データ製品	DataZone ドメインで作成できるデータ製品の最大数	500,000
データソースの実行	1 日あたりのデータソースあたりのデータソース実行の最大数	25

Amazon DataZone API レート制限

次の表に、Amazon DataZone API のレート制限を示します。これらの制限は、リージョンごと、AWS アカウントごとに適用されます。

Amazon DataZone API レート制限

API	API レート制限
CreateGlossary	1 秒あたり 5 件のトランザクション (TPS)
UpdateGlossary	20 TPS
GetGlossary	20 TPS
DeleteGlossary	20 TPS
UpdateGlossaryTerm	20 TPS
DeleteGlossaryTerm	20 TPS
CreateAsset	20 TPS
ListAssetRevisions	20 TPS

API	API レート制限
CreateAssetRevision	20 TPS
DeleteAsset	20 TPS
CreateDataProduct	20 TPS
ListDataProductRevisions	20 TPS
CreateDataProductRevision	20 TPS
DeleteDataProduct	20 TPS
CreateAssetType	20 TPS
DeleteAssetType	20 TPS
CreateFormType	20 TPS
DeleteFormType	20 TPS
検索	20 TPS
SearchTypes	20 TPS
AcceptPredictions	20 TPS
RejectPredictions	20 TPS
AcceptSubscriptionRequest	3 TPS
CancelSubscription	3 TPS
CreateSubscriptionGrant	3 TPS
CreateSubscriptionRequest	3 TPS
GetSubscriptionEligibility	30 TPS
DeleteSubscriptionGrant	3 TPS

API	API レート制限
DeleteSubscriptionRequest	3 TPS
DeleteSubscriptionTarget	3 TPS
GetSubscription	8 TPS
GetSubscriptionGrant	8 TPS
GetSubscriptionRequestDetails	8 TPS
ListSubscriptionGrants	8 TPS
ListSubscriptionRequests	8 TPS
ListSubscriptions	8 TPS
ListSubscriptionTargets	8 TPS
RejectSubscriptionRequest	3 TPS
RevokeSubscription	3 TPS
UpdateSubscriptionRequest	3 TPS
UpdateSubscriptionTarget	3 TPS
CreateProjectProfile	3 TPS
UpdateProjectProfile	3 TPS
:CreateDomain	8 TPS
UpdateDomain	8 TPS
CreateProject	3 TPS
UpdateProject	3 TPS
DeleteProject	3 TPS

API	API レート制限
ListProjects	8 TPS
CreateProjectMembership	3 TPS
ListProjectMemberships	8 TPS
DeleteProjectMembership	3 TPS
CreateEnvironment	3 TPS
DeleteEnvironment	3 TPS
UpdateEnvironment	3 TPS
ListEnvironments	8 TPS
GetEnvironment	8 TPS
GetEnvironmentCredentials	8 TPS
CreateEnvironmentProfile	8 TPS
ListEnvironmentProfiles	8 TPS
ListEnvironmentBlueprints	8 TPS
PutEnvironmentBlueprintConfiguration	10 TPS
StartMetadataGenerationRun	10 TPS
CancelMetadataGenerationRun	20 TPS
CreateDomainUnit	20 TPS
AddPolicyGrant	20 TPS
AddEntityOwner	20 TPS
CreateRule	20 TPS

API	API レート制限
UpdateRule	20 TPS
CreateDataSource	20 TPS
UpdateDataSource	20 TPS
DeleteDataSource	20 TPS
ListDataSources	20 TPS
SearchListings	16 TPS
StartDataSourceRun	20 TPS
UpdateDataSourceRunActivities	20 TPS
PostLineageEvent	20 TPS
CreateConnection	20 TPS
UpdateConnection	20 TPS
GetConnection	20 TPS
ListConnections	20 TPS
DeleteConnection	20 TPS
CreateListingChangeSet	20 TPS

Amazon DataZone ユーザーガイドのドキュメント履歴

次の表は、Amazon DataZone のドキュメントリリースについての説明をまとめたものです。

変更	説明	日付
AmazonDataZoneDomainExecutionRolePolicy - ポリシーの更新	AmazonDataZoneDomainExecutionRolePolicy へのポリシーの更新 - グラフベースのエンティティ検索機能をサポートするアクセス許可を `QueryGraph` アクションに追加します。詳細については、「Amazon DataZone updates to AWS managed policies」を参照してください。	2026 年 2 月 25 日
AmazonDataZoneGlueManageAccessRolePolicy - ポリシーの更新	AmazonDataZoneGlueManageAccessRolePolicy へのポリシーの更新 - Glue の接続ベースのデータソースのデータリネージュキャプチャをサポートするアクセス許可を AWS `GetConnection` アクションに追加します。詳細については、「Amazon DataZone updates to AWS managed policies」を参照してください。	2025 年 7 月 30 日
AmazonDataZoneFullAccess - ポリシーの更新	AmazonDataZoneFullAccess へのポリシーの更新 - SecretsManager の範囲`create`と、 `dzd-`ではなく 形式の新しいドメインの`tag`アクセス許可を一般	2025 年 7 月 23 日

	化dzd_..します。詳細については、「Amazon DataZone updates to AWS managed policies」を参照してください。	
AmazonDataZoneFullAccess - ポリシーの更新	AmazonDataZoneFullAccess へのポリシーの更新 - コンソールが RAM AWS リソース共有の AWS マネージドアクセス許可をアタッチまたは更新できるようにします。詳細については、「Amazon DataZone updates to AWS managed policies」を参照してください。	2025 年 5 月 22 日
AmazonDataZoneGlue ManageAccessRolePolicy - ポリシーの更新	AmazonDataZoneGlue ManageAccessRolePolicy に対するポリシー更新 - Amazon DataZone プロジェクトユーザーロールは、フェデレーティッドテーブルのデータ転送ロールとして使用されます。この更新により、`iam:PassRole` ステートメントに `datazone_usr_role*` が追加され、プロジェクトユーザーロールがこの目的で使用できるようになります。詳細については、「Amazon DataZone updates to AWS managed policies」を参照してください。	2025 年 5 月 21 日

AmazonDataZoneSageMakerProvisioningRolePolicy - ポリシーの更新	AmazonDataZoneSageMakerProvisioningRolePolicy に対するポリシー更新 - `glue:GetConnection` アクションのサポートを追加しました。詳細については、「Amazon DataZone updates to AWS managed policies」を参照してください。	2025 年 1 月 2 日
AmazonDataZoneSageMakerEnvironmentRolePermissionsBoundary - ポリシーの更新	AmazonDataZoneSageMakerEnvironmentRolePermissionsBoundary に対するポリシー更新 - この変更により、アクセス許可の境界に `sagemaker:AddTags` が追加され、Amazon DataZone が必要なタグ `CreateUserProfile` で正常に呼び出せるようになります。詳細については、「Amazon DataZone updates to AWS managed policies」を参照してください。	2024 年 12 月 3 日

AmazonDataZoneSageMakerAccess、および AmazonDataZoneGlueManageAccessRolePolicy - ポリシーの更新	AmazonDataZoneFullAccess、AmazonDataZoneSageMakerAccess、AmazonDataZoneGlueManageAccessRolePolicy に対するポリシー更新 - Amazon SageMaker Unified Studio エクスペリエンスのサポートを有効にしました。詳細については、「Amazon DataZone updates to AWS managed policies」を参照してください。	2024 年 12 月 3 日
AmazonDataZoneDomainExecutionRolePolicy および AmazonDataZoneFullUserAccess - ポリシーの更新	サブスクリプションリクエストに対するメタデータ適用ルールのサポートを有効にするポリシーの更新。詳細については、「Amazon DataZone updates to AWS managed policies」を参照してください。	2024 年 11 月 20 日

Amazon DataZone がサブスクリプションリクエストに対するメタデータ適用ルールを開始	Amazon DataZone におけるサブスクリプションリクエストの新しいメタデータ適用ルールは、ドメインユニットの所有者がデータコンシューマーの明確なメタデータ要件を確立し、アクセスリクエストを合理化し、データガバナンスを向上させることにより、データガバナンスを強化します。この機能により、組織は組織のメタデータ標準に準拠し、カスタムワークフローを実装して、一貫性のある管理されたデータアクセスエクスペリエンスを提供できます。詳細については、「サブスクリプションリクエストのメタデータ適用ルール」を参照してください。	2024 年 11 月 20 日
AmazonDataZoneRedshiftGlueProvisioningPolicy - ポリシーの更新	`iam:DeletePolicyVersion` を追加して、`datazone*` で作成されたポリシーのポリシーバージョンをユーザーが削除できるようにしました。これにより、環境ユーザーロールポリシーを更新する必要があるユーザーのブロックを解除できます。詳細については、「Amazon DataZone updates to AWS managed policies」を参照してください。	2024 年 10 月 22 日

AWS カスタム AWS サービスブループリントの CloudFormation サポート	Amazon DataZone は、カスタム AWS サービスブループリントの AWS CloudFormation サポートを追加しました。この新機能により、 AWS CloudFormation を使用して Amazon DataZone での環境作成を自動化できます。カスタムブループリントを使用すると、管理者は既存の IAM ロールを使用して Amazon DataZone を既存のデータパイプラインにシームレスに統合し、データアセットを Amazon DataZone カタログに公開できるようになりました。これにより、これらのアセットの共有を容易に管理し、インフラストラクチャ全体のガバナンスを強化できます。詳細については、「Amazon DataZone resource type reference」を参照してください。	2024 年 9 月 12 日

ドメインユニット	Amazon DataZone では、ユーザーがビジネスニーズに応じてビジネスユニット/チームレベルの組織を作成し、ポリシーを管理できるようにする、ドメインユニットと認可ポリシーと呼ばれる一連の新しいデータガバナンス機能が導入されています。ドメインユニットの追加により、ユーザーはビジネスユニットやチームに関連付けられたデータアセットとプロジェクトを整理、作成、検索、検出できます。認可ポリシーを使用すると、これらのドメインユニットのユーザーは、Amazon DataZone 内で作成するプロジェクト、用語集、使用するコンピューティングリソースのアクセスポリシーを設定できます。	2024 年 8 月 5 日

データ製品	Amazon DataZone はデータ製品を導入し、データアセットを、特定のビジネスユースケースに合わせて明確に定義された自己完結型パッケージにグループ化します。例えば、マーケティング分析データ製品は、マーケティングキャンペーンデータ、パイプラインデータ、顧客データなど、さまざまなデータアセットをバンドルできます。データ製品を使用すると、検出プロセスとサブスクリプションプロセスを簡素化し、ビジネス目標に合わせて調整して、個々のアセットの処理における冗長性を軽減できます。	2024 年 8 月 5 日
AmazonDataZoneDomainExecutionRolePolicy および AmazonDataZoneFullUserAccess - ポリシーの更新	AmazonDataZoneDomainExecutionRolePolicy と AmazonDataZoneFullUserAccess へのポリシーの更新 - Amazon DataZone ドメインユニットとデータ製品の作成と管理に使用される新しい API のサポートを有効にできます。詳細については、「Amazon DataZone updates to AWS managed policies」を参照してください。	2024 年 8 月 5 日

きめ細かなアクセスコントロール	Amazon DataZone ではきめ細かなアクセスコントロールを導入し、Amazon DataZone のビジネスデータカタログ内のデータアセットをデータレイクとデータウェアハウス全体できめ細かく制御できるようになりました。新機能により、データ所有者は、データアセット全体へのアクセス権を付与する代わりに、行および列レベルでデータの特定のレコードへのアクセスを制限できるようになりました。例えば、個人を特定できる情報 (PII) などの機密情報を含む列がデータに含まれている場合、必要な列のみにアクセスを制限することができます。これにより、機密情報を保護しながら、機密性の低いデータへのアクセスも許可できます。同様に、行レベルでアクセスを制御できるため、ユーザーは自分のロールまたはタスクに関連するレコードのみを表示できます。	2024 年 7 月 2 日

AmazonDataZoneGlueManageAccessRolePolicy - ポリシーの更新	AmazonDataZoneGlueManageAccessRolePolicy へのポリシーの更新 - Lake Formation で付与されるアクセス許可をスコープダウンするために、きめ細かなアクセスコントロール機能に使用される IAM アクセス許可を Amazon DataZone に追加しました。詳細については、「Amazon DataZone updates to AWS managed policies」を参照してください。	2024 年 7 月 2 日

データリネージュ	Amazon DataZone ではプレビューでデータリネージュを起動して、OpenLineage 対応システムまたは API を通じてリネージュイベントを視覚化し、ソースから消費までのデータ移動を追跡できるようにユーザーを支援しています。Amazon DataZone の OpenLineage 互換 APIs を使用すると、ドメイン管理者とデータプロデューサーは、Amazon S3、Glue、その他の サービスでの変換など、Amazon DataZone で利用できる以上の系統イベントをキャプチャして保存できます。 AWS さらに、Amazon DataZone バージョンは各イベントとリネージュを合わせるため、ユーザーは任意の時点でリネージュを視覚化したり、アセットまたはジョブの履歴全体の変換を比較したりできます。この履歴のリネージュにより、データがどのように進化してきたかについて理解を深めることができます。これはデータアセットの整合性のトラブルシューティング、監査、検証に不可欠です。	2024 年 6 月 27 日

AmazonDataZoneExecutionRolePolicy および AmazonDataZoneFullUserAccess - ポリシーの更新	AmazonDataZoneExecutionRolePolicy と AmazonDataZoneFullUserAccess へのポリシーの更新。データリネージュときめ細かなアクセスコントロール API のサポートを有効にしました。詳細については、「Amazon DataZone updates to AWS managed policies」を参照してください。	2024 年 6 月 27 日

カスタム AWS サービスの設計図	カスタム AWS サービスブループリントでは、IAM ロール、データレイク、データメッシュ、Amazon S3 バケット、Amazon Redshift クラスターなどの既存の AWS リソースがある場合、独自のカスタム IAM ロールを使用してこれらの既存のリソースへのアクセス許可を指定できるようになりました。これにより、Amazon DataZone ユーザーはパブリケーションとサブスクリプションを活用してこれらのリソースを共有および管理できます。カスタム AWS サービスブループリントを使用すると、Amazon DataZone 管理者は独自のカスタムロールを使用して AWS サービス環境を設定できます。これらの AWS サービス環境のアクションリンクを設定し、既存の AWS リソースへのフェデレーションアクセスを提供できます。また、これらのカスタム AWS サービス環境でサブスクリプションターゲットとデータソースを設定することもできます。管理者は、独自の Amazon DataZone ドメインアカウント、またはデータを公開、サブスクライブ、検出、または管理する関連付けられたアカウ	2024 年 6 月 17 日

	ントで AWS サービス環境を設定できます。	
AmazonDataZoneGlueManageAccessRolePolicy - ポリシーの更新	AmazonDataZoneGlueManageAccessRolePolicy へのポリシーの更新。Lake Formation で付与するアクセス許可をスコープダウンするために、Amazon DataZone のセルフサブスクライブ機能に必要な IAM アクセス許可を追加しました。セルフサブスクライブ機能を使用すると、Lake Formation アクセス許可はタグ付けされたリソースにのみ付与できます。詳細については、「Amazon DataZone updates to AWS managed policies」を参照してください。	2024 年 6 月 14 日

AmazonDataZoneFullAccess - ポリシーの更新	AmazonDataZoneFullAccess へのポリシーの更新。Amazon DataZone マネジメントコンソールを有効にして、ドメインタグとプロジェクトタグの両方を使用してユーザーの代わりにシークレットを作成できます。また、ドメイン所有者アカウントから管理者を有効にして、関連付けられたアカウントのアカウント関連付けステータスを表示できるようにする `ram:ListResourceSharePermissions` アクションも含まれます。詳細については、「Amazon DataZone updates to AWS managed policies」を参照してください。	2024 年 6 月 14 日
AmazonDataZoneDomainExecutionRolePolicy - ポリシーの更新	AmazonDataZoneDomainExecutionRolePolicy へのポリシーの更新。ユーザーが Amazon DataZone 環境のアクションを設定できるようにする新しい API を Amazon DataZone に追加しました。詳細については、「Amazon DataZone updates to AWS managed policies」を参照してください。	2024 年 6 月 14 日

データソース作成の機能強化	Amazon DataZone では、データソース作成フローに拡張機能を追加し、データプロデューサーのアクセス管理を簡素化しました。これらの更新により、データプロデューサーが AWS Glue および Amazon Redshift アセットを発行するためのデータソースを作成すると、Amazon DataZone はプロジェクトメンバーに読み取り専用アクセス許可を付与します。 AWS Glue データソースを作成すると、Amazon DataZone はデータソースの作成に使用される環境の IAM ロールに「読み取り専用」アクセス許可を自動的に付与し、関連付けられた AWS Glue データベース内のすべてのテーブルへのアクセスを許可します。同様に、Amazon Redshift データソースの場合、Amazon DataZone はデータソースで使用される Amazon Redshift スキーマ内のすべてのテーブルへの「読み取り専用」アクセス許可を付与します。	2024 年 6 月 10 日

Amazon SageMaker との統合	Amazon DataZone では Amazon SageMaker との統合を開始し、データプロデューサーおよびコンシューマーが Amazon SageMaker にシームレスに切り替えて、データおよび機械学習 (ML) アセットへのアクセスガバナンスを適用しながら、機械学習プロジェクトでコラボレーションできるように支援しています。Amazon DataZone と Amazon SageMaker の新しい組み込み統合により、データコンシューマーおよびプロデューサーはインフラストラクチャのセットアップ全体の ML ガバナンスを合理化し、ビジネスイニシアチブでコラボレーションして、データと ML アセットを簡単に管理できます。	2024 年 5 月 6 日
AmazonDataZoneSageMakerProvisioningRolePolicy - 新しいポリシー	AmazonDataZoneSageMakerProvisioningRolePolicy という新しいポリシーが、Amazon SageMaker との相互運用に必要なアクセス許可を Amazon DataZone に付与します。詳細については、「Amazon DataZone updates to AWS managed policies」を参照してください。	2024 年 4 月 30 日

AmazonDataZoneSageMakerEnvironmentRolePermissionsBoundary - 新しいアクセス許可の境界	AmazonDataZoneSageMakerEnvironmentRolePermissionsBoundary という新しいアクセス許可の境界。Amazon DataZone データポータルを使用して Amazon SageMaker 環境を作成すると、Amazon DataZone はこのアクセス許可の境界を環境の作成中に生成される IAM ロールに適用します。アクセス許可の境界により、Amazon DataZone が作成するロールとユーザーが作成するロールの範囲が制限されます。詳細については、「Amazon DataZone updates to AWS managed policies」を参照してください。	2024 年 4 月 30 日
AmazonDataZoneSageMakerAccess - 新しいポリシー	AmazonDataZoneSageMakerAccess という新しいポリシーは、Amazon SageMaker 環境内のさまざまなリソースへのアクセス権をユーザに付与するために必要なアクセス許可を Amazon DataZone に付与します。詳細については、「Amazon DataZone updates to AWS managed policies」を参照してください。	2024 年 4 月 30 日

AmazonDataZoneFullAccess - ポリシーの更新	AmazonDataZoneFullAccess ポリシーへの更新。コンソールでブループリントを設定するアカウント管理者の使いやすさを向上させる DescribeSecurityGroups アクションと、指定されたマネージドポリシーに関する情報の取得に役立つ GetPolicy アクションを追加しました。詳細については、「Amazon DataZone updates to AWS managed policies」を参照してください。	2024 年 4 月 30 日

Lake Formation ハイブリッドアクセスモード	Amazon DataZone は Lake Formation AWS ハイブリッドアクセスモードとの統合を導入しました。この統合により、最初に AWS Lake Formation AWS に登録することなく、Amazon DataZone を介して Glue テーブルを簡単に公開および共有できます。開始するには、管理者は Amazon DataZone コンソールの `DefaultDataLake` ブループリントでデータロケーション登録設定を有効にします。次に、データコンシューマーが IAM アクセス許可を通じて管理される AWS Glue テーブルにサブスクライブすると、Amazon DataZone はまずこのテーブルの Amazon S3 ロケーションをハイブリッドモードで登録し、 AWS Lake Formation を通じてテーブルに対するアクセス許可を管理することでデータコンシューマーへのアクセスを許可します。これにより、テーブルに対する IAM アクセス許可は、既存のワークフローを中断することなく、新しく付与された AWS Lake Formation アクセス許可で引き続き存在します。詳細については、「Amazon DataZone と AWS Lake Formation ハイ	2024 年 4 月 3 日

	ブリッドモードの統合」を参照してください。	
データ品質	Amazon DataZone は AWS Glue Data Quality との統合を開始し、サードパーティーのデータ品質ソリューションのデータ品質メトリクスを統合する APIs を提供します。新しい統合により、 Glue Data Quality AWS スコアを Amazon DataZone ビジネスデータカタログに自動発行できます。Amazon DataZone API を使用して、サードパーティーのソースから品質メトリクスを取り込むことができます。公開されると、データコンシューマーはデータアセットを簡単に検索でき、きめ細かな品質メトリクスを表示し、失敗したチェックとルールを特定できるため、ビジネス上の意思決定が向上します。詳細については、「Amazon DataZone のデータ品質」を参照してください。	2024 年 4 月 3 日

AmazonDataZoneS3Manage-<region>-<domainId> - 新しいロール	Amazon DataZone が Lake Formation を呼び出して Amazon Simple Storage Service (Amazon S3) の場所を登録するときに使用される AmazonDataZoneS3Manage-<region>-<domainId> という新しいロール。 AWS Lake Formation は、その場所のデータにアクセスするときにこのロールを引き受けます。 DataZone AWS Amazon S3 詳細については、「Amazon DataZone updates to AWS managed policies」を参照してください。	2024 年 4 月 1 日
AmazonDataZoneGlueManageAccessRolePolicy - ポリシーの更新	AmazonDataZoneGlueManageAccessRolePolicy を更新して、Amazon DataZone に公開およびデータへのアクセスグラントを有効にすることを許可するアクセス許可のサポートを有効にしました。 詳細については、「Amazon DataZone updates to AWS managed policies」を参照してください。	2024 年 4 月 1 日

AmazonDataZoneDomainExecutionRolePolicy および AmazonDataZoneFullUserAccess - ポリシーの更新	CancelMetadataGenerationRun API のサポートを有効にするために AmazonDataZoneDomainExecutionRolePolicy と AmazonDataZoneFullUserAccess を更新しました。詳細については、「Amazon DataZone updates to AWS managed policies」を参照してください。	2024 年 3 月 29 日
AmazonDataZoneFullAccess - ポリシーの更新	Amazon DataZone は、ビジネスデータカタログを強化することで、データ検出、データ理解、データ使用量を改善するための新しい生成 AI ベースの機能の一般提供リリースを発表しました。データプロデューサーはワンクリックで、包括的なビジネスデータの説明とコンテキストを生成し、影響力のある列を強調表示し、分析ユースケースに関する推奨事項を含めることができます。この機能の開始により、データプロデューサーがアセットの説明をプログラムで生成するために使用できる API のサポートが追加されました。	2024 年 3 月 27 日

AmazonDataZoneFullAccess - ポリシーの更新	Amazon DataZone では、Amazon Redshift 統合にいくつかの機能強化を導入し、Amazon Redshift テーブルおよびビューの公開とサブスクライブのプロセスを簡素化しました。これらの更新により、データプロデューサーとコンシューマーの両方のエクスペリエンスが効率化され、Amazon DataZone 管理者が提供する事前設定された認証情報と接続パラメータを使用してデータウェアハウス環境をすばやく作成できます。さらに、これらの機能強化により、管理者は AWS アカウントと Amazon Redshift クラスター内のリソースを使用できるユーザーと目的をより細かく制御できます。	2024 年 3 月 21 日
AmazonDataZoneFullAccess - ポリシーの更新	`AmazonDataZoneFullAccess` を更新して、ユーザーがテキストボックスに入力するのではなく、Amazon DataZone マネジメントコンソールでシークレット、クラスター、vpc、サブネットを選択できるようにしました。詳細については、「Amazon DataZone updates to AWS managed policies」を参照してください。	2024 年 3 月 13 日

AmazonDataZoneDomainExecutionRolePolicy - ポリシーの更新	AmazonDataZoneDomainExecutionRolePolicy を更新して、どのアカウントとリージョンでどのブループリントが有効になっているかを特定することで、環境プロファイルの作成に必要な ListEnvironmentBlueprintConfigurationSummaries API のサポートを有効にしました。詳細については、「Amazon DataZone updates to AWS managed policies」を参照してください。	2024 年 2 月 1 日
Cloud Formation の使用の強化	Amazon DataZone のユーザーは、 AWS CloudFormation を活用して、Amazon DataZone リソースのスイートを効果的にモデル化および管理できるようになりました。このアプローチにより、リソースの一貫したプロビジョニングが容易になると同時に、コードプラクティスとしてのインフラストラクチャを介したライフサイクル管理も可能になります。カスタムテンプレートを使用すると、必要なリソースとその相互依存関係を正確に定義できます。詳細については、「Amazon DataZone resource type reference」を参照してください。	2024 年 1 月 18 日

カスタムアセット	カスタムアセットのサポートにより、Amazon DataZone はデータポータルを介してダッシュボード、クエリ、モデルなどの非構造化データ用にアセットをカタログ化できるため、これまで利用できた API サポートと共に、カスタムアセットをデータポータルに直接追加しやすくなります。Amazon DataZone でカスタムアセットを作成、更新、公開する機能を使用すると、あらゆる種類のアセットを共有、検索、サブスクライブし、それらのアセットのガバナンスを提供するビジネスワークフローを構築できます。詳細については、「カスタムアセットタイプを作成する」を参照してください。	2024 年 1 月 5 日

IAM プリンシパルをプロジェクトメンバーとして追加する	IAM プリンシパルがまだ Amazon DataZone にログインしていない場合でも (以前の要件)、IAM プリンシパルをプロジェクトメンバーとして追加できるようになりました。ドメイン管理者または IT 管理者がドメインのドメイン実行ロールに `iam:GetUser` と `iam:GetRole` を追加した後、プロジェクト所有者は、IAM ロールまたは IAM ユーザーの Amazon Resouce Name (ARN) を指定するだけで、メンバーとして IAM プリンシパルを追加できます。IAM プリンシパルは Amazon DataZone へのアクセスに必要な IAM アクセス許可も必要で、これらは IAM コンソールで設定できます。詳細については、「プロジェクトにメンバーを追加する」を参照してください。	2024 年 1 月 5 日

ドメインの削除	ドメインの削除は、ドメインをより簡単に削除できる機能です。これで、ドメインが空でない場合 (つまり、プロジェクト、環境、アセット、データソースなどが含まれている場合) でも、ドメインの削除を続行できるようになりました。詳細については、「Amazon DataZone ドメインを削除する」を参照してください。	2023 年 12 月 27 日

Lake Formation ハイブリッドモード	Amazon DataZone で AWS Lake Formation ハイブリッドモードのサポートが追加されました。このサポートにより、ハイブリッドモードで Lake Formation に登録された AWS S3 ロケーションで AWS Glue テーブルを Amazon DataZone に発行する場合、Amazon DataZone はこのテーブルをマネージドアセットとして扱い、このテーブルへのサブスクリプション許可を管理できます。この機能リリース以前では、Amazon DataZone はこのテーブルをアンマネージドアセットとして扱います。つまり、Amazon DataZone はこのテーブルにサブスクリプションを付与できません。詳細については、「Amazon DataZone の Lake Formation アクセス許可の設定」を参照してください。	2023 年 12 月 22 日

HIPAA への準拠	Amazon DataZone は現在、U.S. Health Insurance Portability and Accountability Act of 1996 (1996 年の米国における医療保険の相互運用性と説明責任に関する法令、HIPAA) に準拠しています。HIPAA 準拠 AWS のサービスのリストを表示するには、https://aws.amazon.com/compliance/hipaa-eligible-services-reference/ を参照してください。	2023 年 12 月 14 日
AmazonDataZoneGlueManageAccessRolePolicy - ポリシーの更新	AmazonDataZoneGlueManageAccessRolePolicy を更新して、 AWS Lake Formation ハイブリッドモードのサポートを有効にしました。詳細については、「Amazon DataZone updates to AWS managed policies」を参照してください。	2023 年 12 月 14 日

AmazonDataZoneFull UserAccess と AmazonDataZoneDomainExecutionRolePolicy - ポリシーの更新	Amazon DataZone では AmazonDataZoneFull UserAccess と AmazonDataZoneDomainExecutionRolePolicy ポリシーを更新し、Amazon DataZone の生成 AI を活用したデータの説明機能をサポートしています。詳細については、「Amazon DataZone updates to AWS managed policies」を参照してください。	2023 年 11 月 28 日

AI レコメンデーション	AWS は、Amazon DataZone の新しい生成 AI ベースの機能のプレビューを発表し、ビジネスデータカタログを強化することでデータ検出、データ理解、データ使用量を改善します。データプロデューサーはワンクリックで、包括的なビジネスデータの説明とコンテキストを生成し、影響力のある列を強調表示し、分析ユースケースに関する推奨事項を含めることができます。Amazon DataZone の説明に関する AI の推奨事項により、データコンシューマーは分析に必要なデータテーブルと列を特定できるため、データ検出可能性が向上し、データプロデューサーとのやりとりが減少します。プレビューは、米国東部 (バージニア北部) 、米国西部 (オレゴン) の各 AWS リージョンでプロビジョニングされた Amazon DataZone ドメインで利用できます。詳細については、「機械学習と生成 AI の使用」を参照してください。	2023 年 11 月 28 日

DefaultDataLake ブループリント	Amazon DataZone は、DefaultDataLake ブループリントに拡張機能を追加しました。これにより、 AWS アカウントからどのデータを公開できるかをより細かく制御できます。この機能のリリースで導入された主な変更点が 2 つあります。	2023 年 11 月 20 日
AmazonDataZoneEnvironmentRolePermissionsBoundary - ポリシーの更新	Amazon DataZone では、AmazonDataZoneEnvironmentRolePermissionsBoundary マネージドポリシーを更新しました。このポリシーは、`ResourceTag` 条件でスコープダウンされた追加の `athena:GetQueryResultsStream` アクセス許可で構成されます。詳細については、「Amazon DataZone updates to AWS managed policies」を参照してください。	2023 年 11 月 17 日

AmazonDataZoneRedshiftManageAccessRolePolicy - ポリシーの更新	Amazon DataZone では、`redshift:AssociateDataShareConsumer` アクションの組織 ID のチェックを削除して AmazonDataZoneRedshiftManageAccessRolePolicy ポリシーを更新しました。これにより、 AWS 組織全体でリソースを共有できます。詳細については、「Amazon DataZone updates to AWS managed policies」を参照してください。	2023 年 11 月 16 日
ユーザーガイドの GA リリース	Amazon DataZone ユーザーガイドの一般提供 (GA) リリース。	2023 年 10 月 15 日
AmazonDataZoneFullUserAccess - ポリシーの更新	Amazon DataZone は、Amazon DataZone へのフルアクセスを許可する AmazonDataZoneFullUserAccess ポリシーを更新しましたが、ドメイン、ユーザー、または関連するアカウントの管理は許可しません。詳細については、「Amazon DataZone AWS 管理ポリシーの更新」を参照してください。 DataZone	2023 年 10 月 2 日

AmazonDataZonePreviewConsoleFullAccess - ポリシーの廃止	Amazon DataZone は AmazonDataZonePreviewConsoleFullAccess を廃止しました。詳細については、「Amazon DataZone updates to AWS managed policies」を参照してください。	2023 年 9 月 29 日
AmazonDataZonePortalFullAccessPolicy - ポリシーの廃止	Amazon DataZone は AmazonDataZonePortalFullAccessPolicy を廃止しました。詳細については、「Amazon DataZone updates to AWS managed policies」を参照してください。	2023 年 9 月 29 日

AmazonDataZoneDomainExecutionRolePolicy - 新しいポリシー	Amazon DataZone では、AmazonDataZoneDomainExecutionRolePolicy という新しいポリシーを追加しました。これは Amazon DataZone AmazonDataZoneDomainExecutionRole サービスロールのデフォルトのポリシーです。このロールは、Amazon DataZone ドメイン内のデータをカタログ化、検出、管理、共有、分析するために Amazon DataZone で使用されます。AmazonDataZoneDomainExecutionRole に AmazonDataZoneDomainExecutionRolePolicy ポリシーをアタッチできます。詳細については、「Amazon DataZone updates to AWS managed policies」を参照してください。	2023 年 9 月 25 日
AmazonDataZoneCrossAccountAdmin - 新しいポリシー	Amazon DataZone では、AmazonDataZoneCrossAccountAdmin という新しいポリシーを追加しました。このポリシーは、ユーザーは Amazon DataZone とそれに関連付けられたアカウントを使用できます。詳細については、「Amazon DataZone updates to AWS managed policies」を参照してください。	2023 年 9 月 19 日

AmazonDataZoneRedshiftManageAccessRolePolicy - 新しいポリシー	Amazon DataZone は、AmazonDataZoneRedshiftManageAccessRolePolicy という新しいポリシーを追加しました。このポリシーは、Amazon DataZone に公開およびデータへのアクセスグラントを有効にすることを許可するアクセス許可を付与します。詳細については、「Amazon DataZone updates to AWS managed policies」を参照してください。	2023 年 9 月 12 日
AmazonDataZoneRedshiftGlueProvisioningPolicy - 新しいポリシー	Amazon DataZone では、サポートされているデータソースとの相互運用に必要なアクセス許可を Amazon DataZone に付与する AmazonDataZoneRedshiftGlueProvisioningPolicy という新しいポリシーを追加しました。詳細については、「Amazon DataZone updates to AWS managed policies」を参照してください。	2023 年 9 月 12 日

AmazonDataZoneGlueManageAccessRolePolicy - 新しいポリシー	Amazon DataZone は、AmazonDataZoneGlueManageAccessRolePolicy という新しいポリシーを追加し、カタログに AWS Glue データを発行するアクセス許可を Amazon DataZone に付与します。また、カタログ内の Glue が公開したアセットへのアクセスを許可または取り消すアクセス許可を Amazon DataZone AWS に付与します。詳細については、「Amazon DataZone updates to AWS managed policies」を参照してください。	2023 年 9 月 12 日
AmazonDataZoneFullUserAccess - 新しいポリシー	Amazon DataZone では、データポータルを介して Amazon DataZone へのフルアクセス権を付与する AmazonDataZoneFullUserAccess という新しいポリシーを追加しました。詳細については、「Amazon DataZone updates to AWS managed policies」を参照してください。	2023 年 9 月 12 日

AmazonDataZoneFullAccess - 新しいポリシー	Amazon DataZone は、 AWS マネジメントコンソールを介して Amazon DataZone へのフルアクセスを提供する AmazonDataZoneFullAccess という新しいポリシーを追加しました。 DataZone 詳細については、「Amazon DataZone updates to AWS managed policies」を参照してください。	2023 年 9 月 12 日
AmazonDataZoneEnvironmentRolePermissionsBoundary - 新しいポリシー	Amazon DataZone では、アタッチ先のプロビジョニングされた IAM プリンシパルを制限する AmazonDataZoneEnvironmentRolePermissionsBoundary という新しいポリシーを追加しました。詳細については、「Amazon DataZone updates to AWS managed policies」を参照してください。	2023 年 9 月 12 日
マネージドポリシーの更新	AmazonDataZonePreviewConsoleFullAccess マネージドポリシーの更新。詳細については、「Amazon DataZone updates to AWS managed policies」を参照してください。	2023 年 6 月 13 日

マネージドポリシーの更新	AmazonDataZoneProjectDeploymentPermissionsBoundary マネージドポリシーの更新。詳細については、「Amazon DataZone updates to AWS managed policies」を参照してください。	2023 年 4 月 3 日
???	これは、Amazon DataZone (プレビュー) ユーザーガイドの初回リリースです。	2023 年 3 月 29 日

翻訳は機械翻訳により提供されています。提供された翻訳内容と英語版の間で齟齬、不一致または矛盾がある場合、英語版が優先します。